

海舞寺遺跡
市之串遺跡
中野内遺跡
森ノ上遺跡
(弥生・古墳時代編)
カラ石の元遺跡

Kaimaiji/Ichinokushi/Nakanouchi/Morinoue/Chikaraishinomoto Site
東九州自動車道（県境～北川間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1

2010

宮崎県埋蔵文化財センター

序

宮崎県教育委員会では、東九州自動車道（県境～北川間）建設予定地にかかる埋蔵文化財の発掘調査を平成19年度から実施して参りました。本書には、平成19・20年度に実施した延岡市北浦町古江地区・延岡市熊野江地区の遺跡発掘調査の成果を記載しております。

主な内容としては、土石流に襲われた様子もわかる弥生～古墳時代集落の中野内遺跡、北浦町域最大級の古墳時代集落の1つである森ノ上遺跡、古墳時代墳墓の可能性が考えられた市之串遺跡、中世の木原一族に関する伝承との関連が予想された海舞寺遺跡、熊野江地区最古土器や古墳時代集落・中世寺院等の存在を物語るカラ石の元遺跡が挙げられます。

延岡市北浦町古江地区・延岡市熊野江地区では発掘調査例がほとんどなく、これまでに知られていた当地域の歴史像を大きく塗り替えるような発見が相次ぎました。今回の調査で得られた多くの成果が、今後、当地域の歴史を解明する上で非常に貴重な資料になるものと考えられます。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場等で活用され、埋蔵文化財保護に対する理解の一助になれば幸いです。

最後に、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関・地元の方々、並びに御指導・御助言を賜った先生方に対して、厚くお礼申し上げます。

平成22年3月

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 福永 展幸

例言

- 1 本書は、東九州自動車道（県境～北川間）建設に伴い、平成19～20年度に宮崎県埋蔵文化財センターが実施した延岡市海舞寺（かいまいじ）遺跡・市之串（いちのくし）遺跡・中野内（なかのうち）遺跡・森ノ上（もりのうえ）遺跡・カラ石の元（ちからいしのもと）遺跡の埋蔵文化財発掘調査に関するものである。なお、森ノ上遺跡は、今回、弥生～古墳時代に関する調査分のみ報告とし、それ以外の報告については別集を準備中である。
- 2 発掘調査は、国土交通省九州地方整備局延岡河川国道事務所の委託により、宮崎県教育委員会が調査主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 現地調査のうち、以下のものについては業務委託した。
 - 基準点・グリッド杭等の設置
 - 海舞寺遺跡 …………… 株式会社東九州コンサルタント
 - 市之串遺跡・中野内遺跡・森ノ上遺跡 …… 株式会社エースコンサルタント
 - カラ石の元遺跡 …………… 太陽技術コンサルタント株式会社
 - 空中写真撮影
 - 海舞寺遺跡・市之串遺跡 …………… 有限会社スカイサーベイ九州
 - 中野内遺跡・森ノ上遺跡 …………… 九州航空株式会社
 - カラ石の元遺跡 …………… ふじた航空写真
 - 遺構実測補助
 - カラ石の元遺跡（石塔周辺平面図作成）… 国際航業株式会社（現 国際文化財株式会社）
- 4 現地での遺構図作成・写真撮影については、各遺跡の調査担当者が行った。
- 5 整理作業は、宮崎県埋蔵文化財センターで行った。
- 6 実測・製図・遺物写真撮影・金属製品保存処理については職員間で分担して進めた。
 - 遺構製図 …………… 海舞寺：黒木秀／市之串：崎田／中野内：古田／森ノ上：藤木／カラ石の元：松元
 - 遺物実測・製図 …… （土器・陶磁器等）海舞寺：岡田／中野内・森ノ上：古田／カラ石の元：松元
（石器・鉄器等）海舞寺・中野内・森ノ上：藤木／カラ石の元：松元
（銭貨）古田 （石塔類）松元（カラ石の元のみ）・黒木秀・崎田
 - 遺物写真撮影 …… 中野内の土器：古田／中野内の土器以外：竹田享志
 - 金属製品保存処理 …… 古田なお、石器・鉄器等製図は国際文化財株式会社に業務委託した。
- 7 自然科学分析として、フローテーション作業ならびに種子等の選別作業は黒木秀が行った。放射性炭素年代測定・種実／樹種／魚骨／貝類同定・蛍光X線分析・珪藻分析はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、その成果報告については、黒木が同社と協議・編集して掲載した。
- 8 本文の執筆は分担して行い、文責は目次ならびに各文末に示した。
- 9 本書の作成は宮崎県埋蔵文化財センターで行い、本書全体は藤木が編集した。
- 10 出土遺物および記録類は、宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。

凡例

- 1 遺構種別は以下のように略称を用いた。
 - SA=竪穴住居跡 SB=掘立柱建物跡 SC=土坑 SE=溝状遺構 SI=集石遺構 S=遺構全般
- 2 遺物への注記には以下のような略号とした。
 - ・海舞寺遺跡 …… カイマS1～（各遺構）・A1～（グリッド一括）・II C5～（造成土＋グリッド）・アナヨコ（横穴周辺）・イシグミ（石組遺構）
 - ・中野内遺跡 …… ナカウ2・ナカウ3…SA1～（竪穴住居跡）・S1～（その他の遺構）・T1～（試掘トレンチ）
 - ・森ノ上遺跡 …… モリB…SA1～（竪穴住居跡埋土中）・SA1-1～（竪穴住居跡床直上出土）・B1～（地区一括）
 - ・カラ石の元遺跡：カ石…S1～（現地記録時点の遺構No）・A1 I～（グリッド層位）・C3S5等（S5のC3グリッド相当範囲）
- 3 本書で使用する土層および土器の色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局ならびに財団法人日本色彩研究所監修の『新版標準土色帖』に拠り記述した。
- 4 土器類の実測図について、須恵器は断面を黒く塗っている。
中野内遺跡・森ノ上遺跡の土器実測図中の表現方法については72頁で説明している。
- 5 石器実測図への使用痕の表現として以下のようにした。
 - 敲打痕＝コ 磨痕＝ス 摩擦＝マ 研面＝ト 潰れ＝ツブレ ※実測図中の網掛けは砥面・強い摩擦面を表す。

本文目次

第Ⅰ章	はじめに	
	第1節	調査に至る経緯……………1
	第2節	調査の組織……………1
第Ⅱ章	地理的・歴史的環境	
	第1節	北浦町古江の地理的・歴史的環境……………2
	第2節	延岡市熊野江の地理的・歴史的環境……………7
第Ⅲ章	発掘調査・整理作業の概要と経過	
	第1節	試掘・確認調査の方法・概要と経過……………8
	第2節	発掘調査の概要……………9
	第3節	整理作業の方法と経過……………9
第Ⅳ章	海舞寺遺跡	
	第1節	遺跡の位置と調査の方法・経過……………10
	第2節	基本層序と土層堆積……………12
	第3節	縄文時代・古墳時代・古代の調査……………12
	第4節	中世の調査……………14
	第5節	近世以降の調査……………23
	第6節	その他の調査……………23
	第7節	小結……………24
第Ⅴ章	市之串遺跡	
	第1節	遺跡の位置と調査の方法・経過……………29
	第2節	周辺地形と遺構・遺物……………29
	第3節	小結……………34
第Ⅵ章	中野内遺跡	
	第1節	遺跡の位置と調査の方法・経過……………35
	第2節	基本層序と土層堆積……………36
	第3節	旧石器・縄文時代の調査……………42
	第4節	弥生時代の調査……………43
	第5節	古墳時代の調査……………48
	第6節	流路ならびに土石流堆積物……………62
	第7節	その他の遺構と遺物……………67
	第8節	小結……………73
第Ⅶ章	森ノ上遺跡 (弥生・古墳時代編)	
	第1節	遺跡の位置と調査の方法・経過……………80
	第2節	弥生・古墳時代の調査……………82
	第3節	小結……………102
第Ⅷ章	カラ石の元遺跡	
	第1節	遺跡の位置と調査の方法・経過……………107
	第2節	縄文時代の調査……………111
	第3節	古墳時代の調査……………111
	第4節	中世以降の調査……………115
	第5節	小結……………122
第Ⅸ章	小路・鳴川引地の石塔について	
	第1節	石塔調査の方法と経過……………125
	第2節	小路の石塔群の概要……………125
	第3節	鳴川引地の石塔の概要……………130
	第4節	小結……………130
第Ⅹ章	自然科学分析	
	第1節	種実同定と放射性炭素年代測定……………131
	第2節	骨・貝類同定……………133
	第3節	中野内遺跡出土土器の検証……………134
第Ⅺ章	総括	
	第1節	旧石器～縄文時代の北浦・熊野江……………148
	第2節	弥生～古墳時代の北浦・熊野江
	1	中野内遺跡の大柱遺構について……………148
	2	北浦の弥生土器について……………148
	3	北浦の古墳時代前～中期土師器編年……………149
	4	北浦の弥生～古墳時代の石器の変遷……………154
	5	石製の錘具について……………155
	第3節	中世・近世の北浦・熊野江
	1	歴史的背景と石塔造立について……………155
	2	魚貝類利用の変遷とその特質……………157

挿図目次

第1図	北浦町・熊野江地区表層地質図	3
第2図	北浦町・熊野江地区地形図	3
第3図	報告する遺跡分布図	4
第4図	周辺遺跡採集遺物実測図	5
第5図	海舞寺遺跡周辺地形・グリッド配置図	11
第6図	海舞寺遺跡土層断面図	13
第7図	海舞寺遺跡遺構分布図	15
第8図	海舞寺遺跡遺構実測図(1)掘立柱建物(1)	16
第9図	海舞寺遺跡遺構実測図(2)掘立柱建物(2)・石組遺構	17
第10図	海舞寺遺跡遺物実測図(1)土器・陶磁器	18
第11図	海舞寺遺跡遺物実測図(2)陶磁器・石器・鉄器・石塔	19
第12図	海舞寺遺跡遺物実測図(3)銭貨	21
第13図	海舞寺遺跡遺構実測図(3)横穴	22
第14図	市之串遺跡遺構分布図	30
第15図	市之串遺跡遺構実測図(1)	31
第16図	市之串遺跡遺構実測図(2)	32
第17図	中野内遺跡遺構分布図	37・38
第18図	中野内遺跡土層断面図(1)	39
第19図	中野内遺跡土層断面図(2)	40
第20図	中野内遺跡旧石器実測図	41
第21図	中野内遺跡縄文時代早期調査グリッド配置図	41
第22図	中野内遺跡縄文時代早期集石遺構実測図	41
第23図	中野内遺跡集石遺構構成礫実測図	41
第24図	中野内遺跡弥生～古墳時代遺構分布図	44
第25図	中野内遺跡弥生時代遺構実測図(1)SA1	45
第26図	中野内遺跡弥生時代遺物実測図(1)SA1土器・石器	46
第27図	中野内遺跡弥生時代遺物実測図(2)SA1石器	47
第28図	中野内遺跡古墳時代遺構実測図(2)SA2ならびに出土状況	49
第29図	中野内遺跡古墳時代遺構実測図(2)SA3ならびに出土状況	51
第30図	中野内遺跡古墳時代遺構実測図(2)SA4～7	53
第31図	中野内遺跡古墳時代遺構実測図(2)SA4・5出土状況	54
第32図	中野内遺跡古墳時代遺構実測図(2)SA6・7出土状況	55
第33図	中野内遺跡古墳時代遺物実測図(3)SA2～4土器	56
第34図	中野内遺跡古墳時代遺物実測図(4)SA5土器	57
第35図	中野内遺跡古墳時代遺物実測図(5)SA6土器	58
第36図	中野内遺跡古墳時代遺物実測図(6)SA6・7土器/SA2石器	59
第37図	中野内遺跡古墳時代遺物実測図(7)SA2石器	60
第38図	中野内遺跡古墳時代遺物実測図(8)SA3～7石器	61
第39図	中野内遺跡古墳時代遺物実測図(9)SA7石器/SA4鉄器	62
第40図	中野内遺跡弥生～古墳時代遺構実測図(7)流路ならびに土石流堆積物	63
第41図	中野内遺跡弥生～古墳時代遺物実測図(10)流路等土器・石器	65
第42図	中野内遺跡遺構実測図(8)ピット(1)	69
第43図	中野内遺跡遺構実測図(9)ピット(2)	70
第44図	中野内遺跡遺構実測図(10)掘立柱建物跡(1)	70
第45図	中野内遺跡遺構実測図(11)掘立柱建物跡(2)	71
第46図	中野内遺跡遺構実測図(12)土坑	71
第47図	中野内遺跡遺物実測図(11)その他の遺構・包含層等土器	72
第48図	森ノ上遺跡B区周辺地形・調査区位置図	81
第49図	森ノ上遺跡B区遺構分布図	83
第50図	森ノ上遺跡B区古墳時代遺構実測図(1)SA1～3	85
第51図	森ノ上遺跡B区古墳時代遺構実測図(2)SA4～6	87
第52図	森ノ上遺跡B区古墳時代遺構実測図(3)SA8～11	90
第53図	森ノ上遺跡B区古墳時代遺構実測図(4)SA7/SC1・4	91
第54図	森ノ上遺跡B区古墳時代遺物実測図(1)SA1～3・6・8～11/SC1・4土器	92
第55図	森ノ上遺跡B区古墳時代遺物実測図(2)SA4土器	93
第56図	森ノ上遺跡B区古墳時代遺物実測図(3)SA4土器	94
第57図	森ノ上遺跡B区古墳時代遺物実測図(4)SA4土器	95
第58図	森ノ上遺跡B区古墳時代遺物実測図(5)SA4/古墳時代遺構外他土器	97
第59図	森ノ上遺跡B区古墳時代遺物実測図(6)SA1～3・5石器	98
第60図	森ノ上遺跡B区古墳時代遺物実測図(7)SA4石器	99
第61図	森ノ上遺跡B区古墳時代遺物実測図(8)SA6～10石器	100
第62図	森ノ上遺跡B区古墳時代遺物実測図(9)SA10・11石器/SA3～5・8鉄器	101
第63図	カラ石の元遺跡周辺地形・調査区位置図	108
第64図	カラ石の元遺跡グリッド配置図	109
第65図	カラ石の元遺跡土層断面図	109
第66図	カラ石の元遺跡縄文時代遺物実測図	112
第67図	カラ石の元遺跡古墳時代遺構分布図	113
第68図	カラ石の元遺跡古墳時代遺構実測図(1)SA1	112
第69図	カラ石の元遺跡古墳時代遺構実測図(2)SA2	113
第70図	カラ石の元遺跡古墳時代遺物実測図	114
第71図	カラ石の元遺跡中世以降の遺構分布図	116
第72図	カラ石の元遺跡中世以降のピット群実測図	116
第73図	カラ石の元遺跡中世以降の石塔群・石垣遺構実測図	117
第74図	カラ石の元遺跡中世以降の土坑実測図	118

第75図	カラ石の元遺跡中世以降の遺物実測図 (1)	119
第76図	カラ石の元遺跡中世以降の石塔類実測図 (1)	120
第77図	カラ石の元遺跡中世以降の石塔類実測図 (2)	121
第78図	カラ石の元遺跡中世以降の石塔類実測図 (3)	123
第79図	小路石塔群・鳴川引地位置図	126
第80図	小路石塔群の石塔実測図 (1)	126
第81図	小路石塔群の石塔実測図 (2)	127
第82図	小路石塔群・鳴川引地の石塔実測図	128
第83図	石塔計測概念図	129
第84図	主要珪藻化石群集の分布	143
第85図	分析番号184の蛍光X線スペクトル	143
第86図	分析番号185の蛍光X線スペクトル	144
第87図	分析番号186の蛍光X線スペクトル	144
第88図	分析番号187の蛍光X線スペクトル	145
第89図	分析番号188の蛍光X線スペクトル	145
第90図	中野内遺跡・森ノ上遺跡の古墳時代前期～中期の編年案	151

表目次

第1表	周辺遺跡採集遺物観察表	4
第2表	海舞寺遺跡遺物観察表 (1) 土器・陶磁器	20
第3表	海舞寺遺跡遺物観察表 (2) 石器	21
第4表	海舞寺遺跡遺物観察表 (3) 鉄器	21
第5表	海舞寺遺跡遺物観察表 (4) 銭貨	21
第6表	海舞寺遺跡石塔観察表	21
第7表	海舞寺遺跡遺構・出土遺物一覧表 (1)	25
第8表	海舞寺遺跡遺構・出土遺物一覧表 (2)	26
第9表	海舞寺遺跡遺構・出土遺物一覧表 (3)	27
第10表	海舞寺遺跡遺構詳細一覧表 掘立柱建物跡	28
第11表	海舞寺遺跡遺構詳細一覧表 石組遺構	28
第12表	海舞寺遺跡遺構詳細一覧表 横穴	28
第13表	市之串遺跡遺構詳細一覧表 横穴 (1)	33
第14表	市之串遺跡遺構詳細一覧表 横穴 (2)	33
第15表	市之串遺跡関連聞き取り一覧表	33
第16表	中野内遺跡遺構一覧表 竪穴住居跡	74
第17表	中野内遺跡遺物観察表 (1) 土器	74
第18表	中野内遺跡遺物観察表 (2) 土器	75
第19表	中野内遺跡遺物観察表 (3) 土器	76
第20表	中野内遺跡遺物観察表 (4) 土器	77
第21表	中野内遺跡遺物観察表 (5) 土器	78
第22表	中野内遺跡遺物観察表 石器	79
第23表	中野内遺跡遺物観察表 鉄器	79
第24表	森ノ上遺跡B区古墳時代遺構一覧表	91
第25表	森ノ上遺跡B区遺物観察表 (1) 土器	103
第26表	森ノ上遺跡B区遺物観察表 (2) 土器	104
第27表	森ノ上遺跡B区遺物観察表 (3) 土器	105
第28表	森ノ上遺跡B区遺物観察表 (4) 石器	106
第29表	森ノ上遺跡B区遺物観察表 (5) 鉄器	106
第30表	カラ石の元遺跡遺構・遺物一覧表	110
第31表	カラ石の元遺跡石塔観察表	110
第32表	カラ石の元遺跡遺物観察表 (1) 土器・陶磁器等	124
第33表	カラ石の元遺跡遺物観察表 (2) 石器	124
第34表	カラ石の元遺跡遺物観察表 (3) 金属器・銭貨観察表	124
第35表	小路石塔群観察表	129
第36表	鳴川引地の石塔観察表	129
第37表	放射性年代測定及び暦年較正結果	137
第38表	主な炭化種子の特徴	138
第39表	海舞寺遺跡炭化種子一覧 (1)	139
第40表	海舞寺遺跡炭化種子一覧 (2)	140
第41表	中野内遺跡炭化種子一覧	141
第42表	森ノ上遺跡炭化種子一覧	141
第43表	カラ石の元遺跡炭化種子一覧	141
第44表	海舞寺遺跡検出動物分類群の一覧	141
第45表	海舞寺遺跡の貝類同定結果	141
第46表	カラ石の元遺跡検出動物分類群の一覧	141
第47表	カラ石の元遺跡の骨貝類同定結果	141
第48表	生態性区分と環境指標種群	141
第49表	珪藻分析結果	142
第50表	加圧成型試料作成条件	146
第51表	蛍光X線装置条件	146
第52表	蛍光X線定性測定条件	146
第53表	蛍光X線分析結果	146

写真図版

図版 1	上空より古江を望む	160
図版 2	海舞寺遺跡を上空から望む	162
図版 3	海舞寺遺跡遺構 (1)	163
図版 4	海舞寺遺跡遺構 (2)	164
図版 5	海舞寺遺跡遺構 (3)	165
図版 6	海舞寺遺跡遺構 (4)	166
図版 7	海舞寺遺跡遺構 (5)	167
図版 8	海舞寺遺跡遺構 (6)	168
図版 9	海舞寺遺跡遺物 (1)	169
図版 10	海舞寺遺跡遺物 (2)	170
図版 11	海舞寺遺跡遺物 (3)	171
図版 12	海舞寺遺跡遺物 (4)	172
図版 13	市之串遺跡 (1)	173
図版 14	市之串遺跡 (2)	174
図版 15	市之串遺跡 (3)	175
図版 16	北浦湾上空より古江を望む	176
図版 17	上空より中野内遺跡を望む (遠景) ・中野内遺跡を俯瞰する	178
図版 18	中野内遺跡合成写真	179
図版 19	中野内遺跡遺構 (1)	180
図版 20	中野内遺跡遺構 (2)	181
図版 21	中野内遺跡遺構 (3)	182
図版 22	中野内遺跡遺構 (4)	183
図版 23	中野内遺跡遺構 (5)	184
図版 24	中野内遺跡遺構 (6)	185
図版 25	中野内遺跡遺構 (7)	186
図版 26	中野内遺跡遺構 (8)	187
図版 27	中野内遺跡遺構 (9)	188
図版 28	中野内遺跡遺構 (10)	189
図版 29	中野内遺跡遺物 (1)	190
図版 30	中野内遺跡遺物 (2)	191
図版 31	中野内遺跡遺物 (3)	192
図版 32	中野内遺跡遺物 (4)	193
図版 33	中野内遺跡遺物 (5)	194
図版 34	中野内遺跡遺物 (6)	195
図版 35	中野内遺跡遺物 (7)	196
図版 36	中野内遺跡遺物 (8)	197
図版 37	中野内遺跡遺物 (9)	198
図版 38	中野内遺跡遺物 (10)	199
図版 39	中野内遺跡遺物 (11)	200
図版 40	中野内遺跡遺物 (12)	201
図版 41	中野内遺跡遺物 (13)	202
図版 42	森ノ上遺跡上空より北浦湾を望む	203
図版 43	森ノ上遺跡の古墳時代を俯瞰する・森ノ上遺跡遺構 (1)	204
図版 44	森ノ上遺跡遺構 (2)	205
図版 45	森ノ上遺跡遺構 (3)	206
図版 46	森ノ上遺跡遺構 (4)	207
図版 47	森ノ上遺跡遺物 (1)	208
図版 48	森ノ上遺跡遺物 (2)	209
図版 49	森ノ上遺跡遺物 (3)	210
図版 50	森ノ上遺跡遺物 (4)	211
図版 51	森ノ上遺跡遺物 (5)	212
図版 52	森ノ上遺跡遺物 (6)	213
図版 53	森ノ上遺跡遺物 (7)	214
図版 54	森ノ上遺跡遺物 (8)	215
図版 55	森ノ上遺跡遺物 (9)	216
図版 56	森ノ上遺跡遺物 (10)	217
図版 57	森ノ上遺跡遺物 (11)	218
図版 58	熊野江湾上空よりカラ石の元遺跡を望む	219
図版 59	別府地区より熊野江湾方向を望む ・熊野江神社付近より遺跡を望む	220
図版 60	カラ石の元遺跡上空より ・調査前の六地藏幢周辺	221
図版 61	カラ石の元遺跡遺構 (1)	222
図版 62	カラ石の元遺跡遺構 (2)	223
図版 63	カラ石の元遺跡遺構 (3)	224
図版 64	カラ石の元遺跡遺構 (4)	225
図版 65	カラ石の元遺跡遺構 (5)	226
図版 66	カラ石の元遺跡遺構 (6)	227
図版 67	カラ石の元遺跡遺物 (1)	228
図版 68	カラ石の元遺跡遺物 (2)	229
図版 69	カラ石の元遺跡遺物 (3)	230
図版 70	小路石塔群 (1)	231
図版 71	小路石塔群 (2)	232
図版 72	北浦町関連資料 (1)	233
図版 73	北浦町関連資料 (2)	234
図版 74	自然科学分析 (1)	235
図版 75	自然科学分析 (2)	236
図版 76	自然科学分析 (3)	237
図版 77	自然科学分析 (4)	238

第I章 はじめに

第1節. 調査に至る経緯

東九州自動車道県境～北川間は、延岡市北川町長井の北川I.Cから大分との県境に至る延長16.5kmに及ぶ高規格幹線道路で、平成11年12月に整備計画が決定し、平成15年12月の国土開発幹線自動車会議において有料道路方式から新直轄方式に替わる整備区間に選定された。

本区間の埋蔵文化財取扱い協議は、事業の進展に伴い実施され、平成13年度に日本道路公団（現西日本高速道路株式会社）九州支社長から宮崎県教育長あてに、予定路線内の埋蔵文化財分布調査の依頼があり、同年度に宮崎県埋蔵文化財センターが同調査を実施した。

分布調査の結果、予定路線内に周知の埋蔵文化財包蔵地1箇所、協議が必要な箇所14箇所の計15箇所約73,000㎡を把握し、その旨日本道路公団九州支社長あてに回答を行った。

新直轄区間への選定後、埋蔵文化財の協議は、国土交通省九州地方整備局延岡河川国道事務所と県教育委員会文化財課の間で行われた。この間、路線計画の変更があった北川I.C部分の再分布調査の実施、路線全体のより詳細な現地踏査を実施した結果、14箇所約65,000㎡の調査対象地に絞り込み、発掘調査の措置を講じることになった。

確認調査は最初に北浦I.C予定地の中野内遺跡から着手し、遺構や遺物を確認した。この結果を受け、平成19年12月に、国土交通省九州地方整備局延岡河川国道事務所長から県教育長あてに埋蔵文化財発掘通知が提出され、県教育長名で発掘調査の指示を回答し、本発掘調査に着手したのを皮切りに、他の遺跡も同様の措置を講じていった。（飯田）

第2節. 調査の組織

本書掲載の遺跡調査・整理報告にあたって以下の組織が準備された（平成19～21年度）。（飯田）

（調査主体）宮崎県教育委員会
宮崎県埋蔵文化財センター

所 長		清野 勉（平成19年度） 福永 展幸（平成20・21年度）
副所長		加藤 悟郎（平成19・20年度）
副所長兼総務課長		長友 英詞（平成20・21年度）
総務課長		宮越 尊（平成19年度） 長友 英詞（平成19・20年度）
主幹兼 総務担当リーダー		高山 正信（平成19～21年度）
調査第一課長		長津 宗重（平成19～21年度）
副主幹兼 調査第一担当リーダー		南中道 隆（平成19・20年度） 飯田 博之（平成21年度）
試掘調査担当	主 査	田村 浩司（平成19年度）
	主 査	崎田 一郎（平成19年度）
	主任主事	堀田 孝博（平成19年度）
	主 事	岡田 諭（平成19年度）
	主 事	岸田 裕一（平成19年度）
本調査担当		
海舞寺遺跡	主 査	黒木 秀一
	主任主事	藤木 聡
	主 事	岡田 諭
市之串遺跡	主 査	田村 浩司（～20年10月）
	主 査	崎田 一郎
	主 査	黒木 秀一
	主 事	松元 一浩
中野内遺跡（A～G区）		
	主 査	崎田 一郎（～21年2月）
	主 査	吉野 達三
	主 事	古田 陽
		（H～K区）
	主 事	古田 陽
	主 事	早瀬 航
森ノ上遺跡	主 査	山田 高大
	主任主事	藤木 聡
	主 事	岡田 諭
	主 事	早瀬 航
カラ石の元遺跡		
	主 査	田村 浩司
	主 事	松元 一浩
整理・報告担当	主 査	崎田 一郎
	主 査	黒木 秀一
	主任主事	藤木 聡
	主 事	松元 一浩
	主 事	岡田 諭
	主 事	古田 陽

調査指導・協力等（五十音順）

（宮崎県文化財保護指導委員） 兒嶋宗次
（延岡市教育委員会） 太田尾峰子・尾方農一・
小野信彦・高浦 哲・山田 聡
（宮崎考古学会） 岩永哲夫

第II章 地理的・歴史的環境

本書で報告する遺跡は、宮崎県の最東北端部に位置する延岡市北浦町古江・延岡市熊野江に所在する。

北浦町古江・熊野江一帯を含む日豊海岸国定公園（総延長85km・1974（昭和49）年2月指定）は「日向松島」とも呼ばれる美しいリアス式海岸である。また、天然記念物である高島のビロウ林のような亜熱帯性植物の北限域でもある。

気候は、年間平均気温17℃前後でほとんど降雪もなく、日照時間も2,000時間を越えるように、総じて温暖な気候である。年間降水量は2,800mmに達する多雨地域であり、特に6～9月の梅雨・台風の時期の総降雨量は年間降雨量の6割に相当し、しばしば土砂災害・水害に見舞われている。沿岸の水温は、黒潮の影響を受けて概ね17～30℃と高く、岩磯域には珊瑚礁が発達している。

北浦町一帯は、海に面するという海上交通に恵まれた地理的条件を利用して、古くから大分や瀬戸内地域・大阪地域との交流があった。一方で、自動車主体の陸上交通にあっては“陸の孤島”と呼ばれたが、1974（昭和49）年の国道388号線整備、その後のトンネル開通によって徐々に利便性を増してきている。

第1節 北浦町古江の地理的・歴史的環境

1-1. 北浦町古江の地形環境（第1・2図）

陣ヶ峰（430.5m）をはじめ、飯塚山（571.4m）、岳山（613.8m）、黒岩峠を挟んで鏡山（645.4m）への連続が分水界となり、山腹斜面は開析が進んでおり、多くは急傾斜となって複数の崩壊地形も見られる。

古江は分水界よりも海岸地域に位置し、小河川とその河口部に形成された扇状地性の小規模な沖積平野が見られる。大規模な平野は存在しない。古江川は全長約4kmと分水界からの距離が短く、長雨の時は勢いよく流れる一方で、雨が止めば水が涸れてしまう。中港川は蟬谷の中腹に発し、全長約2.2kmの急流河川であり、水涸れの様子等は古江川に同じである。

古江川に沿って現在の地下地区には谷底低地が南北に発達しており、東西の山地より扇状地が張り出して

いる。北浦支所付近は谷底低地に続く三角州であり、そのまま現在の古江港に向かって古江川周辺に砂堤帯と後背湿地が広がる。

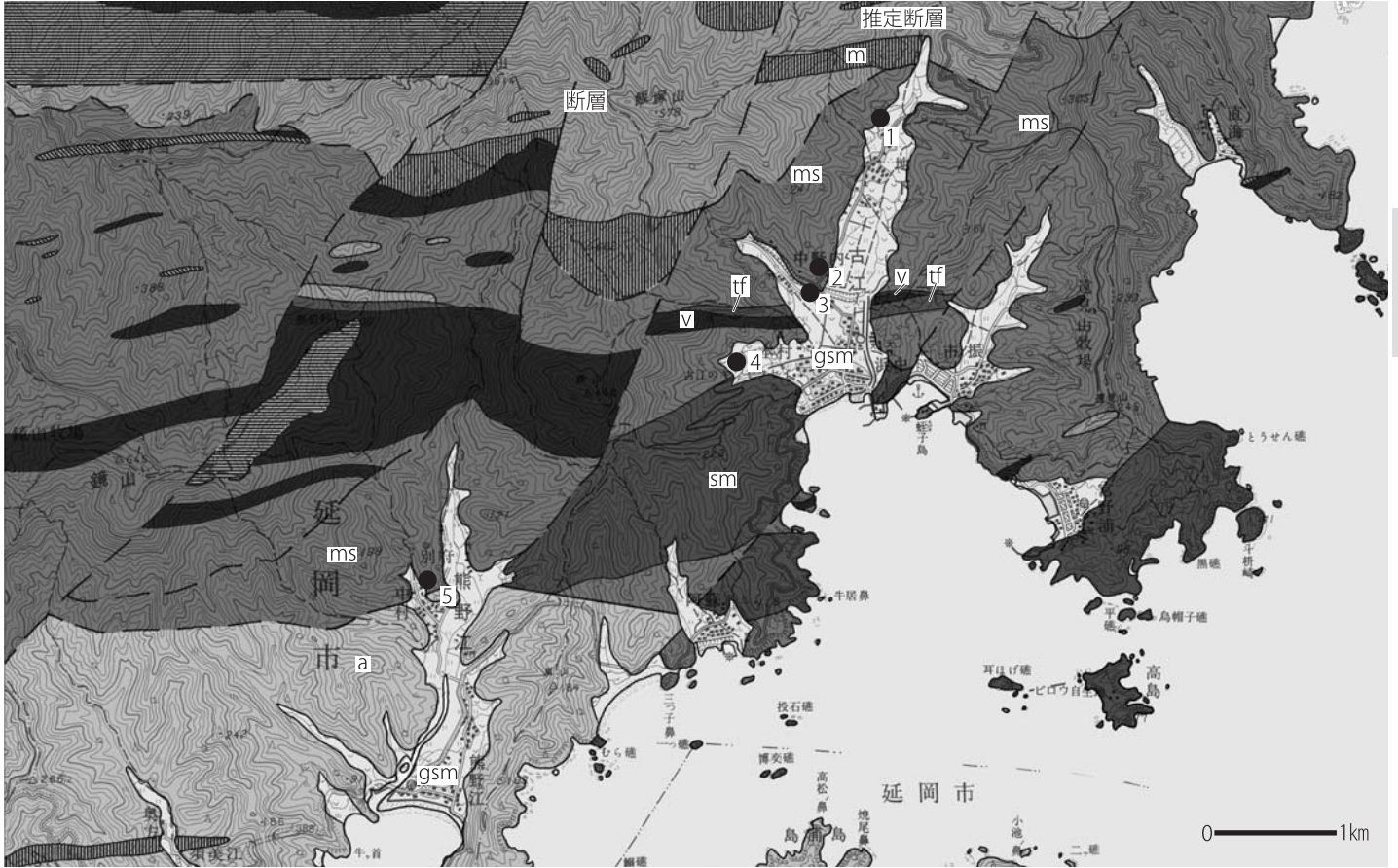
海舞寺遺跡は地下地区の谷底低地に張り出した扇状地東斜面に位置している。市之串遺跡は山地急斜面に位置する。中野内遺跡一帯は海舞寺遺跡の面していた谷底低地ならびにその下流側に形成された旧潟湖に向かう三角州に面している。中野内遺跡に集落が営まれた弥生～古墳時代にかけては、旧潟湖付近まで古江湾が入り込んでいた可能性が高く、集落景観を考える上で重要である。なお、中野内遺跡西側の山麓緩斜面は崩壊した山地と対応している。森ノ上遺跡は中港川に開析された下上位岩石台地とその間を埋める扇状地あたり、今回報告する古墳時代等の集落は扇状地部分に、次年度以降に報告予定の縄文時代早期等の集落は下上位岩石台地部分に相当する。

1-2. 北浦町内の考古資料

今回の一連の調査成果の位置づけにあたり重要となる、延岡市教育委員会保管分ならびに当センターによる分布調査採集遺物を報告する。

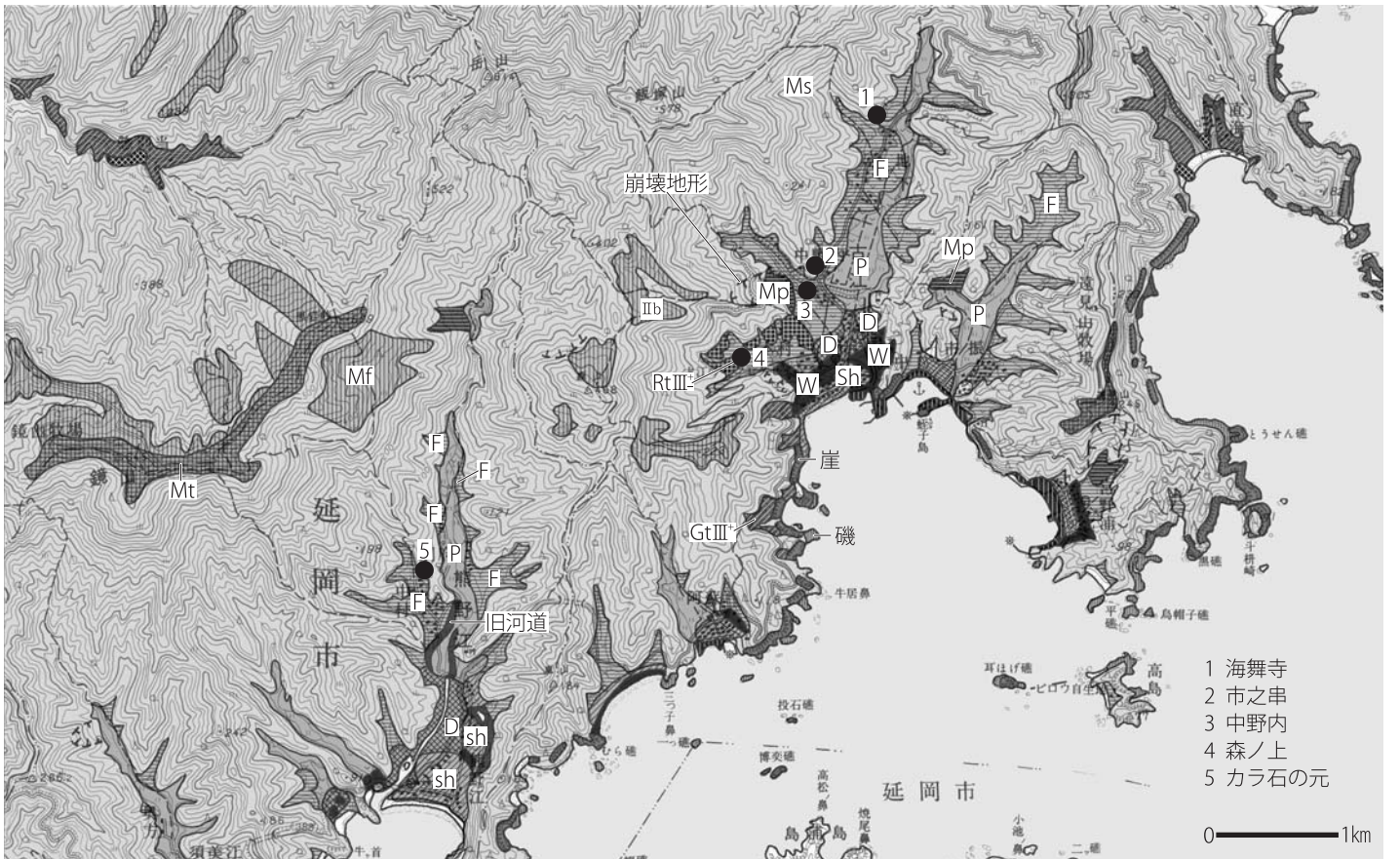
A～E・G～Lは北浦教育課保管（北浦公民館で展示中）・Fは市文化課保管で、縄文時代後期土器、縄文時代前期以降の磨製石斧、弥生前～中期土器、弥生時代後期以降の石庖丁、室町時代の錫杖・銭貨・玉、明治時代の鉄砲弾丸等がある（第4図・第1表）。この他、市振字日用採集で弥生土器・古墳土師器・中世～近世土器／播鉢や採集地不明の鉄滓等がある。日用は寺屋敷とも称されたようである（『全国遺跡地図』作成に伴う1977（昭和52）年分布調査）。

当センターによる分布調査は、発掘調査前後に路線内外を合わせて実施した。鳴川引地では原位置を遊離した石塔部材が散見され（第82図）、縄文時代の打製石鏃・古代以降の火打石（第4図1～5）の他、弥生土器あるいは土師器・中近世陶磁器・青花碗・中世土師器・青砂岩製磨石・凝灰岩製挽臼が採集された。中野内・野地久保島遺跡間の丘陵北斜面では青砂岩製敲石（第4図6）が採集された。ここは山手と里を結ぶ



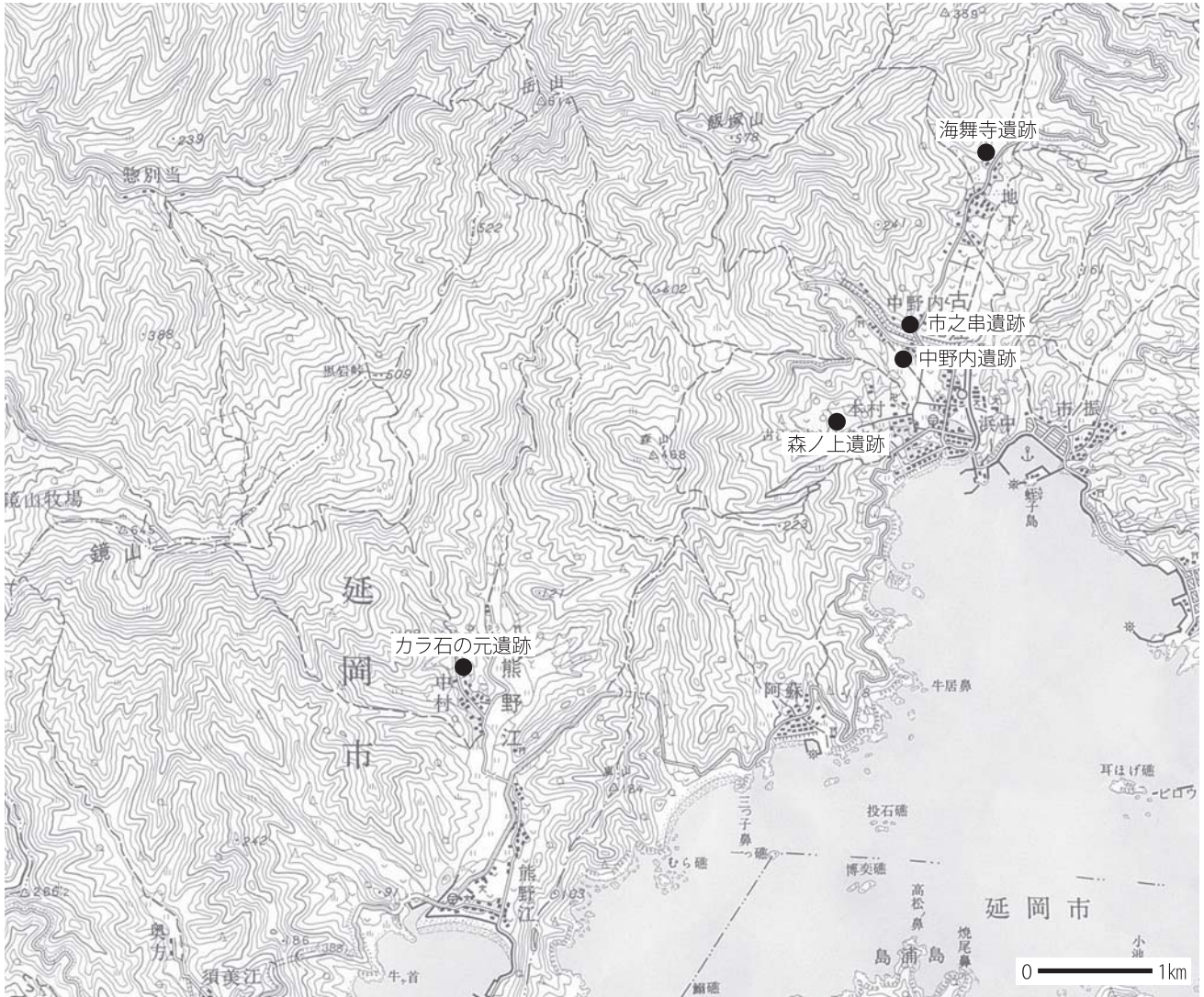
第1図 北浦町・熊野江地区表層地質図

凡例 gsm：礫・砂・泥（低地堆積物）及び埋立地、sa：主に砂岩・砂岩泥岩互層（四万十層群）、m：主に泥質岩（四万十層群）、a：主に層状砂岩・砂岩優勢砂岩泥岩互層（四万十層群）、ms：主に泥質岩（層状組織が発達）（四万十層群）、sm：砂質岩・泥質岩（片状組織が発達）（四万十層群）、tf：凝灰岩・凝灰岩質泥質岩（四万十層群）、v：苦鉄質火山岩類（四万十層群）



第2図 北浦町・熊野江地区地形図

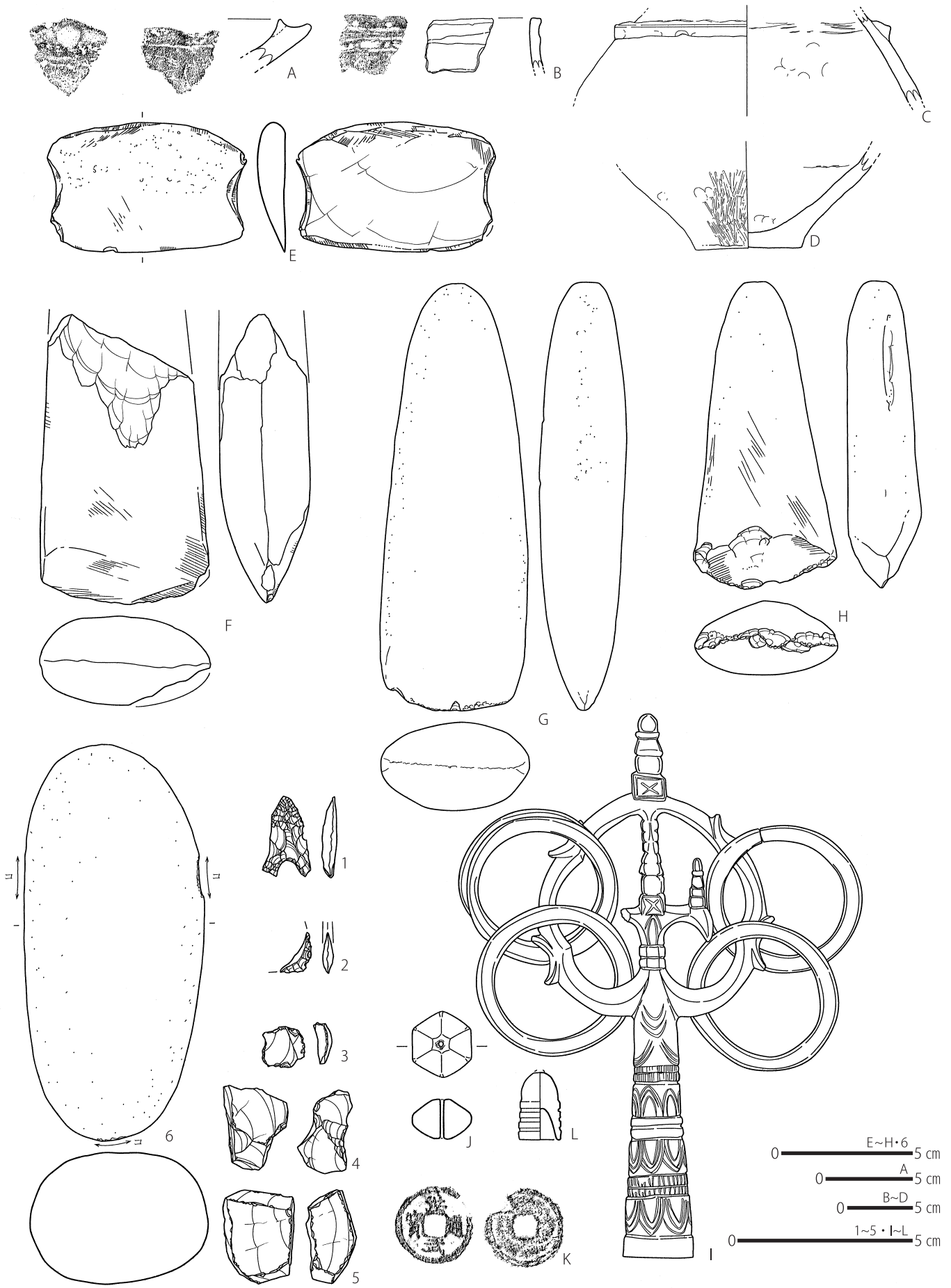
凡例 Mt：山頂急斜面、Mf：山腹緩斜面、Ms：急斜面、Mp：山麓緩斜面、GtIII+：下上位砂礫台地、RtIII+：下上位岩石台地、F：扇状地、P：谷底平野、D：三角州、Sh：砂礫堆、W：湿地



第3図 報告する遺跡分布図

No.	器種等	所見
A	台付皿形土器	市振字日用採集。外面は全体ナデで口縁下部に凹線1条あり。内面は粘土紐貼り付けの上で指押さえて文様を作り出す。焼成良好。縄文後期。
B	甃	古江字鳴川引地採集。土器への貼り紙には採集地等が記載され、港川上流の“鳴子”（鳴川に同じ）の水田で、1978（昭和53）年2月11日に木原〇〇氏（名は判読不能）によって採集されたとわかる。風化が進んでいる。口縁下1.5cmの外面には貼付突帯が廻る。弥生中期。
C	壺	古江字ハイ採集。C・Dは同一個体と見られる。児島新悟氏により提供された。胎土は赤色・白色粒子を含む在地のザラザラしたもので、胴部外面には指押さされた貼付突帯が廻る。土器製作時の接合箇所の1つが突帯部分にあり、全体に指ナデの内器面調整の中で接合痕部分を工具で消している。底部は直径8.0cmの平底で、外面縦方向に長さ約2cm単位でミガキの後に部分的に指押さえがある。内面底も指押さえである。焼成は良好。弥生中期。
D	壺	Cに同じ。
E	石庖丁	北浦町内採集。宮崎県総合博物館報告に掲載。背面に礫面残る横広剥片素材。剥片打面側を石庖丁背部、剥片末端側を刃部とする。研磨は石庖丁背部・刃部・挟り部周辺に集中。裏面は素材の剥片剥離面のまま。挟りは長軸両端に幅広く入る。ホルンフェルス製。長4.9cm・幅7.6cm・厚1.1cm・重量55.8g。弥生後期以降。
F	磨製石斧	器面のマジック書きによると、市振神社の東側で1979（昭和54）年6月14日に吉田実氏によって採集。『北浦町史』79頁写真8に同じ。側面は弱い稜を持ちつつ直線的。最大厚は刃部より6～7cm付近。再研磨を繰り返して小ぶりになった石斧。基部欠損し、欠損面より刃部側に向かって整形するかのような剥離あり。刃部に刃こぼれあり。蛇紋岩製。長11.0cm・幅6.5cm・厚3.5cm・重量348.5g。縄文前期以降。
G	磨製石斧	三川内中学校敷地で採集。宮崎県総合博物館報告に掲載。器面全体は基部側に向かって徐々に先細りになるよう、丁寧に研磨。研磨前には敲打成形があり、研磨の及んでいない箇所が部分的にあり。刃部は蛤刃状。砂岩製。長16.2cm・幅5.7cm・厚3.3cm・重量421.3g。縄文前期以降。
H	磨製石斧	三川内字イヤザメで猪股成子氏採集。器面全体は基部側に向かって徐々に先細りになるよう、丁寧に研磨。基部側に研磨の及ばなかった敲打痕の残る凹部あり。刃部周辺は表裏面ともに再研磨あり。再研磨面を切って、刃端部には敲打痕あり。なお、器面には紙が貼り付けられていた跡が残る。ホルンフェルス製。長11.6cm・幅5.5cm・厚2.8cm・重量214.0g。縄文前期以降。
I	錫杖	木原一雄氏採集。輪は頂部がやや尖った宝珠形を意識するもののほぼ円形で、輪断面は菱形。輪頂には五輪塔を置き、輪の左右2箇所ずつの計4箇所突起あり。輪内部は下弧下端左右から派生した2本の弧に五輪塔を搭載。五輪塔の一方は欠失。輪には5環の遊環が付く（一般的には6環であり1個欠失する可能性あり）。杖本体との接続部は断面円形で柄に向かって開く形状。下端から順に、沈線・沈線・凸線・沈線で3段に分画。各段には8葉からなる蓮弁飾が廻る。下端から2cmの位置には木柄に貫通する釘穴が左右より開く。室町時代。全長15.4cm。
J	玉	木原一雄氏採集。整形等より見るとガラス製か。丸くふくらみを持った、平たい六角錐にカット。両側部をつなぐように直線的に細穴が通され、穴周辺は平ら。レンズ効果を十分に意識し、中心の細穴より放射線が広がるよう細工。長2.3～2.5cm・厚1.5cm・重量10g。
K	洪武通宝	木原一雄氏採集。
L	弾丸	西南戦争の時のものでよろう。スナイドル銃の鉛弾丸。1974（昭和49）年11月に三川内一休谷で池田道義氏採集。長2.6cm・口径1.6cm・重量29.2g。
1	敲石	中野内・野地久保島遺跡間の丘陵北斜面採集。青砂岩製。長15cm・幅6.8cm・厚5cm・重量774.9g。立地等より、縄文時代のものか。
2	打製石鏃	古江字鳴川引地採集。腰岳産黒曜石製。長2.3cm・幅1.4cm・厚0.4cm・重量0.9g。縄文。
3	打製石鏃	古江字鳴川引地採集。チャート製。長1.1cm・幅0.9cm・厚0.3cm・重量0.1g。縄文。
4	火打石	古江字鳴川引地採集。徳島大田井産チャート製。重量0.8g。近世。
5	火打石	古江字鳴川引地採集。灰黒色チャート製。重量5.4g。古代～近世。
6	火打石	古江字鳴川引地採集。石英製。重量11.1g。古代～近世。

第1表 周辺遺跡採集遺物観察表



第4图 周边遗迹采集遗物实测图

稜線に沿った主道とそれに交差する複数の脇小道が走っている。土の露出した範囲を精査したところ、表土直下にわずかな黒色土を挟んで岩盤となっており、斜面中途から下にかけてはK-Ahの堆積も見ることができた。敲石以外に遺物は採集されていない。この他、市之串遺跡調査区北側の山斜面の畑跡周辺（現況は山林）で近代陶磁器の散布が見られた。

1-3. 北浦町古江の歴史環境

今回の発掘調査によって数多くの新知見がもたらされたが、ここでは、前項も踏まえて調査以前に知られていた歴史を概観する。

旧石器時代の遺跡は知られていない。

縄文時代は、わずかに磨製石斧等の採集資料が紹介されていた。昌雄寺東側の畑地で後・晩期の土器片が（文化庁地図の本村遺跡）、市振開田工事の際に縄文土器がそれぞれ発見されたという。また、『宮崎県の考古学』では「北浦村古江字野地」で推定後期の半磨製石斧・石錘・石匙が採集されているようだが、実資料は未確認である。

弥生時代前期・中期末～後期初頭は、中野内遺跡で集落が発掘調査された。また、『全国遺跡地図』作成に伴う1963（昭和38）年の分布調査では、三川内小学校の校舎・運動場の造成時に残された北側の丘陵（三川内字梅木）で弥生土器、1960（昭和35）年の改田の時に市振字清水で弥生土器片・磨製石斧、古江字本村の昌雄寺付近で弥生土器底部、古江字中野内口（現在の中野内遺跡と一連の可能性が高い）で弥生土器等が採集された。この他、弥生時代後期～古墳時代の方形石庖丁が紹介されていた。

古墳時代は、かつて三川内小学校敷地内に古墳が存在したという伝承がある。『全国遺跡地図』の見張台遺跡は古墳時代とされるが、ハイ出土の弥生土器がおそらくこれに該当しそうである（第4図C・D）。この他、『全国遺跡地図』作成に伴う1977（昭和52）年の分布調査では、前節の市振字日用以外に宮野浦字大谷・古江字鳴川川地地帯で土器が採集された（土器の時代・時期・所在等は不詳）。

古代・中世は三川内地区字市尾内・中水流に中世城館か。前者には「倉屋敷」の地名伝承がある（中世城館緊急調査）。古江本村も中世遺跡とされる。

今に伝わる寺社の成立も中世である。禅宗延岡台雲寺の末派となる昌雄寺が1568（永禄11）年に成立し、1594（文禄3）年に伊予国主の河野阿波守によって中興開基された。同寺には1533（享禄5）年の銘文を刻んだ六地藏幢1基がある。本願施主として「越智末孫河野通正」とあり、当地と瀬戸内海の伊予水軍の交流を窺わせる。また、郷社である八幡宮は1448（文安5）年12月の建立である。八幡宮は後に古江神社と名を改めるが、それは1871（明治4）年の地下の鳶野尾権現・熊野権現・住吉大明神、野路の鳶野尾権現、中野内の八王子宮、阿蘇の天神宮の六座を附祭した時である。錫杖・洪武通宝・ガラス玉等の存在は修験僧等の存在も窺わせている。

江戸時代は延岡藩領である。1645（寛永11）年、六箇組七か村の大庄屋である大田尾家の指出に古江村の名が見え、村高170石であった。また、水害が何回も起きており、非課税になる時期もあったという（『国乗遺聞』）。1692（元禄5）年には村高208石余りと増加しており、17C半ばから末期にかけての藩主導の勸農政策や新地開発等によって生産力向上が図られた結果である（『日向国覚書』）。幕末には、人家は地下50数戸・中野内18戸・今村18戸・津留14戸・中村20数戸・濱44戸・本村30数戸・野路14戸・阿蘇20数戸という。人口は男768人・女771人である（『日向地誌』）。

古江村では周辺の村々との間で入会地や漁業権を巡って争論が頻発し、その関係で文書史料が豊富に残されることとなった。一例として、『日向地誌』に挙げたエピソードを紹介すると、古江本村と熊野江村との境界に川内と呼ばれる土地があり、17C末（元禄年間）以前から、両村の間で土地所有の争いが続いていた。1702（元禄15）年6月には藩が聞き取りをし、審議した上でここを両村の共有地としたが、その後も争いは起り、幕末に至っても、この決定に村民は納得していなかったという。

この他、北浦町内に残る庚申塔131基（文字塔76基・像容塔55基）のうち、建立年が最も古いものが中野内の字境にある天和年間（1681～1684年）の文字塔である。また、江戸後期には、伊能忠敬一行が、古江村の海岸部を測量し、大庄屋大田尾源太兵衛宅に宿泊したという（『伊能忠敬測量日記』）。

明治時代の西南戦争の際には、西郷軍が政府軍と対峙する過程で古江一带の山々に陣地を築いたため、艦砲射撃を受けた市振村が戦火にあい大損害を受けた。

行政上では区域の変動が多く、延岡県→宮崎県→鹿児島県と変遷し、1883（明治16）年に再び宮崎県となった。また、市町村制度施行により1889（明治22）年に北浦村、1972（昭和47）年に北浦町、2006（平成18）年に延岡市北浦町となった。（藤木）

第2節 延岡市熊野江の地理的・歴史的環境

2-1. 延岡市熊野江の地形環境

おおまかな地形は、三方に山がめぐって南に海がある。まず鏡山（645.4m）から南に延びる200m超の山稜線が須美江との境界となっている。鏡山から岳山（613.8m）、飯塚山（571.4m）から森山（467.6m）を経て嵐山（183.5m）をつなぐ稜線は、北から東の境界となり、これを越えると下阿蘇・阿蘇となる。嵐山から南は岬状に突き出ており、その南端付近を福崎という。鏡山から南に延びる岬の岩礁は黒八重崎といい、この間が熊野江川・八重川の注ぐ熊野江湾となる。熊野江湾は現在海水浴場ともなる砂浜であり、八重川河口すぐには踊八重・美知楯・庚申八重と呼ばれる3つの岩が並び立っており、美しい景観を作り出している。

人家や畑地・水田等は熊野江川に沿った沖積地や山麓斜面に広がっている。八重川に伴う沖積地は帯状に狭く、畑地・荒地となっている。

地形について、発達した谷底平野を持ち、海岸に沿って砂礫によって形成された浜堤とその背後に旧潟湖跡である後背湿地を伴う。古江よりも小規模とはいえ両者の地形構造は酷似しており、その風景を熊野江では現在も良く残している。

熊野江川は全長約6kmで、鵜戸尻より上流は水が常に少なく、夏場に雨が多く降ると潮水等も上がって水害を多発させていた。熊野江川に沿って現在の別府地区には谷底低地が南北に延びており、東西の山地より支谷を埋めるように扇状地が張り出している。旧河道もいくつか見ることができ、特に下流部においては自然堤防あるいは浜堤が形成される。現在の388号線が走る水田一带は谷底低地に続く三角州であり、最終的に熊野江地区の人家の広がる浜堤となる。

カラ石の元遺跡は、熊野江川に向かう扇状地の中でも最大級の中村地区の最奥部に立地する。同地区を流れる川は水源より熊野江川との合流点（橋ノ元）まで全長1.6kmである。河川改修以前、普段は水がないものの、長雨時には徒歩では渡れなくなったという。

2-2. 熊野江の歴史環境

古江と同じく、調査以前の既知の歴史を概観する。

旧石器～縄文・弥生時代の遺跡は知られていない。

古墳時代は、海岸部に位置する箱式石棺墓7基がある。このうち5基については県指定史跡（南浦村古墳・1942（昭和17）年指定）となっており、現地を訪ねると石碑のみが残されている。1979（昭和54）年に宮崎県教育委員会により1基発掘された。主体部が千枚岩で構成される積石墓であり、棺内には人骨も遺存していた。

中世は、福村（ふむら）と言われるわずか3～4戸の村であったという（年代不詳）。そこへ紀伊国の熊野権現の御霊を迎えて村に鎮座（旧称：熊野三社大権現、1871（明治4）年に熊野江神社と改称）したことで熊野江に改め、人口も次第に増えていった。なお、須美江地区の普門寺に置かれている木造十一面観音立像（11Cの作）は、1578（天正6）年の大友宗麟の日向侵攻による難を逃れるために、熊野江の寺屋敷にあった寺院から移されたものとされる。

江戸時代は延岡藩領である。文政の頃に地元住民が協力して再建したと言われる阿古江の森将監墓がある。また、丸野山の南東の山腹には銅山の採掘場が7箇所あり、文政の頃、熊野江住民によって精製・鑑定したところ品質良好であったが、資金繰り失敗によって未採掘に終わった。人家は大濱17戸・向ひ6戸・下16戸・木場16戸・村19戸・尾鼻14戸・中村24戸・別府9戸という。人口男355人・女352人である（『日向地誌』）。

明治時代以降は、古江と同じく1883（明治16）年に再び宮崎県になった。その後、市町村制度施行により1889（明治22）年に南浦村、1955（昭和30）年に延岡市となった。（藤木）

第Ⅲ章 発掘調査・整理作業の概要と経過

第1節 試掘・確認調査の方法・概要と経過

本書所収遺跡について、平成19年度は、周知の埋蔵文化財包蔵地である中野内遺跡の他、未周知の海舞寺第1遺跡・海舞寺第2遺跡・海舞寺第3遺跡・市之串第1遺跡・鳴川引地遺跡・森ノ上遺跡・カラ石の元遺跡（未周知分はいずれも仮称）の7地点について試掘・確認調査が実施された。調査は、全地点で重機によるトレンチ掘削とし、アカホヤ火山灰層（以下、K-Ah）を目安に土層や遺構・遺物の確認、写真撮影、平板測量を行った。また、分布調査時に確認された市之串第2遺跡（仮称）の横穴群についても再踏査が進められた。各遺跡の調査概要は以下の通りである。

※仮称遺跡名（対象面積・試掘日・調査担当）

海舞寺第1遺跡（2,500㎡・20080219・田村／堀田／岡田）の現況は山林ならびに豚舎・茶畑等である。トレンチ1～4はK-Ahが部分的に残存するが、遺構なし。表土等より近世陶磁器出土。本調査の必要なし。

海舞寺第2遺跡（4,400㎡・20080220・田村／堀田／岡田）の現況は山林・畑地である。トレンチ1・2はK-Ahが部分的に残存するが、遺構・遺物なし。トレンチ3～7はK-Ah上面でピットを検出した。トレンチ3・4・7の黒色土・ピットから中世陶器が出土した他、中世石塔・近世磁器が表採された。なお、分布調査では未見の横穴2基が確認された。本調査必要。

海舞寺第3遺跡（2,200㎡・20080220・田村／堀田／岡田）の現況は山林である。未伐採のため掘削不可ながらも、隣接地の類似する地形部分の試掘結果から、遺跡の可能性は低いと判断した。本調査の必要なし。

市之串第1遺跡（970㎡・20080218・田村／堀田／岡田）の現況は大規模に整地された宅地跡である。トレンチ1～3はK-Ahが部分的に残存する。K-Ah上面に溝状の硬化面を検出したが、時期等の特定は叶わない。近代遺物含む厚い客土が載る。本調査の必要なし。

中野内遺跡（25,230㎡・20070925～20071004・崎田／堀田／佐竹、20080225～20080227・田村／崎田／堀田）の現況は畑地である。2007年9・10月調査のトレ

ンチ1・13・15②はK-Ah面で竪穴住居跡・ピット等を検出した。トレンチ4は平成4年度圃場整備に伴う発掘調査で農道壁面に露出した竪穴住居（調査では平面プランまで検出）との関係が注意された。耕作土直下はK-Ah下の小礫含む褐色土層となり、遺構があったとしても削平済である。遺物なし。トレンチ5～7は混礫砂層で、さらに掘り下げると旧河道と見られる混砂礫層になる。遺物なし。トレンチ8の耕作土直下は砂層でトレンチ5～7に近い状況である。トレンチ9～12は平成4年度調査区の復元目的で設定したが、明確にはならなかった。2008年2月調査のトレンチ8・10はK-Ahが残存する。トレンチ5・6・8～11では客土下に旧水田（圃場整備前）がパックされる。トレンチ8・10で竪穴住居跡を検出し、土器・陶器・石器等が出土した。トレンチ12・13より土器・磁器が出土した。他トレンチでは遺構・遺物なし。本調査必要。

鳴川引地遺跡（950㎡・20080220・崎田／堀田／岸田）のトレンチ1・2ともに遺構・遺物はない。本調査の必要なし。

森ノ上遺跡（5,700㎡・20080220・崎田／堀田／岸田）の現況は宅地ならびに段々になる果樹畑地である。トレンチ1～13はK-Ahが部分的に残存したが、K-Ah上での遺構・遺物はない。K-Ah下は、トレンチ6・7・9・13で縄文早期土器・石器等が出土した。この他、近世磁器等が表採された。本調査必要。

カラ石の元遺跡（1,200㎡・20080221・崎田／堀田／岸田）の現況は山林で石塔・玉砂利が露出する。トレンチ1・2は遺構・遺物なし。トレンチ3～7はK-Ahが残存した。トレンチ6ではピットを検出した。トレンチ7から近世陶器が出土した。本調査必要。

なお、試掘結果により本調査必要なしとした地点が出たことにより、仮称遺跡名のうち海舞寺第2遺跡→海舞寺遺跡、市之串第2遺跡→市之串遺跡に変更決定し、それ以外の遺跡名はそのまま踏襲することとした。以上を踏まえ、平成19・20年度に、中野内遺跡・海舞寺遺跡・市之串遺跡・森ノ上遺跡・カラ石の元遺跡の本調査を実施することとなった。（藤木）

第2節. 発掘調査の概要

本書所収の遺跡発掘調査は、平成19年12月～同20年3月までの中野内遺跡を皮切りに、平成20年6月以降の上半期に海舞寺・中野内・カラ石の元遺跡で、同9月前後の下半期に市之串・森ノ上遺跡で実施した。ここでは発掘調査の概要のみ記載する。

海舞寺遺跡(1,800㎡・20080616～20081020)では中世から近世にかけての掘立柱建物跡等の集落跡が検出され、陶磁器・石器・銭貨・種子・貝等が出土した。この他、石組遺構・横穴も検出され、旧石器・縄文時代遺物も少量出土した。

市之串遺跡(4,400㎡・20081014～20081226)では横穴が検出された。

中野内遺跡(10,945㎡・20071205～20080321/20080609～20080922)では、弥生時代から古墳時代にかけての集落跡・土石流に埋められた流路等が検出され、弥生土器・土師器・石器・鉄器等が出土した。また、縄文時代早期の集石遺構も検出された他、古代以降の遺物も少量出土した。

森ノ上遺跡(5,450㎡・20080825～20090202)では縄文時代早期の集石遺構・炉穴ならびに弥生時代から古墳時代前期の集落跡が検出され、それに伴う遺物も大量に出土した。この他、少量の中世遺物も出土した。なお、今回の報告対象は弥生・古墳時代のみである。

カラ石の元遺跡(1,600㎡・20080602～20080916)では古墳時代中期の集落跡ならびに中世から近世の石塔他が検出された。この他、縄文時代前期の遺物も少量出土した。

なお、調査遺跡と高速道路との位置関係を大分県境側より順に示すと、県境の陣ヶ峰トンネルを抜けて地下橋までの間に海舞寺遺跡、北浦I.C手前の尾根が市之串遺跡、北浦I.Cが中野内遺跡、古江トンネル直前が森ノ上遺跡、熊野江川橋を過ぎて丘陵を越えた地点がカラ石の元遺跡である。(藤木)

第3節. 整理作業の方法と経過

整理作業は、平成20年10月1日以降、現地調査終了分から順次進めていった。報告書は、路線北より順に海舞寺遺跡・市之串遺跡・中野内遺跡・森ノ上遺跡(弥生・古墳時代のみ)・カラ石の元遺跡とその周辺

の文化財関連の報告を一書にまとめることとした。

3-1. 遺構の整理

遺構の整理は一覧表の作成より着手し、全遺構を対象に位置・種別・時期・規模等を整理した。**掘立柱建物跡**は現地復元を基本とし、一部、1/20の遺構分布図を用いて図上復元し、その一覧表を作成した。図中に示す北は基本的に磁北である。地図の一部については国土交通省より原図の提供を受けた。

3-2. 遺物の整理

水洗は調査区ごとに順次進め、取り上げ遺物全てを対象とした。**注記**は「遺跡名略号/遺構・グリッド名/層位/床直上出土ならびに埋土中で重要なものについて遺構内での通しNo. (いわゆるNo.付遺物)」を基本とした。各遺跡の注記ルールは巻頭の凡例のとおり。

土器の**接合**は遺構内出土遺物を中心に、必要に応じて遺構間・グリッド間等でも進めた。陶磁器類・石器については図化対象を中心に接合した。土師器については、胎土の粗さや明瞭な接合痕に起因するひずみが著しく、特に完形品に近い接合復元にあたって困難を極めた。なお、強度を確保した上でバイサム充填範囲に小窓を設けることで、展示の機会等に内面の調整痕等が容易に観察できるよう工夫した。金属器の**保存処理**は、まず、分館のサンドブラスターを用いたクリーニングを基本とし、脱塩は炭酸水素ナトリウム・炭酸ナトリウムを純水に溶かしたものに浸した。脱アルカリは温かい純水に浸し、乾燥を経てソルベントナフサ・NAD-10Vで含浸させた。含浸作業は3回繰り返し、乾燥の後、接合・補修した。最終的に、シリカゲルあるいは調湿剤(湿度を50%に保持)とともに調湿機能のあるプラスチック容器内で保管している。なお、図版用の写真撮影は脱塩前に実施した。

実測は作業員の協力の下に職員による手実測を基本とした。実測対象は、遺構の時期や性格を示す遺物や、遺構には伴わなくとも遺跡の変遷や時期的な性格を考える上で必要な遺物とした。石塔類は現地調査の中で実測・写真撮影した後、現地に残している。**製図**は、石器類・一部の金属器について外部委託した他は、職員で手トレースした。**写真撮影**は大判カメラ・デジタルカメラを併用し進めた。(藤木)

第Ⅳ章 海舞寺遺跡

第1節 遺跡の位置と調査の方法・経過

1-1. 遺跡の位置

海舞寺遺跡は、旧国道388号線を古江方面より進み、現在の地下（じげ）集落を過ぎて三方から山が迫る地下地区の北西最奥部にある（第3図）。本遺跡は、古江と三川内方面を結ぶ重要な陸上交通路であった旧国道388号線を見下ろす位置に立地する。

調査区周辺の地形は、標高90m付近より二又に分かれて延びる尾根と、それに挟まれた東向きに開いた小さな扇状地性の緩斜面からなる。尾根は標高35m付近で緩い傾斜となり、扇状地性緩斜面とともにそのまま沖積低地を蛇行する古江川に向かって下がってゆく。南の尾根の南側には末越川が流れ、谷空間の延長上付近で古江川と合流する（第5図）。

南の尾根は、地元住民によると、天狗が出るから天狗山と呼ぶそうである。高速道路線内にあたる天狗山の尾根上標高50m付近には、調査前に路線外へ移設済みであったが、祠があった。かつて祠のあった場所からは、古江湾に浮かぶ島浦島を望むことができる。この祠の御神体は石塔部材等であり、周辺の畑地脇等にも石塔部材が転在している。

『北浦村史』（1968年）によると、「近江源氏佐々木の一族木原玄蕃守重正が北面武士長乗井守重信をはじめとする一族郎党引きつれ、京都木原の荘より落人として1468（応仁2）年から永住。古江村の地下の奥に館を構えた。」とされ、海舞寺遺跡一帯もその候補となる。現在の古江川に架かる「玄蕃橋」が造られる前は、末越川に架かる本遺跡西側の橋がその名で呼ばれていた。周辺住民からの聞き取りでも本遺跡周辺に木原玄蕃守重正の屋敷があったとの言い伝えがあり、橋の名はその名残だという。

1-2. 調査方法と経過

本調査は平成20年6月16日から平成20年10月20日まで実施した。本調査では集落域（1,200㎡）と横穴周辺（600㎡）に分けて実施した。調査区周辺に山積みされた杉や広葉樹の材・枝葉を重機で移動させた後、表土剥ぎを行った。

集落域は国土座標に準じた10m×10mグリッドを西から東にA～G、北から南に1～7と設定した。アカホヤ上面まで重機で除去後、人力で遺構検出を行った。遺構掘り下げは半截を基本とし、必要に応じて土層断面図を作成した。遺物取り上げはグリッド・遺構別とした。アカホヤ下位については、5m×5mのグリッドを3箇所設定し、人力で掘り下げた。なお、ピット等で炭化物が含まれると判断したものは、土壌を8号ビニール袋に入る程度採取し、簡易のフローテーション作業を実施した。

横穴は4基確認された。入口周辺の表土は地山まで重機で除去し、未開口のものがないか探った。横穴内部については土層断面図等を作成しつつ、人力で床面等を検出した。横穴は古墳時代の横穴墓の可能性があったため、床面上の土については50cm枠毎に全て採取し、微小遺物の回収に努めた。

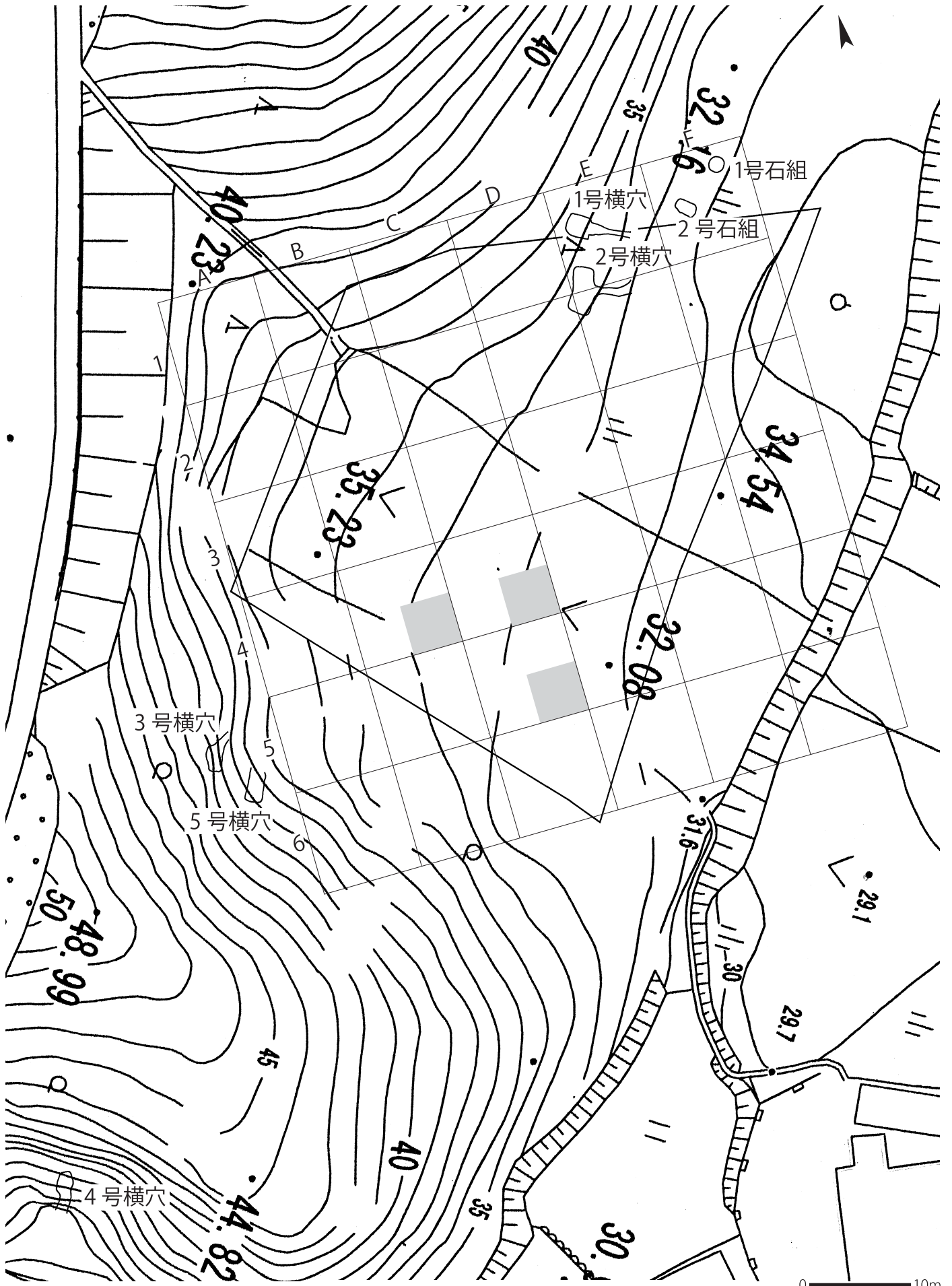
遺構実測図は1/20を基本とし、石塔は1/2で図化の上、現地に遺した。写真記録は大判カメラ（4×5）、中判カメラ（6×7）、35mmカメラでモノクロ・リバーサルフィルムによる記録を中心に行い、随時デジタルカメラを併用した。遺跡の立地状況や周辺の地形等を記録するため、空中写真撮影も実施した。

夏期の猛暑日は寒冷紗で調査区上部を覆うことで熱中症防止対策を取りながらの作業であったが、作業員諸氏の連携、奮闘により調査を無事終了することができた。なお、調査終了は当初、9月19日を予定していたが、国土交通省と協議の上、調査中に新たに発見された横穴の調査分を期間延長した。（黒木秀）

調査日誌抄

平成20（2008）年

- 0619 現場事務所設置予定場所～調査区道の整地。
- 0623 現場事務所設置、集落域重機表土剥ぎ。
- 0627 1・2号横穴入口重機表土剥ぎ。
- 0701 グリッド杭設置。
- 0702 作業員雇用開始。
- 0703 アカホヤ上面遺構検出開始、1号横穴調査開始。
- 0717 1・2号横穴入口を重機で再度表土剥ぎ。
- 0718 集落域土層確認用中央ベルト部を重機除去。



第5図 海舞寺遺跡周辺地形・グリッド配置図

- 0723 遺構検出写真撮影。
 0724 ピット半截作業開始。
 0731 1号横穴調査終了。
 0804 集落域南側攪乱域完掘・平面図記録開始・ピット完掘・フローテーション土採取開始。
 0805 延岡市文化課職員視察。
 0826 2号横穴調査開始
 0903 空中写真撮影。アカホヤ下確認掘削作業開始。
 0905 2号横穴調査終了。
 0908 1・2号石組遺構調査開始。
 0910 1・2号石組遺構調査終了。
 0911 3号横穴入口重機掘削・調査区埋め戻し開始。フローテーション作業開始。
 0922 4号横穴調査開始・重機埋め戻し終了。
 0925 3号横穴調査開始。
 0926 4号横穴調査終了。
 1009 3号横穴調査終了。
 1014 フローテーション作業終了。
 1020 調査終了。

第2節. 基本層序と土層堆積

本遺跡は、北西から南東に向かって緩やかに傾斜している。南北の尾根方向からの傾斜もあり、集落域東側中央付近が最深部となる。そこで、土層堆積は等高線に直交するものと調査区壁とで記録し（第6図a～aならびにb～b）、それらより基本層序を作成した。

- I層：表土
 IIa層：暗褐色土 (Hue10YR3/4 造成土)
 IIb層：黒褐色土 (Hue10YR3/2 造成土)
 IIIa層：暗褐色土 (Hue7.5YR3/3)
 IIIb層：暗褐色土 (Hue7.5YR4/3)
 IVa層：二次アカホヤ火山灰 (Hue5YR4/6)
 IVb層：アカホヤ火山灰 (以下K-Ah) (Hue5YR5/6)
 V層：暗褐色土 (Hue7.5YR3/3)
 VI層：暗褐色土 (Hue7.5YR4/3)

VI層以下は未掘削ながら、周辺露頭の観察からはそのまま岩盤へと続いている。今回の調査区はV層堆積時点で既に小さな谷空間であり、谷最深部はK-Ah堆積以後の最深部よりもやや南にあった。その後K-Ahが堆積し、周辺の尾根上に降った火山灰も流れ込んだと見られ、地点によっては50cmを超える厚みを持っている。IV層は谷中央付近ではやや暗色のIVa層と明るめのIVb層に分かれる。IVa層は礫の流入により微細土壌が混入し濁るように変色した二次K-Ahであり、IVb層は一次堆積に近いものである。その後、火山灰

が土壌化しIII層が形成される過程で、おそらくは降雨等に伴って小型角礫の流入があり（土砂崩れ）、その末端は調査区内で止まっていた。角礫は泥質岩を主体に砂岩・千枚岩等も含まれていた。このようなやや不安定な地形環境の中に中世集落が営まれたようである。その後、III・IV層を不整合に覆うII層の詳細については第5節で詳述する。

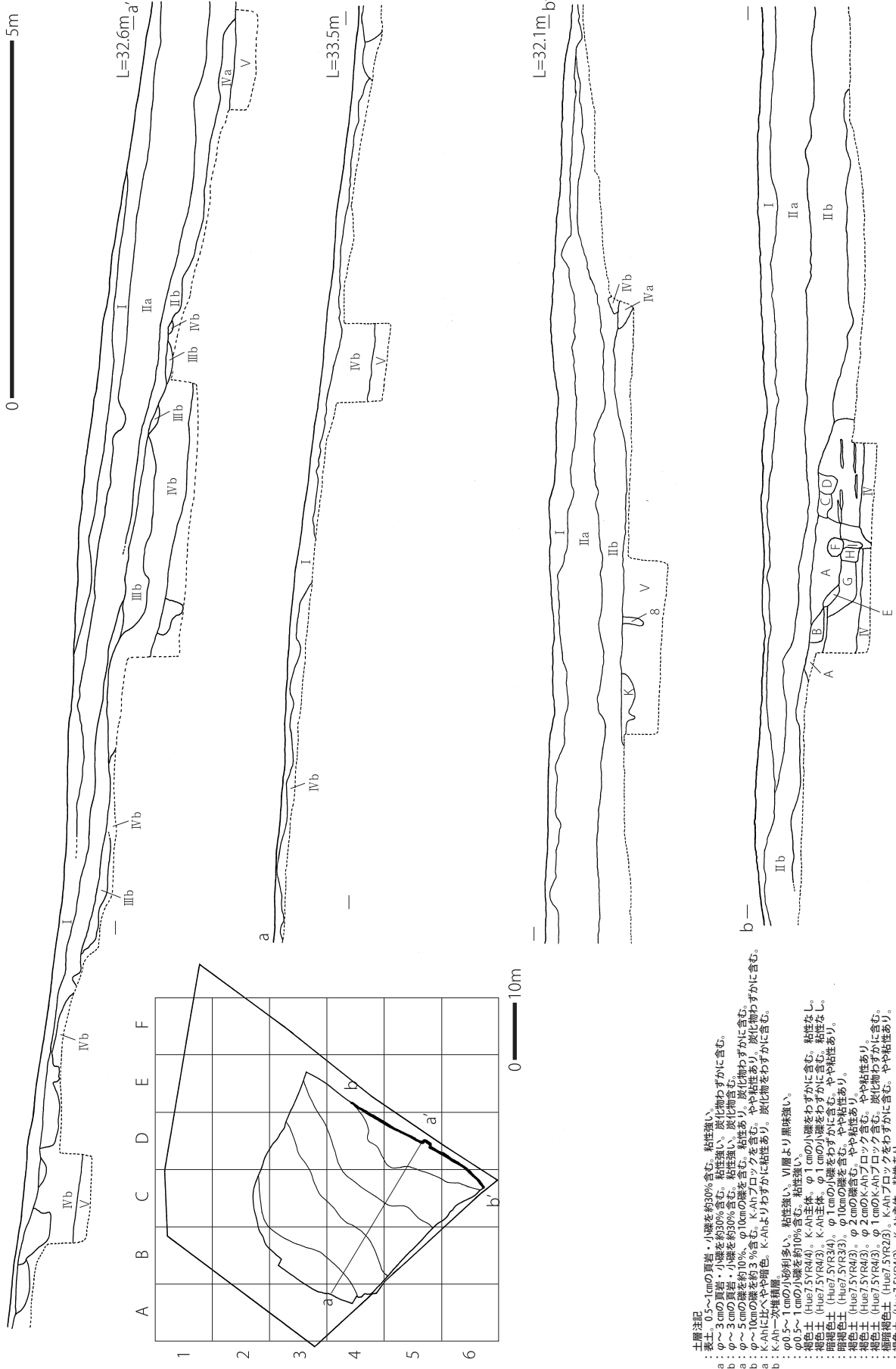
なお、東側壁面には、地山ブロックが塊のまま含まれる、層位が非常に不安定な部分がII層（造成土）下位の幅約4mの範囲に見られた。調査区端でのみ観察され、全体の広がり等は把握できていないものの、地震による地割れあるいは地下水流による水穴が埋まったものの可能性が高い。これについても第5節で触れることとする。（黒木秀）

第3節. 縄文時代・古墳時代・古代の調査

旧石器～縄文時代早期（第11図・第3表）について、旧地形において谷の中でもやや高所にあたるB4・C4・C5グリッドのうち75㎡でK-Ah下位のV層を精査した（第5図）。V層中より土器・石器等は出土しなかったが、弱く赤化した砂岩破砕礫が少量出土した。集石遺構のようなまとまりはない。なお、表採の削器（49）は素材・剥離・石材より見て旧石器時代に遡る可能性がある。

縄文時代後～晩期（第10・11図・第2・3表）では、K-Ah下位精査の過程でIVa層中より貝殻条痕のある深鉢底部（1）、前節で触れた小型角礫の流入範囲より砂岩製剥片2点（50）・石核1点と見られるものが出土した。砂岩は風化面がうすい緑～青みのあるもので、磨石等に好まれた青砂岩と比べ粗質かつ節理が入り軟質である。埋没谷に含まれる破砕礫中の砂岩と石器として利用された砂岩との識別は容易である。磨石（52・53）・凹石（51）もこれに伴う可能性がある。同石材製の磨石・凹石は、少なくとも縄文時代早期～古墳時代中期に至るまで利用されている。この他、無刻目突帯を持つ晩期の深鉢口縁部（2）が採集された。

古墳時代・古代（第10図・第2表）の遺構はなく、遺物のみ見られた。古墳後期の土師器環（3）・古代と見られる須恵器甕（4）がある。（藤木）



第6図 海舞寺遺跡土層断面図

土層注記
 I : 黄土、0.5~1cmの真珠・小礫を約30%含む。粘性強い。
 IIa : φ~3cmの真珠・小礫を約30%含む。粘性強い。炭化物わずかに含む。
 IIb : φ~5cmの真珠・小礫を約30%含む。粘性強い。炭化物含む。
 IIIb : φ~5cmの礫を約10%、φ10cmの礫を含む。粘性あり。炭化物わずかに含む。
 IIIb : φ~10cmの礫を約3%含む。K-Ahブロックを含む。やや粘性あり。炭化物わずかに含む。
 IVa : K-Ahに土味強層。K-Ahよりわずかに粘性あり。炭化物をわずかに含む。
 IVb : φ0.5~1cmの小礫約10%含む。粘性強い。V層より黒味強い。
 V : 褐色土 (Hue7.5YR4.4)。K-Ah主体。粘性強い。
 A : 褐色土 (Hue7.5YR4.3)。φ1cmの小礫をわずかに含む。粘性なし。
 B : 暗褐色土 (Hue7.5YR3.4)。K-Ah主体。φ1cmの小礫をわずかに含む。粘性なし。
 C : 暗褐色土 (Hue7.5YR3.3)。φ10cmの礫を含む。やや粘性あり。
 D : 暗褐色土 (Hue7.5YR4.3)。φ2cmの礫を含む。やや粘性あり。
 E : 褐色土 (Hue7.5YR4.3)。φ1cmのK-Ahブロックを含む。粘性あり。
 F : 暗褐色土 (Hue7.5YR4.3)。φ1cmのK-Ahブロックを含む。炭化物わずかに含む。
 G : 暗褐色土 (Hue7.5YR4.3)。φ1cmのK-Ahブロックを含む。粘性あり。
 H : 暗褐色土 (Hue7.5YR4.3)。K-Ah主体。粘性あり。
 I : 褐色土 (Hue7.5YR2.2)。φ0.5~1cmの小礫約15%、筋状にK-Ahを含む。V層に近く、粘性V層より強い。

第4節. 中世の調査

4-1. 遺構

遺構は、集落域中央から南東方向にかけて、アカホヤ上面にピット492基が円弧状に集中して分布し、掘立柱建物12棟が検出された(第7図)。

(1) 掘立柱建物跡(SB)

集落域の地形は緩やかな谷地形となっている。掘立柱建物跡12棟ならびに建物跡として復元の叶わなかったピットは、建物建築にあたって緩斜面地形の等高線に沿う形で配置されたため、半円弧状の分布を見せて検出された。掘立柱建物跡の分布は集落域C4～C6・D4～D5グリッドであり、これは特にピットが集中する範囲である。掘立柱建物跡の復元は現地でも試みたが、小面積にピットが多数集中していたため、建物は全て図面から検出した(第7～9図・第10表)。

掘立柱建物跡は全て側柱建物で、総柱建物や庇付き等はない。掘立柱建物跡の規模等は、1間×1間が1棟で床面積約3.2㎡である。1間×2間は10棟で、3～4㎡未満が3棟、5～6㎡未満が3棟、6～7㎡未満が3棟であった。1間×3間は1棟のみで約10.0㎡であった。建物の主軸方位は北～北東3棟、北東～東4棟、北～北西3棟、北西～西2棟である。建物の主軸は全方向に偏りなく平均的に分布している。

掘立柱建物跡のピットから、13C後半～14C後半の瓦質土器、14C初頭～後半の輸入青磁碗(体部～底部)、中世の瓦質土器(釜?の胴部)や須恵器(片口鉢?の底部)が出土した。なお、SB11のプランに重複して中世銭貨がまとまって出土したS200がある。

(2) 土坑(SC)(第7図)

土坑はSC1(現地番号S341)1基である。平面は楕円形で、長径90cm・短径66cmであった。龍泉窯青磁碗の体部が出土した他、ハマグリ等の貝類やオオムギ炭化種子等が出土した。SC1は食料残渣の廃棄穴と見られる。(黒木秀)

4-2. 遺物

(1) 土器・陶磁器類(第10・11図・第2表)

遺物は、11C後半より13C代の比較的古手のものと14C以降の新しめのものとに分けられる。

古手の一群には、玉縁口縁の太宰府編年白磁碗Ⅳ-2

類(5)・龍泉窯の太宰府編年青磁碗Ⅰ-2類(6)・同青磁碗Ⅱ-a・Ⅱ-b類(上田分類B-1類)(7・8)等の貿易陶磁や木戸編年Ⅲa～Ⅲb相当の石鍋(11)・森田実編年第Ⅲ期第1段階の東播系須恵器片口鉢(12)がある。また、瓦質の羽釜(13)は岩崎仁志分類「周防型羽釜」あるいは「周防型足釜」に相当しよう。続いて、太宰府編年青磁碗Ⅳ類(上田分類D-1類)(9)・同白磁皿Ⅸ-1b(10)等の貿易陶磁や、三あるいは四耳壺・壺?・播鉢・大甕等の備前焼がある(14～17)。土師器皿(21)は1点のみと少ない。その他、詳細な産地・時期不詳ながら、中世と見られる土師質の鍋・釜(18・19)や須恵質の甕・片口鉢?(22・28)、瓦質の壺・甕(23・25)、陶器壺・甕(24・26・27)がある。陶器甕(24)は外面平行タタキ・内面同心円文タタキ、瓦質の甕(25)は外面格子タタキ・内面同心円文タタキを横ハケで消す等、調整手法に特徴がある。(岡田)

(2) 石器・鉄器(第11図・第3・4表)

柱穴や柱穴群に重複する攪乱より出土した敲石等(51～53)は、縄文時代の部分で報告したものの、中世の所産である可能性も残る。水晶製火打石(48)・鉄製刀子(54)も中世か。(藤木)

(3) 石塔(第11図・第6表)

火輪(81・82)・地輪(83)はいずれも原位置から離れた単体で発見された。

(4) 銭貨(第12図・第5表)

銭貨25枚(55～79)はS200の床よりやや浮いた位置で出土した。

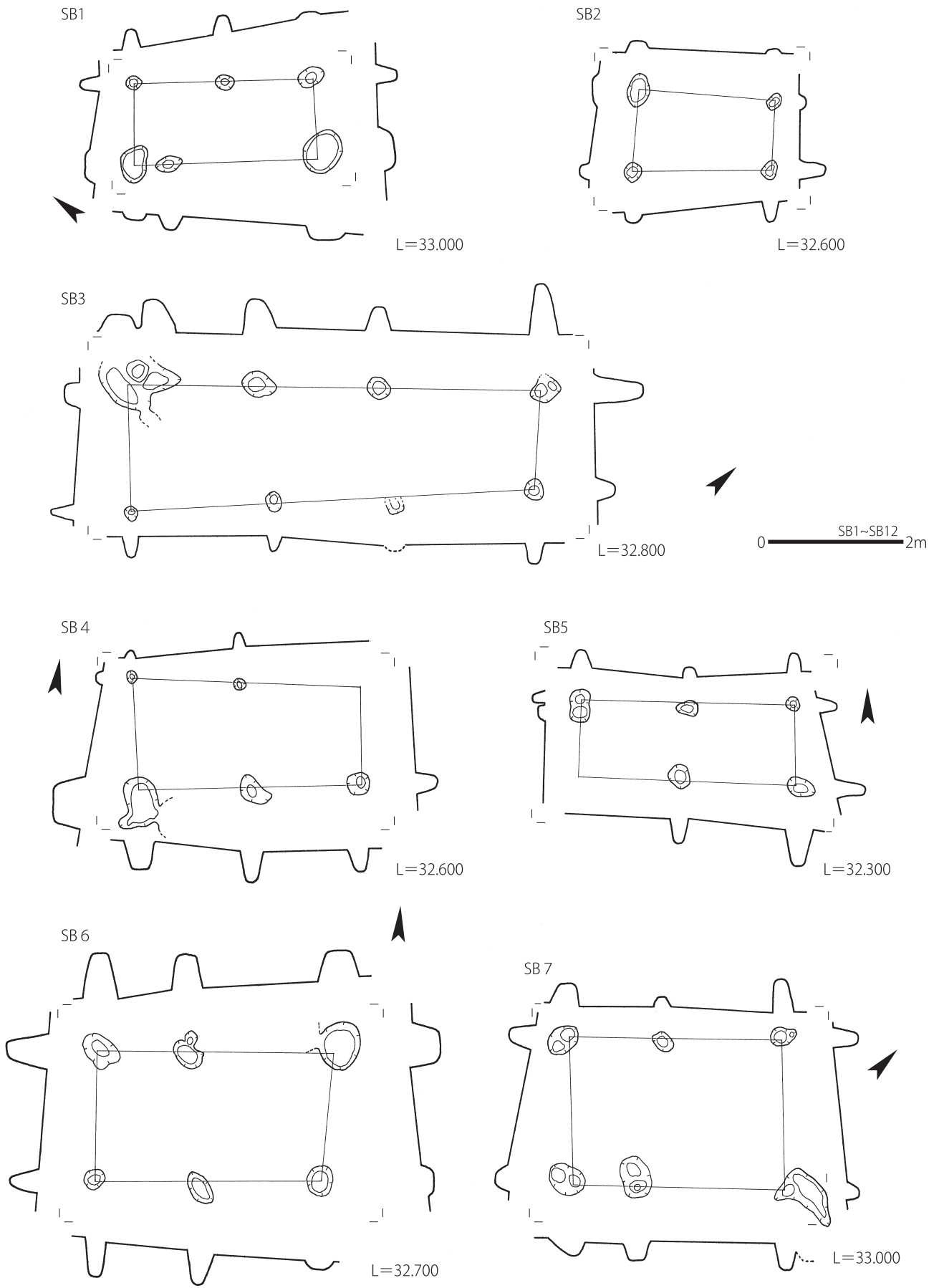
鏽着した銭貨の中には穴に通されていた糸の一部が残るものもあった。鏽着した銭貨からは、紐通しの順番に規則性は見いだせなかった。銭名が判読できたのは21枚あり、その初鑄年は960～1205年(開元通寶～開禧通寶)となる。このうち17枚は北宋銭である。

(5) 自然遺物(植物種子・貝)

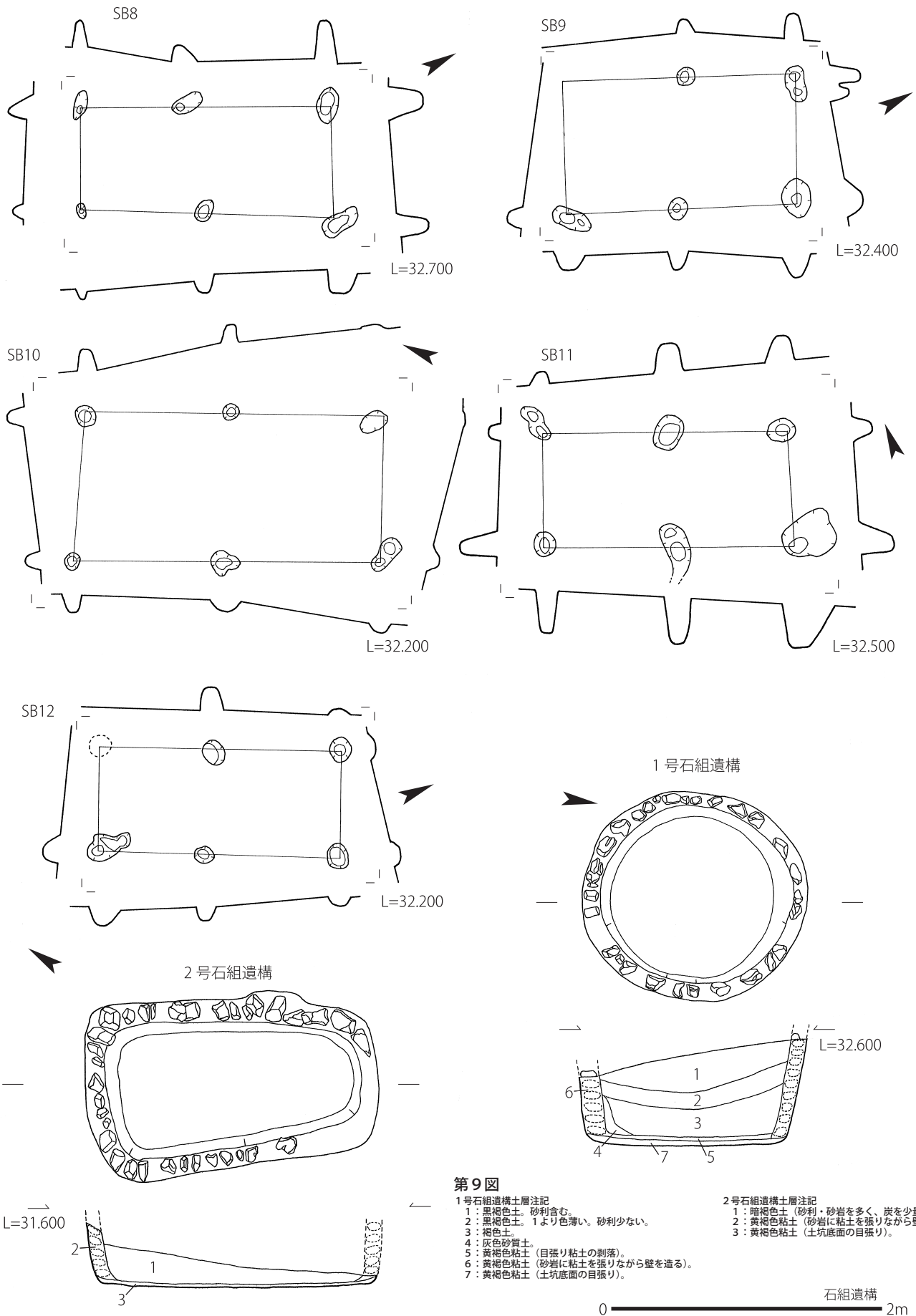
自然遺物についての詳細は第X章に掲載している。概要のみ述べると、集落域で検出されたピットや土坑等492基中332基をフローテーション対象とした結果、339点の炭化種子が回収された。このうち、栽培種の炭化種子に関してはピット110基中96基で289粒が確認され、その内訳はイネ28基・ムギ類70基・マメ類(アズキグループ含む)24基・アワ近似種40基・ヒエ近似



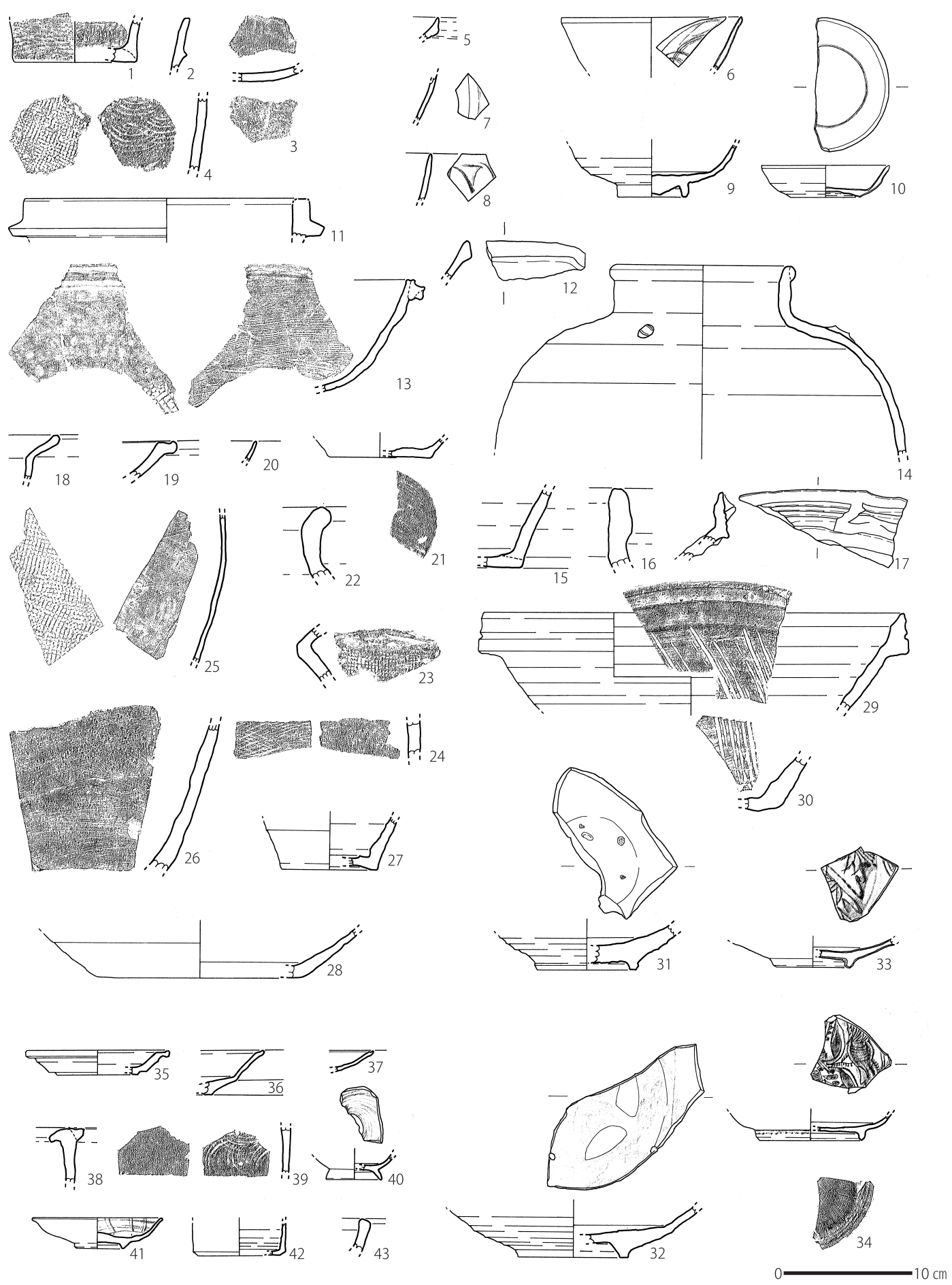
第7図 海舞寺遺跡遺構分布図



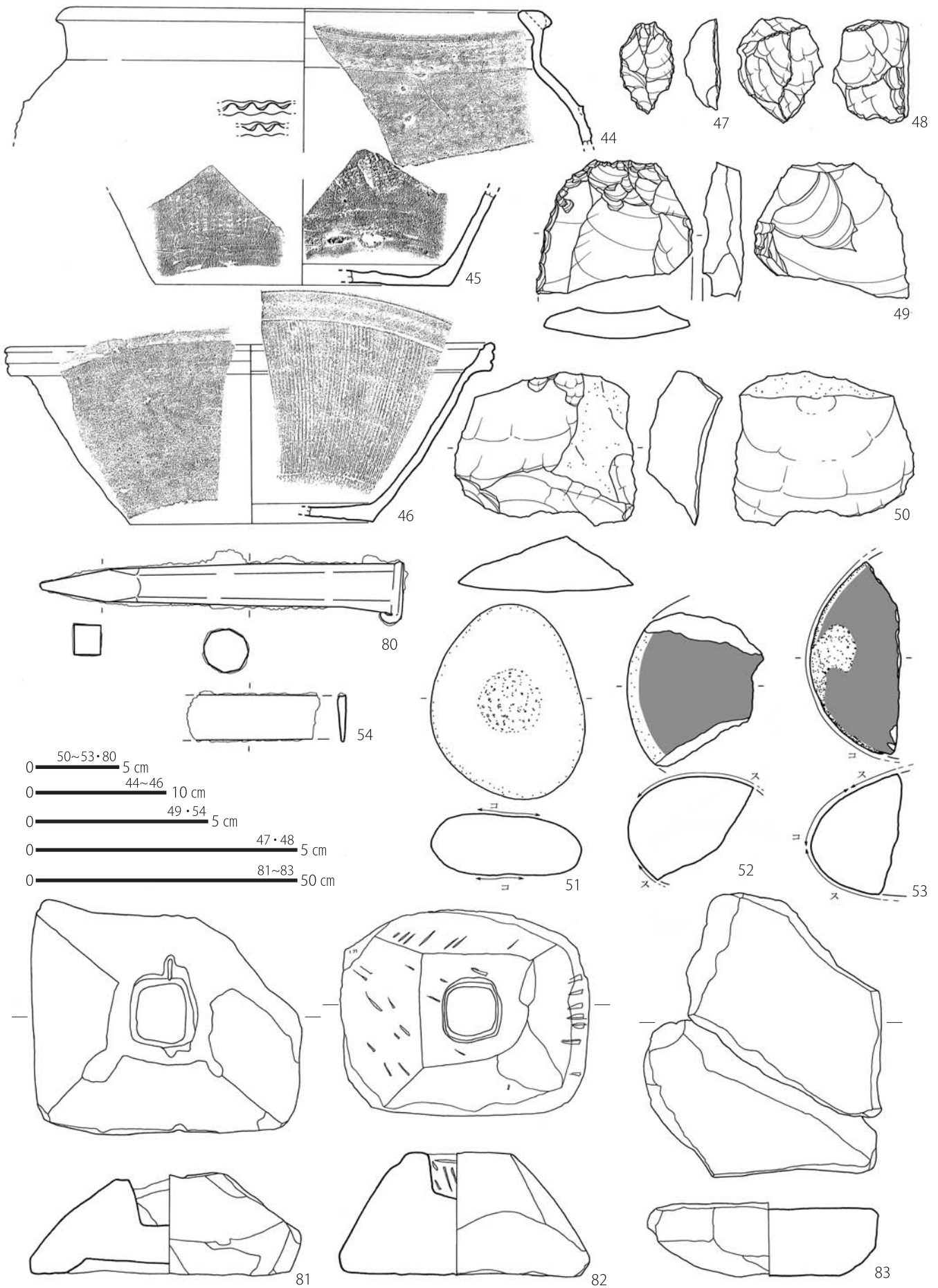
第8図 海舞寺遺跡遺構実測図(1) 掘立柱建物(1)



第9図 海舞寺遺跡遺構実測図(2) 掘立柱建物(2)・石組遺構



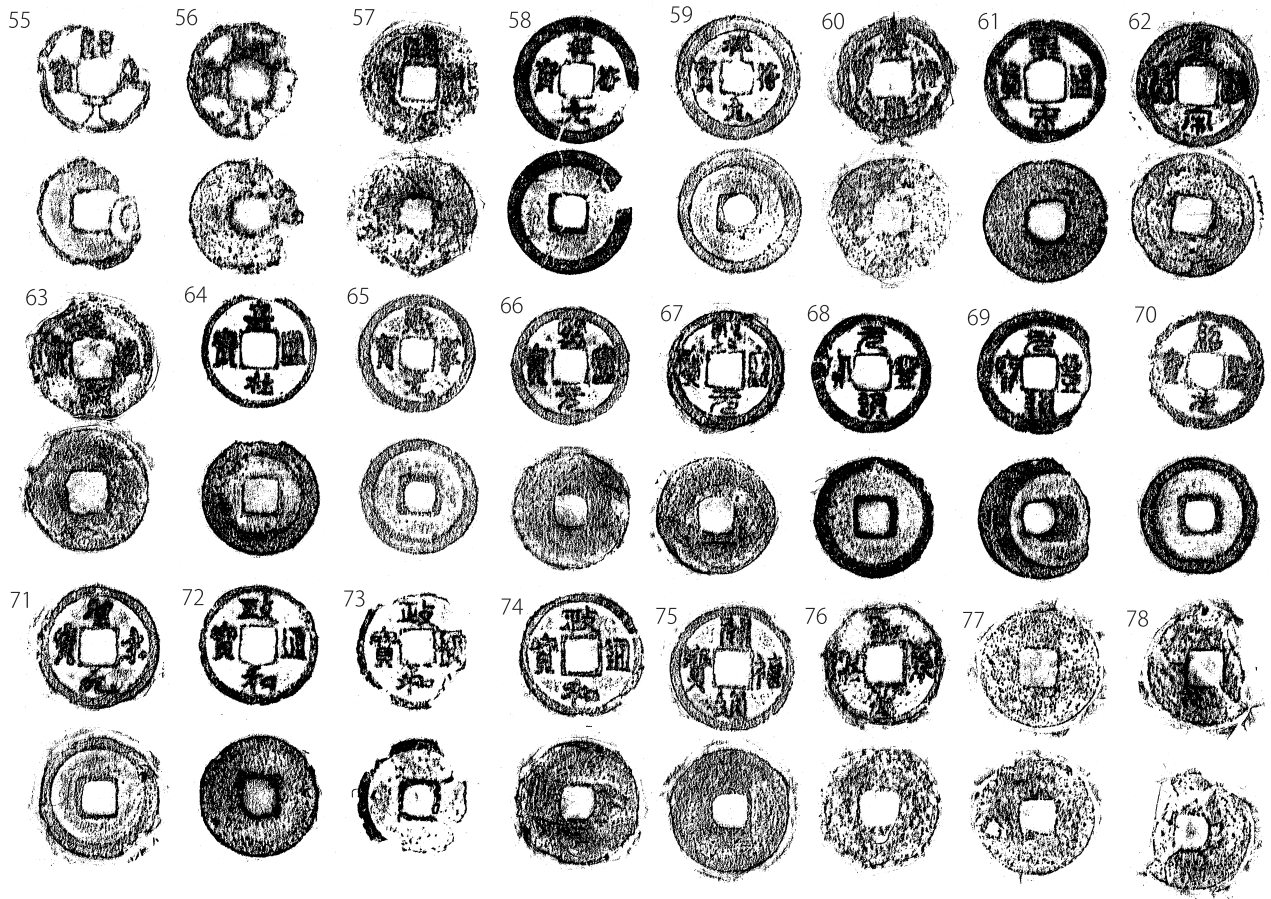
第10図 海舞寺遺跡遺物実測図(1) 土器・陶磁器



第11図 海舞寺遺跡遺物実測図(2) 陶磁器・石器・鉄器・石塔

No.	種別	器種	部位	出土位置	年代	口径	底径	器高	調整・文様等(外面)	調整・文様等(内面)	備考
1	縄文土器	深鉢	底	IVB4	後～晩期	-	9.6	-	横方向貝殻条痕	ナデ	-
2	縄文土器	深鉢	口	-	晩期	-	-	-	ナデ	ナデ	無刻目突帯
3	土師器	堝あるいは坏	底	-	古墳後期	-	-	-	?	?	2mm大の白色粒多し
4	須恵器	甕	胴	S404	古代?	-	-	-	格子風タタキ	同心円文	-
5	輸入白磁	碗	口	II C6	11後～12前	-	-	-	施釉	施釉	玉縁口縁、太宰府編年白磁碗IV-2類
6	輸入青磁	碗	口	III C5	12中～後	-	-	-	施釉	施釉、劃花文(片桐彫り)	龍泉窯、太宰府編年碗I-2類
7	輸入青磁	碗	体	S114	13前	-	-	-	施釉、蓮弁文(鎬有り)	施釉	龍泉窯、太宰府編年青磁碗II-b類、上田編年B-1類
8	輸入青磁	碗	口	カクランC6	13前	-	-	-	施釉、蓮弁文(鎬無し)	施釉	龍泉窯、太宰府編年青磁碗II-a類、上田編年B-1類
9	輸入青磁	碗	体・底	S235	14初～後	-	5.4	-	施釉	ヘラ削り後施釉	太宰府編年青磁碗IV類、上田分類D-1類
10	輸入白磁	皿	口・底	S155	13前～14前 (1230～1350)	10.0	5.4	2.5	施釉	施釉、見込みに口縁(直径6.8cm、片桐彫り)	口禿げ、太宰府編年白磁皿IX-1b
11	石鍋	鍋	口	C6	13頃	22.0	-	-	?	?	内外面煤付着、木戸編年III a～III b
12	須恵器	片口鉢	口	S120	13前～13後	-	-	-	ナデ	ナデ	東播系、森田実編年第三期第1段階
13	瓦質土器	羽釜	口・底	S93	13後～14後	-	-	-	縦方向ハケ目後指オサエ、格子タタキ目(底部付近)	横方向ハケ目	岩崎仁志分類「周防型羽釜」あるいは「周防型足釜」
14	国産陶器	三耳壺あるいは四耳壺	口・肩	S1046	15後～	13.4	-	-	ナデ	工具によるナデ	備前焼、山土と田土の混合土、中世5期以降
15	国産陶器	壺?	底	-	15後～	-	-	-	ナデ	ナデ	備前焼、山土と田土の混合土、中世5期以降
16	国産陶器	大甕	口	横穴1・2周辺	16後～	-	-	-	ナデ	ナデ	備前焼、近世1期b～
17	国産陶器	搦鉢	口	横穴1・2周辺	16前～	-	-	-	ナデ	ナデ	備前焼、中世6期b～
18	土師器	鍋	口	S89	中世	-	-	-	ナデ	ナデ	産地不明・時期不明
19	土師器	釜	口	S116	中世	-	-	-	ナデ	ナデ	産地不明・時期不明・外面に煤付着
20	輸入青磁	碗あるいは皿	口	S1046	中世	-	-	-	施釉	施釉	上田分類c類
21	土師器	皿	底	カクランC2	中世後	-	7.4	-	ナデ、底部系切り	ナデ	-
22	須恵器	甕?	口	S354	中世?	-	-	-	ナデ	ナデ	産地不明
23	瓦質土器	壺あるいは甕	頸	S91	中世	-	-	-	格子タタキ	ナデ	産地不明・時期不明
24	国産陶器	甕	胴	B4	中世前?	-	-	-	平行タタキ	同心円文	産地・時期不明
25	瓦質土器	甕	胴	S40	中世	-	-	-	格子タタキ	当て具痕(同心円文)を横方向ハケ目で消す	産地・時期不明、S172出土土器に酷似
26	国産陶器	壺あるいは甕	胴	S434	中世	-	-	-	ナデ	横方向・斜め方向ハケ目	産地不明・時期不明
27	国産陶器	壺	底	S183	中世	-	7.4	-	ナデ	ナデ	産地不明
28	須恵器	片口鉢?	底	S134	中世	-	8.0	-	ナデ	ナデ	東播系
29	国産陶器	搦鉢	口・体	横穴1-20	17前	33.2	-	-	ナデ	ナデ後スリ目	備前焼、近世1期c～近世II期a
30	国産陶器	搦鉢	底	横穴1・2周辺	17	-	-	-	ナデ	ナデ後スリ目	備前焼
31	国産陶器	皿	底	横穴1・2周辺	16末～17初	-	7.6	-	ナデ	施釉、見込みに胎土目の跡4箇所	肥前陶器、大橋編年I-1～I-2(1580～1610)
32	国産陶器	皿	底	横穴1・2周辺	17初～17前	-	8.6	-	ナデ、体部に施釉	見込みに砂目の跡2箇所、見込みに褐色釉後体部に透明釉	肥前陶器、大橋編年II(1610～1650)
33	青花	皿	底	S17	16後～17初	-	5.6	-	高台内の砂の溶着激しい、白化粧土の上から施釉	白化粧土の上から染付け	漳州窯
34	青花	碗あるいは皿	底	横穴1・2周辺	17前	-	8.0	-	高台内に放射状胎削り、高台部分は露胎	見込みに蓮池文?	景德鎮
35	国産陶器	折縁皿	口・底	-	16後～17初	11.0	6.4	1.9	施釉	施釉、重ね焼きの跡あり	瀬戸、大窯3～4期(1560～1610)
36	国産陶器	皿	口	横穴1-20	中世～近世	-	-	-	口縁部～内面半ばまで施釉	ナデ	瀬戸大窯緑釉皿あるいは肥前陶器溝縁皿
37	国産陶器	溝縁皿	口	横穴1・2周辺	17前	-	-	-	施釉	施釉	肥前陶器、大橋編年II期後半(1610～1650)
38	国産陶器	甕	口	S449	17前	-	-	-	ナデ	ナデ	肥前陶器
39	国産陶器	甕?	胴	石組2-1層	16末～17初	-	-	-	ナデ、施釉	同心円文	肥前陶器
40	国産陶器	碗	底	-	17初～	-	4.3	-	量付のみ露胎、高台部分に白化粧土の刷毛目	白化粧土の刷毛目	唐津焼、大橋編年II期～(1610～)
41	国産磁器	端反皿	口・底	横穴1・2周辺	19前	10.0	3.7	2.4	施釉、量付は釉剥ぎ	染付け(格子文)、見込み蛇の目釉剥ぎ	波佐見、大橋編年V-4期(1820～1860)
42	国産陶器	徳利	底	-	近世	-	6.4	-	施釉、底部付近～底部は露胎	ナデ	関西系
43	土師器	焙烙	口	-	近世	-	-	-	ナデ	ナデ	産地不明・時期不明
44	国産陶器	大甕	口・肩	横穴1・2周辺	17後	34.8	-	-	ナデ、施釉、縄状突帯2条	肩部付近の当具痕(格子目)をナデ消す	肥前陶器、43と同一個体
45	国産陶器	大甕	底	横穴1・2周辺	17後	-	22.5	-	格子タタキ目をナデ消す	当具痕(格子目)をナデ消す	肥前陶器、42と同一個体
46	国産陶器	搦鉢	口・底	横穴1・2周辺	19前	37.6	18.6	13.7	ナデ、胴部に縦方向ハケ目?が2箇所	ナデ、スリ目	堺産、白神III期
参	国産陶器	甕	胴	S407	中世	-	-	-	ハケ目	ハケ目	焼締陶器
参	国産陶器	小壺	頸・胴	横穴1・2周辺	中世	-	-	-	-	-	胎土は山土、櫛描き1点あり
参	国産陶器	?	胴	横穴1・2周辺	近世	-	-	-	-	-	肥前陶器、二彩唐津
参	国産陶器	甕?	胴	横穴1・2周辺	近世	-	-	-	-	同心円文	肥前陶器
参	国産陶器	甕	胴	試掘	中世	-	-	-	ハケ	ハケ目	焼締め陶器

第2表 海舞寺遺跡遺物観察表(1) 土器・陶磁器



第12図 海舞寺遺跡遺物実測図(3) 銭貨 0 5 cm

No.	器種	石材	出土位置	長	幅	厚	重量	観察所見	※法量単位：長・幅・厚=cm、重量=g
47	火打石	チャート	B5	1.7	1.0	0.6	1.1	大田井産チャート。稜線が潰れる。石材よりみて、近世後半以降であろう。	
48	火打石	水晶	S120	2.0	1.6	1.5	5.4	サイコロ状に使い込まれたもの。稜線がよく潰れる。中世。	
49	削器	珪質頁岩	表採	3.8	4.5	1.2	22.0	剥片末端側は大きく欠損するも、縦長剥片素材だろう。両側縁に細かな二次加工を連続させる。旧石器の可能性あり。	
50	剥片	砂岩	埋没谷	8.8	10.4	4.3	337.5	礫面打面。幅広の分厚い剥片。二次加工等はない。埋没谷は二次 K-Ah 面を切っており、縄文時代前期以降の所産でよい。これと同系石材の剥片・石核が少量出土している。	
51	凹石	青砂岩	III D5	11.1	8.9	3.5	525.5	正面・裏面ともに中央が浅く凹む。中世か。	
52	磨石	千枚岩	S92	8.8	7.9	5.9	443.3	正面・裏面ともに磨面あり。側面に敲打痕あり。欠損著しい。割れ口も含め、弱い赤化あり。中世か。	
53	磨石	S536	11.1	5.2	6.9	428.1	正面・裏面ともに磨面あり。側面に敲打痕あり。欠損著しい。割れ口も含め、弱い赤化あり。中世か。		

第3表 海舞寺遺跡遺物観察表(2) 石器

No.	器種	出土位置	所見
54	刀子	S479	残存長 3.8cm・刃幅 1.3cm・厚 0.25cm・処理前重量 3.9g。
80	鑿	3号横穴	横穴壁面に打ち込まれた状態で出土。断面八角形。長さ 20.7cm・断面径 2.5cm・処理前重量 647.2g。

第4表 海舞寺遺跡遺物観察表(3) 鉄器

No.	器種	出土位置	所見	遺構種別	出土位置	所見	
55	開元通宝	S200	初鑄 960 年。裏面剥落。一部剥落。	68	元豊通宝	S200	初鑄北宋 1078 年。
56	開元通宝	S200	初鑄 960 年。風化かなり激しく、拓本で銭名判断。一部剥落。	69	元豊通宝	S200	初鑄北宋 1078 年。一部剥落。
57	開元通宝	S200	初鑄 960 年。風化かなり激しく、拓本で銭名判断。	70	紹聖通宝	S200	初鑄北宋 1094 年。
58	祥符通宝	S200	初鑄北宋 1009 年。一部剥落。	71	聖宗元宝	S200	初鑄北宋 1101 年。
59	祥符通宝	S200	初鑄北宋 1009 年。	72	政和通宝	S200	初鑄北宋 1111 年。
60	祥符通宝	S200	初鑄北宋 1009 年。風化かなり激しく、拓本で銭名判断。	73	政和通宝	S200	初鑄北宋 1111 年。一部剥落。
61	皇宋通宝	S200	初鑄北宋 1038 年。	74	政和通宝	S200	初鑄北宋 1111 年。
62	皇宋通宝	S200	初鑄北宋 1038 年。裏面銭面剥落。風化かなり激しく、拓本で銭名判断。	75	開禧通宝	S200	初鑄南宋 1205 年。
63	皇宋通宝	S200	初鑄北宋 1038 年。風化かなり激しく、拓本で銭名判断。	76	銭貨	S200	銭面剥落。銭名不明。
64	嘉祐通宝	S200	初鑄北宋 1056 年。裏面銭面剥落。一部剥落。	77	銭貨	S200	銭面剥落。銭名不明。
65	熙寧元宝	S200	初鑄北宋 1068 年。風化かなり激しく、拓本で銭名判断。	78	銭貨	S200	銭面剥落。銭名不明。
66	熙寧元宝	S200	初鑄北宋 1068 年。風化かなり激しく、拓本で銭名判断。	79	銭貨	S200	銭面剥落。風化かなり激しい。銭名不明。(拓本なし)
67	熙寧元宝	S200	初鑄北宋 1068 年。風化かなり激しく、拓本で銭名判断。				

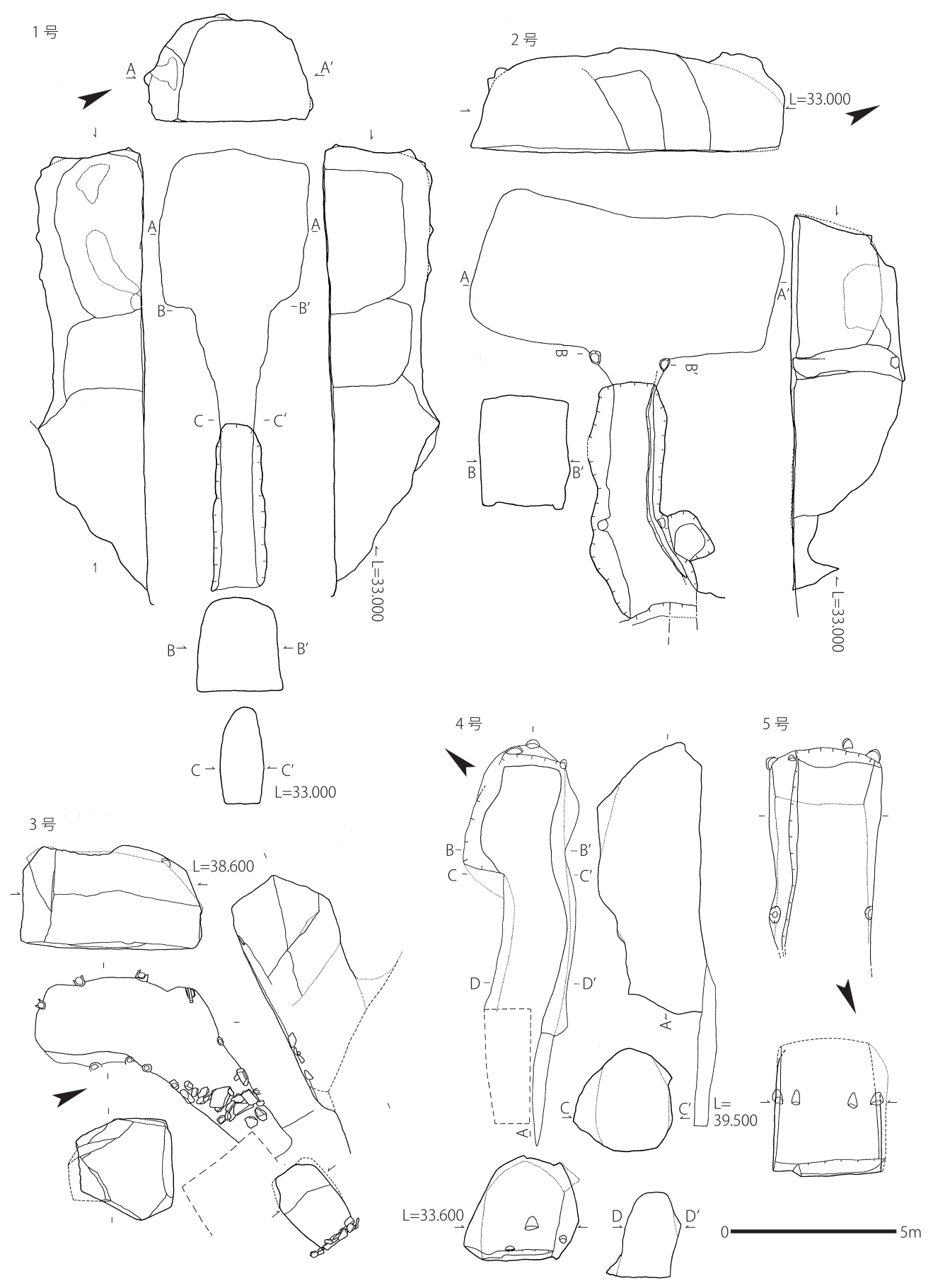
第5表 海舞寺遺跡遺物観察表(4) 銭貨

番号	部位	C	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q
81	火輪	15.8	8.4	12.0	3.6	0.2	7.8	0.8	15.8	9.6	18.0	14.0
82	火輪	18.6	6.8	15.2	2.6	0.8	2.2	0.3	16.5	8.1	20.3	17.5

番号	部位	E	v
83	地輪(基壇)	11.2	35.2

*部位については本書 129 頁参照

第6表 海舞寺遺跡石塔観察表



第13図 海舞寺遺跡遺構実測図(3)横穴

種8基である。この他、モモ・キビ・オオムギ・コムギ・ソバ等が見られた。炭化種子9点について放射性炭素年代測定を実施し、13C後半～14C前半の年代が出ている。野生種はピット19基で種実数は50粒回収された。また、炭化材も327基で確認された。しかし、炭化材の大半は細かく粉碎した状態であり、本来の材形状を留めるものはなかった。

この他、SC1よりハマグリ・ヒメクボガイ・ウズイチモンジ・レイシガイの海産食用貝が出土した。貝類は近隣の沿岸部で採取されたと考えられる。ハマグリについては放射性炭素年代測定を実施し、炭化種子に近い年代が示されている。(黒木秀)

(5) その他の遺物 (第10図・第2表)

集落域より離れた1・2号横穴周辺でも、中世に遡る備前焼大甕・播鉢(16・17)、漳州窯皿(33)・景德鎮碗あるいは皿(34)が見られた。(岡田)

第5節. 近世以降の調査

5-1. 遺構の調査

(1) 造成土 (第6図)

造成土(Ⅱ層)は集落域の中世の遺構面上に載っている。造成土はⅤ層とよく似た土質基調であった。集落域北・南西側はⅤ層以下まで削平されており、ここを削って旧集落域の広がる谷部に盛土し、平坦地を造り出したものと考えられる。

造成土(Ⅱ層)中には陶磁器等の人工遺物は含まれなかったものの、Ⅱa・Ⅱb層を対象にフローテーションを試みたところ、アワ近似種・イネ・オオムギ・キビ近似種・コムギ・ヒエ近似種・マメ類・ムギ類等が回収された。コムギ・オオムギ各1点の放射性炭素年代測定では15～17Cに収まっており、造成の時期は17C以降となろう。

(2) 円形土坑・素掘り小溝 (第7図)

集落域西側に約5m間隔で、直径約0.7～1.6mの円形土坑8基が検出された。1974(昭和49)年撮影の空中写真には、調査区に相当する位置に果樹等が写っており、茶も栽培していたとの聞き取りもある。したがって、円形土坑は果樹等の根穴の可能性もある。

また、集落域北側には筋状に平行に伸びる素掘り小溝6条が検出された。各溝は浅く、6条以外にも削平

されてしまった溝があったと十分に考えられる。近世以降の畑耕作に伴うものと考えられる。

(3) 石組遺構 (第9図)

石組遺構は集落域でなく1・2号横穴の手前に位置する。いずれも床面は粘土で目張りされ、側壁は粘土中に砂岩が埋め込まれる。砂岩は側壁を強固にする骨材と思われる。側壁上部は風化・土砂流入等の理由で削平され、骨材の砂岩が部分的に露出して検出された。調査区周辺での聞き取り調査によると、便所を土と粘土を交互に積み重ねて作っていたとのことである。本遺跡における石組遺構の工法と一致することから、近世から近代にかけて、肥溜めや便所等の施設だった可能性がある。

1号石組遺構は1号横穴の北西に位置する。形状はほぼ円形である。壁面は砂岩を組み上げ、黄褐色粘土で隙間が詰められている。最上部は砂岩が露出している。壁面上部は北側から南側にかけて緩やかに消失しており、元々は検出面より高い側壁であったと思われる。床面には壁面と同じ黄褐色粘土で目張りが施されているが、砂岩等の敷き詰めはない。遺物は確認されなかった。**2号石組遺構**も1号横穴の北西に位置し、1号石組遺構と並列する。形状は角がやや丸味を帯びた細長い台形である。壁面・床面の工法は1号石組遺構と同じである。壁面は北から南側に向かって斜めに消失し、底面が浅い。1号同様に削平が進み壁面が一部失われている。埋土1層中より肥前系甕の破片(39)が出土した。甕は16C末～17C初等のものと思われるが、混入の可能性もある。(黒木秀)

5-2. 遺物

1・2号横穴周辺には、地山崩落土中や地表面に数多くの近世～近代遺物が見られた。17～19C前半のものを中心に備前焼播鉢、肥前系の大甕・甕・碗・皿・溝縁皿・端反皿・二彩唐津、瀬戸大窯折縁皿・縁釉皿、堺産播鉢等の国産陶磁器が大量に採集された(29～32・36・37・41～44・46・48～50)。

この他、攪乱中出土の徳島県大田井産チャート製火打石(47)がある。近世後半でよからう。(藤木)

第6節. その他の調査

調査区内に4基の横穴が確認された。横穴は1・2号

が近接し、天狗山の北斜面に3号、南斜面に4号が開口する。3号横穴東側には防空壕1基がある。

横穴の壁面の工具痕は新しい印象であり、横穴は全て防空壕として改変された可能性がある。横穴内部の特徴からは、左右対称で丁寧な構築かつ柱穴を持たない1号横穴と、不整形でかつ柱穴を持つ2～4号横穴とに分けられる。壁面の仕上げが不整形となった要因として複雑に入り組んだ節理・層理が挙げられ、本来的には横穴掘削には向いていない地質なのだと考えられる。特記事項としては、3号横穴の通路には礫の集積が検出された。4号横穴入口東壁面には、幅約1.7m、高さ約0.5mにわたって石垣状の組石があった。

調査の過程では、奥室内を50cmメッシュで区切り、メッシュ毎に横穴内の埋土を採集、乾燥させた後、フローテーション作業を行い、遺物の回収に努めた。その結果、古墳時代の横穴墓あるいは中近世等に利用されたことを直接に示す遺物は見つからず、植物種子あるいは近世～近代遺物で占められた。(黒木秀)

第7節. 小 結

今回の調査では主に中世集落が検出され、この他に縄文時代から近代にかけての遺物が出土した。

中世集落については、集落立地上で有利な緩斜面の中心というよりも山寄りの狭い谷部分に調査区が相当したこと、掘立柱建物跡はいずれも小規模であり、主となるような規模・構造の建物がない特徴がある。集落の中心は調査区南東側の緩斜面にあると予想され、今回の調査区は集落域の端に限定された可能性がある。

遺物は約半数が中世のものであった。ピット出土土器・陶器は38点あり、古代1点・中世29点・中世?3点・中世～近世1点・近世2点・不明1点となっており、中世が84%と大半を占めていた。内容も豊かであり、11C後半より13C代の比較的古手の一群である玉縁口縁の白磁碗・龍泉窯青磁碗や石鍋・東播系須恵器片口鉢・北宋銭に加え、「周防型羽釜」あるいは「周防型足釜」に相当する瓦質の羽釜の存在は、西日本広域に及んだ交易によって北浦地域にもたらされたものであり、たいへん注目される。特に瓦質羽釜は宮崎県域ではほとんど知られておらず、貴重な発見となった。14C以降についても青磁碗・白磁皿や青花、備前焼四

耳壺・播鉢・大甕等や土師質の鍋・釜、須恵質の甕・片口鉢、瓦質の壺・甕等とバラエティに富み、流通品が一定数集まる集落であったことを窺わせている。一方で、土師皿が1点のみと少ない点は特徴の1つと見てよからう。

今回の調査の特筆点として、全体の70%近いピット等埋土をフローテーション対象とできたことがある。現地での試料回収段階では、炭化種子等が視認できず期待できる様子はなかったが、最終的に予想を大きく上回る炭化種実を回収できた点が挙げられる。このうち栽培種は78.1%を占め、野生種が圧倒的に少なかった。当初、満遍なく炭化種子が分布するため、畑等が広がっていた可能性も考えた。しかし、畑地であれば付近には畑地に伴う雑草が繁茂し、野生植物の種子の回収率も上がると考えられるが、本調査区では栽培植物の回収が主であった。よって、居住空間にムギ類等の栽培植物が持ち込まれ、雑草種子も一部入り込んで炭化したものと思われる。ハマグリ等の海産食用貝とともに、中世の食糧事情の一端を示す好例となった。

第2節で触れたように、地震あるいは大雨等による地割れのような現象が起きていた。この災害は、全体像が不詳であるため検討を深めることは困難であるが、集落を棄てる契機となったという解釈も成り立とう。中世集落を覆う造成(Ⅱ層)は、被害を回復し再び集落とするあるいは集落は移して畑地として利用する等の目的で進められた可能性がある。炭化種子について、中世集落に伴うものと造成土中のものとを比較すると、種子組成は近似するものの年代値は造成土中の方が約100～200年新しい点も、この解釈を後押ししていよう。

近世以降は畑地としての利用が主であり、そのまま現代にまで継続したのであろう。現在の集落の位置からみると今回の調査区は裏山にあたり、近世から近代遺物は投棄されたものなのであろう。

＊

木原一族と海舞寺遺跡の関係について、直接的な関係を示すものは得られなかった。とはいえ“火のないところに煙は立たず”、一定規模を持つ中世集落の実在こそが伝承の背景となったことは間違いなからう。

(黒木秀)

凡例
 遺構 S1～
 種別 SB1～（1号掘立柱建物跡）
 グリッド A1～
 長径・短径 単位はcm
 出土遺物 種子=炭化種子
 土壌注記
 褐色=褐色土
 アカ=アカホヤ火山灰
 II・IV層=基本層序に対応
 ●混▲=●を基調に▲が若干混じる

遺構	種別	グリッド	長径	短径	出土遺物	土壌注記
S1		A4	26	24		褐色混アカ
S2		A4	34	24		褐色混アカ
S3		A4	20	20		褐色混アカ
S4	攪乱	B4	74	30		褐色混アカ
S5	攪乱	B4	88	40		褐色混アカ
S6	攪乱	B4	100	44	種子	褐色混アカ
S7	攪乱	B4	36	30		褐色混アカ
S8	樹痕	B4	38	20		褐色混アカ
S9	攪乱	B4	32	20		褐色混アカ
S10	攪乱	B4	26	16		褐色混アカ
S11	攪乱	B4	30	24		褐色混アカ
S12	攪乱	B4	112	64		褐色混アカ
S13	樹痕	B4	42	30		褐色混アカ
S14	攪乱	B4	38	32		褐色混アカ
S15	樹痕	B4	116	96		褐色混アカ
S16	樹痕	B4	40	14		褐色混アカ
S17	樹痕	B4	30	26	漳州皿	褐色混アカ
S18	樹痕	B4	58	40		褐色混アカ
S19	樹痕	B4	82	64		褐色混アカ
S20	樹痕	B4	120	76		褐色混アカ
S21	攪乱	B4	78	68		褐色混アカ
S22	攪乱	B5	96	84		褐色混アカ
S23	樹痕	C5	148	114		褐色混アカ
S24	樹痕	C6	122	106		褐色混アカ
S25	攪乱	C4	68	38		褐色混アカ
S26	攪乱	C4	70	66		褐色混アカ
S27	攪乱	C4	112	90		褐色混アカ
S28	攪乱	C4	68	48		褐色混アカ
S29	攪乱	C5	88	26		褐色混アカ
S30	攪乱	C5	48	28		褐色混アカ
S31	攪乱	C5	72	26		褐色混アカ
S32	攪乱	C5	18	16	種子	褐色混アカ
S33	攪乱	C5	44	28	種子	褐色混アカ
S34	攪乱	C5	26	20		褐色混アカ
S35	攪乱	C5	42	24		褐色混アカ
S36	攪乱	C5	32	20		褐色混アカ
S37	攪乱	C5	46	24		褐色混アカ
S38	攪乱	C5	94	50		褐色混アカ
S39	攪乱	C5	26	22	種子	褐色混アカ
S40	攪乱	C5	34	16	瓦質甕・羽釜	褐色混アカ
S41	攪乱	C5	34	30		褐色混アカ
S42	攪乱	C5	24	22		褐色混アカ
S43	攪乱	C5	24	16		褐色混アカ
S44	攪乱	C5	22	20		褐色混アカ
S45	攪乱	C4	54	38		褐色混アカ
S46	攪乱	C4	24	20		褐色混アカ
S47	攪乱	C4	52	34		褐色混アカ
S48	攪乱	C4	70	34	礫	褐色混アカ
S49	攪乱	C4	62	44		褐色混アカ
S50	攪乱	C4	24	24		褐色混アカ
S51	攪乱	C5	60	42	礫	褐色混アカ
S52	攪乱	C5	54	40	礫・種子	褐色混アカ
S53	攪乱	C5	30	24		褐色混アカ
S54	攪乱	C5	40	20	種子	褐色混アカ
S55	攪乱	C5	46	20	種子	褐色混アカ
S56	攪乱	C5	66	40		褐色混アカ
S57	樹痕	C4	84	80		褐色混アカ
S58	攪乱	C4	54	16		褐色混アカ
S59	攪乱	C4	30	24		褐色混アカ
S60	攪乱	C4	32	24		褐色混アカ
S61	攪乱	C4	14	12		褐色混アカ
S62	攪乱	C4	28	24	種子	褐色混アカ
S63	攪乱	C4	28	22		褐色混アカ
S64	攪乱	C4	24	18		褐色混アカ
S65	攪乱	C4	20	14		褐色混アカ
S66	攪乱	C5	48	16		褐色混アカ
S67	攪乱	C5	46	18		褐色混アカ
S68	攪乱	C5	68	44		褐色混アカ
S69	攪乱	C5	76	70		褐色混アカ
S70	攪乱	C5	50	16		褐色混アカ
S71	攪乱	C5	40	24	種子	褐色混アカ
S72	攪乱	C5	20	18	種子	褐色混アカ
S73	攪乱	C5	22	16		褐色混アカ
S74	攪乱	C5	18	18	種子	褐色混アカ
S75	攪乱	C5	34	20		褐色混アカ
S76	攪乱	C5	32	30	種子	褐色混アカ
S77	攪乱	C5	52	42		褐色混アカ
S78	攪乱	C5	24	18		褐色混アカ
S79	攪乱	C5	38	34	種子	褐色混アカ
S80	攪乱	C5	44	24		褐色混アカ
S81	攪乱	C5	34	30		褐色混アカ
S82	攪乱	C5	34	24	礫	褐色混アカ
S83	樹痕	C4	98	40	礫	褐色混アカ
S85	攪乱	C5	46	26		褐色混アカ
S86	攪乱	C5	70	28	礫	褐色混アカ
S87	SB9	C5	52	26	礫・種子	褐色混アカ
S88	C5	80	36		褐色混アカ	
S89	SB8	C5	40	20	中世土師鍋	褐色混アカ
S90	C5	66	54		褐色混アカ	
S91	C5	26	22	瓦質壺 or 甕・釜	褐色混アカ	
S92	C5	48	36		褐色混アカ	
S93	SB9	C5	28	24	瓦質羽釜・礫・種子	褐色混アカ
S94	C5	110	46	礫	褐色混アカ	
S95	C5	42	24		褐色混アカ	
S96	C5	20	18		褐色混アカ	
S97	C5	40	26		褐色混アカ	
S98	C5	78	48	種子	褐色混アカ	
S99	C5	40	34	礫・種子	褐色混アカ	
S100	SB9	C5	32	26		褐色混アカ
S101	C5	30	28		褐色混アカ	
S102	C5	32	30		褐色混アカ	
S103	C5	64	26		褐色混アカ	
S104	SB9	D5	54	40	礫	褐色混アカ
S105	SB8	C5	22	14		褐色混アカ
S106	C5	26	22		褐色混アカ	
S107	攪乱	C6	—	—	瓦質釜	褐色混アカ
S108	C5	20	18		褐色混アカ	
S109	C5	66	36	礫・種子	褐色混アカ	
S110	攪乱	C5	28	24	種子	褐色混アカ
S111	C5	44	36		褐色混アカ	
S112	C5	38	30	種子	褐色混アカ	
S113	C5	28	22	礫	褐色混アカ	
S114	C5	36	30	太宰府編年II-b類青磁碗	褐色混アカ	
S115	C5	26	24		褐色混アカ	
S116	C5	20	16	中世土師釜	褐色混アカ	
S117	C5	38	24	種子	褐色混アカ	
S118	C5	70	44	礫	褐色混アカ	
S119	C5	30	22	種子	褐色混アカ	
S120	C5	90	74	東播片口鉢・中世土師・礫	褐色混アカ	
S121	C5	60	46	瓦質釜・礫・種子	褐色混アカ	
S122	攪乱	C5	80	46		褐色混アカ
S123	攪乱	C5	80	34		褐色混アカ
S124	C5	24	26		褐色混アカ	
S125	C5	28	26	礫	褐色混アカ	
S126	C5	34	24		褐色混アカ	
S127	C5	20	14		褐色混アカ	
S128	C5	52	32		褐色混アカ	
S129	C5	30	20		褐色混アカ	
S130	C5	76	66	種子	褐色混アカ	
S131	C5	108	90		褐色混アカ	
S132	C5	36	24	種子	褐色混アカ	
S133	SB11	C5	32	18	種子	褐色混アカ
S134	SB11	C5	50	36	東播片口鉢・瓦質釜・中世土師・種子	褐色混アカ
S135	C5	24	22	瓦質釜	褐色混アカ	
S136	C5	40	30		褐色混アカ	
S137	C5	28	22		褐色混アカ	
S138	C5	30	20		褐色混アカ	
S139	C5	56	56	種子	褐色混アカ	
S140	攪乱	C5	80	34		褐色混アカ
S141	C5	66	44		褐色混アカ	
S142	C5	44	34	瓦質甕	褐色混アカ	
S143	C5	68	60		褐色混アカ	
S144	攪乱	C5	80	60	種子	褐色混アカ
S145	C5	32	30	種子	褐色混アカ	
S146	C5	28	24		褐色混アカ	
S147	C5	20	20	礫・種子	褐色混アカ	
S148	C5	20	16		褐色混アカ	
S149	C5	48	24		褐色混アカ	
S150	C5	22	18		褐色混アカ	
S151	C5	40	34	種子	褐色混アカ	
S152	C5	40	26		褐色混アカ	
S153	SB9	C5	56	28		褐色混アカ
S154	C5	22	14	礫	褐色混アカ	
S155	C5	64	30	太宰府編年IX-1b類白磁皿	褐色混アカ	
S156	C5	52	34	種子	褐色混アカ	
S157	C5	26	26	種子	褐色混アカ	
S158	C5	28	22		褐色混アカ	
S159	C5	26	20		褐色混アカ	
S160	C5	28	24		褐色混アカ	
S161	C5	28	24		褐色混アカ	
S162	C6	26	18		褐色混アカ	
S163	C5	24	22	陶器人形	褐色混アカ	
S164	攪乱	C5	104	54	種子	褐色混アカ
S165	攪乱	C5	—	—	種子	褐色混アカ
S166	C5	18	10	種子	褐色混アカ	
S167	C5	24	20	種子	褐色混アカ	
S168	C5	50	20	種子	褐色混アカ	
S169	C5	28	24	種子	褐色混アカ	

第7表 海舞寺遺跡遺構・出土遺物一覧表（1）

遺構	種別	グリッド	長径	短径	出土遺物	土壌注記	遺構	種別	グリッド	長径	短径	出土遺物	土壌注記
S170		C5	30	28		褐色混アカ	S362		C4	18	14		—
S171		C5	28	26	種子	褐色混アカ	S363	SB6	D4	52	26	礫	褐色混アカ
S172		C5	24	22	瓦質甃	褐色混アカ	S364		D4	24	18		—
S173		C5	38	26		褐色混アカ	S366	SB6	D4	54	36	種子	褐色混アカ
S174		C5	42	38		II層混アカ	S367		D4	28	20		—
S175		C5	46	36	礫	褐色混アカ	S368	SB3	D4	30	24	種子	褐色混アカ
S176	攪乱	C6	—	—		—	S369		D4	40	28	種子	—
S177		C6	40	32		—	S370		D4	26	22	種子	II層混アカ
S178		C6	62	26	種子	褐色混アカ	S371		D4	30	24	種子	II層混アカ
S179	SB11	C6	32	30	礫	II層混アカ	S372	SB3	D4	34	30	種子	褐色混アカ
S180		C6	40	22	礫・種子	褐色混アカ	S373		D4	56	28		褐色混アカ
S181		C6	30	28	種子	II層混アカ	S374		D4	40	26		II層混アカ
S182		C6	18	12	種子	—	S375		D4	40	28	種子	II層混アカ
S183		C6	26	24	中世国産陶壺・種子	—	S376	SB6	D4	48	28		II層混アカ
S184	攪乱	C6	88	26		—	S377		D4	20	18		—
S185		C6	48	30	種子	—	S378		D4	28	22	種子	—
S186		C6	26	24	瓦質甃	II層混アカ	S379		D4	26	16		—
S187	SB11	C6	38	30	種子	II層混アカ	S380		D4	22	20	種子	—
S188		C6	20	18		褐色混アカ	S381	SB5	D4	30	24		—
S189		C6	22	22		褐色混アカ	S382		D4	32	24		—
S190	SB10	C6	40	26		褐色混アカ	S383		D4	14	12	種子	—
S191	SB11	C6	36	34		II層混アカ	S384	SB2	D4	26	24		—
S192		C6	36	34		褐色混アカ	S385	SB6	D4	48	28		褐色混アカ
S193	SB12	C6	36	32		—	S386		D4	66	38		褐色混アカ
S194		C6	24	22		褐色混アカ	S387		D4	22	18		褐色混アカ
S195		C6	18	14		褐色混アカ	S388		D4	30	14		—
S196		C6	24	20		褐色混アカ	S389		D4	24	24		褐色混アカ
S197		C6	36	26		褐色混アカ	S390		D4	28	16		褐色混アカ
S198		C6	56	50		—	S391		D4	24	20		褐色混アカ
S199		C6	58	50		—	S392		D4	30	24		—
S200		C6	52	46	銭貨	褐色混アカ	S393		D4	48	34	種子	II層混アカ
S201		C6	34	28		褐色混アカ	S394		D4	26	18		—
S202		C6	60	56	種子	II層混アカ	S395		D4	38	34	種子	褐色混アカ
S203		C6	26	26	種子	褐色混アカ	S396	SB4	D4	72	46	礫・種子	褐色混アカ
S204		C6	52	48		褐色混アカ	S397		D4	34	32	種子	褐色混アカ
S205		C6	62	42		褐色混アカ	S398	SB5	D4	34	30		褐色混アカ
S206		C6	18	14	種子	—	S399	攪乱	D4	18	12		—
S207	SB10	C6	46	26		褐色混アカ	S400	攪乱	D4	28	20		—
S208		C6	14	14	種子	—	S401	SB5	D4	32	24	種子	—
S209		C6	50	20		褐色混アカ	S402	SB4	D4	16	14		—
S210		C6	32	30	種子	褐色混アカ	S403		D4	42	20		褐色混アカ
S211		C6	28	26	種子	褐色混アカ	S404		D4	42	38	古代須恵甃	褐色混アカ
S212	SB10	C6	46	26	種子	褐色混アカ	S405		D4	80	30	種子	II層混アカ
S213		C6	100	80		—	S406		D4	22	18		II層混アカ
S214		C6	46	36		II層混アカ	S407		D4	24	24	中世国産陶甃	褐色混アカ
S215	SB12	C6	36	30		II層混アカ	S408	SB4	D4	18	18		II層混アカ
S216		C6	30	34	種子	褐色混アカ	S409	SB5	D4	22	20		褐色混アカ
S217		C6	70	42		褐色混アカ	S410		D4	38	36	種子	褐色混アカ
S218		C6	30	24		—	S411		D4	34	22	種子	II層混アカ
S219		C6	22	22		褐色混アカ	S412	SB5	D4	42	28	種子	褐色混アカ
S220	SB12	C6	48	38		褐色混アカ	S413	SB6	D4	70	58	種子	褐色混アカ
S221		C6	28	22		—	S414		D4	20	16	種子	褐色混アカ
S222		C6	20	14		II層混アカ	S415		D4	30	26	種子	褐色混アカ
S223		C6	46	10		—	S416		D4	40	32	礫	褐色
S224		C6	94	26		—	S417		D5	84	44		褐色混アカ
S225		D6	84	56		褐色混アカ	S418		D4	20	20		褐色混アカ
S226		D6	24	20		褐色混アカ	S419		D4	18	16	種子	褐色混アカ
S227		D6	54	36	種子	VI層	S420	SB4	D4	48	30		褐色混アカ
S228		D6	64	58		褐色混アカ	S421		D4	28	24		褐色混アカ
S230		D6	34	32	種子	VI層	S422		D4	16	14		—
S231		D6	24	20		褐色混アカ	S423		D4	76	72		褐色混アカ
S232		C4	36	24	礫・種子	褐色混アカ	S424		D4	26	24		—
S233		C4	72	28	種子	—	S425	攪乱	D4	84	74		—
S234		C4	30	18		褐色	S426	SB4	D4	32	32		—
S235		C4	130	70	太宰府編年IV類青磁碗・種子	褐色混アカ	S427		D4	22	14		—
S236		C4	74	30		褐色混アカ	S428		D4	12	12		—
S237		C4	40	22		褐色混アカ	S429		D4	32	32		褐色混アカ
S238	攪乱	C4	22	24		—	S430	攪乱	C3	36	22		—
S239	攪乱	C4	26	18		—	S431	攪乱	C3	28	16		—
S340		C4	32	24		褐色混アカ	S432	攪乱	C3	34	30		—
S341	SC1	C4	90	66	龍泉碗・貝・種子	褐色混アカ	S433		C3	30	28		II層混アカ
S343	SB3	C4	106	70	東播・瓦質甃・種子	—	S434		C3	36	26	中世国産陶壺or甃	II層混アカ
S344		C4	32	24		—	S435		C3	28	20		II層
S345	攪乱	C4	78	62	種子	褐色混アカ	S436		C3	30	18		アカ混褐色
S346		C4	100	70	瓦質	VI層混褐色	S437		C3	28	20		—
S347		C4	40	30		II層混アカ	S438		C3	26	26	種子	II層混アカ
S348	攪乱	C4	28	28		褐色混アカ	S439		C3	62	50		褐色混アカ
S349	SB3	C4	52	38		—	S440		C3	32	28		—
S350		C4	18	16		—	S441	攪乱	C3	46	32		II層混アカ
S351		C4	18	18	種子	褐色混アカ	S442		C3	24	14		—
S352		C4	42	36	種子	褐色混アカ	S443	攪乱	C3	30	20		—
S353	攪乱	C4	22	14	礫	褐色混アカ	S444		C3	32	20		—
S354		C4	46	30	中世須恵甃	—	S446		C3	36	30		褐色混アカ
S355		C4	26	20		—	S447		C3	66	56		—
S356		C4	26	20	種子	褐色混アカ	S448		C3	62	54		—
S357		C4	80	74	礫・種子	褐色	S449	攪乱	C3	—	—	近世肥前甃	—
S358		C4	46	30	礫	褐色混アカ	S450	攪乱	C3	—	—	ガラス	—
S359	SB3	C4	20	18		褐色混アカ	S451		C3	108	44		—
S360	SB8	C4	50	30	種子	褐色混アカ	S452		D3	84	48	龍泉碗	—
S361		C4	48	24		褐色混アカ	S454	攪乱	D3	—	—		—

第8表 海舞寺遺跡遺構・出土遺物一覧表(2)

遺構	種別	グリッド	長径	短径	出土遺物	土壌注記	遺構	種別	グリッド	長径	短径	出土遺物	土壌注記
S455		C3	28	20		II層混アカ	S1007	SB10	C5	26	24	種子	褐色混アカ
S457		C3	26	22		—	S1008		C5	26	24		—
S458	攪乱	C3	52	26	種子	II層混アカ	S1009		C5	44	10		褐色混アカ
S459		C3	32	20		II層混アカ	S1010		C5	20	18		II層混アカ
S460		D4	28	22		—	S1011	攪乱	C6	40	28	瓦質釜・中世土師・中世須恵・種子	II層混アカ
S461		D4	46	28		—	S1012		C6	40	24	中世土師	褐色混アカ
S462		D4	22	22	種子	褐色混アカ	S1013	SB11	C6	40	30		—
S463		D4	80	50		—	S1014		C6	32	24		褐色混アカ
S464		D4	22	18		—	S1015		C6	78	40		褐色混アカ
S465	攪乱	D4	50	14		—	S1016	SB12	C6	34	30	碟	褐色混アカ
S466		D4	42	32		褐色混アカ	S1019		C5	32	28	種子	褐色混アカ
S467	SB1	D4	64	54		II層混アカ	S1020		C5	22	20		II層混アカ
S468	SB1	D4	38	30		褐色混アカ	S1021		C5	70	14		—
S469	SB1	D4	28	22		II層混アカ	S1022		C6	30	28		褐色混アカ
S470		D4	28	26	種子	—	S1023		C6	28	26		褐色混アカ
S471	SB1	D4	40	22	種子	褐色混アカ	S1024	SB10	C5	30	30	種子	—
S472	SB1	D4	58	34		—	S1025		C5	62	38	青磁碗蓮弁文	褐色混アカ
S473	SB1	D4	24	22	種子	II層混アカ	S1027		C5	26	24	種子	褐色混アカ
S474		D4	66	54	種子	II層	S1028		C5	18	18		II層混アカ
S475		D4	66	56		—	S1029		C5	24	20	種子	—
S476	攪乱	D4	—	—		—	S1030		C5	44	24		II層混アカ
S477		D4	26	26		褐色混アカ	S1031		C6	34	28		褐色混アカ
S478		D4	24	18		—	S1033		C5	32	26	種子	褐色混アカ
S479	SB2	D4	50	32	種子	アカ混褐色	S1034		C5	20	16		褐色混アカ
S480		D4	32	28		II層混アカ	S1035	SB10	C5	24	22		褐色混アカ
S481		C4	88	64		—	S1036	攪乱	C4	34	32	種子	褐色混アカ
S482		D4	54	36		—	S1037		C3	18	14		II層混アカ
S483		C4	22	16		—	S1038		C5	20	16	中世土師	—
S484		D4	20	6		—	S1039		C6	40	34	碟	褐色
S485		D4	32	16		—	S1040	SB12	C6	28	22		褐色混アカ
S486		D3	32	26		—	S1041	攪乱	C6	—	—		褐色混アカ
S487	攪乱	C4	88	64	種子	II層混アカ	S1042	攪乱	D4	88	46		—
S488		D4	46	36		VI層混褐色	S1043	SB6	D4	44	36		—
S489		D4	30	24		—	S1044		D4	34	34		アカ混褐色
S490		D4	52	38		—	S1046		C6	40	20	備前四耳壺・上田E類碗or皿・種子	褐色混アカ
S491		D4	24	22		—	S1047		C6	28	26		—
S492	SB3	D4	106	46		—	S1049	SB7	C4	38	24		褐色混アカ
S493	SB2	D4	24	18	種子	アカ混褐色	S1050	SB3	D4	24	14		—
S494	SB3	D4	30	28		褐色混アカ	S1051		D4	42	30		—
S495		C4	40	28		褐色混アカ	S1052		C3	18	16		—
S496	攪乱	C4	34	12		—	S1100		C3	36	34		II層混アカ
S497		C4	24	14		—	S1101	SB2	D4	28	20	種子	II層
S499		C4	34	30	種子	—	S1102		D4	28	26	碟	褐色混アカ
S500	攪乱	C4	14	10		—	S1103		D4	20	20	種子	褐色混アカ
S501	攪乱	C4	16	14		—	S1104		D5	44	36	種子	II層混アカ
S502	攪乱	C4	12	8		—	S1105		C4	20	18		褐色混アカ
S503	攪乱	C4	10	10		—	S1106	攪乱	C5	14	12		—
S504	攪乱	C4	12	10		—	S1107		C3	30	28		—
S505	攪乱	C4	20	16		—	S1108	樹痕	B4	86	82		—
S506	攪乱	C4	18	16		—	S1109		C5	54	24		—
S507		C4	50	30		—	S1110	攪乱	C4	—	—		—
S508	攪乱	C4	18	16		II層混アカ	S1111		C4	30	20		—
S509	攪乱	C4	16	14		—	S1112	攪乱	C4	14	12		褐色混アカ
S510	攪乱	C4	20	18		褐色混アカ	S1113		D4	76	46		—
S511	攪乱	C4	18	16		—							
S512	攪乱	C4	26	20		褐色混アカ							
S513	攪乱	C4	20	16		—							
S514		C4	20	16		—							
S515		C4	50	28	種子	褐色混アカ							
S516		C4	42	36		—							
S517	攪乱	C4	42	22		—							
S518		D5	24	20		—							
S519		D5	18	16		褐色混アカ							
S520		D5	24	14		褐色混アカ							
S521		D5	24	20	種子	褐色混アカ							
S522		D5	22	20		褐色混アカ							
S523		D5	12	12		—							
S524		D5	16	16	種子	褐色混アカ							
S525		D5	42	30		褐色混アカ							
S526		D5	16	14		—							
S527		D5	30	24		VI層混褐色							
S528		D5	22	18		褐色混アカ							
S529	攪乱	D5	20	14		褐色混アカ							
S530		D5	24	16	種子	褐色混アカ							
S531		D5	34	18	種子	褐色混アカ							
S532		D5	22	20	種子	褐色混アカ							
S533		D5	50	30		VI層混褐色							
S534	攪乱	D5	24	18		—							
S535		D5	102	50		—							
S536	SB8	D5	60	24	碟	褐色混アカ							
S537		D5	36	26		褐色混アカ							
S538		D5	32	24		褐色混アカ							
S539		D5	40	26		褐色混アカ							
S540	SB8	D5	34	24		褐色混アカ							
S1001		B5	80	26	碟	褐色混アカ							
S1002		B5	24	22	碟	褐色混アカ							
S1003		B5	40	14		混アカ							
S1004		C5	122	84		褐色混アカ							
S1005		C5	24	16		褐色混アカ							
S1006		C5	52	30	種子	褐色混アカ							

遺構	出土遺物
1号横穴	国産磁碗・国産陶器瀬戸大窯緑釉皿・近世備前播鉢・関西系徳利
2号横穴	国産磁器・棧瓦 備前播鉢・近世備前大甕・景德鎮碗or皿・肥前大橋Ⅰ-1・2/Ⅱ皿・肥前大橋Ⅱ期後半溝線皿・肥前大甕・堺産白神Ⅲ期播鉢・波佐見大橋Ⅴ-4期端反皿・備前小壺・肥前二彩唐津・肥前甕・瓦質土器・瓦・ガラス
1・2号横穴周辺	1号石組 1層 肥前紅猪口 1号石組 4層 近世陶器 2号石組 1層 肥前甕・瓦質甕 B4 IV層 縄文後～晩期深鉢
その他	近世瓦質火鉢・中世須恵壺・国産陶器甕・肥前陶器甕・無刻目突帯深鉢（縄文晩期）・土師器碗or坏（古墳後期）・備前壺・瀬戸大窯Ⅲ～4期折線皿・唐津大橋Ⅱ期～碗・土師皿・焙烙・関西系徳利・瓦質土器・関西系碗・龍泉窯碗・石鍋・白磁碗・瓦質釜

第9表 海舞寺遺跡遺構・出土遺物一覧表（3）

遺構名	主軸	規模	面積 (㎡)	梁行実長 (cm)	桁行実長 (cm)	桁行柱間 (cm)	柱穴直径 (cm)	柱穴深 (cm)	遺物
SB1	N-42° -W	1×2間	3.2	120	260~272	128~132	20~44	8~32	
SB2	N-59° -E	1×1間	2.3	104~120	200~208	200~208	16~48	8~32	
SB3	N-43° -E	1×3間	10.0	148~188	592~604	180~236	20~52	12~72	青磁碗 (体部~底部)
SB4	N-83° -E	1×2間	5.3	164	324	160~164	16~48	12~44	
SB5	N-88° -W	1×2間	3.7	120	312	160~192	20~40	16~52	
SB6	N-86° -E	1×2間	6.2	172~192	332~348	136~216	28~72	12~68	
SB7	N-46° -E	1×2間	6.8	216~224	308~312	92~216	24~40	12~48	
SB8	N-25° -E	1×2間	5.8	148~164	368~372	144~224	20~52	12~56	土師器鍋 (口縁)
SB9	N-39° -W	1×2間	3.5	148~168	220~228	108~132	24~64	12~32	
SB10	N-26° -W	1×2間	9.6	212~220	440~452	216~228	20~40	4~32	瓦質土器 (釜? 胴部)、須恵器 (片口鉢? 底部)
SB11	N-68° -W	1×2間	6.2	168~172	360~368	172~192	36~52	20~60	
SB12	N-23° -E	1×2間	5.6	156	356	120~200	24~36	12~36	

第10表 海舞寺遺跡遺構詳細一覧表 掘立柱建物跡

遺構名	主軸	掘り込み (cm)			内法 (cm)		
		長軸	短軸	深さ	長軸	短軸	深さ
1号石組遺構	N30° -W	164	152	52~72	140	130	42~70
2号石組遺構	N6° -W	214	122	6~46	186	80	4~42

第11表 海舞寺遺跡遺構詳細一覧表 石組遺構

床面標高 (m)	主軸方向	通路幅 (m)	通路長さ (m)	奥室入口幅 (m)	奥室形	奥室横幅 (m)	奥室奥行 (m)	天井	天井高 (m)	柱痕 (基)
1号横穴	32.4 N68° -W	0.5~0.6	4.1	1.3	方形	2.2	2.3	平形	1.6	0
2号横穴	32.2 N73° -W	0.5~1.0	3.6	0.5	平入り方形	4.5	2.0	ドーム形	1.5	4
3号横穴	37.9 N64° -E (通路) N9° -E (奥室)	0.6~1.0	2.7	—	—	1.5	1.9	平形	1.5	12
4号横穴	32.9 N48° -E	1.1	1.7	—	—	1.0	2.5	ドーム形	1.5	0

※横穴床上埋土フローテーションによる回収物一覧

炭化材片・腐朽材片・木屑片・炭化植物根・現代植物種子 (アカメガシワ・カラスウリ・カラスザンショウ・クサギ・スギ・コナラ属・バラ科・フユイチゴ・センダン)・スギ雄花・菌類片 (クロコブタケ? 菌核?)・昆虫死骸・陸産貝類等が確認された。植物は、遺跡周辺に普通に見られる林縁植物が中心となっており、自然混入と思われる。近世の遺物は、アクリル片・ガラス片・スポンジ片・金属部品 (ボルト・ナット・水道メーター蓋・小鉄球・針金・注射針・釘・鉄球・ガス管部品)・鉄片・ビニール片・プラスチック片 (ボタン)・布片 (ラベル・毛糸・衣服片)・紙片・土嚢片・瓶片・薬品容器・陶器片

第12表 海舞寺遺跡遺構詳細一覧表 横穴

第V章 市之串遺跡

第1節. 遺跡の位置と調査の方法・経過

1-1. 遺跡の位置

市之串遺跡は北浦町中野内地区に位置し、延岡市北浦町から三川内を經由して大分県佐伯市蒲江に至る国道388号線から入った市道古江～下阿蘇線に沿っている(第3・14図)。中野内地区の北西には、飯塚山(標高571.4m)がそびえ、遺跡は山頂から中野内地区北側に向かって南東方向に伸びる尾根の裾部にあたる。遺跡東の低所には国道388号線と古江川に挟まれて水田や畑が広がり、南方向には市振や宮野浦等の漁港が点在する古江湾を望むことができる。農道を挟んで遺跡の東側には、江戸時代の義民天野屋英五郎を祀った天野神社があり、地域の人々の信仰の対象となっている。

1-2. 調査方法と経過

調査地について、分布調査の際に開口した横穴を視認でき、これらが古墳時代の横穴墓である可能性が考えられた。また、近接する中野内遺跡で古墳時代中期の集落が確認されており、本遺跡との関係についても注意を払うこととした。

調査は、重機による枝木や切り株を除去した後、未開口の横穴も探す目的もあって、斜面全体の表土剥ぎを実施した。調査区が斜面であることから調査区東側の農道及び農地への土砂の流れ込みが予想されたため、これを防ぐ措置をとった後、発掘作業を開始した。また、作業員の安全確保のために斜面随所に転落防止用の防護ネットや防護柵を設置した。さらに作業効率を高めるために排土を遺跡内の平場に落とす手製スライダも設置した。

発掘作業は、トレンチ等で遺構の位置や広がり・残存状況、横穴内部の埋土の堆積状況を確認し、必要に応じて土層断面図作成後、各横穴を完掘した。完掘後は、実測図の作成と各横穴の外観および内部の写真撮影を行った。また、遺構中の微細な遺物(人の歯や副葬された玉等)を取りこぼさないよう50cm間隔で横穴床面埋土を採取・水洗した。しかし、遺構の年代を確定する遺物は遺構床面埋土の水洗いでも出土しなかった。また、横穴の調査と平行して横穴下の平場の土層

堆積を確認するトレンチを設け、市道建設に伴って現地表下に埋没した横穴がないかを探った。

遺構等の記録は、現地で作成した実測図と写真撮影で行った。遺構実測図は1/20、遺構分布図は1/100を基本にして作成した。写真記録は大判カメラ(4×5)、中判カメラ(6×7)、35mmカメラでモノクロ・リバーサルフィルムによる記録を中心に、随時デジタルカメラを併用して発掘作業の細部の記録ができるよう努めた。また、遺跡の立地状況や周辺の地形等の自然環境を記録するため、空中写真撮影も実施した。

これらの調査が進む中で遺跡内の横穴が太平洋戦争中に防空壕としても利用された可能性が高まってきた。そこで発掘調査と並行して、戦争体験のある住民への聞き取り調査を実施し、情報収集に努めた(第15表)。

総調査日数は43日間である。(崎田)

調査日誌抄

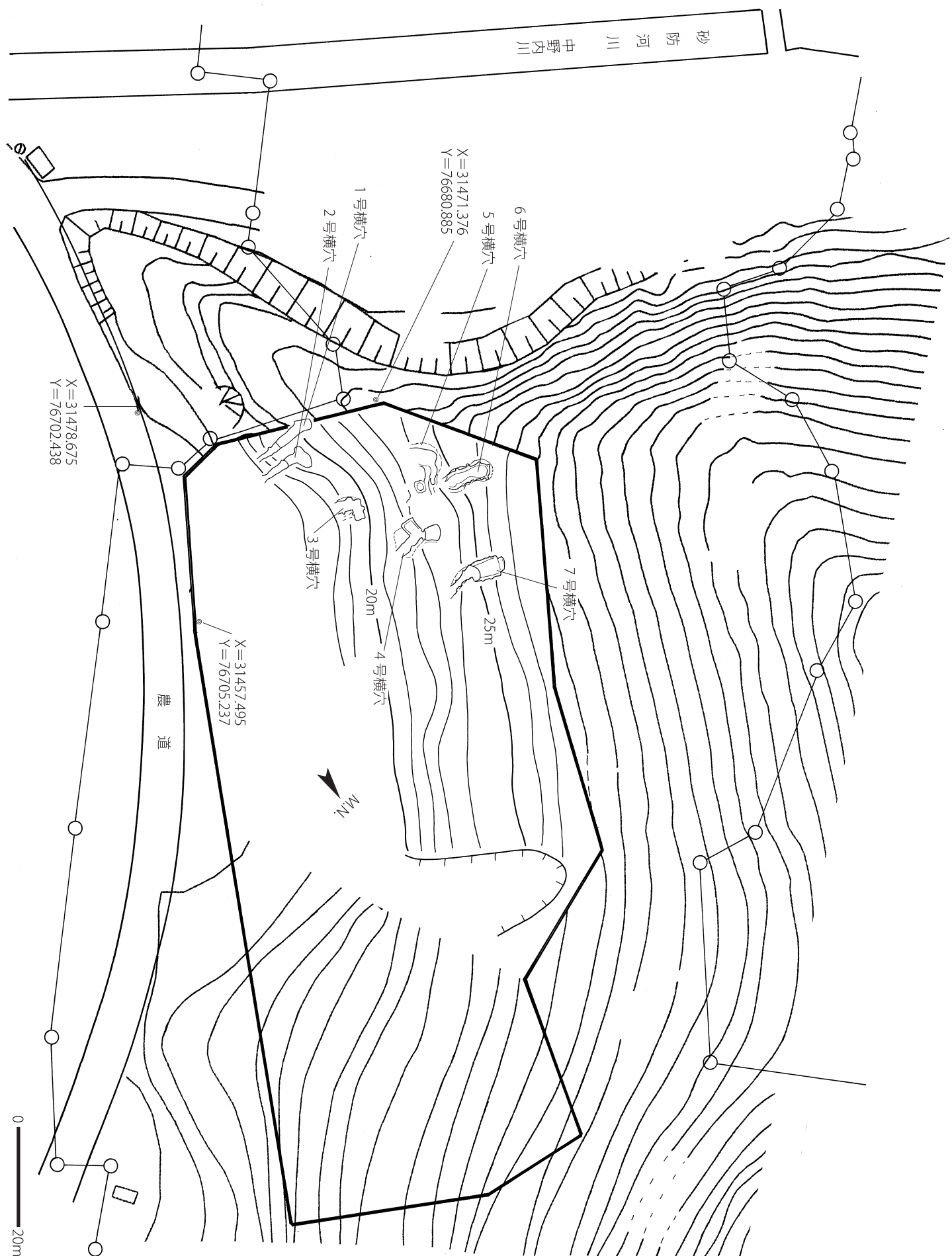
平成20(2008)年

- 1014 調査開始。
- 1022 表土剥ぎ開始。
- 1027 作業員投入。
- 1029 1・2号横穴調査着手。
- 1104 3・5・6号横穴調査着手。
- 1106 8号横穴調査着手。
- 1110 横穴床面埋土の水洗作業開始。
- 1114 4号横穴調査着手。
- 1119 7号横穴調査着手。
- 1204～1205 周辺住民への聞き取り調査。
- 1212 調査区の地形測量。
- 1216 空中写真撮影。
- 1217 各横穴等を大判カメラで撮影。
- 1225 横穴等の埋め戻し。
- 1226 現場事務所撤去。調査終了。

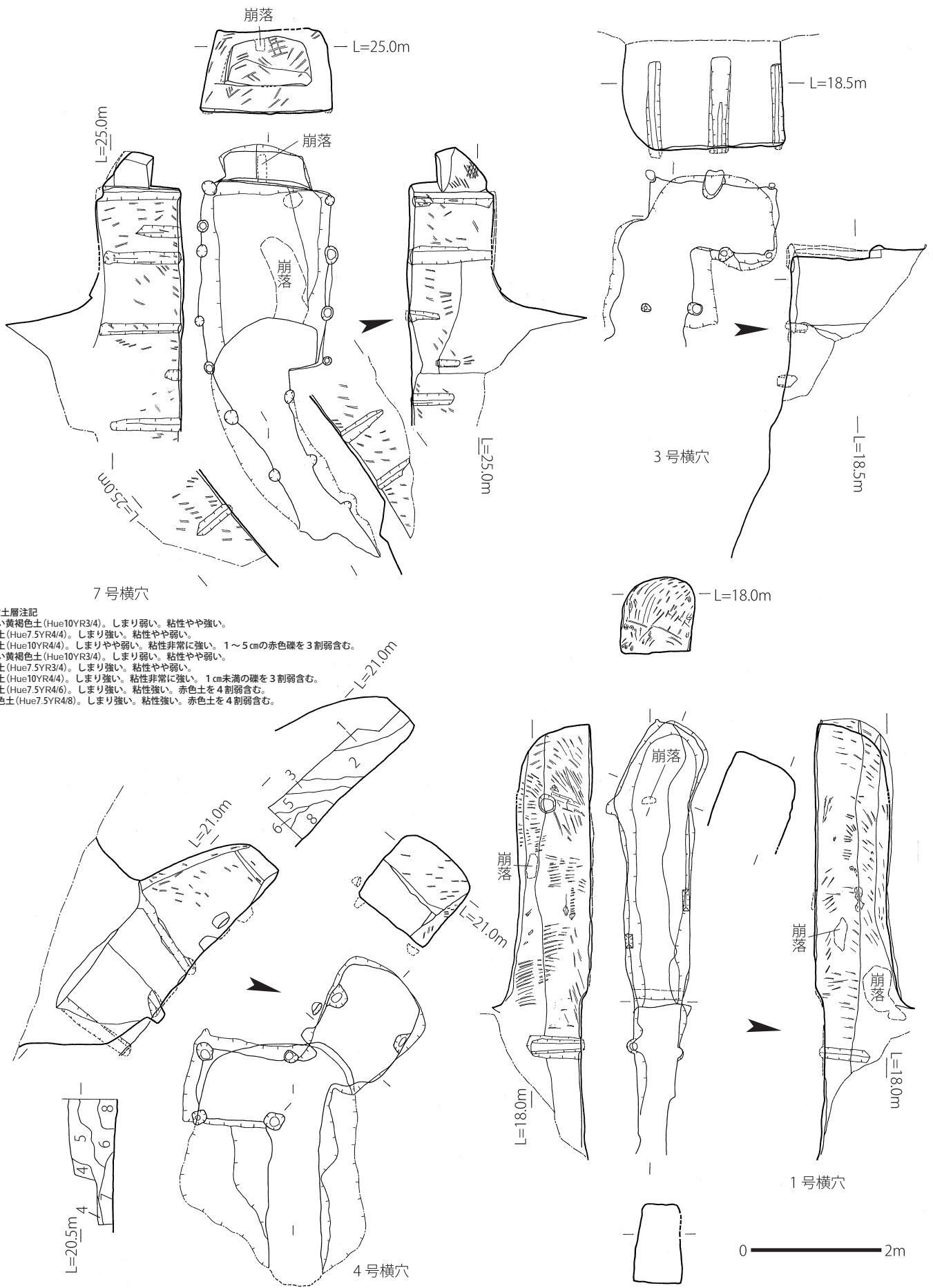
第2節. 周辺地形と遺構・遺物

2-1. 周辺地形と遺構の位置

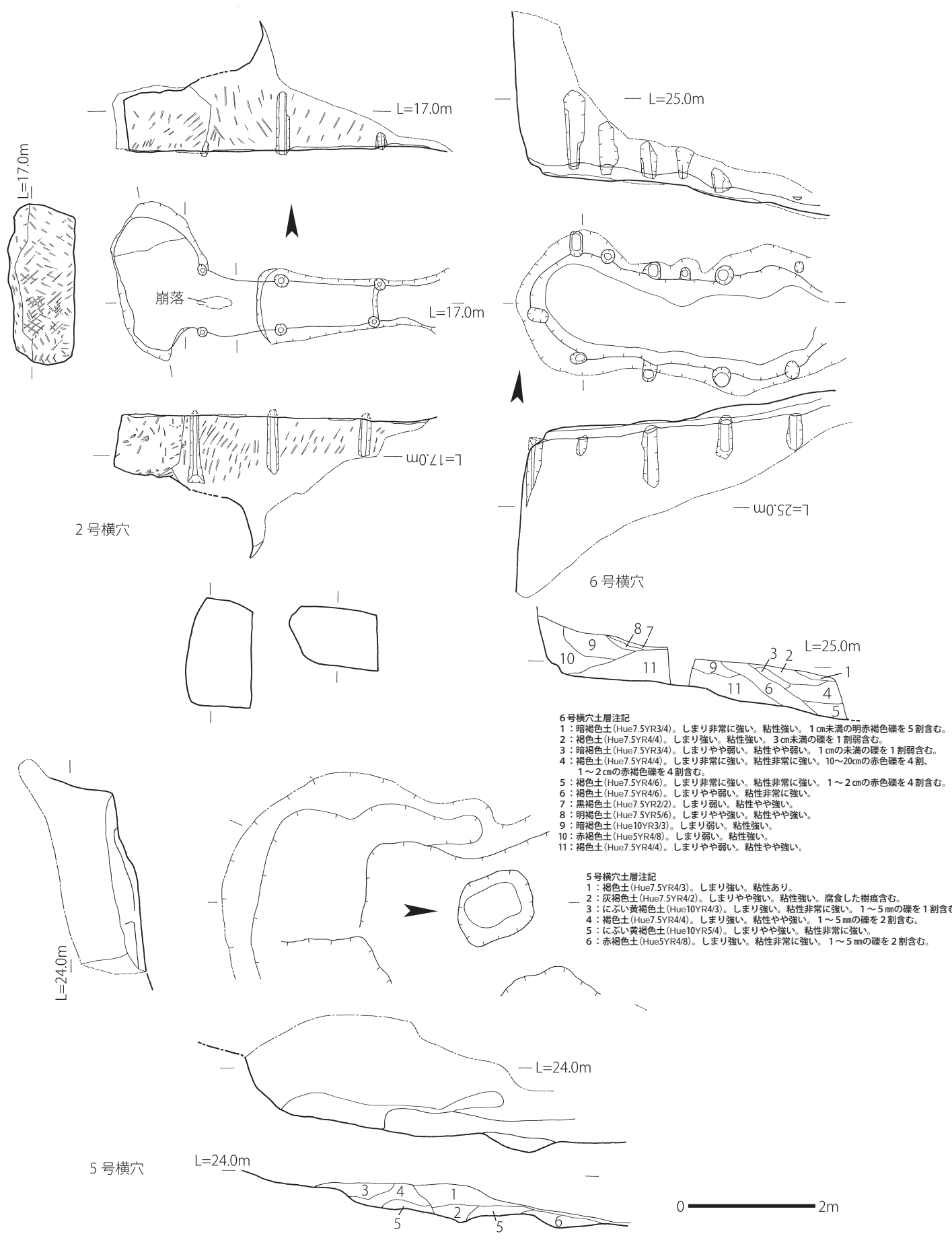
工事対象地の現況は、西から順に横穴群の開口する尾根と市道に連続する平場、市道とそれを挟んでコンクリート擁壁下に畑地となっていた。トレンチ調査の結果、平場は市道設置に伴って造成されたものと判明し、横穴のある尾根から畑地のある低所の間の斜面に



第14图 市之串遺跡遺構分布图 (S=1/1000)



第15図 市之串遺跡遺構実測図 (1)



第16図 市之串遺跡遺構実測図 (2)

	床面標高(m)	通路幅(m)	通路長さ(m)	奥室入口幅(m)	奥室形	奥室横幅(m)	奥室奥行(m)	天井	天井高(m)	柱痕(基)
1号横穴	16.9~17.0	0.4~1.0	5.4	1.1	方形	1.0	1.0	ドーム	1.1	2
2号横穴	16.4	0.5~0.8	3.8	0.9	楕円形	2.2	1.2	平	0.9	6
3号横穴	18.0	0.6	1.6	0.6	長方形	2.0	1.0	—	—	7
4号横穴 a	20.0	0.8	2.8	0.6	方形	1.4	1.6	平	1.3	2
4号横穴 b	20.0	0.8	2.8	1.0	方形	1.0	1.4	ドーム	0.9~1.4	4
5号横穴	23.2	—	—	—	—	—	—	—	—	—
6号横穴	23.8	1.0	2.6	0.9	楕円形	1.2	1.8	—	—	11
7号横穴	24.0	0.5	3.2	1.2	長方形	1.9	2.8	平	1.2	14

第13表 市之串遺跡遺構詳細一覧表 横穴(1)

遺構No	項目	観察所見
1号横穴 全形	開口付近の北壁の一部に崩落あるものの、ほぼ良好な残存状態。長さ約6.7m、通路端部から約5.4m部分で北へ約20度傾く。穴の幅は、約110cmで端部に向かって徐々に狭まる。奥壁から約4.3mまで天井部残存。	
	奥室	天井は、奥壁から約50cm部分で約110cmの高さに達し、ほぼ同じレベルを保ちながら約2.6m続き、開口部分へ緩やかに立ち上がる。奥室入口南壁の高さ約60cmの位置に、幅約18cm・高さ約22cm・深さ約20cmの貫状の溝あり。
	通路	端部から約1.6mの北床面と約1.7mの南床面に直径約20cmの柱穴1基ずつあり。柱跡は壁面に約15cm入り込み、東に約5度傾斜。側壁面の柱跡の先端部まで長さ北壁のものが約76cm、南壁のものが約80cm。通路端部から約3.8mの北床面と約3.3mの南床面に方形の溝あり。北床面のものは幅約10cm・長さ約18cm・深さ5cm、南床面のものは幅約10cm・長さ約30cm・深さ5cm。
	工具痕	奥壁・側壁に上から下へ向かう多数の明瞭な工具痕。奥壁底部に下から上への斜め方向の工具痕もわずかながらあり。
2号横穴 全形	天井の一部に崩落あるものの、良好な残存状態。長さ約5m、奥壁から約2.2mの長さで天井部が残存。	
	奥室	天井は奥壁から約10cm部分で約88cmに達し、徐々に高さを増しながら、開口部分へ向かう。
	通路	端部から約3.8mまでの側壁には、南北ともほぼ同間隔で各3基、計6基の柱穴あり。柱穴直径約12~20cmで、いずれも側壁に約4~10cm壁面に入り込む。側壁の柱痕はほぼ垂直で、長さは北側が西から約24cm・100cm・30cm、南側が西から約110cm・110cm・68cm。
	工具痕	奥壁・側壁には、上から下、左右へ向かう多数の明瞭な工具痕あり。一部に格子目を描くものもあり。
3号横穴 全形	天井部なし。長さ約2.6m、通路端部から約1.6mの部分で北へ約90度傾斜し、奥に方形の奥室を持つ。横穴平面の形状から本来は、この通路内の柱穴と西壁の最南端にある柱穴とを結んだ線に横穴の南壁が存在したことが考えられる。	
	奥室	西壁に3基、東壁に2基の柱穴あり。西壁の柱穴はいずれもほぼ垂直立ちで、角材使用。柱穴は壁面に最大20cm掘り込まれ、長さは148cm以上である。東壁の柱穴は、北から直径約11cm・16cmで、壁面に最大16cm掘り込まれる。
	通路	天井なし。北壁の柱は14cm角の角材で、床面より14cmの深さまで打ち込まれる。通路内の柱穴は円形直径約10cm。
4号横穴 全形	通路端部から約2.8m部分で北西と南の2方向に方形の奥室を持った構造をとる。	
	奥室a	分岐点から約2.4m延び、奥壁から約1.6m部分まで天井残存。開口部の天井の高さは約144cmで緩やかに低くなり奥壁部分の高さは約60cmとなる。側壁北東側に1基、南西側に2基の柱穴あり。柱穴はいずれも不定形。北東側のものは直径約20cmで約2cm床面に掘り込まれている。南西側の柱穴の1基は直径約20cmで床面に約12cm掘り込まれ、もう1基は床面から8cm上の壁面に掘り込まれる。
	奥室b	分岐点から約1.5m延び、奥室を取り囲むように4基の柱穴あり。西壁の北側の柱穴は直径約14cm、床面に10cm掘り込まれる。南側の柱穴は角材を用いたことが伺える形状を持ち、その1辺は約16cm。2基とも西側にわずかに傾斜。東壁の北側の柱穴は直径約18cm、床面に約20cm掘り込まれている。南側の柱穴は1辺約14cmの角材を用いたことが伺え、南東側にわずかに傾斜。天井は崩落。残存部分から約125cmの高さを持っていたことが推測できる。
	通路	通路は、約80~100cmの幅で緩やかに拡張と収縮を繰り返す構造をもつ。通路の南壁は崩落により失われているが、南側奥室の東壁北側の柱穴を起点に通路の北壁に並行する形で端部に伸びる構造をもっていたことが推察できる。
	その他	2つの奥室の埋土を半截して堆積状況を観察したが、分岐点あたりに切り合いは認められなかった。ただし、遺跡内の他の横穴が通路から奥室に向かう途中で北に傾くという構造をとっていることを考慮すると南部分が新たに造成された可能性が高い。
5号横穴 全形	天井部がなく、正確な奥行きや幅も不明だが、残存する部分は、長さ約5.5m、幅約3mである。横穴の南と西に残された壁は、大部分が崩落により失われているが、ほぼ垂直に切られ、最大で約140cmの高さをもつ。床面は西から緩やかに東に下り、随所に凹凸見られる。	
6号横穴 全形	長さ約4.9m、側壁の柱穴の間隔から幅は約1.6~1.8mと考えられる。天井部はなく、平面での形状では、他の横穴の様な北方向への屈曲が見られない。西側の奥壁は曲面を呈し、最高部分で約2.4mに達する。	
	奥室	奥室・通路との境界は不明瞭。奥壁中央よりやや南側に長径約30cmの柱穴1基が確認できた。柱痕は奥壁に垂直に刻まれ、その長さは約102cmである。北壁は奥壁から約70~170cmの部分で高さが約240cmから約60cmに下がり、その後は端部に向かって緩やかに高さを減じている。横穴北側の6基の柱穴は、西から長径約28cm・14cm・20cm・10cm・18cm・13cm。壁面の柱痕の長さは、西から約120cm・80cm・58cm・52cm・36cm・5cmであった。南壁は奥壁から約18~180cmの部分で高さが約240cmから約135cmに下がり、その後は端部に向かって緩やかに高さを減じている。横穴南側の4基の柱穴は、西から長径約20cm・18cm・22cm・10cm・28cm。壁面の柱痕の長さは、西から約33cm・96cm・70cm・59cmであった。床面は浅い凹凸が見られる程度で、端部に向かって緩やかに下る。
	通路	
7号横穴 全形	通路端部から約1.8m部分で北へ30度傾き、奥室となる。	
	奥室	屈曲部分から約80cm進んだ部分に造成された方形の奥室は、長さ約2.8m、幅約1.7~1.9m、高さ約1.3mである。柱穴は奥室の北東壁に4基、南西壁に5基、通路部分の北壁に3基、南壁に2基あり。奥室北東壁の柱穴は、西から直径約14cm・24cm・20cm・12cm。西から2本目までの壁面柱痕は、天井部まで達し、その長さは、西から約124cm・130cm。3本目の柱痕は長さ約52cm、4本目は床面から約20cm上の壁面に彫り込まれ、その長さは約38cm。奥室南西壁の柱穴は、西から直径約20cm・18cm・18cm・14cm・18cm。西から1・3・4本目の壁面柱痕は、天井部まで達し、その長さは、西から約124cm・115cm・124cm。2本目・4本目の柱痕の長さは約68cm・25cm。
	通路	通路の側壁は、端部に向かってその高さを減じているが、北側の方がやや緩やかな曲線を描く。北側の柱穴は、西から直径約18cm・18cm・15cm。壁面柱痕は、約5~10cm壁面に彫り込まれ、それぞれの長さは西から約67cm・74cm・67cm。南側の柱穴は、西から直径約20cm・18cm。壁面柱痕は、約10~18cm壁面に彫り込まれ、それぞれの長さは西から約110cm・64cm。
	工具痕	奥室・通路の壁面には、上から下へ向かう多数の工具痕が明瞭に残されており、格子目を形成する部分も確認された。
	その他	奥壁には、高さ約40cm、幅約130cm、奥行き約40cmの棚状の施設あり。

第14表 市之串遺跡遺構詳細一覧表 横穴(2)

談話者	居住地	談話
男性	昭和3年生	古江
男性	昭和9年生	宮之浦
男性	大正6年生	市振
男性	昭和9年生	宮之浦

遺跡内の横穴は山の所有者と話者が戦争中防空壕として利用した。自分も遺跡の近くに防空壕を2基造った。警報が鳴ると現在の役場付近から遺跡東側の田圃や畑を走って穴の中に隠れた。戦争中畑(現在の永出製材所付近)に爆弾が落とされ大きな穴ができた。

敵機が近づくと鐘が鳴らされ、避難した。北浦は1回古江に爆弾が落とされたが、空襲と言うほどのものはなかった。戦闘機は度々来襲し、登校中に日本機との空中戦を見たり、海水浴中に機銃掃射を受けたことがあった。北浦では死人は出なかったが、島之浦では子どもが死んだと聞いた。防空壕にはトンネルの様な『横穴式』と縦穴の上に梁を造り、その上に土をかぶせる『イモ穴式』があった。決まった工法はなく、各人で造っていた。防空壕以外にも避難用の『疎開小屋』と呼ばれるものが裏山に造られていた。疎開小屋は山の斜面を削って平場を造った後、カナテコで穴を掘って柱を立て、屋根をトタンや茅、壁を竹や芝の葉で覆って造った。床はムシロ張りて年寄り(戦時中)そこで生活していた。

土壁の下地用の土はいたる所にあった。クワで掘って取っていた。通学路の土手には土取でできた穴がたくさんあった。

土取りは、ツルハシやスコップで露天掘りをして取っていた。

第15表 市之串遺跡関連聞き取り一覧表

市道が取り付けられていた。造成された平場に埋もれた横穴は確認されなかった。

尾根は西側の頂部より浅い谷を挟んで二叉に分かれて東に延びており、南側の尾根の南斜面は中野内川に開析されている。横穴群は南側の尾根の浅い谷側に開口する。開口部の標高は約16～26mである。開口部周辺は造林等により作業道等と見られる帯状の平坦面も見られた。

2-2. 遺構 (第15・16図・第13・14表)

横穴は9基あり、このうち調査区内に掘り込まれるのは7基である。中には天井部のないものが3基確認されたが、本来は天井部があった可能性も考えられることから、便宜上全て横穴と呼んだ。調査区外の横穴2基は1号横穴の南に並んで開口しており、これらの傍には天井の崩落した石積みの炭焼窯もある。

横穴群は3つの高さに分かれて掘り込まれ、高所より順に見ると標高23～24mに5～7号、標高20mに4号、標高16～18mに1～3号・調査区外の横穴となる。市道の高さに立つと、最大で10m近い比高差をもって横穴が開口する。未開口の横穴はない。

1～3号横穴は既に表土を除去した段階で通路部分等の大部分が露出していたことから、トレンチで残存状況を確認した後に完掘した。一方、4～7号横穴は内部と入口部分が崩落土等で埋もれた状況であった。横穴の平面軸は二パターンあり、1～4・7号横穴は北方向へ屈曲し、6号横穴は傾きのない直線的構造をとる。奥室の平面形は大別すると方形・楕円形があり、通路の幅・全長は様々である。

1号横穴は開口付近の北壁の一部に崩落が見られたが、ほぼ良好な状態で遺構が保たれていた。全体に直線的な構造をしており、奥室と通路の境は明瞭でない。

2号横穴は天井部分の一部に崩落が見られる程度の良好な状態で遺構が保たれていた。奥室は歪な平面楕円形となる。**3号横穴**は、天井部がない。横穴平面の形状から本来は、入口側の柱穴と西壁の最南端にある柱穴とを結んだ線に横穴の南壁が存在したことが考えられる。奥室は北側のみ広がっている。**4号横穴**は2方向に方形の奥室を持った構造をとる。他の横穴が通路から奥室に向かう途中で北に傾くという構造をとっていることを考慮すると、南側の奥室が新たに造成さ

れた可能性が高い。**5号横穴**は天井部がなく、正確な奥行きや幅も不明ながら、壁面は垂直に切られ最大で約140cmの高さを持つ。他横穴に共通する柱穴が見られず、平面形も歪である。**6号横穴**の天井部はなく、平面での形状では、他の横穴の様な北方向への屈曲が見られず直線的である。**7号横穴**は丁寧な造りで、奥室も広い。奥室奥壁には棚状の施設が掘り込まれる。

なお、路線内には横穴群から弱い谷を挟んだ北側にある急斜度の尾根には石垣で区画された段々畑とそれに直交した石積みが造成されていた。石垣は岩盤である千枚岩で構築された粗雑なものである。石積みは畑地造成等で不要となった礫を積み上げたもので、通路であると同時にシシ垣のような害獣阻止の役割も担ったと見られる。

2-3. 遺物

7号横穴の奥室奥壁の棚状施設に近代以降の陶磁器碗1点が置かれていた。また、横穴の調査と平行して、横穴の開口する斜面部分や平場より近世以降の陶磁器・焙烙ならびに弥生土器あるいは土師器の小片が採集された。

この他、横穴群北側の段々畑で近代以降の播鉢等が採集された。(崎田)

第3節. 小結

1～4・7号横穴の形状はバラエティに富んでいるが、聞き取り等も踏まえると防空壕として利用された可能性が高い。一方で、1～4・7号横穴について古墳時代の横穴墓あるいはそれ以降の何らかの横穴を防空壕として改変した可能性も否定できない。天井が全く残存しなかった横穴のうち、6号横穴については聞き取りを踏まえると疎開小屋であった可能性も考えられる。5号横穴はやはり聞き取りにあるような土取り跡の可能性もあるが、隣接する6号横穴の構築に伴う斜面段切りとも考えられる。(崎田)

第Ⅵ章 中野内遺跡

第1節 遺跡の位置と調査の方法・経過

1-1. 遺跡の位置と環境 (第3・17図)

中野内遺跡は西北方を山に囲まれ、西側に飯塚山(標高571.4m)、西南側に森山(標高245.3m)、両山の奥に岳山(標高613.8m)が聳え立つ。当遺跡は西側より延びる緩やかな扇状地上に立地し、遺跡北側には飯塚山に源がある総延長約4kmの古江川が流れる。

古江川は、河川改修以前、梅雨時期や集中豪雨の時に急激に増水し、時によっては堤防が決壊・氾濫して水田や民家に土砂・浸水被害を及ぼしていた。1967(昭和42)年3月、川底・川幅ともに掘りつつ堤防をコンクリートブロックとする工事がなされた。

調査中に体感できた気候について、冬季は、調査区を囲む柵が何度も倒れるほど山手から急な突風が吹いた。また、霜柱が3回立ったが、日当たり良好のため、午前中には全て解けた。夏季は、気温が40°を越える日もあったが、海から吹く涼風もあってか体感温度は涼しかった。夏の終わりには、北川方面の山々が暗くなると雷鳴とともに夕立となった。この他、「島野浦が白く煙たら雨が降る」「沖合の船の音が聞こえだしたら雨が降る」(古江在住の40~60代の作業員による)。

1-2. 発掘調査歴ならびに習俗の聞き取り

1989(平成元)年以降、古江地区において団体営の圃場整備が進められる中、1991(平成3)年に工事法面に竪穴住居跡3軒が見つかり、1992(平成4)年から発掘調査が北浦町教育委員会により実施された(以下、圃場発掘と略す)。また、新たに聞き取りできたこととして、圃場整備以前には、388号線から中野内地区に入る最も南側の道の突き当たり部分に貝殻が山積みされた状態で畑地壁面に露出していたという。圃場整備に伴う発掘調査で竪穴住居内から貝集積箇所が発見されており、同様の遺構であった可能性がある。

この他、聞き取り調査によれば、中野内遺跡のやや北側の古江川に近い地域には鍛冶屋の集団がおり、近代までそれらの伝統祭事が残っていたという。

1-3. 調査方法と経過

調査は、現況の地形・削平状況・畑地の区割り等に

沿ってA~K区を設定し、平成19年度A~G区を、平成20年度にH~K区を発掘調査した。測量基準は3級基準点測量によって導出された世界測地系で設定した。グリッドは5×5mとし、東西軸がアルファベット、南北軸が算用数字の組み合わせでグリッド名とした。

表土除去は重機で行い、それ以後の掘削は、先行トレンチ等で土層堆積を検討しつつ、区毎に人力で進めた。表土はA~G区・H~K区で異なっており、包含層を削平しないよう慎重を期した。遺構検出の大半は、Ⅲ層面で進めたが、圃場整備に伴う重機のキャタピラ痕跡が明瞭に残っていたことや、一次堆積と見分けの難しい偽のアカホヤ火山灰が一次堆積のアカホヤ火山灰層を被っていたため、検出作業を何度も繰り返すこととなった。竪穴住居跡の掘り下げは、サブトレンチを入れつつ人力で進めた。土石流堆積物については、人力・重機を併用したトレンチ掘削後に、可能な範囲で掘り下げた。遺構記録について、全体遺構配置を縮尺1/200、ピットを1/10・1/20で実測した。竪穴住居跡はトランシットで二次元データを記録した。竪穴住居跡内の遺物出土状況については全て図化した。写真記録は、各調査段階においてデジタルカメラでメモ写真を、モノクロ・カラースライドでフィルム写真を撮影した。コンタ図作成は、削平の著しかったH~K区では作成せず、A~G区のみⅢ層上面で進めた。包含層中の遺物は、グリッド一括あるいは必要に応じて点挙げした。遺構内より出土した遺物は、全て位置等を記入して取り上げた。

Ⅲ層以下の調査について、I区から集石遺構1基が検出されたことには大変驚かされた。そこで、H~K区について人力ならびに埋め戻し時の重機で深掘りトレンチを設定したが、遺構・遺物の追加はなかった。前年度調査のA~G区のⅢ層以下も、同様の調査を進めていたが、遺構・遺物ともに確認できていない。

I区の範囲は圃場発掘区と一部重複させ、Ⅲ層以下の確認と圃場発掘区の壁面にかかっていた竪穴住居跡の続きが発見される可能性に対応できるようにした。しかし、圃場発掘区との重複範囲は、圃場整備の影響

で著しく攪乱されており、遺構・遺物ともに確認されなかった。なお、平成20年10月に、H・I区、J・K区間の市道敷き下の遺構の有無について、工事立ち会いで確認した。圃場整備以前の畑地耕作に伴うトレンチャー・攪乱以外に遺構・遺物は確認されなかった。

1-4. 報告書への掲載方法

複数次に渡る調査を同時に報告するため、全調査を通して遺構番号を統一した。竪穴住居跡については、H～K区が現地調査時からそのままSA1・2・3とし、A～G区がSA1→SA4、SA2→SA5、SA3→SA6、SA4→SA7（現地調査→報告書）にそれぞれ変更した。（古田）

調査日誌抄

（A～G区）

平成19（2007）年

- 1203 A～G区調査開始。事務所用地の整地。
- 1204 調査範囲の境界杭・事務所等の設置。
- 1205 重機による表土剥ぎ開始。
- 1206 安全保安員点検。
- 1210 作業員17人投入。
- 1213 表土剥ぎ終了。
- 1214、17～21、25～27 深掘りトレンチ。全体精査。

平成20（2008）年

- 0107～10 A～C区精査・一部包含層掘削作業。
- 0111 B区一部包含層掘削。
- 0115～18、21 C・D区包含層一部掘削・検出。
- 0122 雨天。作業員中止。測量データ整理。
- 0123 C・D区竪穴住居跡、ピット多数検出。
- 0125 朝から霜柱除去作業。
- 0129～31 B区一段下げ。E・F区再検出。
- 0204～08 遺構掘削・写真・図面。
- 0212 D・E区掘削。SA7全掘のための調査区拡張。
- 0213～15 遺構精査・掘削・写真・図面。
- 0218 SA4・5掘削。B区一部掘削。E区写真・図面。
- 0219～27 SA4～7掘削・写真・図面・遺物記録。
- 0228、0305 竪穴住居跡土層ベルト除去。遺物記録。
- 0306 空撮前掃除。13時から空撮。SA1～4最終掘削。
- 0307～14 測量。SA5・7最終掘削。
- 0317～19 埋め戻し。作業員最終日。ミニ説明会。
- 0321 遺物・機材運搬。安全対策上の杭打ち。

（H～K区）

- 0609、13 H～K区調査開始。草刈り。
- 0617～30 重機による表土剥ぎ開始。
- 0624～25 雨天。重機中止。
- 0630 表土剥ぎ終了。
- 0701 作業員18名投入。H区精査。柵設置。
- 0702 雨天。AEDの説明。J区水道管の埋土掘削。

- 0703 K区SA1周辺一部掘削。I区全体の精査。
- 0707～09 全体の精査・写真完了。
- 0710 J区土石流検出。H区土層図。ピット掘削。
- 0711～16 J区SA1周辺拡張。I区竪穴住居跡掘削。
- 0714 K区竪穴住居跡掘削。発掘体験。北浦中学校2年生24名。掘削ならびに土器水洗。
- 0715 J区溝状遺構精査。H区土層図。発掘体験。北浦中学校2年生22名。掘削ならびに土器水洗。
- 0717 J区溝状遺構掘削。作業員なし。
- 0718 K区西側に土器集中検出。I区竪穴住居跡検出。H区土層図完了。台風対策。
- 0722～24 I区竪穴住居跡精査・図面・写真。H区終了。
- 0728～31 J・K区重機トレンチ掘り・一部表土剥ぎ。
- 0801、05～13 J・K区トレンチ掘削作業。
- 0805 延岡市文化財保護審議会による視察。
- 0818～20 K区竪穴住居跡掘削。北浦中学校2年生3名の見学あり。
- 0821 J・K区土層図。I区集石遺構図面。草刈り。
- 0822～29 全体的な最終精査。
- 0901 11時頃まで空撮用最終精査。昼に空撮。
- 0902～05 全体測量。作業員最終日。ミニ説明会。
- 0908～12 重機による埋め戻し。
- 0916 台風対策。機材等片付け。
- 0922 プレハブ撤去。遺物・機材運搬。

第2節. 基本層序と土層堆積

2-1. 基本層序

基本層序は次のI～VII層に分かれる（第18・19図）。

I a層：黒褐色砂質土（耕作土層）

I b層：灰褐色泥砂質土（造成土層）

II 層：黒褐色砂質土（弥生時代～中世包含層）

III 層：明褐色土（アカホヤ火山灰で以下、K-Ah）

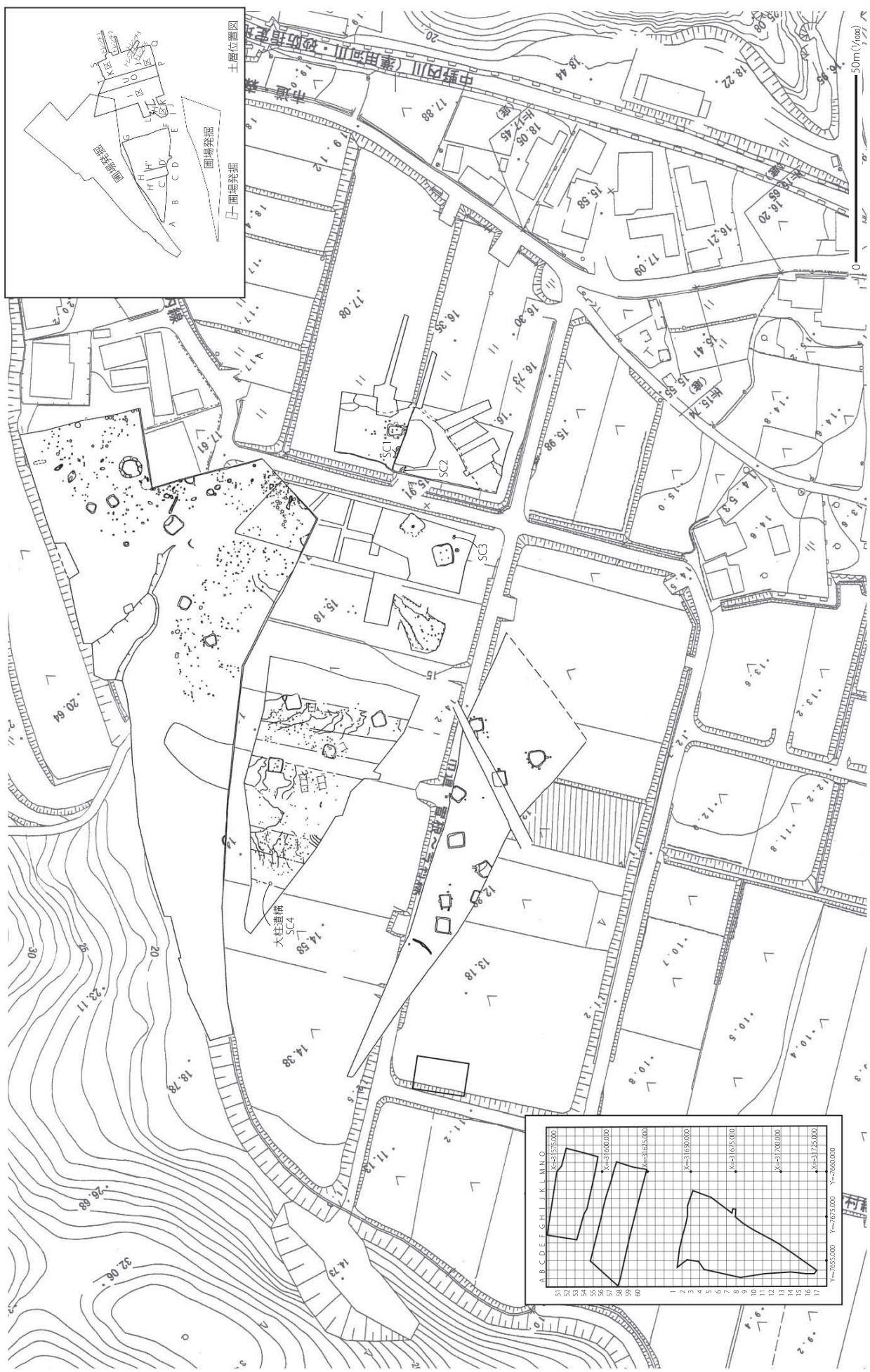
IV 層：暗黒褐色粘質土（縄文時代早期包含層）

V 層：暗黄褐色混小礫土（無遺物層）

VI 層：明黄褐色混小礫土（無遺物層）

VII 層：暗褐色混小礫土（河成礫層）

I b層は全体に均一に水分をよく含む泥に近い砂質層で、大きい河原石が点々と混じる他、近代以降の茶碗・長靴・肥料用袋等が含まれていた。発掘作業員によると当地域で昭和30年代に改田事業があり、表土層を除いた上で河川付近の水分を含む泥層を入れ、再び除去した表土層を戻すことで、水分保有量の多い土地を作り出したそうである。I a層も改田事業の影響か、

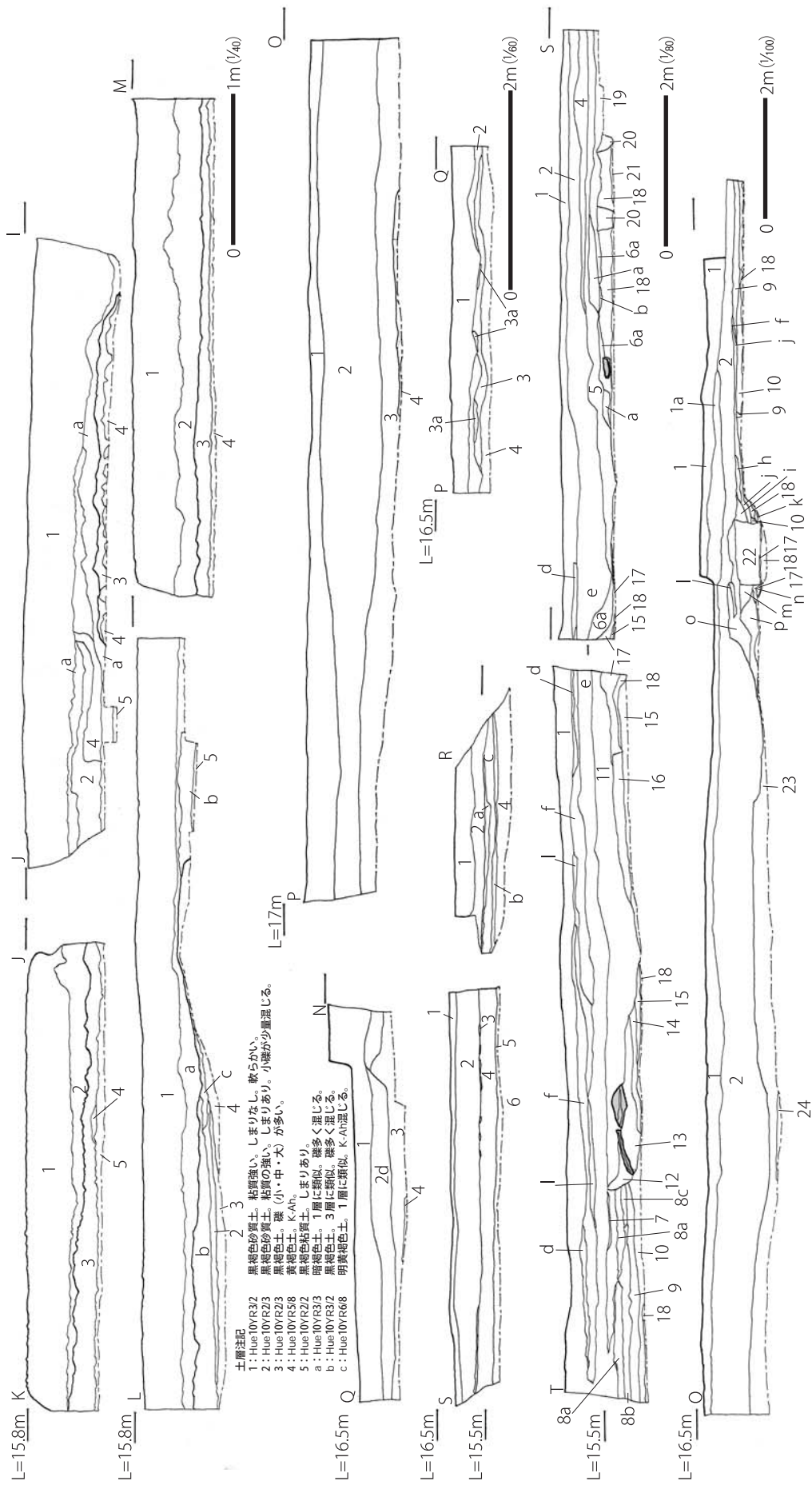


第17図 中野内遺跡遺構分布図



第18図 中野内遺跡土層断面図(1)

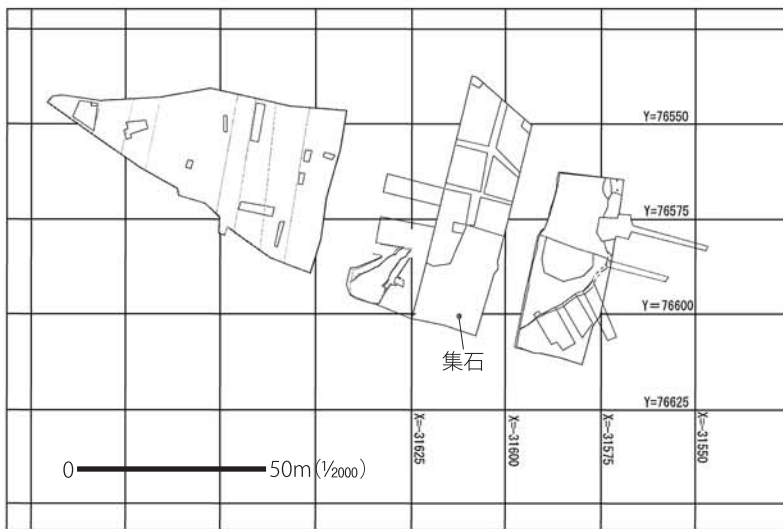
- 土層表記
- 1 : Hue10YR5/1 相灰色砂質土、ややしまる。1~3cmの礫を多く含む。K-Ahブロックが層状に入る部分あり。
 - 1a : Hue10YR3/2 黒褐色砂質土、しまりなし。K-Ah少し混じる。
 - 2 : Hue10YR6/2 灰黄褐色土、やや粘性強い、水分多く含む。K-Ahブロック含む。
 - 2a : Hue10YR6/2 黒褐色砂質土、2層より灰色が深い。
 - 2b : Hue10YR2/2 黒褐色砂質土、やや粘性あり。湿り気のある1~2cm程度の礫を多量に含む。
 - 2c : Hue10YR2/2 黒褐色土、6層が混じる。
 - 2d : Hue10YR5/1 黒褐色土、1層と類似した層より灰色がかる。細かい礫含む。
 - 2e : Hue10YR5/2 黒褐色土、やや粘性強く、しまる。K-Ah粒子が少量混じる。
 - 3 : Hue10YR3/2 黒褐色砂質土、しまりなし。須臾器が混じる。
 - 3a : Hue10YR3/1 にぶい褐色砂質土、やや粘性あり。ややしまる。5mm以下の礫含む。
 - 3b : Hue10YR5/3 黒褐色土、5~10mmの礫含む。
 - 3c : Hue10YR5/6 黒褐色土、5~10mm程度の礫含む。
 - 3d : Hue10YR3/2 黒褐色砂質土、しまりなし。K-Ah少し混じる。
 - 4 : Hue10YR2/2 黒褐色砂質土、やや粘性強い、しまり強い。K-Ah少量含む。
 - 4a : Hue10YR6/6 黒褐色土、全体的にK-Ahブロックが混じる。
 - 5 : Hue10YR8/8 黒褐色土、しまりなし。
 - 5a : Hue10YR2/2 黒褐色土、全体的にK-Ahブロックが混じる。
 - 5b : Hue10YR4/2 黒褐色土、K-Ah、しまりなし。
 - 5c : Hue10YR3/3 黒褐色土、粘性強い、硬くしまる。遺物なし。
 - 6 : Hue10YR2/2 黒褐色土、粘性強い、ややしまる。1~5mm礫含む。
 - 6a : Hue10YR3/2 黒褐色土、全体的にK-Ahブロックが多く、黒褐色土が全体に混じる。
 - 6b : Hue10YR2/1 灰黄褐色砂質土、硬くしまる。湿り気あり。~1mm程度の細かい礫を含む。
 - 7 : Hue10YR4/2 黄褐色砂質土、粘性強い、1~5mm程度の礫含む。
 - 7a : Hue10YR5/6 黄褐色砂質土、やや粘性あり。しまりなし。K-Ah粒子少量混じる。
 - 7b : Hue10YR4/2 灰黄褐色土、7層が混じる。
 - 7c : Hue10YR5/3 にぶい黄褐色砂質土、粘性強い、硬くしまる。シルト質に近い、~1cmの礫少量混じる。
 - 7d : Hue10YR6/6 明黄褐色砂質土、粘性強い、硬くしまる。~1mmの白い石が入る。
 - 7e : Hue10YR2/1 黒褐色土、やや粘性あり。硬くしまる。遺物なし。
 - 7f : Hue10YR6/6 明黄褐色砂質土、粘性強い、しまり強い。1~5mmの白い礫含む(シルト質に近い)。
 - 7g : Hue5YR4/6 赤褐色砂質土、粘性強い、硬くしまる。
 - 7h : Hue10YR4/2 灰褐色砂質土、粘性強い。
 - 7i : Hue10YR3/4 明灰色土、ややシルト質。
 - 7j : Hue2.5YR7/6 暗褐色土、ややシルト質。
 - 7k : Hue2.5YR4/2 茶褐色土、シルト質。
 - 7l : Hue10YR8/1 灰白色土、シルト質。



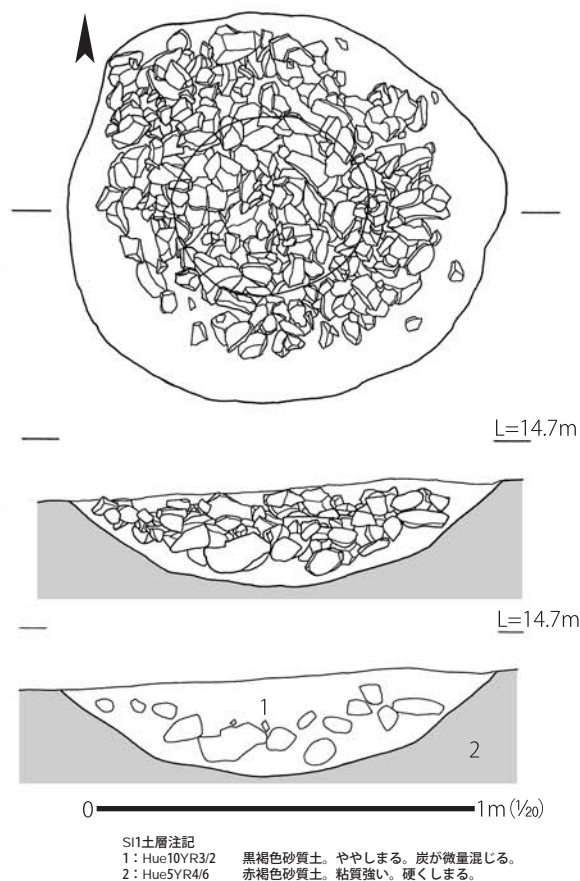
土層注記
 1: Hue10YR3/2 黒褐色粘質土 粘質強い、しまりなし、軟らかい。
 2: Hue10YR2/3 黒褐色粘質土 粘質の強い、しまりあり、小礫が少量混じる。
 3: Hue10YR2/3 黒褐色土 礫(小・中・大)が多い。
 4: Hue10YR5/8 黒褐色土 K-Ah
 5: Hue10YR2/2 黒褐色粘質土 しまりあり
 a: Hue10YR3/3 暗褐色土 1層に類似し、礫多く混じる。
 b: Hue10YR3/2 黒褐色土 3層に類似し、礫多く混じる。
 c: Hue10YR6/8 明黄褐色土 1層に類似し、K-Ah混じる。

土層注記
 1: Hue10YR4/3 にふい黄褐色砂質土、粘性あり、サラサラして粒子が細かい。
 1a: Hue10YR4/3 明褐色粘質土、細かい砂利を含む。
 2: Hue10YR6/2 灰褐色粘質土、粘質強い、硬くしまる。目礫から小礫まで多く混じる。
 2a: Hue10YR6/2 灰褐色粘質土、粘質強い、硬くしまる。目礫から小礫まで多く混じる。
 3: Hue2.5YR4/8 赤褐色粘質土、硬くしまる。鉄分少量混じる。
 3a: Hue10YR4/1 暗褐色土、3層に類似し、8割がK-Ahブロック。
 4: Hue10YR4/1 にふい黄褐色砂質土、やや粘性あり、硬くしまる。小礫疎らに入る。
 5: Hue10YR4/1 暗褐色粘質土、粘性強い、粒子が細かい。
 6: Hue10YR5/3 にふい黄褐色砂質土、粘性強い、K-Ah斑点少量混じる。
 6a: Hue10YR7/1 灰白色粘質土、やや粘性あり、硬くしまる。～1cmの細かい砂利疎らに入る。
 7: Hue10YR7/1 灰白色粘質土、やや粘性あり、硬くしまる。～1cmの細かい砂利疎らに入る。
 8: Hue10YR3/3 にふい黄褐色砂質土、硬くしまる。湿り気あり、鉄分が上層に入る。少量混じる。
 8a: Hue10YR3/3 にふい黄褐色砂質土、硬くしまる。湿り気あり、鉄分が上層に入る。少量混じる。
 8b: Hue10YR4/3 にふい黄褐色土、鉄分を多く含む赤みがある。
 8c: Hue10YR4/3 にふい黄褐色土、鉄分を多く含む赤みがある。

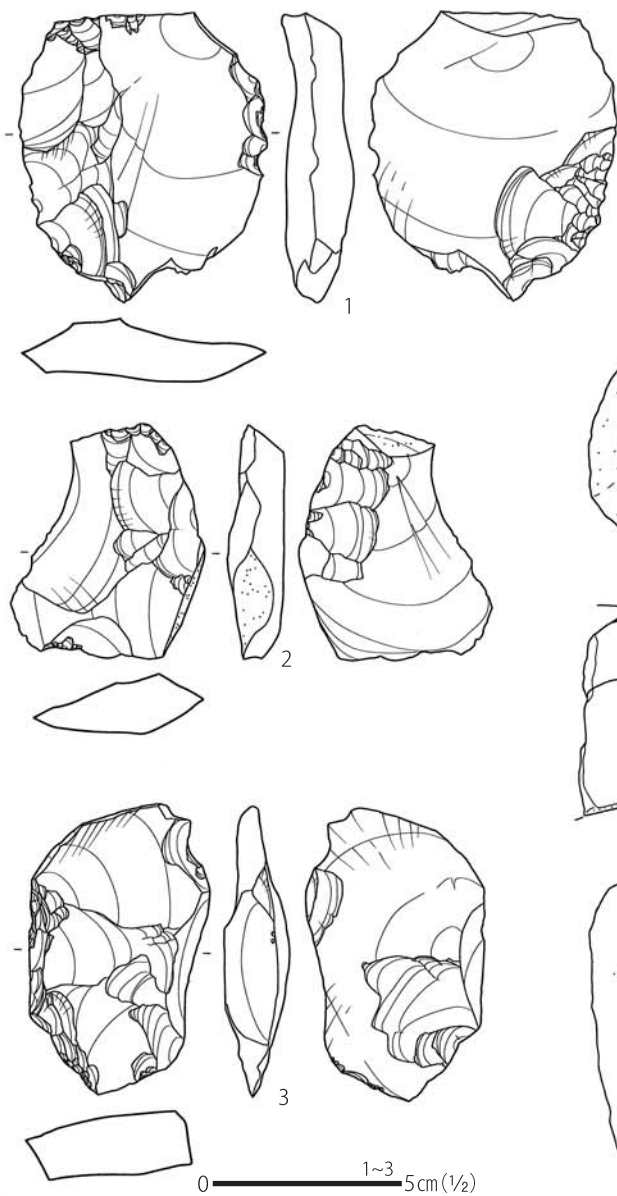
第19図 中野内遺跡土層断面図(2)



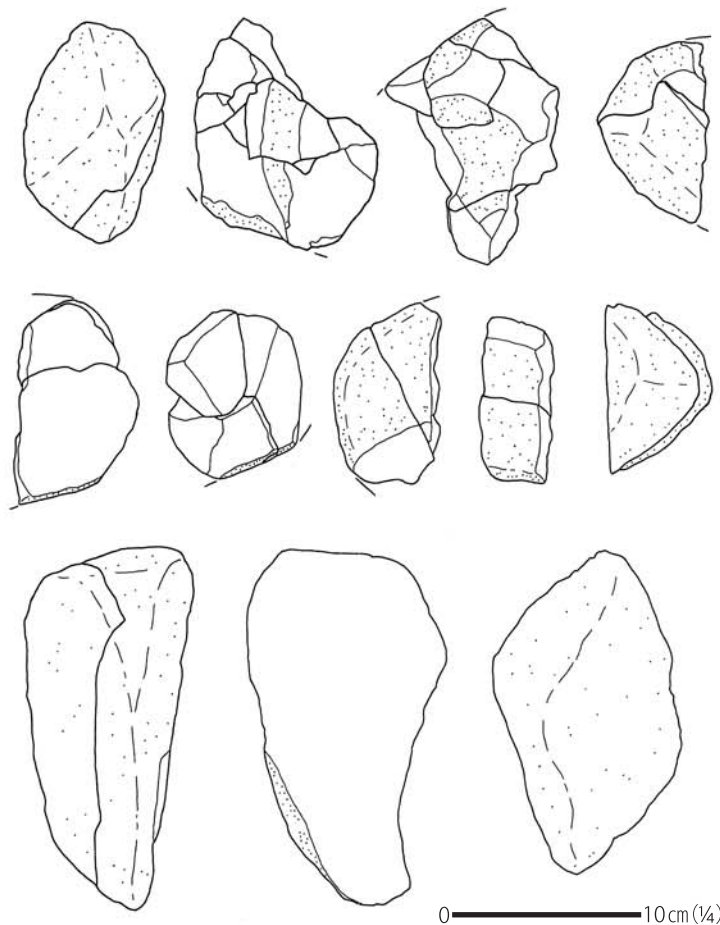
第21図 中野内遺跡縄文時代早期調査グリッド配置図



第22図 中野内遺跡縄文時代早期集石遺構実測図



第20図 中野内遺跡旧石器実測図



第23図 中野内遺跡集石遺構構成礫実測図

K-Ahが多く混じっており、一部では層状に含まれていた。特にC・D区は、波状に堆積した土層が明瞭であり、機械力による填圧の可能性はある。

II層は黒色でしっかりと硬く、上部の影響のためか粘性がやや強い。II層はそのまま弥生・古墳時代の竪穴住居跡埋土の基質となるが、竪穴埋土の色調が区毎に異なっていた。土地利用や上部に堆積した土砂の状態の違いが影響している可能性がある。

K-Ah (III層) の堆積厚は北東側に向かって約10cmから約1mへと堆積が厚くなった。IV層は、II層に比べて茶褐色味があり、粘性が強く白色粒が混じる。V層はIV層よりも明るい色合いで、パサパサとした土質である。細かい白色礫が混じる。VI層は全体に明るい赤色で、粘性が強く粒子自体が細かい。VII層は全体に黄色がかっており、粘り気が強い。白く風化した長径20~60cm強の垂角礫が多く混じり、その隙間に中~小礫が含まれていた。

2.2. 土層堆積の状況

土層堆積は、耕作土改良等によってA~K区別に削平状況が異なっていた。A~G区の堆積は薄く、I層最下部には圃場整備に伴う重機のキャタピラ痕跡が明瞭に残っていた。A区あるいはC・D区東部ではII・III層まで削平され、I層直下でIV・V層となる部分があった。C区では造成によるものか、II層の上にIII層ブロックが層状に覆い被さる部分が見られた。B・E・F区では、II層が良好に厚く残存していた。H区は、旧道路部分のみ圃場整備による削平を免れており、III層に掘り込まれた多くのピットを検出できた。I区は東側にわずかにII層以下が残り、全体はIV・V層以下まで削平されていた。J区はI層が厚く、場所によっては地表より2m近くもあった。K区はII層の上に水田層が残っていた。なお、C・D区間に農業用下水道、J区を斜断する下水管がそれぞれ埋設されていた。(古田)

第3節. 旧石器・縄文時代の調査

3-1. 旧石器時代の遺物 (第20図)

A~G区調査に伴うトレンチI層中より旧石器が集中して出土した。I層は圃場整備に伴うもので、宮野浦等の土砂も一部搬入されたという談話もある。いずれにせよ、新たな旧石器時代遺跡の可能性が示唆され

るため、表土中出土ながら図化した。(古田)

石器は流紋岩製二次加工ある剥片3点・剥片11点(未図化)がある。いずれも節理が著しく縞状の薄灰色の風化面であり、礫面の特徴や剥片剥離のあり方に共通点が多いことから、同一母岩より連続して剥離されたものと見られる。礫打面8点・剥離面打面6点で、縦長~幅広剥片生産を意図した一群である。(藤木)

3-2. 縄文時代早期の遺構

K-Ah (III層) 以下の調査は、A~G・I~K区で人力掘削780㎡、重機掘削1,800㎡で実施し、I区東端より集石遺構1基を確認した。また、D区の西側のSA7下にあたる二次K-Ah中より縄文時代の可能性があるチャート製剥片1点が出土した(第21図)。

集石遺構(第22図)は、検出当初、何であるのか判別が付かず、検出面にあった直径約1cmの細礫は作業過程で一部除去してしまった。集石遺構は、平面長軸93cm・短軸85cm、検出面より深さ26cmの浅い皿状の掘り込みに礫が充填されるものである。内部礫は、約8cm大の垂角礫が中心に向かって同心円状に全体的に均等に配置され、一部火熱による赤化が見られた。掘り込み面直上には20×10cmの平たい千枚岩礫が2点、逆ハの字状に置かれ、配石の可能性はある。埋土は硬質で強い粘性があり、埋土下部には微量の炭化物が含まれていた。

礫は全て洗浄の上、接合関係や石材について検討を試みた。内部礫・配石全体の重量は68.5kgであり、石材構成は砂岩：千枚岩=9：1となる。礫は約30点が接合し、1つの礫が二等分または三等分に破碎され、約150~200gの石片となっている。なお、本来の礫形態がおおよそ復元されるものや左右対称に置かれ配石とも見える千枚岩礫については図化した(第23図)。

集石遺構埋土中の炭化物について放射性炭素年代測定をしたところ、縄文時代早期前葉(約9,400年前)の年代値が出ている(詳細は第X章参照)。

集石遺構は扇状地上にあり、扇状地を下った地点には試掘結果により縄文海進に伴うと見られる砂層の堆積が確認されている。集石遺構はもちろん縄文海進以前のものであるが、低地と扇状地・山地の境界域に1基のみ残されている。一次的なキャンプ地のような場面であった可能性が考えられる。(古田)

第4節 弥生時代の調査

中野内遺跡では、圃場発掘調査区のやや北西側に、南九州特有の花弁状住居を含む弥生時代集落が確認されている。今回の調査区でも北西側に竪穴住居跡1軒が検出された(第24図)。

【1号竪穴住居跡(SA1)】(第25図)

SA1はK区の中央東側に位置し、Ⅱ層を介さずにⅠ層直下のⅢ層に掘り込まれる形で確認された。出土遺物から弥生時代前期後半から中期初頭と考えられる。

SA1の主軸は北東-南西にあり、東西約4.6m×南北約3.3mの平面隅丸方形である。竪穴の南北壁からは羽が生えているような浅い張り出しがある。平面形が歪であったため、プランが明瞭になるまで何度も検出作業を行った。張り出しと中央の竪穴との境となる壁ならびに竪穴自体の壁は緩く立ち上がる。竪穴内外には、直径約20cm・残深約20cmの柱穴が21基掘り込まれる他、南壁際には平面楕円形の浅い掘り込みがある。竪穴周辺を囲むように、掘り込まれ、竪穴内にある柱穴とほぼ同形態・規模である。これらもまた竪穴住居を支える柱穴と考えられる。これらの状況からは、SA1は本来、花弁状あるいはベッド状遺構等のような、床面に段差のある竪穴住居であった可能性がある。

床面はⅢ層に及び、大量の石器類が出土した竪穴南西部分が硬くしまっていた。貼床や壁帯溝の有無については、地山まで断ち割ったものの確認されなかった。埋土は約18cmあるが基本的に単相であり、分層は色調のみを根拠とした。埋土の土色は、B~D区のそれに比べて薄い黒褐色であった。北壁の張り出し部分にのみごく微量の炭化物が含まれていた。

竪穴南西から北東部分の埋土1層中より、一旦取り上げた後も重なって新たに出土するというように、大振りの石器・礫が大量に重なって密に出土した。大きい礫は埋土上部により多い。礫は台石風の千枚岩・砂岩等であり、最大で長径40cmのものも見られた。これとともに、弥生前期に遡るであろう口縁部の突帯に刻み目を持つ土器が出土した。床直には、下城式の祖形甕(11)や、やや床から浮いて弥生中期土器(24)が出土した。(古田)

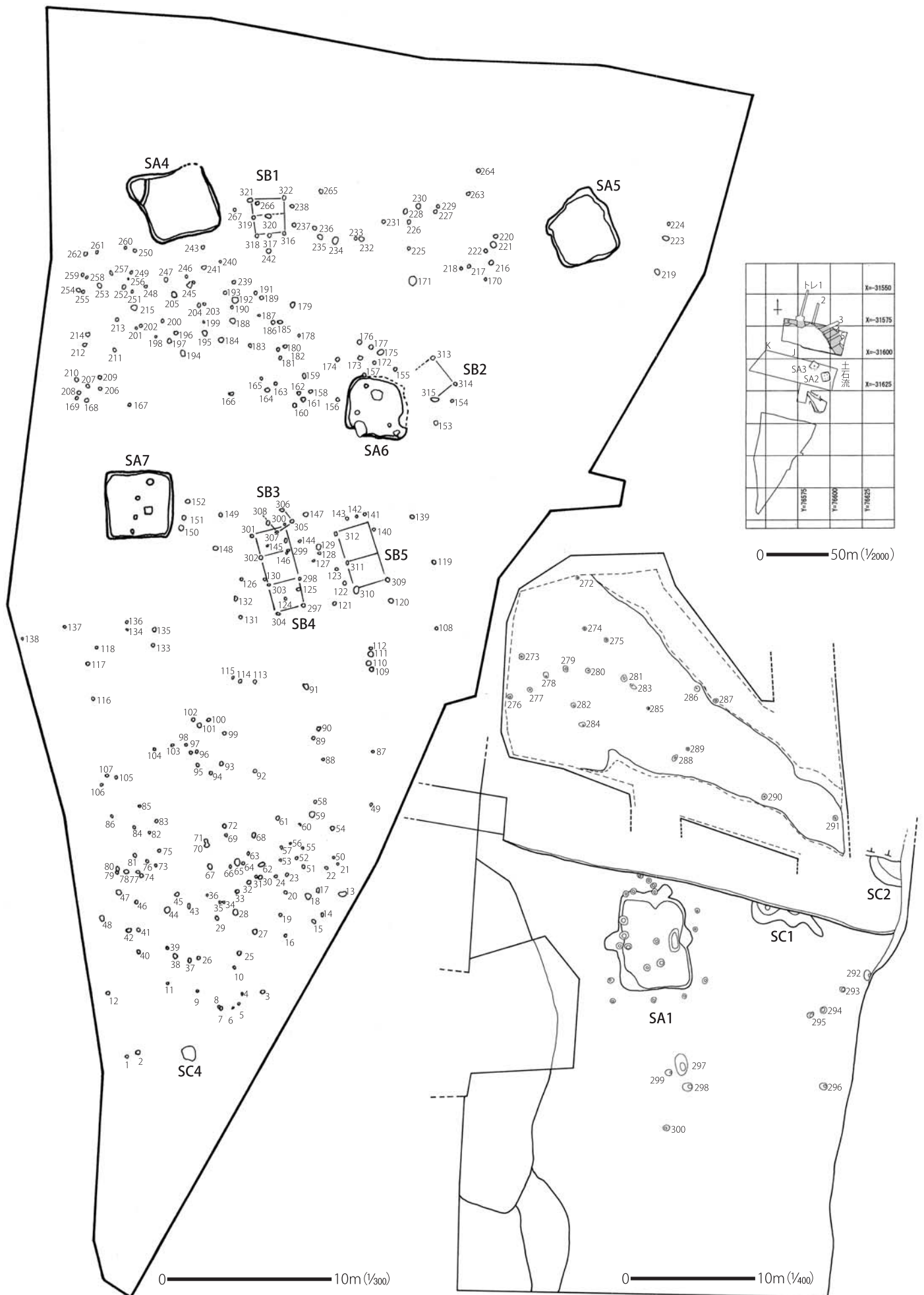
【SA1出土遺物】(第26・27図)

出土土器はほぼ全て図化した。壺の小片4点が入る

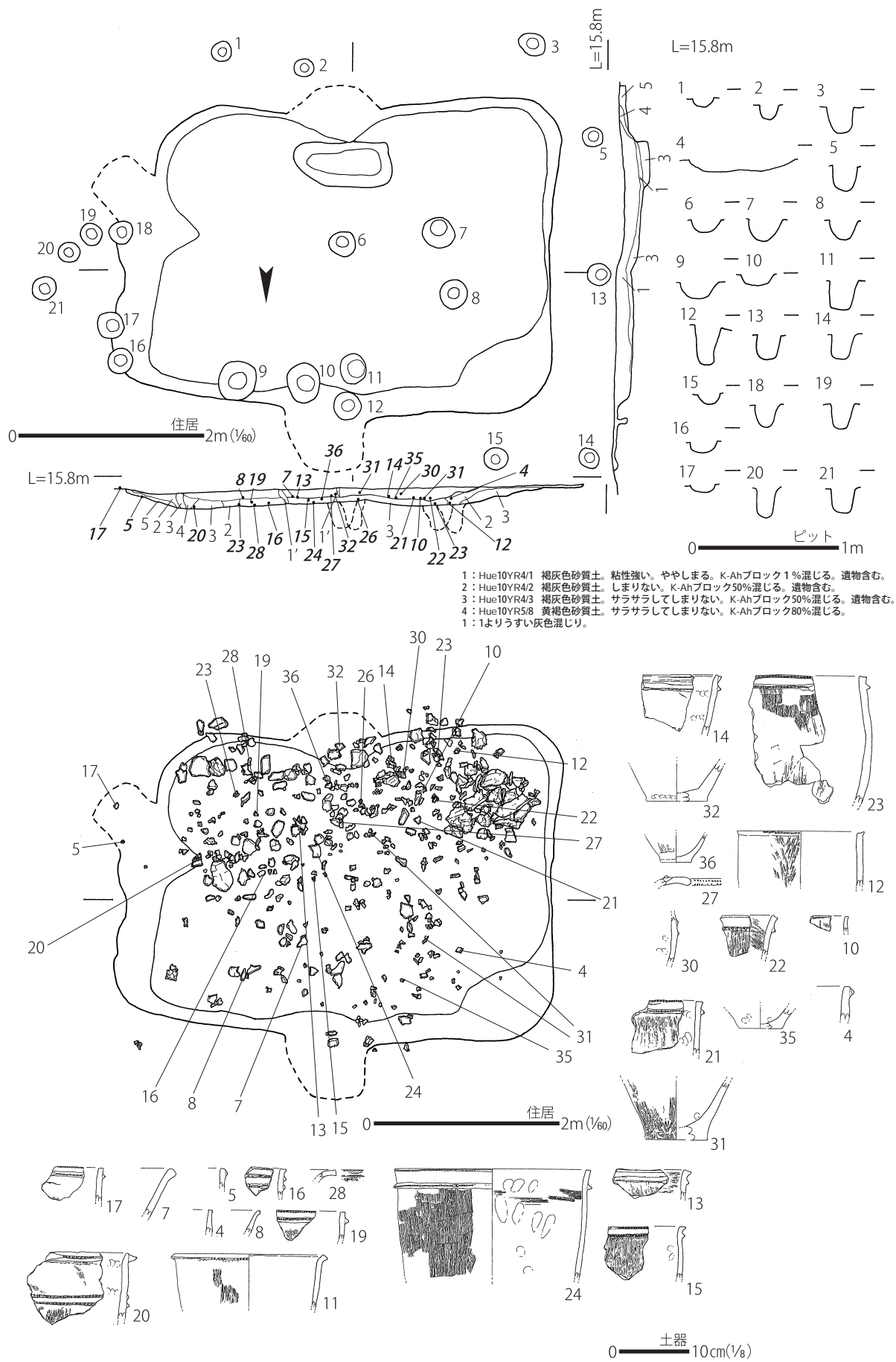
他は甕で占められる。4~9は口縁部に刻み目を持つ。11は下城式土器の祖形甕である。口縁端部をやや丸みのある断面三角形に成形し、内面には稜を持つ。12は口縁部が丁寧にナデられ、かつ凹状になるが、バラエティーの一つと思われる。外面は細かいハケメで、煤化している。13は貼り付け突帯の刻み目を持たないものである。14~24は口縁下部に刻み目を施すもので、大きくは下城式タイプである。色調は全体的に明るい橙色である。貼り付け突帯断面は三角形であり、口縁端上部が弱く凹むようにナデるものがある。施文手法について、突帯が二条以上廻るものは、口縁部・体部の突帯に工具で同時に刻んでいる。24の貼り付け突帯下から体部は丸みを帯び、突帯から口縁部にかけてやや外反気味になる。内面の指ナデ痕が明瞭に残る。施文具の原体の跡が刻み目の間に残る。25~30は壺である。25は如意形で口縁部が短い。胎土は橙色で内外面ともにミガキがあり、全体的に煤化している。26は櫛描きで弧文を入れた体部片である。下城式ではない。27は口縁部内面に突帯を巡らせる。29は上部に貼り付け痕が残る。30は壺の体部に突帯を巡らせるもので、胎土は他と明瞭に異なり角閃石が目立って多く、全体的に黒味を帯びる。31~36は下城式の甕の底部である。36のみ赤味を帯びる。(古田)

37・38は黒色頁岩製磨製石鏃・同未製品で、全て異母岩である。39~43は砂岩製礫器で、縁辺に簡単な剥離を加える点やその稜線に潰れを残す点で共通する。45・46は青みのある砂岩製磨石・凹石である。47は軽石製研磨具か。44・48~53の砥石・台石のうち、50・52・53は同質の石材製で、49は石英閃緑岩製の特異な例である。この他、未図化のものとして、灰色緻密なものとして黒色千枚岩質の磨製石鏃生産に伴う剥片等2点・砂岩製礫器に関連しそうな石核等3点・青みのある砂岩製磨石1点・同石材製台石3点・砂岩製砥石片1点がある。

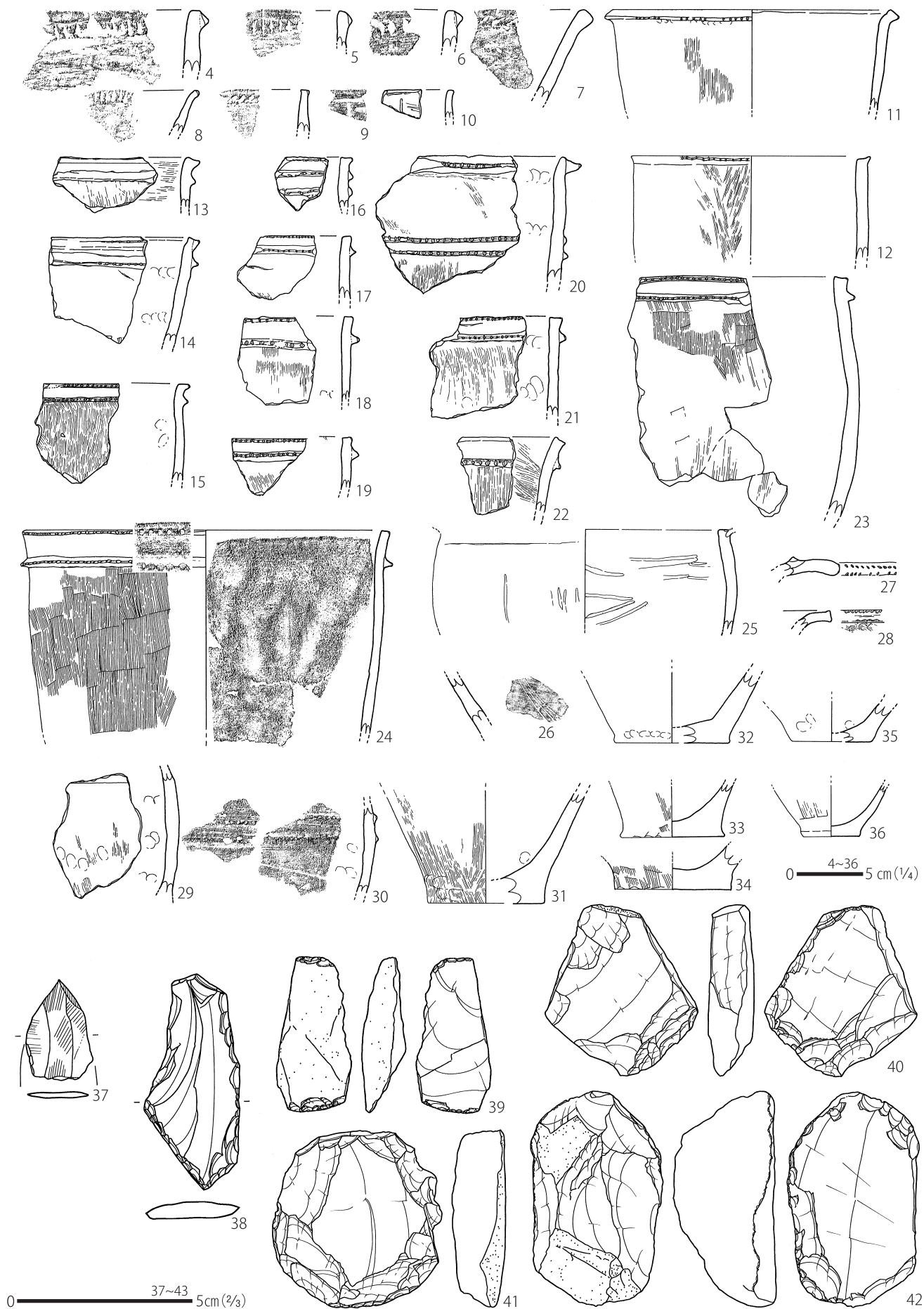
追記 なお、報告書入稿後に中野内遺跡の攪乱土中より扁平片刃石斧1点が出土していると判明した。その詳細については次年度刊行の『野地久保島遺跡 森ノ上遺跡』を参照してほしい。(藤木)



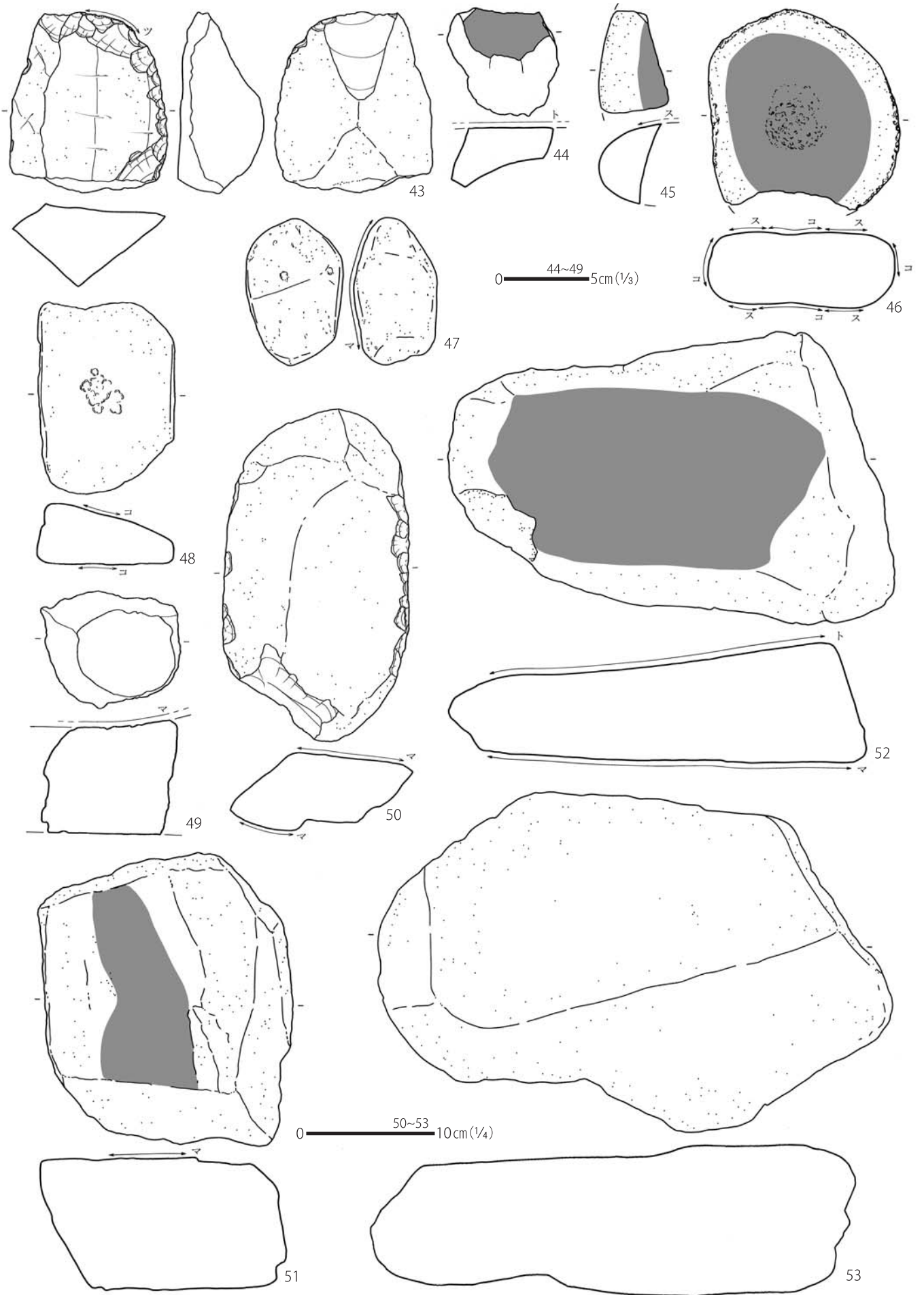
第24図 中野内遺跡弥生～古墳時代遺構分布図



第25図 中野内遺跡弥生時代遺構実測図(1) SA1



第26図 中野内遺跡弥生時代遺物実測図(1) SA1土器・石器



第27図 中野内遺跡弥生時代遺物実測図(2) SA1石器

第5節. 古墳時代の調査

中野内遺跡では、圃場発掘調査区で検出された弥生時代集落のやや南側に古墳時代集落が分布した。今回の調査区でも同様に、古墳時代の竪穴住居跡6軒が南よりで検出された(第24図)。

【2号竪穴住居跡(SA2)】(第28図)

SA2はI区の中央東側に位置し、I a層除去後、Ⅲ～Ⅳ層に掘り込む形で確認できた。出土遺物から古墳時代中期中葉～末と考えられる。

SA2の主軸は北東-南西に約45°振れており、東西約5.1m×南北約5.1mの平面隅丸方形である。I a層最下部には圃場整備時の重機で押されたK-Ahが全体的に被っており(以下、偽K-Ahと呼ぶ)、遺構検出の際に大変紛らわしかった。さらに、壁際の掘削時には偽K-Ahが被ったことで、一見すると、オーバーハングする断面形となった。検出当初に見えた歪な平面形も偽K-Ahによるものであり、竪穴下端のラインこそが本来の竪穴住居のプランとなった。竪穴の南部分は大きく攪乱を受けている。

床面はⅣ層上面に及び、床面中央には直径約27cmの炉が掘り込まれ、埋土は若干赤みを帯びていた。炉埋土はフローテーションしたが種子がなく、多くの炭化材片のみが回収された。柱穴は、竪穴内外を問わず確認されなかった。竪穴埋土は約24cmあるが基本的に単相であり、分層は色調のみを根拠とした。埋土の土色はB～D区Ⅱ層より薄く、K-Ahブロックはほとんど含まれなかった。埋土1層は全体的にしまっている。埋土3層はやや軟質で、攪乱物を含みつつ堆積する。また、壁際は崩壊しており、K-Ahブロックが斜めに堆積していた。なお、地山を一部断ち割ったが、貼床・壁帯溝は検出されなかった。

出土土器は全体に少なく、床直上からは甕口縁部片・坏片各1点が出土したのみである。埋土1層上部には、弥生時代中期の口縁部に突帯を持つタイプの土器が少量混じっていた。この他、竪穴中央に台石が配置され、手頃なサイズの棒状礫22点が床面等よりまとまって出土した。(古田)

【SA2出土遺物】(第33・36・37図)

54～57は甕口縁部である。やや外反しつつも直線的な立ち上がりであり、器壁は厚い。58は最大径が口縁

下部にあって口縁部が内湾する坏で、おそらく丸底であろう。(古田)

147は青砂岩製磨石でよく磨り込まれている。153～156の台石のうち、砂岩塊石には摩滅、千枚岩板石には中央部分に敲打痕がある。157～178は錘具と見られ、台石と同じ石材であり、砂岩13点・千枚岩9点となる。重量分布は214.1g～548.9g(ほぼ完形の21点対象)と幅広い。なお、148～152の扁平礫の用途等は錘具と関連する可能性もある。(藤木)

【3号竪穴住居跡(SA3)】(第29図)

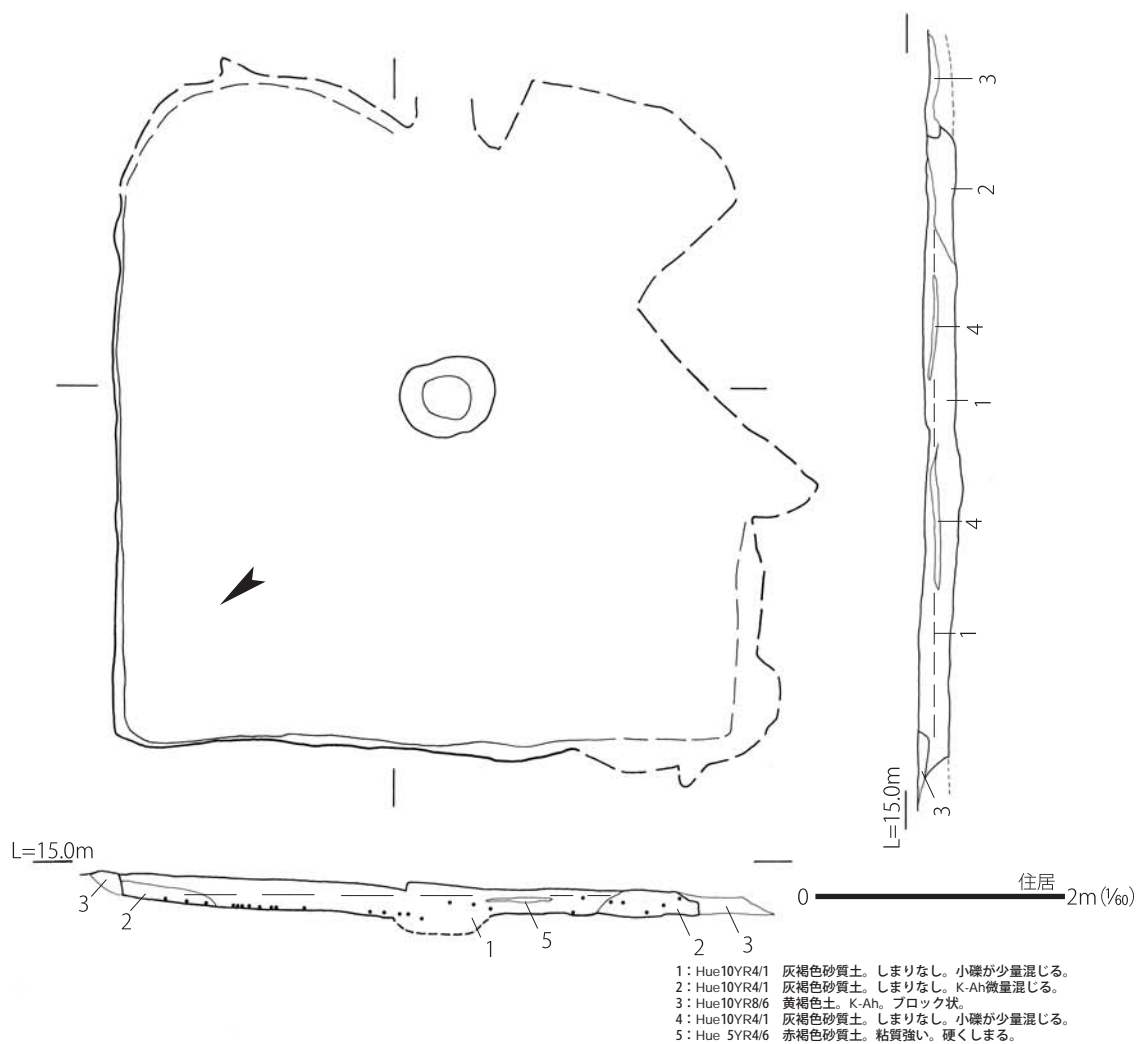
SA3はI区の東側に位置し、I a層除去後、Ⅳ～Ⅴ層に掘り込まれる形で確認できた。出土遺物から古墳時代中期中葉～後葉と考えられる。

遺構検出時に偽K-Ahに錯綜された点はSA2と同じであり、これの影響なのか、遺構検出時に露出した埋土上面は細かい白色礫が入る硬質なものであった。

SA3の主軸は約20°西に振れており、東西約5.4m×南北約5.4mの平面隅丸方形である。竪穴北から東・南壁に沿って、幅約8cmの壁帯溝が廻っていた。竪穴南側の一部の壁の立ち上がりは削失していたものの、壁帯溝の位置より推定プランを復元している。竪穴の壁際は崩落し斜めに堆積する(埋土2層)。Ⅴ層上面に及んだ床面は全体に硬化しており、北西隅が若干高い一方で南側は緩やかに低くなっていた。竪穴内には4本の支柱痕跡が残され、しっかり柱が固定できたと思われる細かい礫層部分へ掘り込んでいた。竪穴周辺に柱穴はない。竪穴埋土は約18cmあり、B～D区の竪穴埋土の黒褐色よりも薄い色合いで、全体にややしまっていた。

竪穴中央西よりでは、須恵器無蓋高坏が天地逆さの状態、土師器高坏が横倒しになっていた他、竪穴北東隅には69・70の土師器碗2点が重なって出土した。内側の碗は外側の碗よりやや小さい程度で、碗どうしの隙間には少量の土が入って密閉されていた。

なお、重なって出土した土師器碗2点について、洗浄の際に、他の土器洗浄時にはない強い磯臭がした。また、黒く煤化するばかりでなく粘り気のある付着物も見られ、その正体を探るべく自然科学分析を実施した(詳細は第X章参照)。(古田)



第28図 中野内遺跡古墳時代遺構実測図(2) SA2ならびに出土状況

【SA3出土遺物】（第33・38図）

59～64は甕である。59は口縁が長く外反する。62は口縁部と頸部・体部とも径がほぼ変わらず、やや直線的である。口縁端部は丁寧なミガキである。63は口縁部内で屈曲し外反する。内面は丁寧にミガキ、外面は細かなハケメとなる。64の肩部は張らず寸胴である。65・66は壺である。65の頸部は明瞭で、直線的に口縁が上がって端部のみ外反する。肩部も接合部分で大きく張っている。外面は、丁寧なミガキで、内面は細かく丁寧なユビ押さえとなる。67～70の坏・埴類は全体的に丸みがあり、器高の半分あたりから直線的に口縁部が立ち上がり、端部もそのまま直線的なものである。最大径部分の外面は丁寧なミガキとなる。69・70は平底である。高坏のうち、73～75は坏部・76～78は脚部のみ・79は坏部接合部である。75は口縁部と坏受部分を境に稜線を持ち、外反した口縁部の端部が屈曲する。坏・脚の接着は充填法であり、脚裾は大きく広がる。端部は丸く収める。76～78は、高坏脚部にしては器壁が薄く、鉢類の脚台の可能性もある。80はTK208の須恵器無蓋高坏である。口縁下部には二条の段を持ち、丁寧な波状文が描かれる。内面は灰かぶりであり、重ね焼きの痕跡も残っている。脚部との接合部分にはヘアで線描きされる。脚柱には細かい沈線が廻り、脚内面側より3箇所三角透かしが入れられる。（古田）

179・180・182・183の敲石・磨石・凹石はいずれもよく転磨された砂岩の円礫あるいは亜円礫を素材とする。磨石は中でも正円に転磨された礫が用いられる。184～186は台石で、中央に敲打痕あるいは摩滅あるものの二者があり、特に千枚岩製の184の中央はよく敲き凹む。181は打ち欠きある礫で、両側面の敲打痕周辺が赤化する。未図化には敲石2点、磨石・欠損面も含めて赤化した凹石・鉄錆が付着する砂岩製台石・砂岩製剥片各1点がある。（藤木）

【4号竪穴住居跡（SA4）】（第30・31図）

SA4はB区の北よりに位置し、I a層を除去したIII層面で検出された。出土遺物から古墳時代中期前葉～中葉と考えられる。

SA4の主軸は約20°西に振れており、東西約4.8m×南北約4.5mの平面隅丸方形である。検出面では全

体にキャタピラ痕が東西方向に走り、北東隅は攪乱されていたものの、埋土は濃い色合いであったため遺構検出は容易であった。

竪穴床面はIII層中に留まり、全体に貼床が施されている。北西隅を除いて幅約8cmの壁帯溝が廻り、北東隅の攪乱箇所は壁帯溝によって平面形の想定ラインを引いている。床面の高低差はほとんど見られないが、北西隅に向かって徐々に高くなっており、その周辺のみ硬化していた。北西隅の出入口あるいは柵状の施設等とそれに伴う踏み固められた硬化面の可能性がある。なお、貼床面を除去してもピット・土坑等の屋内施設は確認されなかった。埋土は約30cmあり、壁際ではやや直線気味に斜めの堆積も見られた。埋土1層は樹痕もあったためか全体に土が軽く掘り下げやすかった。1層上面には弥生土器が混在する。埋土2層は全体にしつとりと硬くしまっており、細かい炭化材が満遍なく含まれていた。

遺物は竪穴の中央から北西に寄って出土した。南壁際床面付近では完形の壺1点があり、壺中の土砂についてフローテーションしたところ、種子はなく炭化材が回収された。（古田）

【SA4出土遺物】（第33・38・39図）

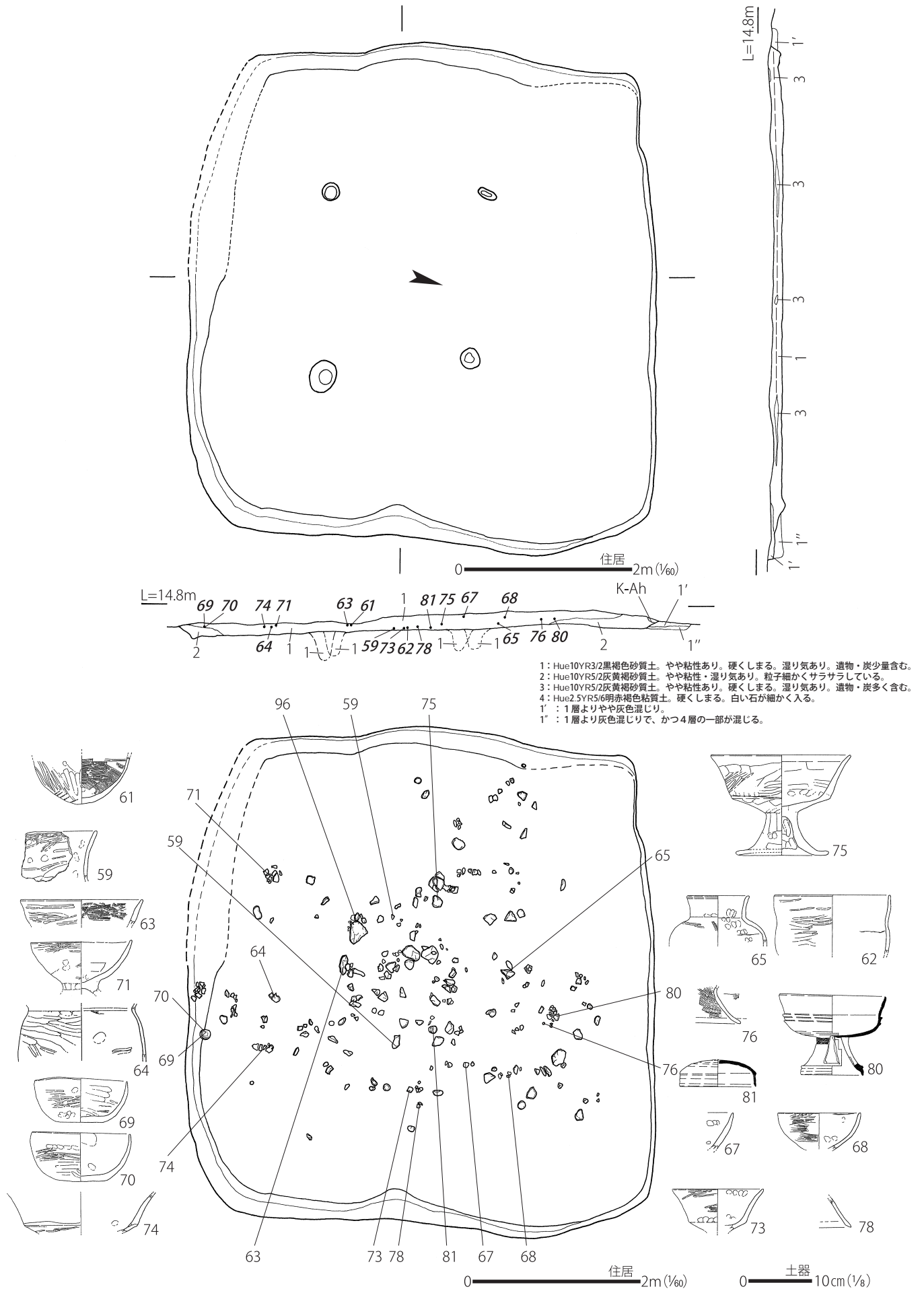
82～86は甕、88～90は高坏脚部である。85・86は肩部の膨らみがなく、口縁径と胴部最大径がほぼ同じである。86は中型球胴甕で最大径は肩部にある。外面には横方向のミガキが、体部にはナナメ縦方向のミガキが見られ、接合部分は指で押さえている。87はほぼ完形で出土した小型壺で、内面のみ全体に赤色顔料が付着している。頸部が締まって口縁部は外へ広がり、丸底に向かって体部はやや扁平球で、胴部中央が膨れている。90は脚裾に向かってハの字状に広がる。（古田）

187・188は敲石・砥石である。砥石は広い面ではなく幅狭な側面を砥面としている。

この他、鉄小片（201）がある。（藤木）

【5号竪穴住居跡（SA5）】（第30・31図）

SA5はB区の東側に位置し、B区の中でもII層の堆積が良好な地点で検出された。出土遺物から古墳時代中期後半と考えられる。



第29図 中野内遺跡古墳時代遺構実測図(2) SA3ならびに出土状況

SA5の主軸は約20°西に振れており、南北3.7m×東西4.2mのやや歪な平面隅丸方形である。北側に一部、竪穴中央部の1/2の深さを持つ羽のような張り出し部分がある。Ⅱ層中より小片ながら土師器片が多く包含され、遺構の存在を窺うことができた。

床面はⅣ層上面となり、全体的に硬くしまっていた。貼床・壁帯溝・柱穴等は確認されず、竪穴周辺に見られたピット埋土も竪穴のそれとは大きく異なっていた。埋土は約30cmあり、埋土1層は土師器小片を含み、特に硬くしっとりとしていた。埋土2層は微量の小礫を含んでいた。壁際には三角堆積が見られた。

遺物は、他住居より広範囲に分布する。東壁付近からは石器がまとまって出土した。土器は南よりに分布し、大形甕(91・92)破片が張り出し付近で出土した。接合関係からは、SA5～7が併存した可能性がある。

【SA5出土遺物】(第34・38図)

遺物の破片が大きく、床直上から積み重なるように出土し、SA5出土土器とSA6・SA7出土土器とに接合関係が確認された。接合状況を見ると、100は口縁～肩部がSA5、体部から下がSA6にある。91～93はSA5・6の破片が混在して接合する。接合分の実測図はSA5で掲載した。

91～93は口径と胴部最大径が同じでくびれない大型中胴甕である。底部は丸底と推定される。時期は、古墳時代中期前葉～中葉末である。94は苺形のプロポーションを持ち、口径が胴部最大径より若干大きく、最大径部分がやや直線的になる。100は中形長胴甕で、口縁端部が大きく外反する。105～113は坏・坑類である。114・115は坑の脚と推定される。(古田)

190・191・193は青みのある砂岩製敲石・台石である。191の下端は磨面と言えるほど滑らかであり、軟質のものを対象としたスリコギのような使用方法が推測される。192は断面五角形に顕著に研ぎ込まれた砥石で、一部は旧砥面が赤化した後に再び砥面が残されている。切り傷状の研ぎ痕周辺は鉄錆がよく付着する。これらの特徴は、鉄製品用砥石を思わせるに十分である。189は、剥離の目的や対応する製品等は不詳ながら、剥片石器向きの鉄石英ではある。縄文時代にさかのぼる可能性を残す。未図化には、石英質の強い歪な垂円礫と目の粗い楕円礫の2点がある。(藤木)

【6号竪穴住居跡(SA6)】(第30・32図)

SA6はC区の中央に位置し、SA2・3と同じく偽K-Ahに覆われており、東側の一部にはキャタピラ痕が残されていた。出土遺物から古墳時代中期前葉～中葉末と考えられる。

SA6の主軸は約20°西に振れており、東西約3.6m×南北約3.5mで隅丸方形を呈する。北東隅は攪乱によって欠けている。床面はⅢ層中で貼床はなく、北東隅は他より硬くしまっていた。床面にはピット4基・土坑2基が掘り込まれ、このうち直径15cm・深さ12cmのピット3基は支柱穴と思われる。竪穴中央付近の平面直径30cm・深さ10cmの土坑中からは壺(132)が出土した。土坑は貯蔵穴の可能性もある。埋土は全体にK-Ahが多く混じり、約6cmとあまり残存しない。遺物は竪穴西側ならびに東南側に集中して密に重なって出土した。上を向くように裏返った状態の坏(128)の中に収まるように敲石(194)が出土した点は特記される。坏に石器を収納していた可能性がある。

【SA6出土遺物】(第35・36・38図)

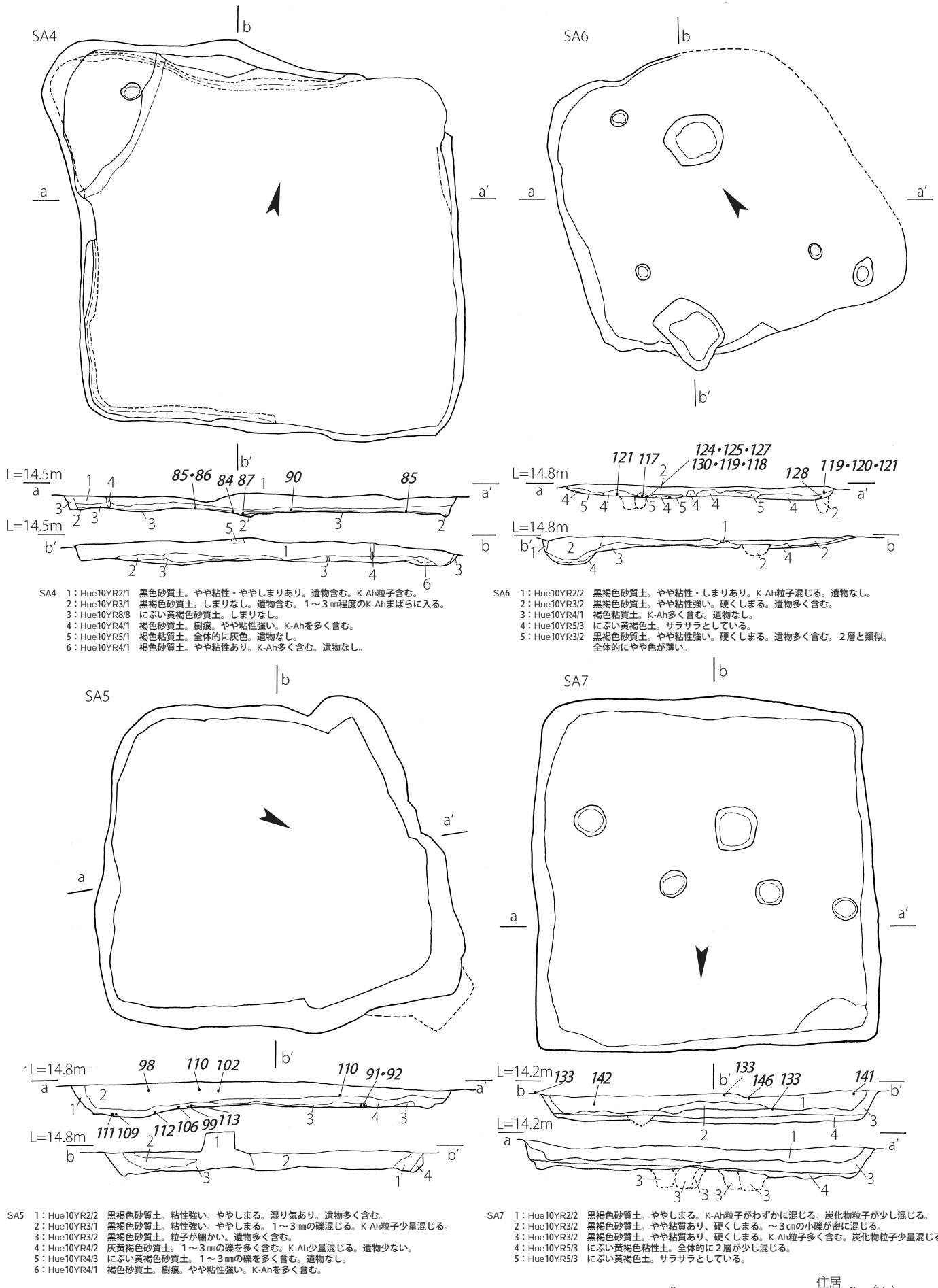
117・118は小型壺である。120は球形の体部であり、口径と胴部最大径が同じである。121は苺形の甕である。122は全体に丸みがあり、底部は平底である。123～126は甕の破片であろう。127～130は坏で、口縁はやや内湾気味で端部は上方を向く。外面は丁寧なミガキである。131は高坏脚部である。132は肩部に張りを持つ寸胴の壺で、外面にはナナメ方向の細かいミガキがある。外面は真っ黒に煤化する。なお、接合状況より120～122はSA5で報告した。(古田)

194は敲石で、上端や両側面のやや波打つような面的な敲打痕は軟質の対象物によるものであろう。器面全体もよく手擦れすることから、長期間使用されたあるいは丁寧に使用された石器のようと思われる。195は台石である。(藤木)

【7号竪穴住居跡(SA7)】(第30・32図)

SA7はD区の西側に位置し、出土遺物から古墳時代中期中葉～後期と考えられる。SA7の主軸は北東-南西に向いており、東西約3.9m×南北約3.9mの平面隅丸方形である。他竪穴住居跡と比べ、方形に近い。

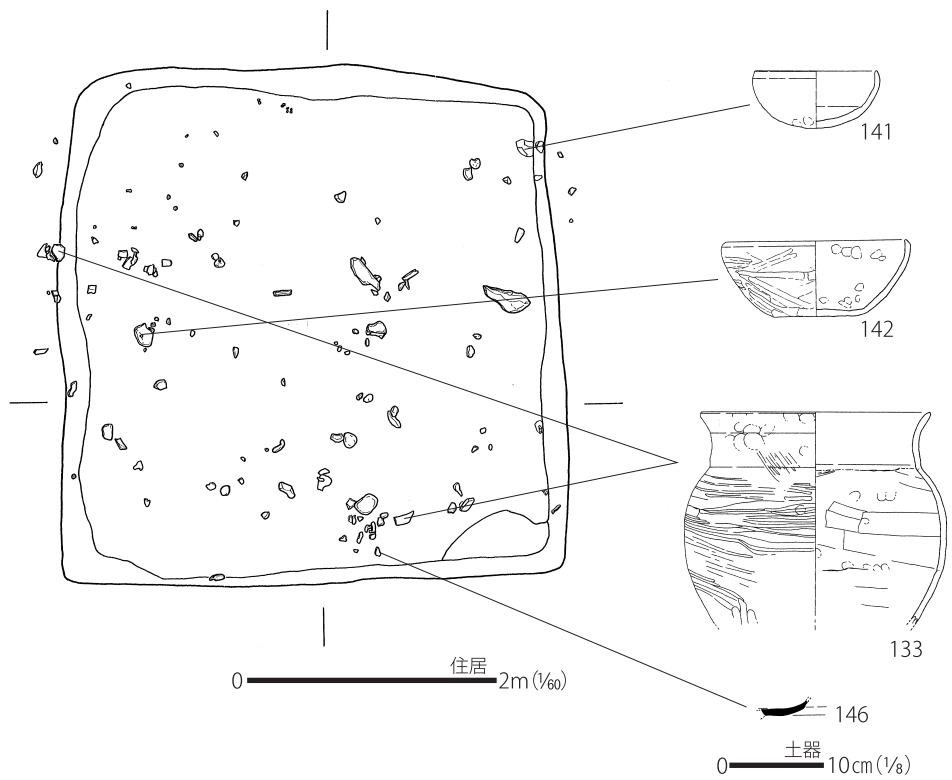
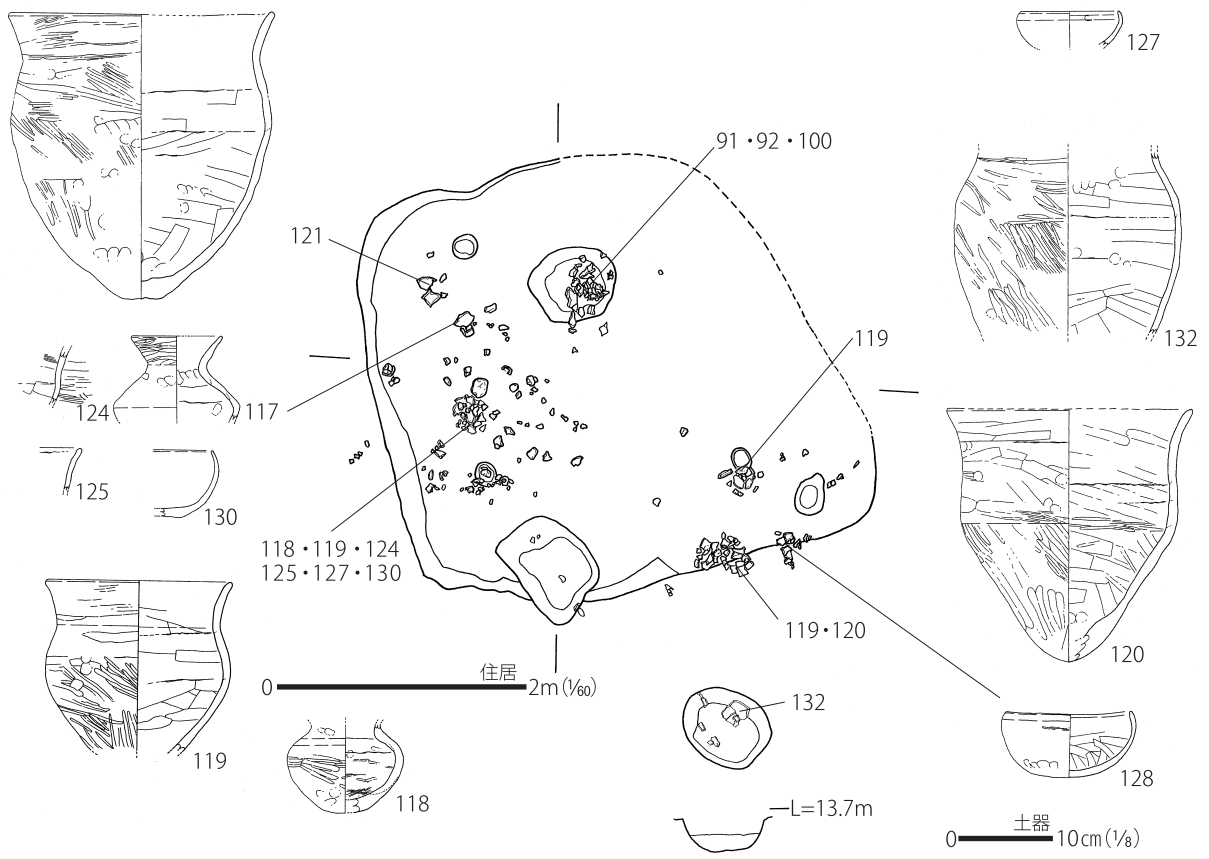
床面はⅢ層中にあり、全体に硬くしまった貼床が見



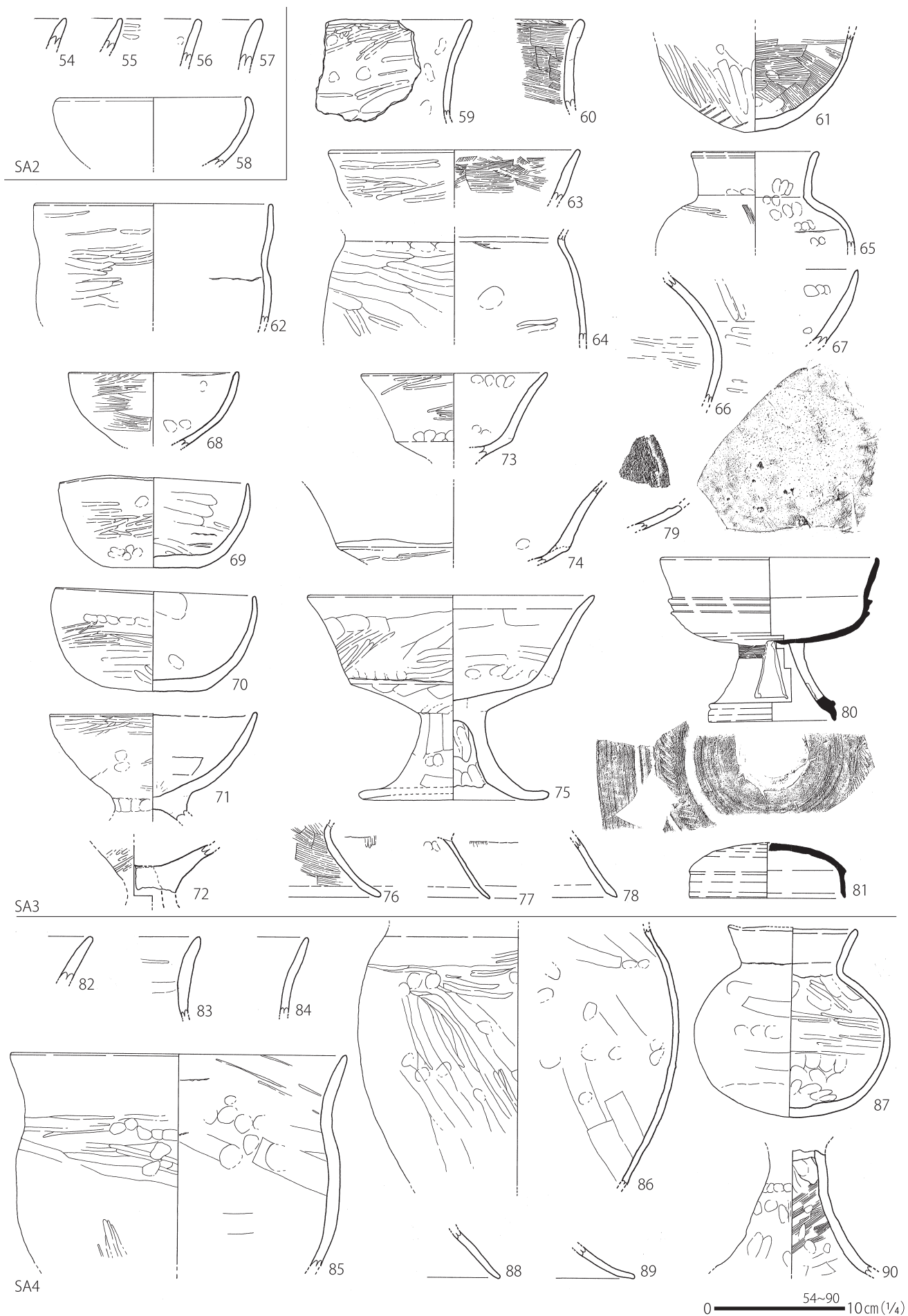
第30図 中野内遺跡古墳時代遺構実測図(2) SA4~7



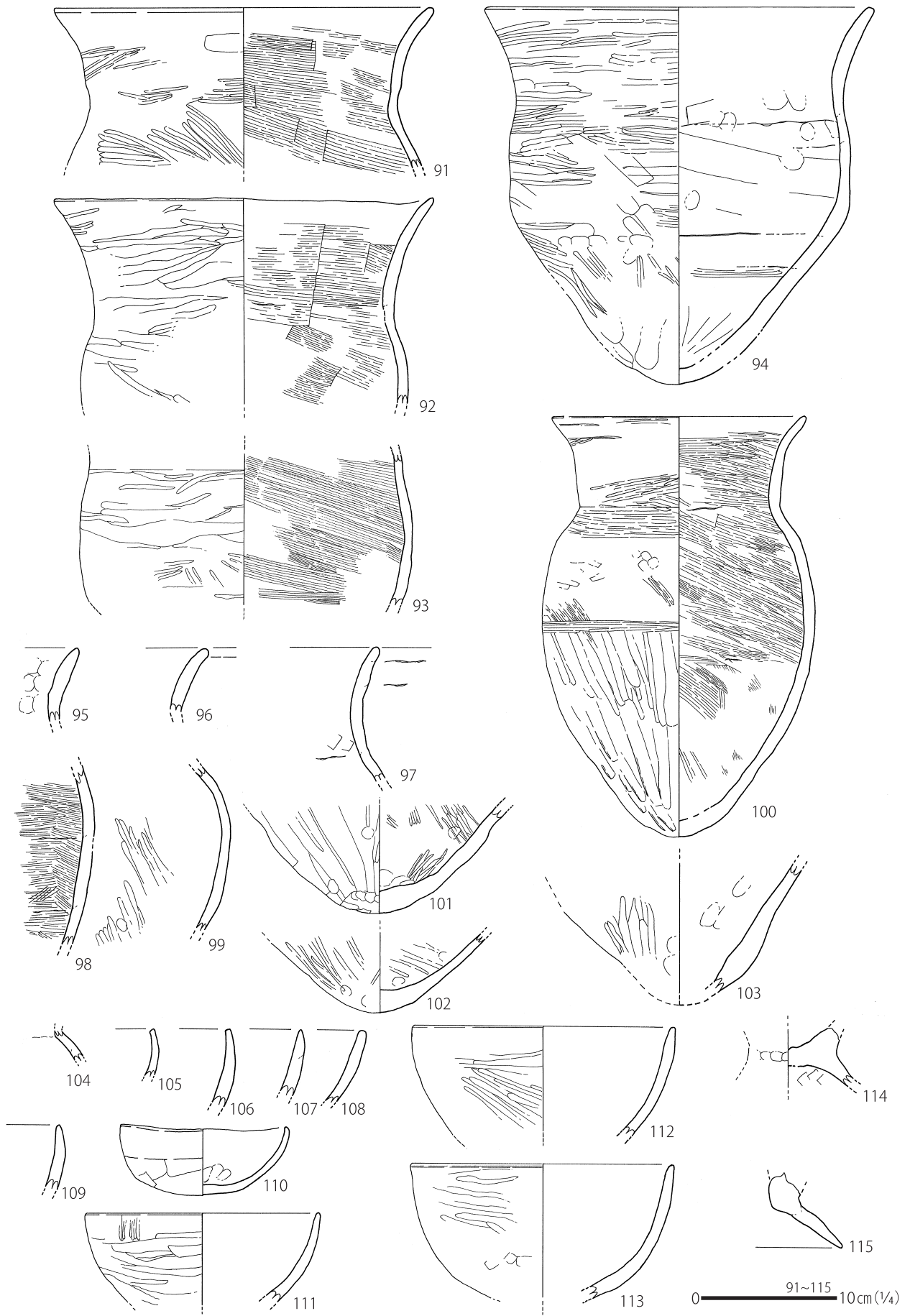
第31図 中野内遺跡古墳時代遺構実測図(2) SA4・5出土状況



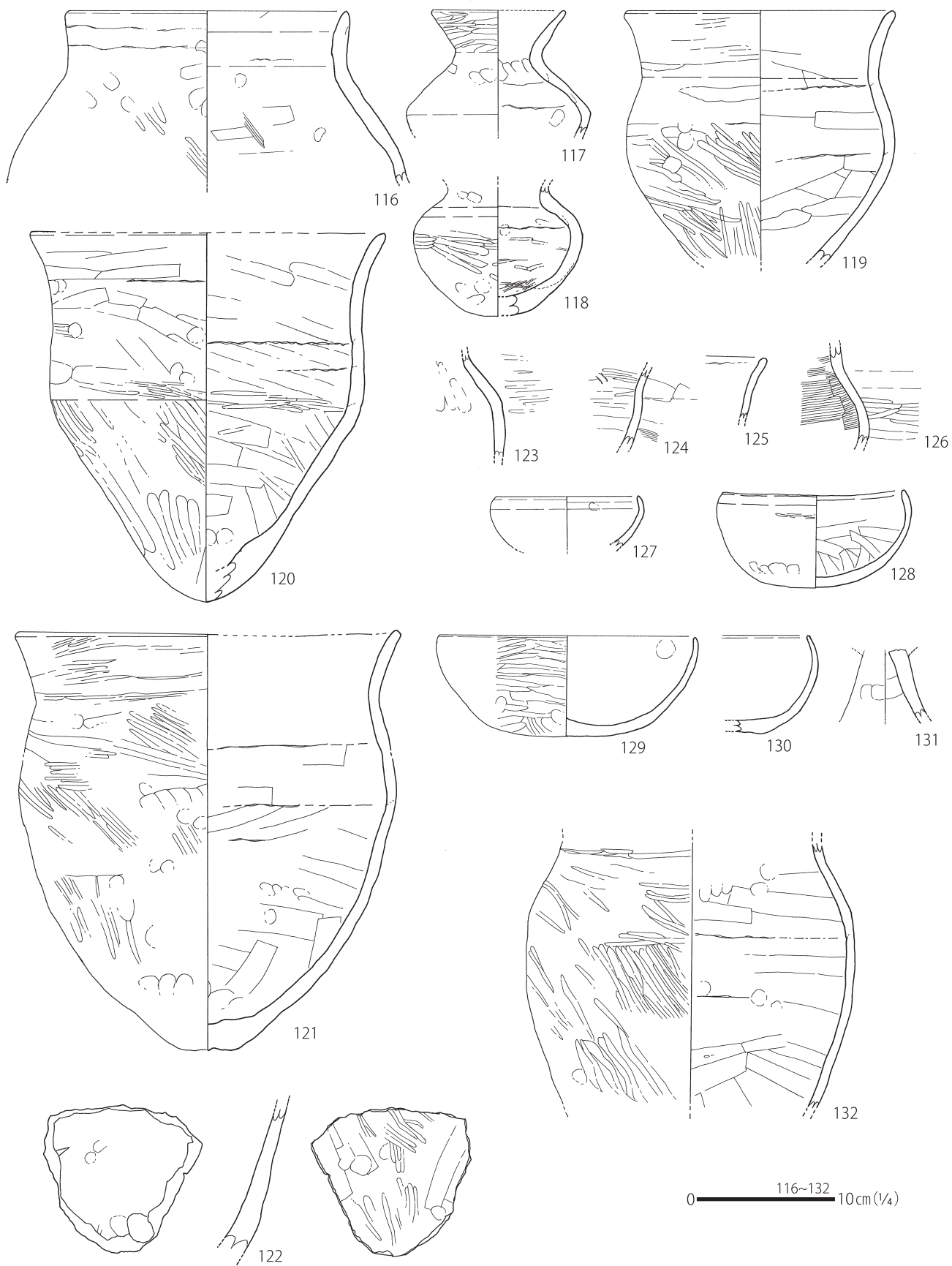
第32図 中野内遺跡古墳時代遺構実測図(2) SA6・7出土状況



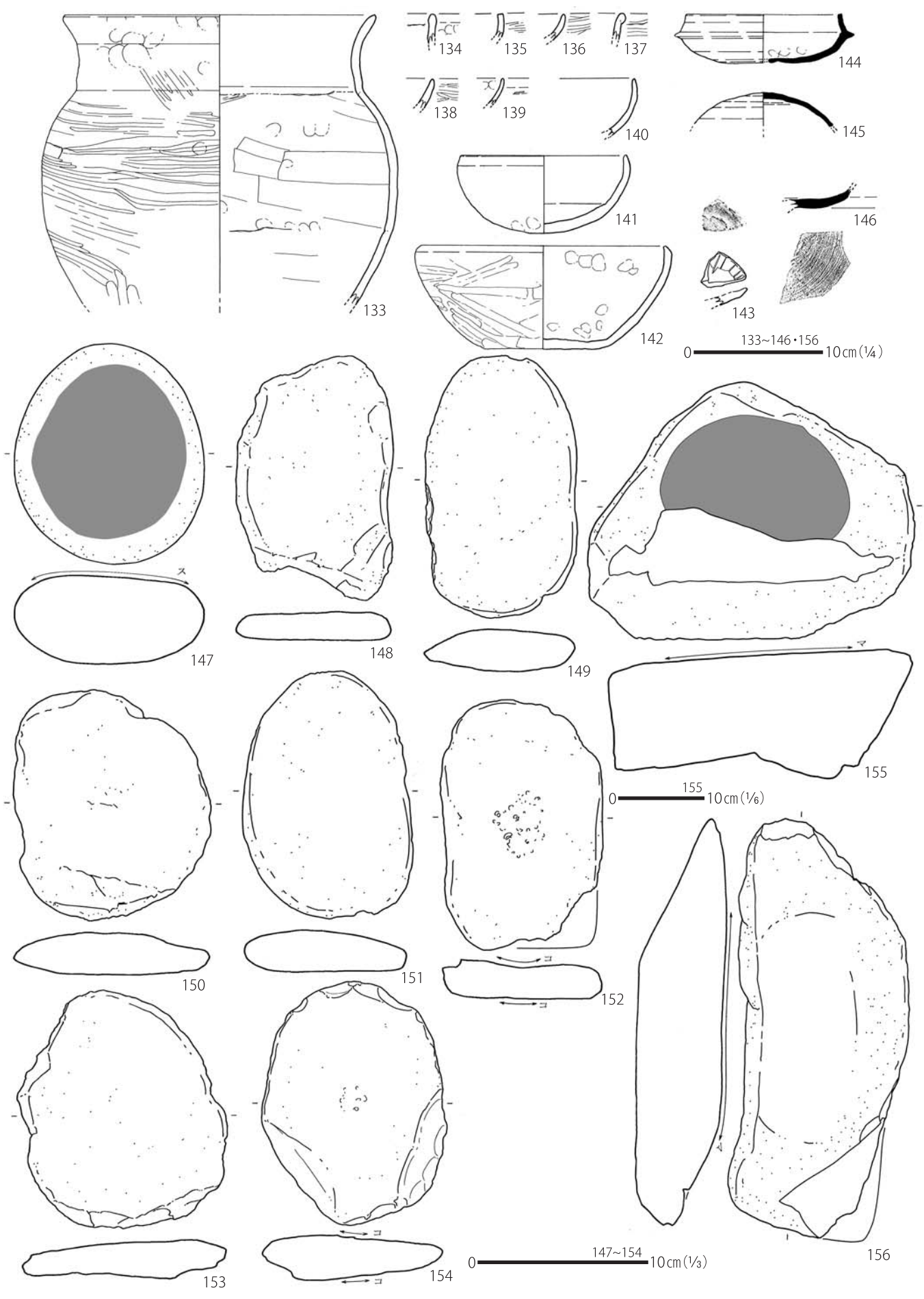
第33図 中野内遺跡古墳時代遺物実測図(3) SA2~4土器



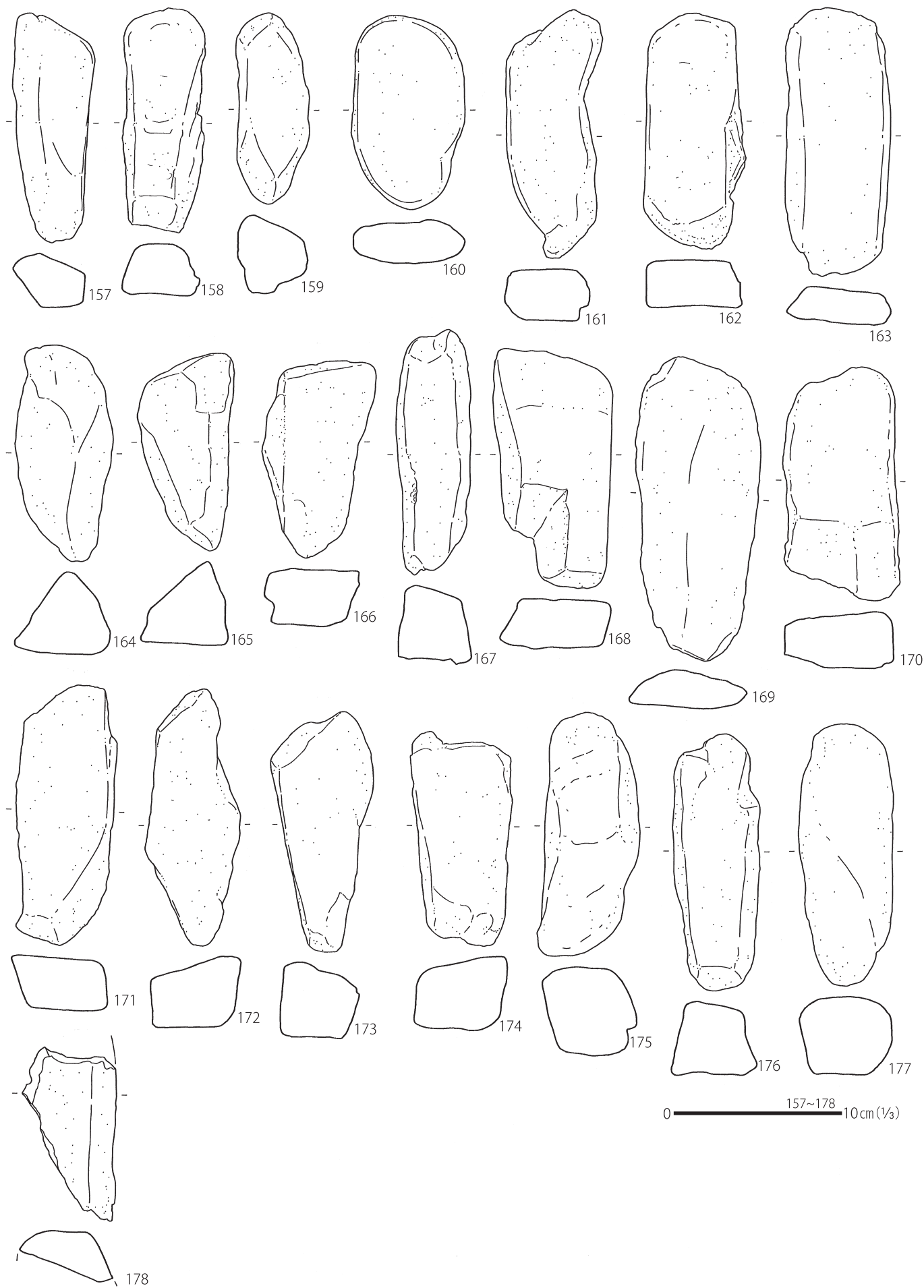
第34図 中野内遺跡古墳時代遺物実測図(4) SA5土器



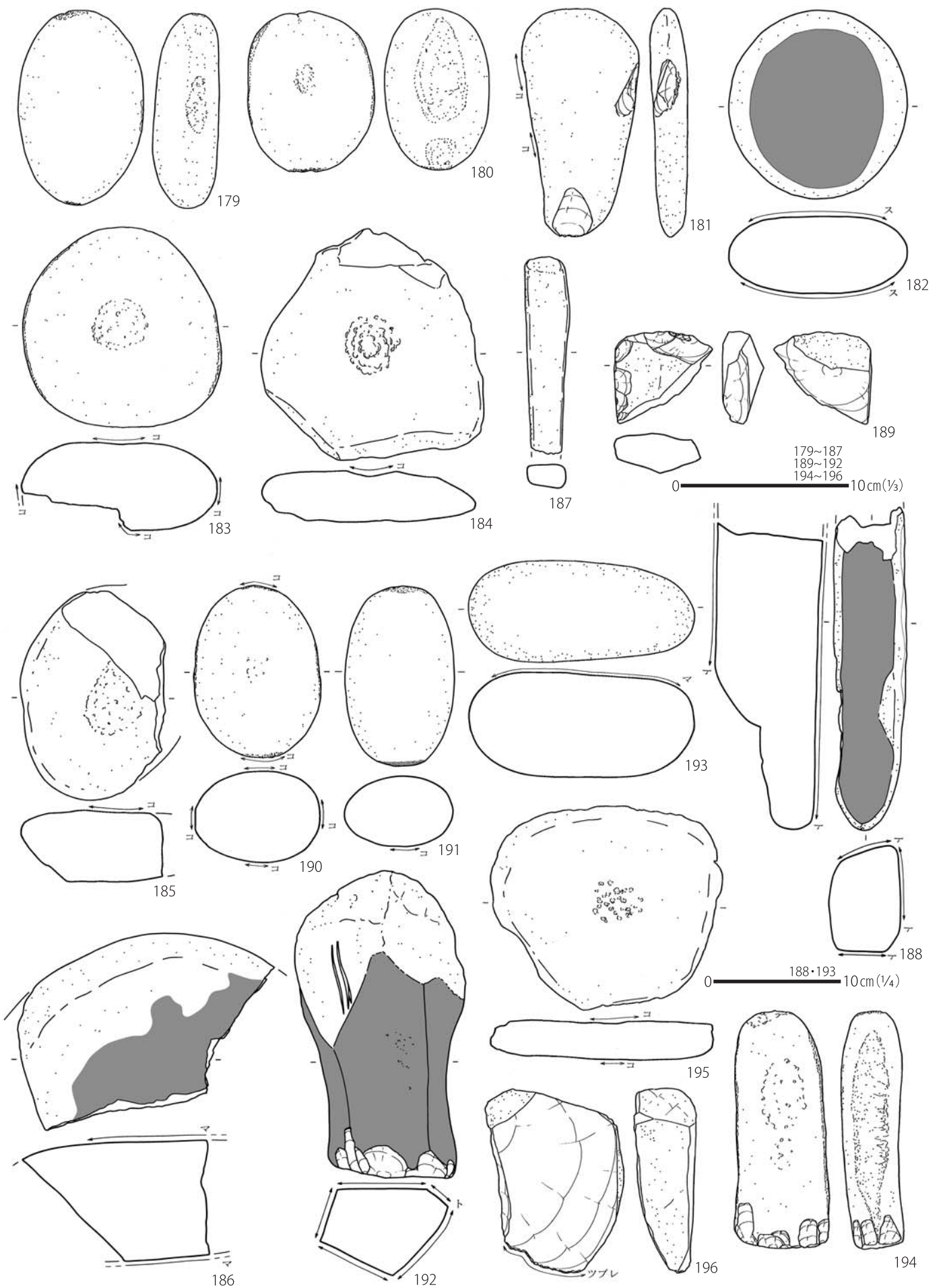
第35図 中野内遺跡古墳時代遺物実測図(5) SA6土器



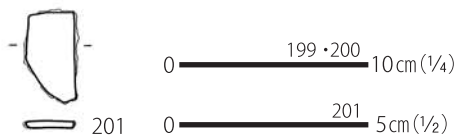
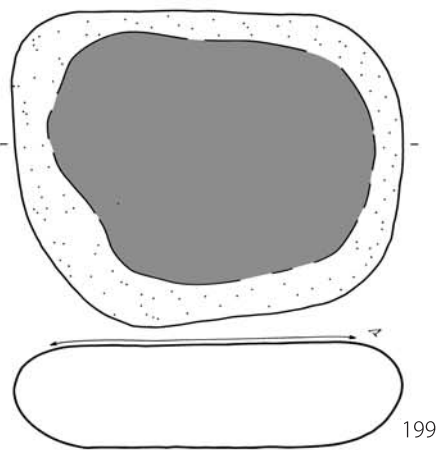
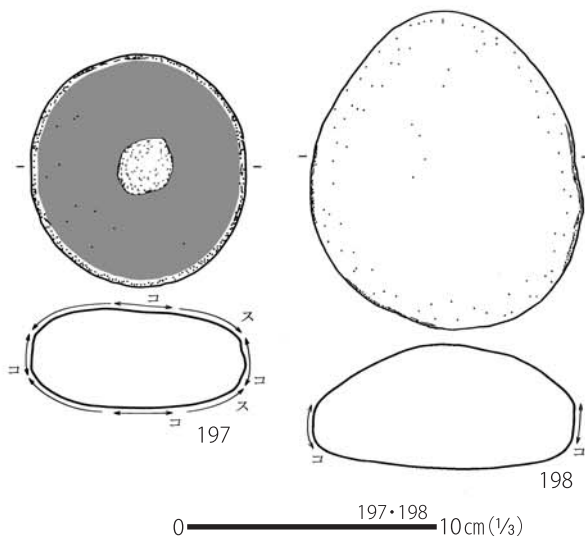
第36图 中野内遺跡古墳時代遺物実測図(6) SA6・7土器/SA2石器



第37図 中野内遺跡古墳時代遺物実測図(7) SA2石器



第38図 中野内遺跡古墳時代遺物実測図(8) SA3~7石器



られた。竪穴北東隅には硬くしまる高まりがある。竪穴床面には横一列に並ぶような配置でピットが掘り込まれ、支柱穴の可能性もある。竪穴周囲のピットは竪穴内のそれとは異なる埋土であり、位置も若干離れている。竪穴埋土は約30cmあり、全体にしっとりと硬くしまっていた。埋土のうち、竪穴南西から中央にかけては炭化材小片が目についた。竪穴中央付近の埋土2層中には約0.3~0.5cmの楕円礫が密に混じっていた。遺物は散漫に出土しており、東壁中央付近の検出面に甕(133)が、西壁の中央付近には台石(200)があった他、須恵器3点も見られた。(古田)

【SA7出土遺物】(第36・38・39図)

133は大型球胴形で、体部は丸く最大径がやや肩よりにある。直線的に上がる口縁部の口縁中央より上方は大きく外反し、明確な稜線を持つ。134~142は一部器種不明ながら坏あるいは鉢と見られ、多種多様な口縁部がある。143は高坏で、坏部接合部に刻みがある。144~146は須恵器で、146にはヘラによる刻みがある。なお、接合状況より103はSA5で報告した。(古田)

197~199は青みのある砂岩製敲石・台石である。197の右面の敲打部分や器面の凹部に鉄錆付着が顕著である。砥石は未図化分も合わせていずれも目の粗い砂岩製である。200は砥石で、砥面に伴う弱い敲打痕は意図的に凹凸になるよう準備した可能性がある。196は礫片の一端に刃部を設けた礫器で、破碎した台石等をリサイクルした可能性もある。未図化には砥石2点・台石1点・青みのある砂岩円礫1点・縄文時代のものであろう乳白色系チャート製剥片2点がある。(藤木)

第6節. 流路ならびに土石流堆積物

6-1. 流路ならびに土石流堆積物の構造(第24・40図)

流路6条以上(SE1~3・SEA~C)ならびに土石流堆積物1箇所が検出された。SE1には特に遺物の集中する地点2箇所があり、それぞれSE1西・SE1東と呼ぶこととする。流路6条は扇状地堆積物を切り込んで、西から東に向かっておそらくは蛇行しつつ流れており、現在の古江川へと変遷してゆくものである。

流路等の調査経過を辿ると、まず、J区北側でII~III層(K-Ah)が途切れて礫が露出し、さらにIV~V層中まで削平の及んでいたK区北側も全体に湿り気が

第39図 中野内遺跡古墳時代遺物実測図(9) SA7石器/SA4鉄器

抜けず黒ずんでおり、雨天が続くと湿気によるためかコケ類が大繁殖することもあった。これらの状況から、溝あるいは低地が埋没していると想定され、トレンチを開けることとした。

当初は、浅い溝あるいは低地を想定したため、人力で開削しはじめた。しかし、場所によっては深さ1mを超えたことや、断面観察により旧河川とその氾濫原ならびに土石流堆積物の広がりが見えてきた。そこで土層観察に適した箇所ならびに遺物をよく含む箇所を中心に大規模なトレンチを再設定し、重機によるトレンチ掘削に切り替えた。調査区壁との高低差等による安全管理上の問題を踏まえ、トレンチは段掘りとした。

トレンチ1～5の土層について、特にトレンチ3～5は変動しつつも大枠では対応した土層堆積となるため、同一あるいは同一と見られる土層については統一した番号を付けた。土層状況から、河川水流等による砂礫中心のラミナ堆積等を見せる14層以前と、基本的に離水し土壌化する13層以降の時期とに分けられる。

なお、流路1より古い流路（扇状地性堆積物）について、トレンチ1でインブリケーション※1のある砂礫層が該当する。円礫・楕円礫といった淘汰の進んだ大きさの揃った礫が多い。遺物は全く含まれていない。

【1号流路（SE1）ならびに土石流堆積物】

流路1ならびに土石流は西壁からトレンチ1、トレンチ5付近から東壁までにある。

調査では、まず、西壁からトレンチ1までの検出面で大量の礫が隙間なく積み重なって検出され、その南側には黒色土が広がることが確認された。黒色土中に遺物を多く含むことから、検出当初は、大量の礫に切られた竪穴住居跡等の可能性を想定して調査を進めたが、断ち割りの結果、北側へ落ち込んでいった。これにより、黒色土はほぼ埋没した流路1の肩部分であり、大量の礫は黒色土を切り込みつつ、流路1とほぼ重複して流入した土石流と推定した。多く出土した遺物については、遺物集中SE1西と呼ぶこととした。

トレンチ1南側は流路1とそれに重なる土石流の断面である。土石流堆積物は検出面から30cm下までのみ、大小様々な礫が多方向に向いて規則性なく密に重なっていた。この規則性ない礫の平面範囲は広く、西側は調査区外に延びている一方、東端はトレンチ1付近と

なっている。堆積状況等からは1層により削平された土石流の、下部がわずかに残ったものと見られる。流路1は土石流の南側にわずかにその断面を見ることが出来る。流路1南壁はトレンチ2～5の流路2・3に比べ緩い傾斜である。

土石流のうち礫を多く運んだ本体は西壁からトレンチ1付近で収束するが、その一連の流れは礫・遺物を含みつつより下流まで及んだと見られ、トレンチ5付近より東壁までにあたる遺物集中SE1東が相当する。トレンチ2～5には流路1ならびに土石流が見られず、流路2・3によって切られたと見られるが、その境はトレンチ断面等では明確にできなかった。

流路1ならびに土石流の時期については、まずSE1西の断面a～a'・b～b'の5層黒色土に含まれる遺物が弥生時代中期～古墳時代中期前半までに収まっている。また、SE1東の断面c～c'でサンプル的に採集した土器について、c～c'①層までに古墳時代土師器が、同②層までに弥生時代後期土師器が、同③層に多くの弥生時代前期土師器がそれぞれ包含されていた。単純に見れば、礫とともに古手の遺物がより下層に、新時代の遺物がより上層に包含されることとなる。SE1東の土師器の破砕面に磨耗はあまり進んでおらず、流水等によって大きく移動・堆積したものと考えるに、おそらくは土石流等によって包含層・遺構埋土等がブロック状態で壊され、その後再堆積する過程で若干水流による磨耗を受けたものなのであろう。以上の点からは、SE1は弥生時代前期以前からあった流路であり、複数回にわたって土石流等に見舞われていた可能性がある。発掘調査範囲の中で確認できる最後の大規模土石流は古墳時代中期前半以降の可能性はある。

【2号流路（SE2）】

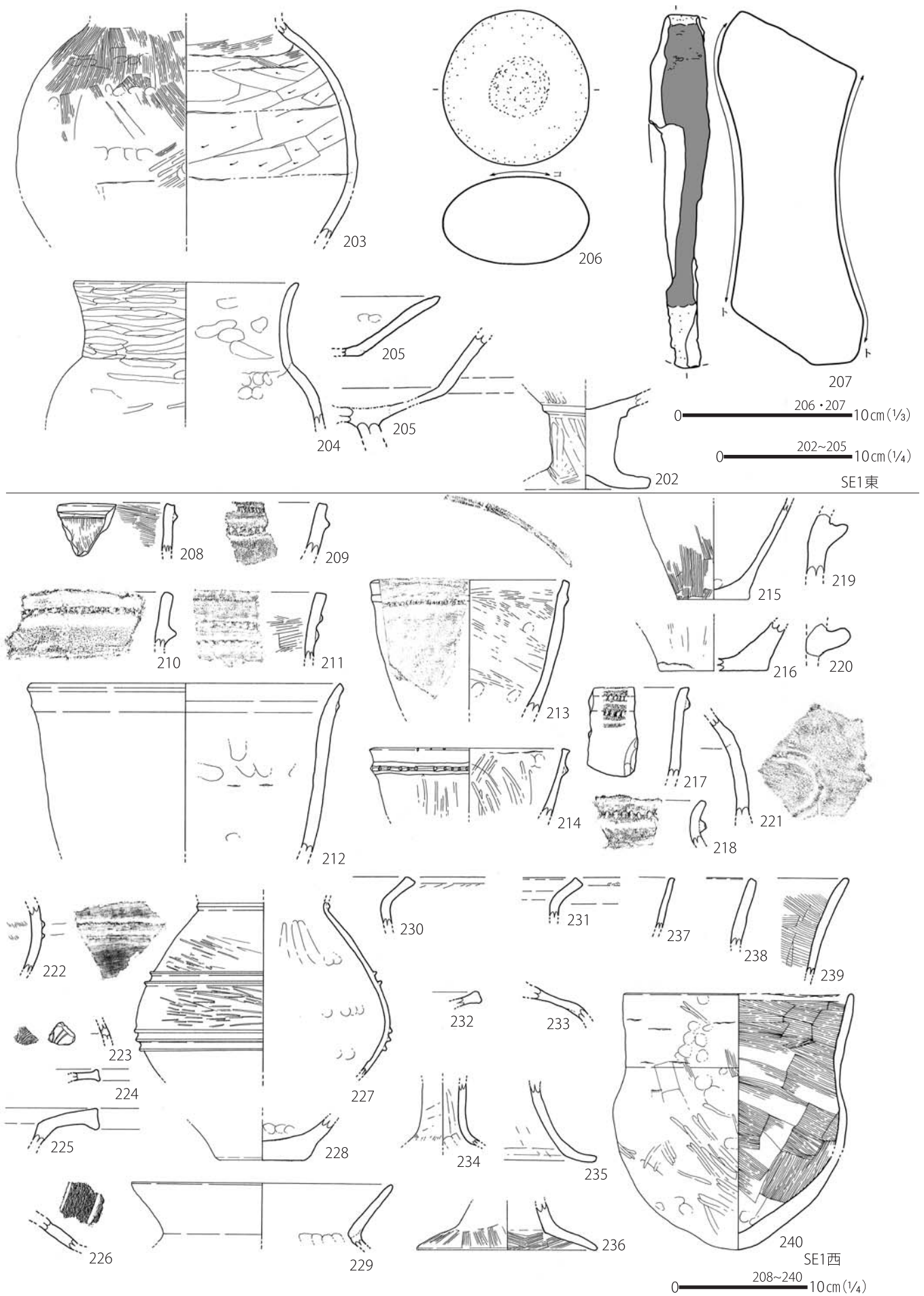
流路2は6・8・9層が離水時に堆積した黒色系土である。流路3によって再び開削される。

【3号流路（SE3）】

流路3は流路2とほぼ同じ流向である。流路2埋土を再び開削するように流路が形成され、トレンチ4南壁際には非常に大きな礫も見られた。流路3の南壁の急な立ち上がりは、河川内弧にもあたることから河川水流によって形成された可能性が高い。7層最下部には河川に伴う微粒砂が明瞭に堆積する。

※1 インブリケーション：

伏臥構造とも呼ばれ、河原の石が川の流によって一定方向を向くようになった状態を指す。完全な球形ではない石は、水の流れに対して、最も安定する形で、最も水流に対して踏ん張れる形で安定して、静止する。その結果、多くの石がまるで上流を向いて整列しているように見える。



第41図 中野内遺跡弥生～古墳時代遺物実測図 (10) 流路等土器・石器

離水時の年代を推すために比較的大きな広葉樹系炭化材について採取し、放射性炭素年代測定を実施したところ、暦年較正（※測定誤差 σ ）がトレンチ5の7層（分析番号178）で10C末～11C初頭、トレンチ4の5a層（分析番号179）で11C初頭～12C前半、トレンチ5の6層（分析番号166）で14C、トレンチ5の4層（分析番号180）で14～15C初頭となった（詳細は第X章参照）。これを根拠とすれば、流路3は10C末以降に離水と小規模な流水を断続的に介して埋没する（1～4・5・7層）。4層が堆積する15C初頭頃にはほぼ平坦地化しており、中野内川の流れば調査区よりかなり北に離れてしまっていたのであろう。

【その他の流路】

流路A～Cは、流路1～3との関係が薄い流路である。現在の中野内川の位置まで連続的に複数の流路が形成されたと見られ、そのうちのいくつかを断面で抽出できたにすぎない。流路A（a・b層）は流路2の肩を切ることから流路2より新しく、流路3との前後関係が明確でない。流路A北側の立ち上がり等は弱いため氾濫原等との境界は不明瞭である。流路B（13層）はトレンチ2北側で見られ、砂礫主体の14・18層の上面を開削している。離水後は腐食土系の13層等が堆積する。流路C（15層等）はトレンチ3～5で見られるが、流路6・流路Aよりも古い。いずれも南側の緩やかな立ち上がりのみ確認でき、北側の様子が不明である。

6-2. SE1出土遺物（SE1西・SE1東、第41図）

SE1西には203～207がある。脚部と坏部の接合部には一条の三角突帯が貼り付けられ、脚柱部は粘土柱により作られ、脚裾部で外方へ開いている。外面は丁寧な細かいミガキである。203は弥生時代後期～終末の大形球形の甕で、内面はケズリである。205は、同一個体であろう古墳時代中期後半の高坏坏部である。なお、202はSE1西よりも上部から出土した甕脚部であり、SE1の上限を示唆する。（古田）

206は敲石、207は仕上げ砥石で、207は正面・裏面に強く湾曲した砥面がある。（藤木）

SE1東には208～240がある。208～218は下城系の甕で、口縁部が緩く凹みを持つものやや外反するものがある。213は口縁部上端も丁寧に板ナデを施す。214

は胎土が密である。口縁内面はやや巻き上げるような形であり、内外面ともにミガキが施される。217は体部にタテ方向に突帯を貼り付ける。219・220は大きく外反し、突帯を丁寧に貼り付ける。221は壺で、胴部には横方向に弧を描くように突帯を貼り付けている。胎土中には角閃石が多く含まれ、他例と比べて全く色調が異なる。222は壺胴部で、最大径の位置に断面三角形の貼付突帯を二条廻らす。内外面ともに赤色顔料を塗布する。223は下城式の壺胴部、224は中期後半の壺である。225は須玖式と思われる。227・228は頸部に一条、肩部に二条、最大径部分に三条の突帯を貼り付け、やや下膨れの胴部を持つ壺である。外面は細かいミガキであり、赤色顔料が残着する。229～240は弥生時代後期後半の甕で、0.5cm前後の礫が多く混入する脆い胎土である。230・231の口縁部はやや屈曲し、口縁部上端が突出気味に肥厚する。230は口縁部外面にヘラによる文様があり、弥生時代中期後半のものである。233～236は古墳時代前期の高坏であり、屈曲し外反するものやハの字状に開くものがある。237～240の甕は口径と最大径部分が同径になっており、古墳時代中期～後期のものである。（古田）

この他、未図化ながら、粗質の赤色チャート剥片1点が出土している。（藤木）

6-3. 流路ならびに土石流のまとめ

流路ならびに土石流の全貌については、今回の調査のみでは明らかでない。弥生時代前期以前よりあった流路が部分的に埋没・開削を繰り返す中で、大規模な土石流に見舞われることもあったのであろう。土石流中に含まれた遺物は、今回の調査区より山手にも弥生～古墳時代集落が展開した可能性も示している。

扇状地上という立地条件や現在の河川の状況等を踏まえると、通常は流路底下の伏流水であり、台風や梅雨等の長雨豪雨時にのみ一気に増水・氾濫した可能性が高い。これまでの中野内遺跡の調査範囲において弥生時代後期の遺構・遺物がほとんどない点も、土石流災害等との関係を考慮していいかもしれない。

そして、流路全体は現在の中野内川に向かって北側へ移動してしまう。かつて土石流を起こした流路もまた中世には埋没してしまったのであろう。（古田）

第7節. その他の遺構と遺物

7-1. 掘立柱建物跡 (第44・45図)

表土I層除去後、Ⅱ～Ⅲ層面で多数のピットを検出した。ピットの大半は平面円形で、約30cm前後の直径である。ピット中の遺物は少なく、時期は判然としないが、包含層等の出土遺物からは古代～中世までが想定される。ピットのうち、埋土土色や高さ・並び・柱痕跡等を根拠に並ぶ可能性のあるものを掘立柱建物跡と認定した。ピットのうち、最終的に樹痕等としたものは欠番になる。

【1号掘立柱建物跡 (SB1)】

B区に位置し主軸はほぼ南北である。桁行2間(約1.2m)・梁行1間(約1m)である。P322が方位軸からやや東に振れるものの、全体的に均整のとれた配置である。P321から弥生時代前期の甕小片が出土したが、混入の可能性もある。

【2号掘立柱建物跡 (SB2)】

C区に位置し主軸は東西に約10°振れる。農業用水道管により一部削平を受ける。桁行間数は不明(約1.9m)・梁行1間(約1.8m)である。出土遺物はない。

【3号掘立柱建物跡 (SB3)】

D区に位置しSA7に近接する。主軸は西に45°振れる。桁行2間以上(約1.7m)・梁行1間(約0.7m)である。出土遺物はない。

【4号掘立柱建物跡 (SB4)】

SB3の南に位置し、主軸は東に約30°振れる。桁行5間(約1.7m)・梁行1間(約1.8m)である。P297は軸からやや外れるものの、全体的には均整が取れている。東側は圃場整備時の深い削平が入る。柱穴は端正で埋土も均一である。出土遺物はない。

【5号掘立柱建物跡 (SB5)】

SB4に隣接し主軸も近い。おそらく桁行3間(約1.3m)・梁行2間(約0.6m)であり、柱穴の1つは攪乱により失われる。

7-2. 土坑 (第46図)

【1号土坑 (SC1)】

K区の中央東側のSA1の南側に位置する。長軸約120cm・短軸40cmの瓢箪状で、東側が大きく削平される。埋土はSA1のそれと近い。SA1の付属施設、あるいは

新たな竪穴住居跡の可能性もある。下城式の甕口縁部小片ならびに弥生土器の体部片が出土した。弥生時代前期の遺構である。

【2号土坑 (SC2)】

J区の調査区南壁際に位置し、さらに東側が削平された結果、平面扇形となっているが、本来は円形土坑であろう。残深は約20cmである。埋土はSA1の黒褐色土に類似し、全体的にしっとりとしり気があり、硬くしまっていた。周囲にピット等は確認されていない。

【3号土坑 (SC3)】

H区に位置しSA3に隣接する。直径40cmの柱痕跡と見られる部分がある。埋土は黒褐色をした浸透質のある砂質土で、微細なK-Ahブロックを含む。257・258の古墳時代中期の甕口縁部と高坏脚部が出土した。

【4号土坑 (SC4)】

F区の中央に位置し、直径約80cm・検出面からの深さ110cmである。遺構規模は、掘削の際に大人一人がすっぽりと収まってしまう大きなものであった。周辺対になるようなものや掘立柱建物等として並ぶ可能性を考慮し、広めに遺構検出を繰り返したものの、やはり独立した1基であった。いわゆる「大柱遺構」の可能性を踏まえた調査を企画した。

埋土2層の南側には壁面半周ほどに段が廻っていた。埋土3層は柱痕跡で、直径約40cm弱の平面楕円形である。土色は、他竪穴住居跡等の埋土と比較してやや暗めである。柱痕跡上部には三角錐状の長径15cm強の白色砂岩礫が載っており、柱痕跡下部には平たい三角形をした長径15cm強の礫が張り付くように出土した。柱痕跡下部の礫は、立柱の沈降防止のために置かれたものであろう。土坑下位にのみ柱痕跡が見られたことから、柱最下部のみを残して柱材が再利用された可能性も考えられる。礫以外に時期のわかる土器等は出土していない。

7-3. 浅い落ち込み (第17図)

圃場発掘時に埋没谷とされたものと一連のものと思われる浅い落ち込みがD区で検出された。埋土は竪穴住居跡のそれと似ているものの、含まれるK-Ahブロックがやや緑色を混ぜたような黄色であり、異質であった。落ち込み下部からは土器小片が出土した。

7.4. その他の出土遺物（第47図）

241～254は、竪穴住居跡に直接に伴わない、あるいは遺構検出時に出土したものである。241～250は口縁部下部に突帯を貼り付けており、口縁端部が直線的なもの・やや内湾するもの・外反するもの等が見られる。254は弥生時代前期末～中期のもので、頸部に突帯を廻らせ、網目状の文様を施している。

255～259はピット・土坑出土土器である。ピット出土土器は少なく、また小片であるため、器種・時期等不明なものが多い。255はピット5から出土した弥生時代前期中葉～中期の甕で、やや外反する口縁部外面の下に一条の刻み目を貼り付け、そこから縦方向に二条の刻み目突帯を垂下させている。刻み目を施した工具痕が残り、刻み目の中に3～4本の平行なラインが見えている。256はピット184から、259はピット247から出土し、口縁部・口縁部下部に突帯がある。

260～271は包含層中より出土した弥生時代～古墳時代前期の土器・土製品である。260・264は下城式の甕である。突帯を貼り付けてから体部全体にハケメを施す。261は胴部の張りがやや著しい壺である。肩部の文様帯は上下両端を各二条の沈線で区画し、無軸羽状文を施す。262は木ノ葉文を胴部に廻らせる壺で、弥生時代前期後葉のものである。263は甕脚部と思われ、底部内面に平らな面を持つ。立ち上がりの残存状況からは、やや平行に開くようである。265～267は坏であり、265・266は口縁端部が三角になってやや上方に立ち上がるもので、古墳時代のものである。267は古墳時代前期後半のもので、全体に丸みを持ち、内傾した口縁下部に最大径を持つ。268～271は高坏で、268は受け部が深く、269は坏部に向けて大きく三角形に開く。270は脚柱が長く、脚裾が屈曲し広がる。高坏のうち、269のみ弥生時代終末期で、他は古墳時代前期前葉である。

272～283は包含層中より出土した古墳時代後期～古代の土器・土製品である。272～276は須恵器坏である。坏蓋・坏身は、口縁端部や蓋の肩部に沈線や段を持つ等、前段階的な属性を残すが、古墳時代を通じて最も法量が大型化する古墳時代後期前半のものである。277は短頸壺である。胎土は密で硬い。内面は幾度も丁寧なケズリに近い調整がある。古墳時代終末期のもの

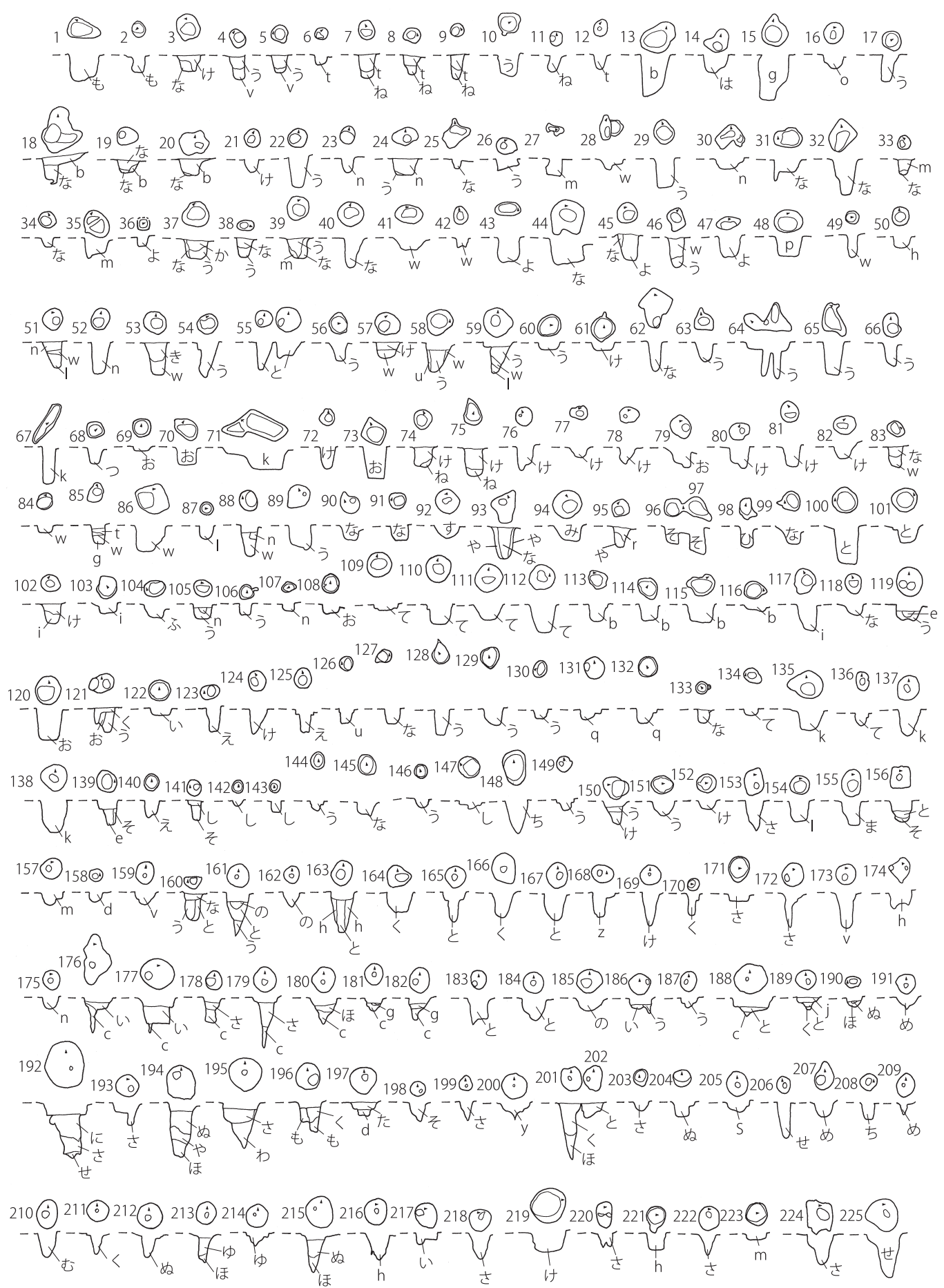
可能性がある。278・279・283は須恵器甕である。280・281は須恵器蓋である。282は土師器皿の蓋で、古代のものと思われる。これらはD区Ⅱ層中からの出土が目立ち、掘立柱建物跡に伴う可能性もある。

284～292は包含層中出土の中世以降の土器等である。284は鎬連弁文の輸入青磁碗で、13C後半～14C代のものである。285・286は小片であるが、中世前半の土師器捏ね鉢片と思われる。287～289は土師器皿の口縁部から底部片である。289は15C後半のものではややピンクがかかった焼き上がりである。290は漳州窯系のもの、291は16C代の菊花皿、292は18C代の天目茶碗である。この他、時期不詳ながら293は円盤状土製品である。全体的に丸みを帯び、土器片再利用品ではなく、1個体の完形品である。片面は手で押さえた跡があり、もう片面は紐原体で擦ったような跡が残っている。縁辺には焼成前と見られる一部抉られたような箇所がある。紐等を巻き付けた擦痕は見られない。土器製品製作過程での玩具類かもしれない。

7.5. 関連資料（第47図）

圃場発掘調査区と今回の発掘調査区が隣接・一部重複するため、須恵器等について両者間での接合や個体数の把握等に努めた。須恵器の接合等は確認されなかったが、作業過程で今回の中野内遺跡の発掘調査を位置づける上で不可欠な資料の存在を知った。

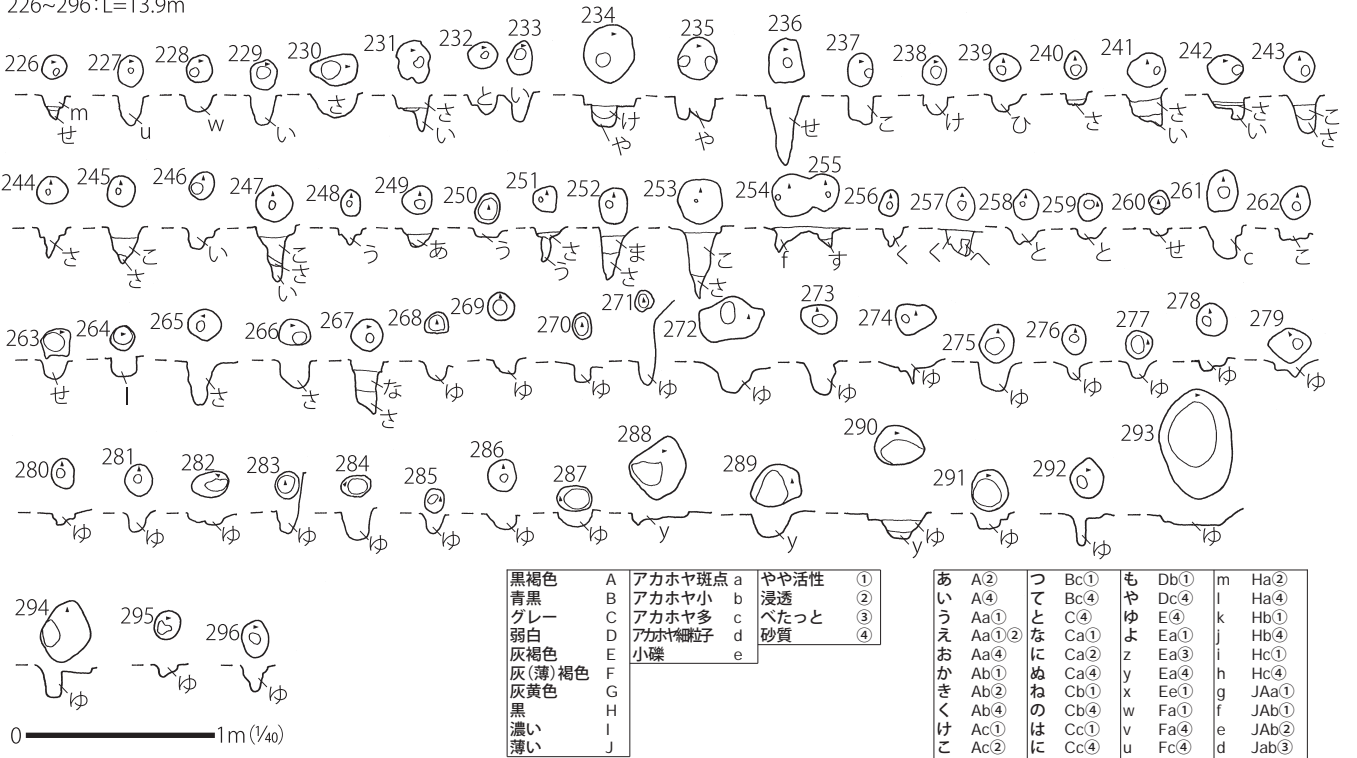
①～③は弥生時代後期後半～末の複合口縁壺の口縁片で、山形文様を櫛描きする。④・⑤は後期中葉～後葉の複合口縁壺であり、波状文の可能性はある。複合口縁部の接合部分がわかる資料である。密な胎土と全体に橙色である点は、森ノ上遺跡のものと同様である。⑥は弥生時代前期、⑦は弥生前期～中期の甕の口縁部であり、残存状況から連続性のある波状口縁と見られる。⑥は胎土中に角閃石が目立ち、色調が縄文晩期土器のような暗黒褐色である。口縁は全体にやや内湾気味であり、粘土を摘み上げて突帯状のものを作り、外側から押して穴を開けるように波状を作りだす。口縁端部には六角形のような工具痕が残り、波状部分の整形後にナデ等はない。外面にミガキが細かく入る。⑦の口縁部の波状文は貼り足しではなく、波状に整形後も丁寧なナデが入る。孤文状に貼り付けられる刻み



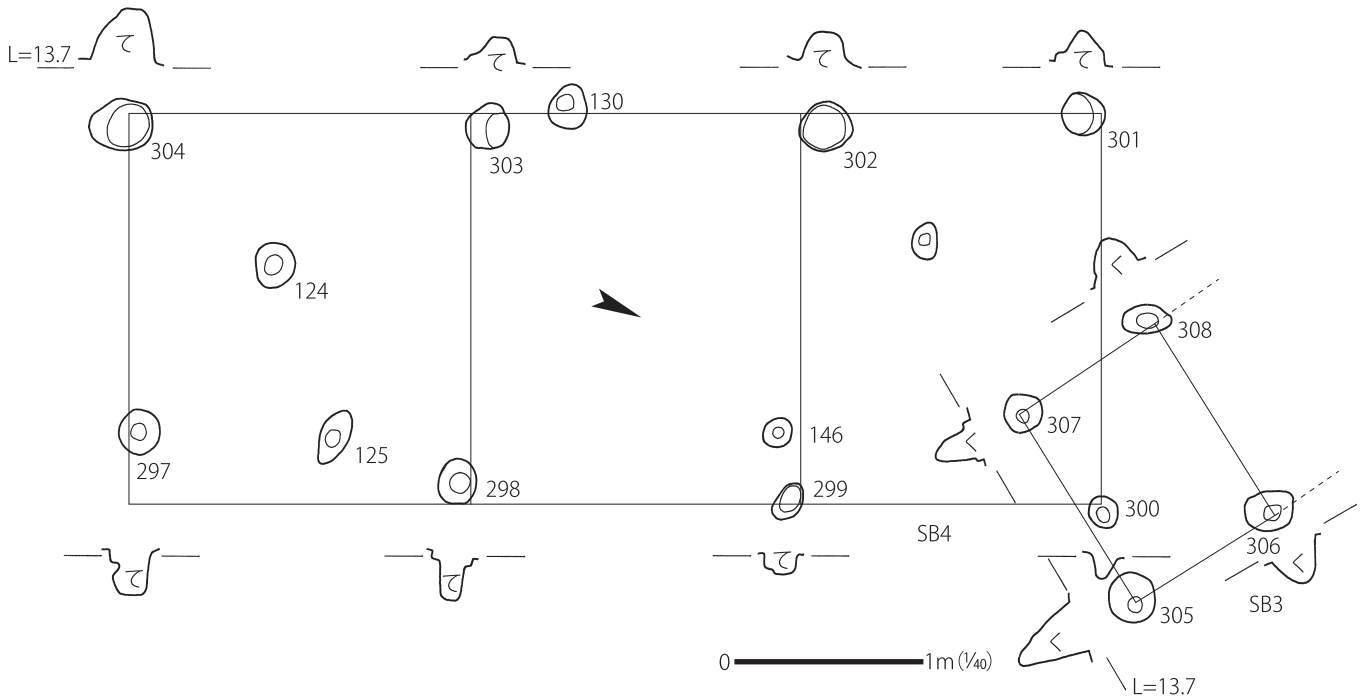
1~152 : L=13.5m, 153~225 : L=13.9m 0 ————— 1m (1/40)

第42図 中野内遺跡遺構実測図(8)ピット(1)

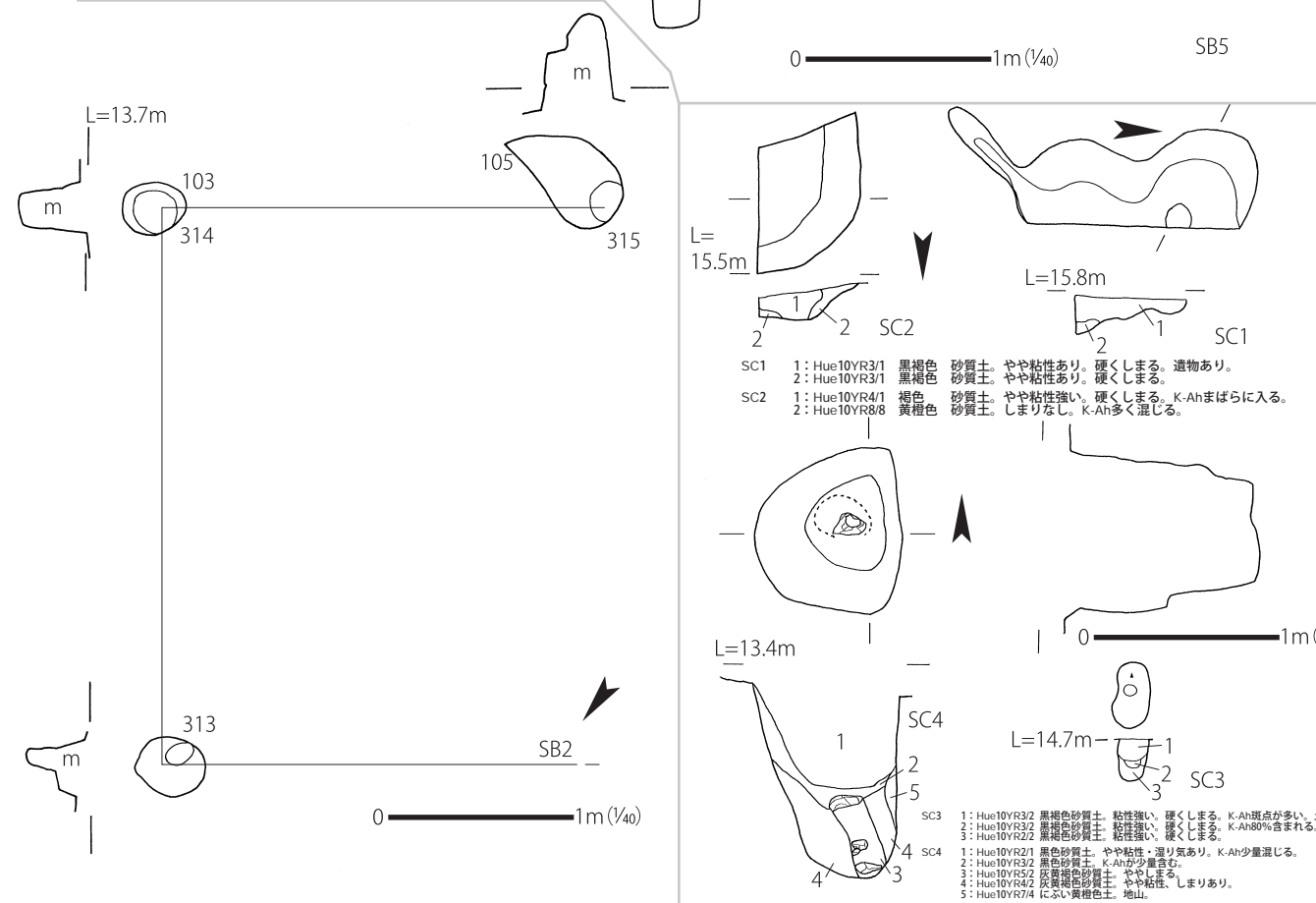
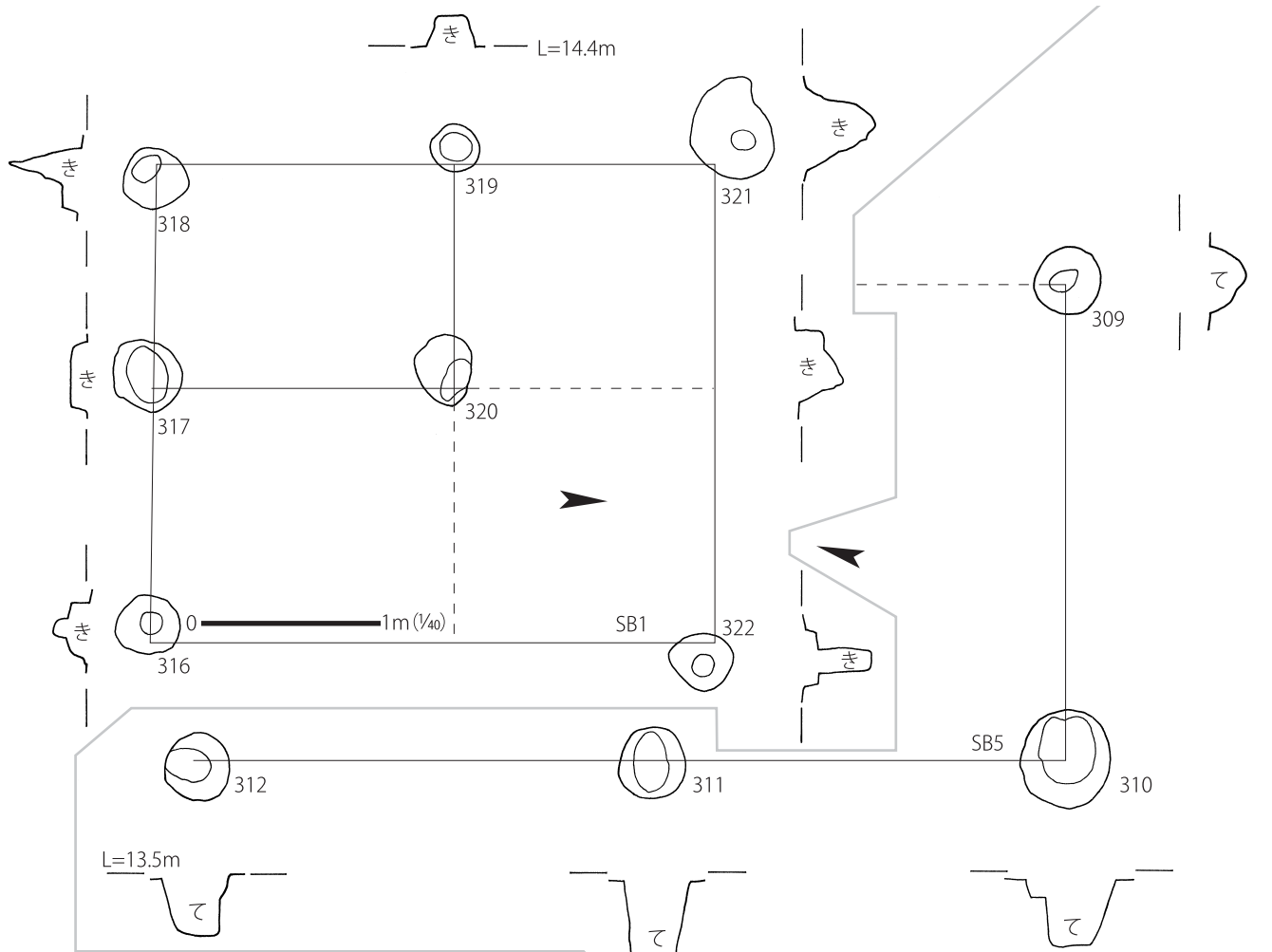
226~296:L=13.9m



第43図 中野内遺跡遺構実測図 (9) ピット (2)

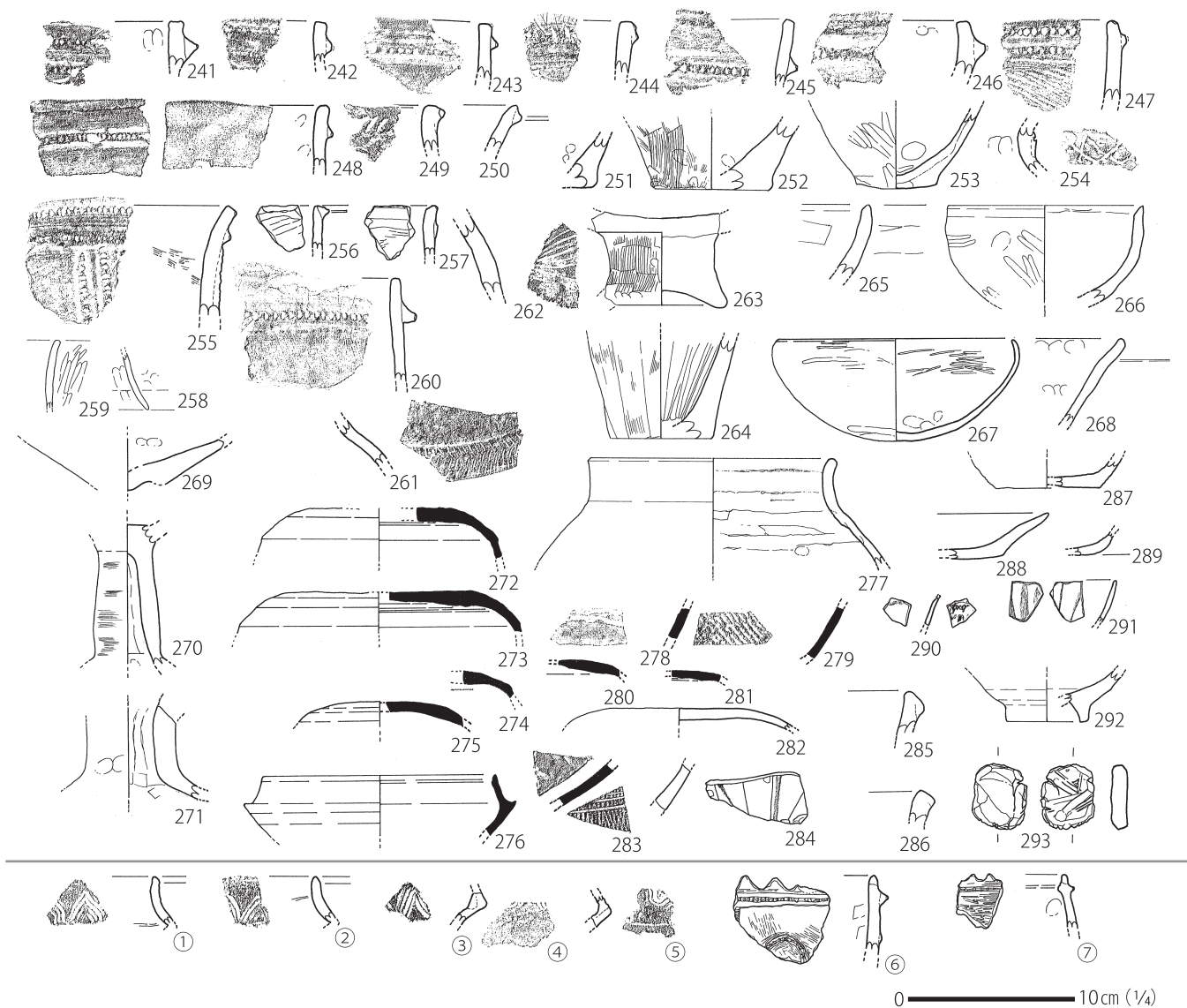


第44図 中野内遺跡遺構実測図 (10) 掘立柱建物跡 (1)



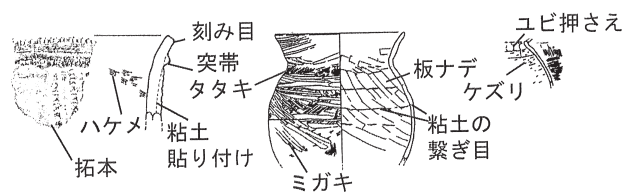
第45図 中野内遺跡遺構実測図 (11) 掘立柱建物跡 (2)

第46図 中野内遺跡遺構実測図 (12) 土坑



第47図 中野内遺跡遺物実測図(11) その他の遺構・包含層等土器

文様・調整の表現方法



須恵器の断面は、黒塗り。

目突帯とタテ方向の突帯が外面にある。貼り付け後に丁寧に周りにハケメ調整し、その上で突帯貼り付け箇所を丁寧に細かくナデ整形する。内面には、板ナデが一部残る。胎土は下城式の甕と類似する。

⑥は縄文時代晩期のリボン状突起に類似する。波状部分が連続しない可能性があり、胎土も⑦とは大きく異なる。⑦の類品は兵庫・岡山・島根・大分や四国島といった西部瀬戸地域に分布しており、下城式甕の分布領域内に収まって広がりを見せる可能性がある。

第8節. 小結

弥生時代の中野内遺跡は、扇状地のやや北西側に集中して前期後葉～後期初頭にわたる住居域が見られ、より山手側にも集落が広がる可能性がある。

弥生時代の竪穴住居跡は大小様々で規格性は認められないが、圃場発掘時には花卉状住居も確認されている。花卉状住居とは、住居竪穴が円形や方形に掘り窪められることが一般的な中で、竪穴内部に向かって突出する土壁を残し、上から見た平面形が花びらのように開いて見えるものを指している。さらに、掘り残された土壁が間仕切り機能を持つと考えられることから、花卉状間仕切り住居と呼ばれる（北郷1989）。花卉状間仕切り住居は南九州に多く分布する特徴があり、中野内遺跡の例は宮崎県内では北限である。また、大分県南部・愛媛県域にも分布することが知られる。

中野内遺跡例は、円形プランを基調とした全体に均等に突出を持つ花卉形で、端には柱穴が規格的に配置される、典型的な初期の花卉状間仕切り住居である。時期は、弥生時代中期後半から後期初頭になる。一方で方形住居に突出が付くものは、後期後半以降と新しい時期のものがあり（北郷1989）、鹿児島県内等では古墳時代まで残るものもある（二子塚A遺跡2005他）。

花卉状間仕切り住居の系譜については、朝鮮半島を起源とする松菊里型住居に求める説が主流であった（中間1987）。そして、最近、佐賀県西寒水四本柳遺跡（岡・太田2009）で弥生時代中期前半～中頃の松菊里型住居・花卉状住居が共に発見された。この花卉状住居は円形プランを基調としたもので、これまで宮崎県域でのみ知られていた初期型の花卉状住居である。

これらの年代的観点から考慮すると、朝鮮半島から

伝播した住居様式が北部九州から分布を広げるうちに、特に宮崎県域の複数地域で同時多発的に初期型の花卉状住居を採用したものと解釈できる。中野内遺跡の位置は宮崎県域における北限であり、換言すれば北部九州等に最も接することになる。中野内遺跡に初期型の花卉状住居が残されるのも、北部九州等に近いという地理的位置が重要な前提となるのであろう。さらに、中野内遺跡出土品には、北部九州の影響下にある土器、大分地域に主分布域のある下城式系土器、瀬戸内地域の凹線文系土器、大分方面より搬入されたのであろう蛇紋岩製扁平片刃石斧が含まれている。これらの遺物相からも、やはり南の延岡方面でなく、大分方面から北部九州、瀬戸内地域とより深い関連を持つ中野内遺跡の姿が浮かび上がってくる。

なお、中野内遺跡には弥生時代後期～終末にかけての遺物が少ない。これは、土石流等の自然災害により集落を放棄した可能性も考えられる。一方で、中野内遺跡よりも山手にある森ノ上遺跡では、弥生時代終末～古墳時代前期の集落が広がっており、単純化すれば標高の高い場所へと集落が移動した可能性がある。

古墳時代中期に中野内遺跡に再び集落が形成され、竪穴住居跡19軒が確認されている。弥生時代よりもやや南側に集落域が展開している。住居規模等を見ると、中期全体では軸を約10°東に振るもの、約45°東に振るもの等があり一定ではない。中期中葉には竪穴が4m×4m以上のものが多く、軸は約20°西に振るものが主流となる。竪穴規模の大きいものからは須恵器が出土する。須恵器には無蓋高環の脚部小片が少なくとも5個体以上はあり、大形の高環形器台の小片も見られる。灰かぶりの様子や器形のシャープさからは陶邑産の可能性が高い。また、圃場発掘SA11は円形住居であり、布留式系甕や高環脚部転用のフイゴ羽口が出土したことから、小鍛冶等を行う作業場的な要素を見ることができる。また、圃場発掘SA13埋土の再整理により、鉄片数点の混在が確認できた。

古墳時代後期には竪穴規模がやや小さくなり、住居軸は南北方向になる。その後の中野内遺跡に明瞭な集落跡を考えることは難しながら、古墳時代後期から古代、そして中世以降の遺物が散発的に出土し、何らかの人の営みが付近であったことを示している。（古田）

住居	平面形	規模 (m)	時期	須恵器	住居主軸	住居構造	特徴ある出土遺物
H19・20年度 東九州自動車道(県境～北川間)建設に伴う発掘調査							
SA1	隅丸方形(羽状付き)	3.3×4.5	弥生	前期後葉～中期前葉	南北方向		甕(多い)
SA2	隅丸方形	5.1×5.1	古墳	中期中葉～後葉	約45°	炉	錘具
SA3	隅丸方形	5.5×5.8	古墳	中期中葉～後葉	約20°(西)	壁帯溝	須恵器・甕・2個体の坏が重なって出土
SA4	隅丸方形	4.8×4.5	古墳	中期前葉～中葉	約20°(西)	壁帯溝・貼床	完形小型壺
SA5	隅丸方形	4.0×4.2	古墳	中期前葉～中葉末	約20°(西)		甕
SA6	隅丸方形	3.7×3.4	古墳	中期前葉～中葉末	約10°(東)	貯蔵穴	甕
SA7	隅丸方形	3.9×3.9	古墳	中期中葉～後期	南北方向	貯蔵穴・貼床	須恵器
平成4年度 園場整備発掘調査							
SA1	花弁状住居	7.0×6.7	弥生	中期末～後期初頭	—	ベット状	凹線文(瀬戸内)・須玖式・磨製石鏃
SA2	小型隅丸方形	3.9×2.8	弥生	中期末～後期初頭	約45°	—	小型壺・刻目突帯甕
SA3	小型隅丸方形	2.5×?	弥生	中期末～後期初頭	—	ベット状	小型壺・刻目突帯甕
SA4	隅丸方形	5.2×4.8	弥生	中期末～後期初頭	約45°	—	凹線文(瀬戸内)・小型壺
SA5	不明	2.5×?	弥生	中期末～後期初頭	—	—	壺
SA6	不明	4.0×?	古墳	中期?	約20°(西)	—	甕
SA7	隅丸方形	3.9×3.6	古墳	中期中葉～	約10°(東)	貼床	甕・坏
SA8	隅丸方形	3.5×3.5	古墳	中期前葉～中葉	約20°(西)	壁帯溝	小型壺・甕
SA9	不明	不明	古墳	不明	—	—	不明
SA10	隅丸方形	4.6×4.0	古墳	中期中葉	約20°(西)	壁帯溝	須恵器・甕
SA11	丸形	5.2×4.9	古墳	中期前葉～中葉	—	貼床	フイゴの羽口(高坏転用)・布留系甕
SA12	隅丸方形	4.0×?	古墳	中期?	約20°(西)	—	不明
SA13	隅丸方形	4.0×3.8	古墳	中期後葉～後期前葉	約45°	貼床	須恵器・甕
SA14	隅丸方形	5.2×4.9	古墳	中期中葉～後葉	約20°(西)	貼床	須恵器・甕
SA15	隅丸方形	4.4×4.0	古墳	中期前葉～中葉	約45°	壁帯溝・貼床	坏・高坏類
SA16	隅丸方形	4.0×?	古墳	中期?	約10°(東)	壁帯溝	—
SA17	隅丸方形	3.8×3.6	古墳	中期中葉～後期前葉	約20°(西)	壁帯溝	甕・台石
SA18	隅丸方形	4.4×4.0	古墳	中期中葉～後期前葉	南北方向	壁帯溝・貯蔵穴	須恵器・甕

第16表 中野内遺跡遺構一覧表 竪穴住居跡

種別	位置	口径	残高	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	胎土	石	備考
②	③	④	④	⑤	⑤	⑥	⑥	⑦	⑧	⑨

- ①遺物掲載番号。
 ②判明する器種について記述する。
 ③出土遺構。
 ④計測可能な各部位のサイズを記述する。
 ⑤色調は、標準土色帖を基に記述する。
 ⑥器面調整について記述する。
 ⑦胎土の質。
 ⑧胎土中に含まれる混和剤について量の多い順に記述する。
 黒色粒子→a、白色粒子(石英・長石)→b
 灰色・千枚岩→c、角閃石→e、雲母→f、赤色粒子→g
 ※cの中に緑色結晶片岩が含まれる可能性がある。
 ⑨特記事項。

No	器種	地点	口径	残高	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	胎土	石	備考	
4	弥生甕	SA1	4.6	7.5YR7/8	黄褐	7.5YR7/8	黄褐	□→刻み目(板状工具による)、 体→ヨコ方向ナデ	やや密	a/b/c	多	
5	弥生甕	SA1	2.8	5YR6/8	橙	10YR6/4	にぶい黄橙	□→刻み目(板状工具による) □→刻み目(板状工具による)体→ 煤化、強ナデ	体→ヨコ方向強ナデ	良好	b	多
6	弥生甕	SA1	2.7	5YR6/8	橙	5YR7/8	橙	□→刻み目(板状工具による)体→ 煤化、強ナデ	一部ハケメ(ヨコハケメ)	やや密	b/c	多
7	弥生甕	SA1	4.8	5YR7/6	橙	10YR5/4	にぶい黄橙	ヨコ方向ナデ、刻み目(棒状工具)	煤化して暗い、ヨコ方向ナデ	やや密	b/c	多
8	弥生甕	SA1	2.8	5YR6/8	橙	5YR7/6	橙	□→刻み目(板状工具)、ユビナ テ	ユビナテ(ヨコ)、体→ヨコ 方向のハケメ	やや密	b/c	多
9	弥生甕	SA1	3.1	10YR4/4	褐色	10YR5/4	にぶい黄橙	□→刻み目(棒状工具)	ユビナテ	良好	b/c	多
10	弥生甕	SA1	2.1	7.5YR8/4	浅黄橙	10YR7/2	にぶい黄橙	文様?、□→ヨコ方向ミガキ、 体→ナナムにミガキ	丁寧ナデ	良好	g/f/e	多
11	弥生甕	SA1	7.5	5YR7/6	橙	5YR7/6	橙	□→刻み目(板状工具)、□下→ ユビナテ、体→タテハケ	ナデ	やや密	g/b/f/c	多
12	弥生甕	SA1	7.5	5YR6/4	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい黄橙	体→タテハケ、接部強ナデ、 □→刻み目(棒状工具)	ナデ煤化	やや密	b/c	多
13	弥生甕	SA1	4.0	5YR7/6	橙	5YR7/8	橙	□→突帯2条、タテハケ	ヨコハケ	密	e/g/c	多
14	弥生甕	SA1	8.0	10YR8/4	浅黄橙	10YR8/4	浅黄橙	□→(突帯1条)、□下→突帯1 条(刻み目)、(棒状工具)強ナデ、 体→ハケメ	ユビナテ	密	e/g/c	多
15	弥生甕	SA1	7.2	10YR6/3	にぶい黄橙	10YR8/3	浅黄橙	□下→刻み目(棒状工具)、突帯 付近細いハケ、タテハケ	ユビナテ	やや密	e/b/c	多
16	弥生甕	SA1	3.8	5YR7/8	橙	7.5YR8/6	浅黄橙	□→1条刻み目、□下→2条刻 み目(棒状工具)	ナデ	やや密	g	多/a/b/c
17	弥生甕	SA1	4.8	7.5YR7/6	橙	7.5YR7/6	橙	□→1条刻み目、□下→刻み目、 体→ナナムハケメ	ナナムハケ、体→煤化	良好	b	多
18	弥生甕	SA1	5.4	7.5YR8/6	浅黄橙	5YR7/8	橙	□→刻み目、□下→刻み目(棒 状工具)、タテハケメ後ヨコナ テ、体→タテ細いハケメ	強ナデ	やや密	g	多/b
19	弥生甕	SA1	3.9	7.5YR7/6	橙	7.5YR7/8	黄橙	□→刻み目、□下→刻み目(棒 状工具)同時に刻み目、体→強 ナデ	板状工具ナデ、ユビナテ	密	b/g	多

第17表 中野内遺跡遺物観察表(1) 土器

No	器種	地点	口径	残高	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	胎土	石	備考
20	弥生甕	SA1		9.4	5YR7/6 橙 (全体煤)	5YR6/6 橙 (全体微煤)	口→刻み目、体→2 条刻み目 (棒状工具煤化)、タテハケ	内側全体に暗い、コビおさえ	やや密	g/c 多	
21	弥生甕	SA1		7.5	5YR7/6 橙	5YR7/8 橙	口→刻み目、口下→刻み目(板状工具)、タテハケ	コビオサエ、コビヒデ、	やや密	g/c 多	胎土白い非在地?
22	弥生甕	SA1		4.8	5YR7/6 橙	5YR6/4 にぶい橙	口下→刻み目(棒状工具)、タテハケ	強ナメハケ、煤化、	やや密	b/f/e 多	口～内部体部のみ煤化
23	弥生甕	SA1		17.7	7.5YR8/8 黄橙	7.5YR7/8 黄橙	口→刻み目、口下→刻み目(棒状工具)タテハケ、上部のみヨコナデ	コビヒデ	やや密	c 多	別々に刻み目
24	弥生甕	SA1	25.2	15.3	7.5YR7/8 橙	7.5YR7/4 にぶい橙	口→刻み目、口下→刻み目(棒状工具)、タテ細ハケ、煤化	ヨコハケ後コビナデおさえ	やや密	e/g/f/c 多	外→煤化、刻み目→工具間に痕跡炭附着、内→指紋
25	弥生甕	SA1	9.9	7.6	10YR8/8 黄橙	10YR4/2 灰黄褐	体→タテミガキ、口下→強ナデ凹線、煤化	ヨコ方向ミガキ、全体に煤化	やや密	b/c 多	
26	弥生壺	SA1		4.8	10YR7/6 明黄褐	7.5YR8/8 黄橙	文様(櫛描)	ナデ	密	b 多	胎土白い非在地系?
27	弥生壺	SA1		1.4	2.5YR6/8 橙	2.5YR6/8 橙	口→羽状文、マメツ	突帯1条、ナデ	やや密	赤(多)白	胎土橙 非在地?
28	弥生壺	SA1		1.4	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	口→刻み目(棒状工具)ハケメ後コビナデ	ナデ	良好	b/c 多	胎土白い非在地?
29	弥生壺	SA1		8.5	10YR8/4 浅黄橙	7.5YR8/6 浅黄橙	段が付いている(接合部)、タテハケ後コビナデ、煤化	コビおさえ	やや密	a/b/g/e 多	胎土白い非在地?
30	弥生甕	SA1		6.7	7.5YR4/1 褐灰	7.5YR6/6 橙	体→2 条刻み目(全体にナデ)、煤化	コビオサエ	やや密	a/b/e/c 多	胎土がこげ茶非在地?
31	弥生甕	SA1		8.1	7.5YR7/8 黄橙	7.5YR7/6 橙 (煤)	細かいハケのユビナデ、最下部→ハケ後コビナデ	コビナデ	やや密	b/g/c 多	
32	弥生甕	SA1			5YR7/8 橙	10YR8/3 浅黄橙	ナデ	タテ方向ナデ	やや密	b/c/g/e 多	底部圧痕
33	弥生甕	SA1		3.7	5YR6/8 橙	5YR7/8 橙	タテハケ	ナデ	やや密	b/e 多	内外破裂痕
34	弥生甕	SA1		2.0	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	タテ方向ハケ	ナデ	やや密	c/e/g 多	底部→植物繊維圧内面破裂痕
35	弥生甕	SA1		2.8	5YR7/8 橙	10YR6/3 にぶい黄橙(煤)	コビナデ、植物痕跡?	コビナデ	やや密	b/g/c 多	底→植物繊維圧痕
36	弥生甕	SA1		3.5	5YR7/8 橙	7.5YR7/6 橙	ハケメ(タテ)、一部煤化	ナデ	密	a/b/c 多	底→植物繊維圧痕
54	土師甕	SA2		2.0	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	強ナデ	ナデ	やや密	b/c 多	
55	土師甕	SA2		2.5	7.5YR6/6 橙	5YR7/6 橙	ミガキ(段がつくほど)	ナデ	やや密	c 多	
56	土師甕	SA2		3.3	10YR8/6 黄橙	5YR7/6 橙	強ナデ	強ヨコナデ	やや密	b/e/c 多	
57	土師甕	SA2		3.9	5YR6/8 橙	5YR7/8 橙	口→強ナデ	強ヨコ方向ナデ	やや密	b/c 多	
58	土師坏	SA2	14.4	5.0	10YR8/6 黄橙	10YR8/6 黄橙	ヨコ方向ナデ、ピンクに一部焼け	ヨコ方向ナデ	やや密	a/b/c/g 多	全体磨滅、胎土白い非在地系?
59	土師甕	SA3		7.4	5YR5/8 明黄褐	5YR5/8 明黄褐	ミガキ後コビナデ	ナデ	やや密	b/c 多	
60	土師甕	SA3		6.8	5YR6/4 にぶい橙	5YR6/4 にぶい橙	口→強ナデ、ミガキ(ナメ、ヨコ)後コビおさえ	ヨコハケ、口→ナメハケ	やや密	a/b/c 多	
61	土師甕	SA3		7.6	2.5YR5/6 明赤褐	2.5YR4/8 赤褐	タテミガキ、底→一部タタキ	ナメハケメ、コビナデ、	やや密	b/f/c 多	
62	土師甕	SA3	18.4	8.8	5YR5/6 明赤褐 (煤)	5YR6/8 橙	全体ミガキ、接合部よりミガキ、煤化激しい	強ナデ	やや密	f/c 多	
63	土師甕	SA3	19.0	3.7	5YR6/6 褐	5YR6/6 橙	ミガキ	ヨコハケ	やや密	b/c 多	
64	土師甕	SA3		7.5	2.5YR6/8 橙	5YR5/6 明赤褐 (煤)	ヨコ方向ミガキ、頸部コビおさえ、煤化	稜線持つ、コビナデ、	やや密	f/c 多	軽い
65	土師壺	SA3	9.5	7.4	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	強ナデ、頸→コビおさえ、ヨコミガキとナメハケ	コビおさえ、	やや密	f/b/c 多	内外→全体朱色
66	土師壺	SA3		9.1	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	強方向ナデ	強ナデ	密	f/b/c 多	軽い
67	土師坏	SA3		5.7	10YR6/3 にぶい黄橙	5YR6/8 橙	細かいヨコ方向ミガキ、煤化	ナデ	やや密	b/c 多	
68	土師坏	SA3	13.0	5.6	5YR4/2 灰褐 (煤)	5YR4/3 にぶい赤褐 (煤)	細かいヨコ方向ミガキ、煤化	ナデ	やや密	b/c 多	
69	土師坏	SA3	14.4	7.9	5YR5/6 明赤褐	5YR5/4 にぶい赤褐	丁寧ミガキ、底コビおさえ	ミガキ	やや密	f/c 多	内外→煤化、2枚重なる外側
70	土師坏	SA3	15.2	7.6	5YR6/6 橙	5YR6/4 にぶい橙	ヨコ方向ミガキ	ヨコ方向ナデ	やや粗	f/c 多	外全体に煤化、2枚重なる内側
71	土師脚付坏	SA3		8.3	2.5YR6/6 橙	2.5YR6/8 橙	ミガキ、コビおさえ、ヨコ方向ミガキ	板ナデ	良好	b/c 多	
72	土師高坏	SA3		3.3	2.5YR5/8 明赤褐	2.5YR5/8 明赤褐	ヨコ方向ミガキ	板ナデ	やや密	b/c 多	
73	土師高坏	SA3	14.2	6.5	5YR5/6 明赤褐 (煤)	5YR6/6 橙	丁寧ナデ	コビおさえ、強ナデ	やや密	b/c 多	内面破裂?
74	土師高坏	SA3		5.5	10YR6/6 明黄褐 (煤)	10YR6/6 明黄褐 (煤)	強ナデ	ナデ	やや密	b/c 多	内面破裂?
75	土師高坏	SA3	22.0	15.7	5YR6/8 橙	5YR6/6 橙	坏→ヨコミガキ、板ナデ(脚)?	ナデ	やや密	g/b/b/c 多	全体的にナデ
76	土師高坏	SA3		5.5	5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐	タテミガキ	ヨコ方向ハケメ	やや密	b/c 多	
77	土師高坏	SA3		4.6	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	タテハケ後ナデ	ナデ	やや密	g/b/f/c 多	
78	土師高坏	SA3		4.8	10YR6/6 明黄褐	10YR6/6 明黄褐	ナデ	ナデ	やや密	c/b 多	
79	土師高坏	SA3		18.0	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	ヨコナデ	ナデ	密	c/b 多	胎土が非常に硬い
80	須惠脚付無蓋高坏	SA3	12.7	12.7	5Y6/1 灰	5YR4/1 褐灰	三角透かし、波状文、右回転ナデ	回転ナデ	密	b 多	内面灰かぶり、重ね焼の粘土痕跡
81	須惠蓋	SA3	12.0	5.2	5YR6/1 灰	5YR6/1 灰	ケズリ、回転ナデ後ケズリ	回転ナデ	密	b 多	
82	土師甕	SA4		3.2	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	強ヨコ方向ナデ	強ヨコ方向ナデ	やや密	b/c 多	
83	土師甕	SA4		6.1	5YR7/6 橙	5YR5/6 明黄褐	強ナデ、煤化	口→強ナデ	やや密	b/c 多	
84	土師甕	SA4		4.9	10YR7/6 明黄褐	10YR6/6 明黄褐	ナデ後コビおさえ、煤化	ナデ後コビおさえ	やや密	b/c 多	
85	土師甕	SA4	25.9	16.1	7.5YR5/3 にぶい褐	10YR5/6 赤	口→強ナデ、ケ～タ→ヨコ方向ミガキ後コビおさえ、体下半→タテミガキ	口→ナメケズリ、(接合箇所)、ケ～タ→コビおさえ、ナメ板ナデ、タ下半→マモウ気味、ヨコナデ	やや粗	c 多	
86	土師甕	SA4		15.5	5YR5/4 にぶい赤褐 (煤)	5YR4/6 赤褐 (煤)	ケ～タ→太いヨコミガキ、タ→タテミガキ、全体煤化	板ナデ、コビおさえ、板ナデ(タ下半～下→上へ、上半分～ヨコ方向)、接合→コビおさえ	やや粗	b/c 多	
87	土師壺	SA4	9.7	14.5	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR4/2 灰褐	コビナデ(丁寧)、底は平たくなるよう板ナデ	口と頸コビナデおさえ、(体)細かいミガキ、(底)コビおさえ、ナデ	やや粗	g/b/f/c 多	内面酸化鉄(ベンガラ)
88	土師高坏	SA4		3.5	5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	ヨコ方向ナデ、ナメミガキ、ヨコ方向ナデ	ヨコ方向ナデ	やや密	b/e/g 多	
89	土師高坏	SA4		2.3	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/6 明黄褐	ヨコ方向ナデ	ヨコ方向ナデ	やや密	b/c 多	
90	土師高坏	SA4	4.4	12.0	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	ヨコ方向ナデ後コビナデ	ナメハケ後粘土貼付けコビおさえ	やや密	b/c 多	
91	土師甕	SA5・6	27.9	11.7	2.5YR 6/6 橙	5YR6/4 にぶい橙	ミガキ(口)→ヨコ、ケ～タ→ミガキ	ナメハケメ	やや密	g/b/f/c 多	

第18表 中野内遺跡遺物観察表(2) 土器

No	器種	地点	口径	残高	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	胎土	石	備考
92	土師甕	SA5・6	28.0	15.1	5YR6/6 橙	5YR 6/6 橙	ヨコ方向ミガキ	ナナメハケメ (太い単位)	やや密	g/b/f/c 多	
93	土師甕	SA5・6		10.7	5YR6/5 明赤褐	5YR5/6 明赤褐	ヨコ方向ミガキ、煤化	ナナメハケ、太い	密	b/c 多	
94	土師甕	SA5	28.1	27.8	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	口〜タテヨコ方向ミガキ、タテナナメ方向ミガキ、最径→ユビ押さえ、一部板ナデ後ミガキ	板ナデ・ユビおさえ、一部(底)にヨコ方向ミガキ、板ナデ (底部)	やや密	e/f/b/c 多	
95	土師甕	SA5		5.5	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	細いミガキ、煤化	ユビおさえ	やや密	b/c 多	
96	土師甕	SA5		4.7	2.5YR5/6 明赤褐	2.5YR5/6 明赤褐	ヨコミガキ後ユビナデ、外に煤化	ナデ	やや密	b/c 多	
97	土師甕	SA5		10.0	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	ミガキ後(細い)、ユビナデ	接合、板ナデ (全体ナデ)	密	b/c 多	
98	土師甕	SA5		13.1	5YR6/8 橙	5YR6/6 橙	口→ヨコミガキ、体→タテミガキ後ユビナデ	ヨコハケメ	密	b/c 多	内→植物圧痕?
99	土師甕	SA5		11.8	5YR6/6 橙	10YR7/4 にぶい黄橙	ヨコミガキ(〜体)タテミガキ(体〜)後ユビナデ、煤化	ユビナデ、内一部オレンジ	密	b/c 多	
100	土師甕	SA5・6	18.4	30.9	5YR6/8 橙 (上部やや煤化) 茶色	7.5YR4/2 灰褐	口〜頸へラみがき、肩部のみ丁寧みがき、下部強板ナデ、最大径丁寧ナデ	主にハケ、上部ナナメハケメ、下部タテ、ナナメハケメ、接合アリ	やや密	b/c 多 (大)	外面全体に細い板ナデ (空欄部分)
101	土師甕	SA5		7.8	2.5YR5/6 明赤褐	2.5YR6/4 にぶい橙	板ナデ後ミガキ	タテミガキ、ユビナデ	やや密	c/e/f/b 多	
102	土師甕	SA5		5.9	5YR5/4 にぶい赤褐 (煤)	5YR5/6 明赤褐	ミガキ後ユビおさえ	ミガキ、ユビおさえ	やや密	b/f/c 多	
103	土師甕	SA5・7		9.5	5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	タテミガキのユビナデ、全→板ナデ、(底)板で叩く	ユビナデ、煤化 (半分くらい)	やや密	c 多	胎土白い非在地?
104	土師壺	SA5		2.0	2.5YR6/8 橙	2.5YR5/8 明赤褐	ナデ	ユビナデ、	やや密	b/e 多	
105	土師坏	SA5		3.2	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	板ナデ	ヨコナデ	やや密	b/c 多	口→外→内へまくる
106	土師坏	SA5		5.7	7.5YR6/6 橙	7.5YR7/6 橙	ヨコ方向ミガキ	ヨコミガキ	やや密	b/g/e/f/c 多	内面朱
107	土師坏	SA5		4.9	5YR6/6 橙	2.5YR6/8 橙	ヨコミガキ	ヨコ方向ナデ	やや密	b/b/c 多	
108	土師坏	SA5		5.3	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR8/4 浅黄橙	ヨコ方向ミガキ	ユビナデ	やや密	b/c 多	
109	土師坏	SA5		47.0	2.5YR5/6 明赤褐	7.5YR6/6 橙	ヨコ方向細いミガキ、煤化	ナデ	やや密	f/c 多	
110	土師坏	SA5	12.0	5.1	5YR6/6 橙 (煤)	5YR6/6 橙 (煤)	ユビナデ、(底)板ナデ→少し角張る	ユビナデ	やや粗	c 多	全体にひびわれ
111	土師埴	SA5	17.2	6.5	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/4 にぶい橙	口→タテミガキ、体→ヨコミガキ	ユビナデ	密	g/b/c 多 (大)	
112	土師埴	SA5	19.4	8.2	5YR6/6 橙 (煤)	5YR6/6 橙 (煤)	体→タテ・ナナメミガキ	強ナデ	やや粗	b/c 多	
113	土師埴	SA5	19.2	10.0	5YR6/6 橙 (煤)	5YR6/6 煤	ミガキ	ナデ	やや粗	b/c 多	全体まばらに煤化
114	土師脚付埴	SA5		2.9	7.5YR6/6 橙	5YR7/6 橙	ユビおさえ	板ナデ	やや密	b/c 多	
115	土師脚付埴	SA5		5.5	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	ミガキナナメ、強ナデ、脚柱接合	板ナデ	やや粗	b/c 多	
116	土師壺	SA6	20.5	12.3	2.5YR6/6 橙	2.5YR6/6 橙 2.5YR 3/1 暗赤灰	接合か所→ミガキ後ユビおさえ	接合(1)、ミガキ一部後板ナデ、指おさえ	やや密	b/c 多	
117	土師壺	SA6	9.7	8.7	5YR6/4 にぶい橙	2.5YR6/6 橙	口→ミガキ、ユビおさえ(ナデ)→全	接合 (2箇所)、ユビおさえ	密	b/c 多	
118	土師壺	SA6		9.4	5YR6/4 にぶい橙	2.5YR6/8 橙	最大径、ミガキ下(底)ユビおさえ	接合痕後ユビナデ、ミガキ、細いハケメ (ヨコ、タテ)	やや密	b/f/e/c 多	内→全体に赤い
119	土師甕	SA6	19.2		5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	口→強ヨコ方向のナデ、口〜タテヨコ方向の太いナデ、最体→ナナメミガキ、テ〜タテミガキ後ユビ	板ナデ、接合箇所消すように、ソ→ユビナデ	やや密	f/b/c 多	内→植物圧痕
120	土師甕	SA6	25.7	26.6	5YR6/6 橙	2.5YR6/6 橙	強板ナデ(口)接合消すため、板ナデ(口〜肩)、ユビナデ・ミガキヨコ(体)ミガキ・タテ(体)の下	ユビナデ (口)、板ナデナナメ (肩)、ヨコミガキ(体)、板ナデタテヨコ (下)、ユビおさえ (底)	やや密	f/b/c 多	外→煤化一部
121	土師甕	SA6	27.4	29.0	2.5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐	(口〜頸)ヨコ方向ミガキ、(頸〜体)ナナメ方向ミガキ、(体〜)ナナメ方向みがき、板ナデ	接合3か所、板ナデ	やや粗	f/b/c 多	
122	土師甕	SA6		16.0	5YR6/4 にぶい橙	5YR6/6 橙	板ナデ後ミガキ、ミガキ(タテ)	ユビおさえ	やや粗	b/c 多	
123	土師甕	SA6		6.7	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	ヨコミガキ	板ナデのちユビ押さえ	やや密	b/c 多	
125	土師甕	SA6		4.3	5YR5/6 明赤褐 (煤)	7.5YR5/6 明褐煤	ミガキ後ユビおさえ、ヨコ	ナデ	やや密	b/f/e/c 多	口→外から内へまくる
124	土師甕	SA6		8.1	7.5YR7/3 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	ユビナデ	ユビナデ	やや密	b/e 多	
126	土師甕	SA6		6.5	7.5YR6/6 橙	10YR6/4 にぶい黄橙	ヨコ方向ミガキ	ヨコ方向ハケ	密	g/b/c 多	
127	土師坏	SA6-P1	10.2	4.8	10YR5/3 にぶい黄橙 (煤)	10YR5/3 にぶい黄橙 (煤)	ミガキ(ヨコ方向)あり、煤化、マモウ	ユビナデ、ナデ (全)	密	b/f/e 多	口→一部面を持つ
128	土師坏	SA6	13.2	6.7	5YR6/6 橙	5YR7/4 にぶい橙	口→細いナデ、黒斑?煤化が一部、丁寧ミガキとナデで仕上げ	内→オレンジ?顔料?、細いハケ右回り	密	b/e 多	外底→黒斑の付き方が不自然、植物痕跡有り
129	土師鉢	SA6-P1	18.5	5.4	10YR7/4 にぶい橙 (煤)	7.5YR6/6 橙	ミガキ後ユビおさえ	ナデ、ユビナデ	密	b 多	胎土白い非在地?
130	土師坏	SA6		5.4	5YR6/6 橙	5YR5/6 明赤褐	ヨコミガキ、一部強ナナメハケ? (煤化)、板状痕跡	口→一部ナナメハケメ	やや密	b/f/c 多	外: 植物圧痕?
131	土師高坏	SA6		6.5	5YR6/6 橙	7.5YR6/4 にぶい橙	ユビナデ	板ナデ、ヨコ	やや密	c/b 多	
132	土師甕	SA6		9.0	5YR6/8 橙 (煤)	5YR6/8 橙 (煤)	ミガキ、最大径(ヨコ方向)、下部(タテ方向)	板ナデ、接合 (2箇所)、ユビナデ	密	b/c 多	
133	土師甕	SA7	24.2	22.3	5YR6/4 にぶい橙 5YR2/1 黒褐	2.5YR6/6 橙 5YR7/6 橙	口→接合、ユビおさえ、タテ→ヨコ方向太いミガキ、下半部タテ方向太いミガキ	板ナデ、ユビおさえ、まばらに煤化	やや粗	a/b/f/c 多	胎土中石で破裂しそう、外口縁全体が特に煤化
134	土師壺	SA7		2.3	7.5YR5/8 明褐 (煤)	7.5YR5/8 明褐	ユビナデ	ナデ	やや密	b/f/c 多	
135	土師坏	SA7		1.8	7.5YR6/8 橙	7.5YR5/8 明褐	ヨコミガキ	ナデ	やや密	b/f 多	
136	土師坏	SA7		2.0	10YR7/4 にぶい黄橙 (煤)	10YR7/4 にぶい黄橙 (煤)	ヨコミガキ	ナデ	やや密	b/f 多	
137	土師坏	SA7		2.0	7.5YR5/8 明褐 (煤)	7.5YR5/8 明褐	ヨコミガキ	ナデ	やや密	b/f 多	
138	土師坏	SA7		2.3	5YR6/8 橙	7.5YR5/8 明褐	ヨコミガキ	ナデ	やや密	b/f 多	
139	土師坏	SA7		1.8	10YR7/6 にぶい黄橙	7.5YR8/4asa 浅黄橙	ヨコミガキ	ナデ	密	b/f 多	
140	土師坏	SA7		2.5	7.5YR7/6 橙	7.5YR6/6 橙	ヨコナデ	ナデ、マメツ	やや粗	a/e/b/c 多	全体マメツ
141	土師坏	SA7		6.0	5YR6/6 橙	5YR6/8 橙	ヨコミガキ	ナデ	やや密	a/f/e/c 多	胎土橙
142	土師鉢	SA7	18.6	8.0	5YR5/6 明赤褐 (煤)	7.5YR6/6 橙 (煤)	口→煤化、全体ヨコ方向ミガキ	ユビおさえ	やや密	b/c 多 (大)	
143	土師高坏	SA7		1.4	5YR7/8 橙	10YR7/4 にぶい黄橙	ナデ	刻み目後貼り付け粘土	密	b/c 多	受け部に刻み目
144	須恵坏	SA7	12.0	3.8	5Y6/1 灰	2.5Y6/1 黄灰	回転ナデ後、ケズリ	蓋→ユビおさえロクロナデ	密	b 多	右回り
145	須恵蓋	SA7		2.6	7.5Y4/1 黄灰	10YR5/1 灰	右回転後ケズリ	ロクロナデ	密	b 多	右回り
146	須恵高坏	SA7		1.5	2.5Y4/1 黄灰	7.5Y5/1 灰	ケズリ、刻み(脚付着のため)	ロクロナデ、灰かぶり	密	b 多	(SA3と類似)
202	土師甕	SE上		7.6	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	細かいミガキ、脚柱ナデ	ハケ、板ナデ	やや密	b 多	

第19表 中野内遺跡遺物観察表(3) 土器

No	器種	地点	口径	残高	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	胎土	石	備考
203	土師甕	S6		16.6	5YR6/6 橙	5YR6/4 にぶい橙	タテハケ後ユビおさえ、一部ミガキ(タ→下半)	接4箇所、板ナデ、一部ハケ	やや粗	b/c	多
204	土師壺	S6	17.4	11.5	5YR5/3 にぶい赤褐(煤)	5YR5/6 明赤褐(煤)	ヨコミガキ	細いハケ後ユビナデ、接点ユビおさえ	やや密	b/c	多
205	土師高坏	S6	11.3	6.9	5YR5/4 にぶい赤褐	2.5YR6/6 橙	ミガキ、脚柱→ユビナデ、おさえ	ユビナデ	やや密	b/c	多
208	弥生甕	S8		3.7	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR5/6 明赤褐	口→刻み目、タテハケ、1条突帯	ナナメハケ	密	b/f	多
209	弥生甕	S8		4.4	2.5YR6/6 橙	7.5YR7/4 にぶい橙	口→突刻1条、口下→突刻1条(板状工具)ナナメハケ後突帯付ける、棒状工具	内ユビナデ	やや密	b/c	多
210	弥生甕	S8		4.5	5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	口→刻み目1条(マモウ)	ヨコ方向ナデ後ユビナデ	やや粗	b/f	多
211	弥生甕	S8		5.0	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	2条突帯(棒状工具)	ヨコ方向ハケ	やや密	b/g/e/c	多
212	弥生甕	S8	24.6	13.0	7.5YR7/4 にぶい橙	10YR4/1 褐灰	一部煤化、ナデ、タ→マモウ?	内→全て煤化、ユビおさえナデ、接合	やや密	b/c	多
213	弥生甕	S8	14.6	10.2	2.5YR6/6 橙	5YR6/4 にぶい橙	口→突帯に施文具原体の跡、1条、タテハケ(2段)、タテハケ	口→タテハケ、タ→ナナメハケ	やや密	b/e	多
214	弥生甕	S8	15.6	5.8	2.5YR5/6 明赤褐	5YR5/4 にぶい赤褐	口→刻み目一部アリ、口シ→刻み目1条(板状工具)、タテミガキ	ユビナデ、タテミガキ後ユビナデ	密	b/e	多
215	弥生甕	S8		7.4	5YR6/6 橙(煤)	5YR5/4 にぶい赤褐(煤)	タテハケ後ユビナデ	煤化、底:ユビおさえ	密	b/e/c	多
216	弥生甕	S8		3.2	7.5YR5/6 明黄褐	5YR7/6 橙	細いナデ、底部工具残る	ややマメツ	やや密	b/c	多
217	弥生甕	S8		6.8	7.5YR7/6 橙	7.5YR5/3 にぶい橙	口→刻み目丸棒(工具による)突帯、口下→(棒状工具)	ナデ	密	b/f/g/e	多
218	弥生甕	S8		3.1	7.5YR7/6 橙	5YR6/6 橙	口→刻み目1条、口下→(板状)、ヨコ方向ナデ後貼付け突帯	ヨコ方向ナデ	密	c/f	多
219	弥生甕	S8		4.5	7.5YR4/2 灰褐	5YR4/6 赤褐	ナデ	ナデ後ユビおさえ	密	b/f/e	多
220	弥生甕	S8		2.5	2.5YR6/2 灰黄	2.5YR6/2 灰黄	ナデ、強ナデ	ヨコハケ	やや密	g/b	多
221	弥生壺	S8		7.5	7.5YR7/8 黄橙	2.5YR5/3 黄橙	ヨコ突帯(煤化)	ユビナデ、接合	やや密	g/b/e	多
222	弥生壺	S8		6.2	2.5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	細いミガキ、(突2条)シ→ヨコナデ	ナナメハケ	密	g	多
223	弥生壺	S8		1.2	7.5YR7/6 橙	7.5YR6/6 橙	文様(措文)	接、ナデ	密	c/e	多
224	弥生壺	S8		1.0	7.5YR6/6 橙・10YR5/8 赤(朱)	7.5YR6/6 橙・10YR5/8 赤(朱)	ナデ、凹	ナデ	密	b/f/e	多
225	弥生壺	S8		2.9	7.5YR5/8 明褐	7.5YR5/8 明褐	ナデ、口→凹	ナデ	やや密	b/f/e	多
226	弥生壺	S8			7.5YR6/8 橙	7.5YR6/8 橙	文様、段、ヨコミガキ	ナデ	密	g/b	多
227	弥生壺	S8		27.3	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/2 にぶい褐	ナナメミガキ(細い)、ケ→タ→タテハケメ、3条突帯後強ナデ(細い)	ヨコナデ後ユビナデ	密	b/g/e/c	多
228	弥生壺	S8		3.2	7.5YR6/6 橙	10YR7/4 にぶい黄橙	坏部→板ナデ、柱→ユビナデ、接合(板ナデ)	一部煤化、ユビおさえ	密	b/g/e/c	多
229	弥生甕	S8		3.6	7.5YR8/8 黄橙	7.5YR7/8 黄橙	マモウ	全体磨滅、頸部ユビおさえ	密	b/g/c	多
230	弥生甕	S8		3.0	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/3 にぶい橙	ナデ	ナデ	密	a/b/g/e	多
231	弥生甕	S8		3.0	7.5YR7/3 にぶい橙	10YR7/3 にぶい黄橙	口→文様、口→朱?、タテハケ	強ナデ	やや密	a/b	多
232	弥生高坏	S8		1.2	7.5YR7/8 黄橙	7.5YR7/8 黄橙	ナデ	ナデ	密	e/b	多
233	土師高坏	S8		2.2	10YR6/4 にぶい黄橙(煤)	7.5YR6/4 にぶい橙(煤)	坏部→板ナデ、柱→ユビナデ、接合(板ナデ)	ユビナデ	密	a/b/f/c	多
234	土師高坏	S8		5.0	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	ヨコ(板)ナデ、脚・裾→タテハケ	しぼり、ユビナデ	やや密	b/g/f	多
235	土師高坏	S8		5.6	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	脚裾→タテ方向の板ナデ、ハケメ	しぼり	密	b/c/f	多
236	土師高坏	S8		3.6	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/4 にぶい橙	脚すそ→タテハケ、脚→ヨコモガキ	ヨコ方向ハケ	密	b/f/e	多
237	土師壺	S8		3.9	5YR5/6 明赤褐(煤)	7.5YR5/6 明褐	外の一部煤化	ユビナデ	密	b/g/c	多
238	土師甕	S8		5.2	5YR6/6 橙	7.5YR7/4 にぶい橙	口唇→強ヨコ方向ナデ、ユビナデ、口→端部上面より押しさえナデられる	ユビナデ	やや粗	d/b/c	多
239	土師甕	S8		7.6	7.5YR6/3 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	(幅太い)ヨコモガキ後タテミガキ	ナナメハケ	密	b/c	多
240	土師甕	S8	17.8	20.0	2.5YR5/4 にぶい赤褐	2.5YR6/6 橙	タ→タテミガキ、接合2箇所ユビナデとハケで隠す	ヨコ方向ハケメ、ハケ	密	g/b/c	多
241	弥生甕	SA2		2.6	7.5YR8/6 黄橙(煤)	7.5YR8/4 黄橙(煤)	口縁、突帯1条、口縁下突帯1条、張り付け、棒状工具、	ユビナデ	やや密	b/c	多
242	弥生甕	SA7		2.4	5YR6/6 橙	7.5YR5/3 にぶい褐	刻み目(口唇部)、2条の刻み目(口縁)	ナデ	やや密	b/c	多
243	弥生甕	SA5		3.4	7.5YR6/3 にぶい褐	7.5YR5/3 にぶい褐	口唇1条、口縁下1条	ナデ	密	g/b/c	多
244	弥生甕	SA5		3.4	7.5YR6/6 橙	10YR6/4 にぶい黄橙	口→刻み目(板状工具)	ナデ	やや密	b/g/c	多
245	弥生甕	SA6		3.6	7.5YR6/6 橙(煤)	7.5YR6/6 橙	口下→刻み目(板状工具)、ナデ	ナデ	やや密	a/b/g/c	多
246	弥生甕	SA6		3.4	7.5YR6/6 橙	5YR5/6 明赤褐	口→刻み目、口下→刻み目(板状工具)、ハケメ	ナデ	やや密	g/c	多
247	弥生甕	SA7		4.8	7.5YR6/6 橙	7.5YR5/4 にぶい褐	口→刻み2条(口縁部、棒状口唇部、施文具原体の跡)	ナデ	やや密	g/c	多
248	弥生甕	SA2			7.5YR8/4 浅黄橙	10YR5/3 にぶい黄橙	口下→刻み目突帯1刻み目(棒状工具)、ナナメハケ	ヨコ方向ハケ後ユビナデ	やや密	b/c/e	多
249	弥生甕	SA7		2.6	5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐	刻み目、(棒状工具)	ナデ	やや密	b/c	多
250	弥生甕	SA4		2.6	5YR6/6 橙	7.5YR7/6 橙	貼付け、貼り付け突帯後ハケメ	一部ハケ後ユビナデ	やや密	b/c	多
251	弥生甕	SA2		2.7	7.5YR6/8 橙	7.5YR6/8 橙	磨滅、ユビナデ	ユビおさえ	やや粗	b/c/e	多
252	弥生甕	SA4		3.5	10YR8/6 黄橙	10YR8/2 灰白	タテ方向ハケ後ユビおさえ	ユビおさえ	やや密	b/f/e/c	多
253	弥生甕	SA4		3.5	5YR6/8 橙	5YR7/8 橙	タテ方向のミガキ	細いナデ後ユビおさえ	密	b/c	多
254	弥生壺	SA5		2.6	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	頸部(棒状工具)	ユビナデ	やや密	c/f	多
255	弥生甕	P5		5.4	7.5YR6/6 橙	7.5YR5/3 にぶい褐	口唇→施文間原体の跡、突帯1条(棒状工具)、口縁下→丸棒突帯1条、体部縦刻み目2条→丸棒	ナナメハケ	密	b/c	多
256	弥生甕	P184	9.0	2.6	5YR5/6 明赤褐	7.5YR 5/4 にぶい褐	ヨコハケ、突帯1条、貼り付け突帯、ヨコハケメ	マモウ→ナデ?	やや密	b	多
257	土師甕	SK3		8.5	10YR2/1 黒褐	10YR7/4 にぶい黄橙	外煤化、ヨコモガキ後タテミガキ	ナデ	密	b/f/c	多
258	土師甕	SK3		6.7	7.5YR6/8 橙	5YR 6/8 橙	体→ヨコ板ナデ	ナデ	密	b/c	多
259	土師高坏	P247	8.0	2.8	5YR5/6 明赤褐(煤)	5YR5/6 明赤褐(煤)	口→刻み目、口下→刻み目、口縁→突帯1条、ヨコ方向ハケメ	マモウ→ハケメ	やや密	b	多
260	弥生甕		6.0	5.6	7.5YR 3/2 黒褐(煤)	7.5YR4/6 褐(煤)	タテハケ後突帯(1条)貼る(棒状工具)	ユビおさえ	密	e/b/c	多
261	弥生壺			2.6	7.5YR4/4 橙	5YR4/3 にぶい赤褐	矢羽根状文様	丁寧ナデ	密	e/b	多
262	弥生壺			4.5	7.5YR6/8 橙	10YR8/6 黄橙	木葉文	ナデ	やや密	g/e/c	多

第20表 中野内遺跡遺物観察表(4) 土器

No	器種	地点	口径	残高	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	胎土	石	備考
263	弥生甕			5.2	2.5YR6/6 橙	5YR6/4 にぶい橙	底コビおさえ、タテハケ後コビおさえ、受け部コビおさえ	ナデ	やや粗	b/c	多
264	弥生甕			5.6	5YR5/6 明赤褐(煤)	5YR5/6 明赤褐(煤)	タテハケ後板状工具で丁寧におさえる	ミガキ	密	b/c	多
265	土師環			4.1	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/6 橙	ヨコミガキ後板ナデ	板ナデ	密	b/e/f	多
266	土師環	11.7		5.7	5YR7/6 橙	5YR7/4 にぶい橙	ミガキ、ナデ(一部コビナデ)	コビナデ	密	b/c	多
267	土師環	14.0		6.2	5YR6/8 橙	7.5YR7/6 橙	細くミガキ後コビナデ	細いミガキ(ヨコ方向)、底部→コビおさえ	やや密	a/b	多 基底 6cm
268	土師高環			4.9	7.5YR6/6 橙(煤)	5YR6/6 橙	口→凹、一部煤化	ナデ後コビナデ	密	b/c	多 高環?か甕?
269	土師高環			3.1	5YR6/6 橙	5YR6/4 にぶい橙	ヨコ方向ナデ後コビおさえ、一部煤化	コビナデ	やや密	b/c	多 へそ付き
270	土師高環			8.4	5YR6/6 橙	5YR6/4 にぶい橙	細いヨコ方向ナデ	しぼり、ヨコ方向ナデ後コビおさえ	やや密	b/c	多
271	土師高環			5.5	5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	ヨコナデ後コビおさえ	しぼり、ヨコ方向板ナデ	やや粗	b/c	多
272	須恵蓋			3.1	7.5YR6/1 灰	7.5YR6/1 灰	(右)ロクロナデ、ケズリ	ロクロナデ	密	b	多
273	須恵蓋			2.5	7.5YR6/1 灰	N6/灰	ロクロ後ケズリ	ロクロ(ナデ)、底ナデ	密	b	多
274	須恵蓋			1.5	7.5YR 6/1 灰	7.5YR6/1 灰	一部ケズリ	ロクロナデ	密	b	多
275	須恵蓋			1.4	10YR5/1 灰	7.5YR6/1 灰	ケズリ、ロクロ右回り	コビナデ(底部)、ロクロナデ	密	b	多
276	須恵環	14.0		3.7	7.5YR6/1 灰	7.5YR6/1 灰	ロクロナデ	ロクロナデ	密	b	多
277	土師壺	14.6		6.2	7.5YR5/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	ナデ(ヨコ方向)	接合か所(板ナデ)	密	b	多
278	須恵甕			1.8	5B3/1 暗青灰	N6/灰	格子目タタキ	タタキ(ハケメ)	密	b	多
279	須恵甕			2.8	2.5YR6/3 にぶい黄	2.5YR5/3 黄褐	ヨコナデ	ヨコナデ、やや赤い	密	b	多
280	須恵蓋			0.7	10YR7/3 にぶい橙	10YR6/2 灰黄褐	ケズリ	ロクロナデ	密	a/b	多
281	須恵蓋			0.6	10YR6/2 灰黄褐	10YR6/4 にぶい黄橙	ケズリ	ナデ	密	a/b	多
282	土師蓋			1.2	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	板ナデ、一部コビおさえ	ナデ	密	b/g/f/e	多 基底=8.6
283	須恵甕			1.3	2.5YR8/3 浅黄	10YR8/2 灰白	タテヨコ文様	同心円状	密	b	多
284	青磁碗			2.8	5Y5/3 灰オリーブ	5Y5/3 灰オリーブ	施釉	施釉	密	b	多
285	土師皿			2.6	2.5YR6/6 橙	2.5YR6/6 橙			やや密	a/b/g	多
286	土師皿			1.6	5YR6/4 にぶい橙	5YR6/4 にぶい橙	ミガキ(細い)、(口)ヨコナデ	ナデ	やや密	a/b/g	多
287	土師皿			1.7	5YR7/6 橙	7.5YR7/4 にぶい橙	回転ナデ、(底)板ナデ、余分な所板ナデ	ロクロ(段々一部)、ロクロ後(底)ナデ	密	a/g/e	多 全体に焼け(ピンク) 基底 6
288	中世土師皿			2.8	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	ナデ(マモウ)	ロクロ跡?、ナデ	やや密	a/g/e	多 基底 10.6cm
289	中世土師皿			1.4	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	ナデ	ナデ	やや密	b/g/f	多
290	小碗 (滑洲窯)			1.6	5YR8/3 淡黄	5YR8/3 淡黄	文様あり	圈線	やや粗	b	多
291	青磁菊花皿			2.4	10Y7/1 灰白	10Y7/2 灰白	蓮弁文	蓮文様	密	b	多
292	天目(近世)碗			2.7	7.5Y 6/4 にぶい橙 黒褐釉薬	2.5Y3/1 黒褐釉薬	一部釉、ケズリ	釉	密	g/b	多
293	土師瓦玩具?				10YR5/4 にぶい橙	7.5YR5/6 明褐	コビナデ	板?ハケメ?糸跡	密	b	多
①	弥生複合口縁壺			2.8	5YR7/8 橙	5YR6/6 橙	山形文	強ナデ	密	b	多
②	弥生複合口縁壺			2.8	5YR6/8 橙	5YR6/6 橙	文様あり	強ナデ	密	b	多
③	弥生複合口縁壺				5YR6/8 橙	5YR6/4 にぶい橙	山形文	強ナデ	密	b	多 拓本のみ
④	弥生複合口縁壺			1.7	5YR7/8 橙	5YR6/4 にぶい橙	波状文	ナデ	密	b	多
⑤	弥生複合口縁壺			2.0	5YR6/6 橙	5YR6/8 橙	波状文	ナデ	密	b	多
⑥	弥生甕			3.4	7.5YR6/6 橙	10YR5/4 にぶい黄橙	細いミガキ、刻目目(丸い棒状)	コビナデ	密	b/f/e	多 全体的に少し煤化気味
⑦	弥生甕			4.7	7.5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	波状口縁丁寧に整形している、(口)→刻目目(丸い棒状)	板ナデ	密	b/f/e	多

第21表 中野内遺跡遺物観察表(5) 土器

No	器種	石材	出土位置	長	幅	厚	重量	観察所見	※法量単位:長・幅・厚=cm、重量=g
1	二次加工剥片	流紋岩	T19	7.6	6.6	1.9	89.1	単剥離打面。左側縁は末端側にかけて二次加工あり。右側縁は鋸歯状の二次加工あり。	
2	二次加工剥片	流紋岩	T19	6.2	5.2	1.5	45.2	打面礫面。裏面左側縁より二次加工あり。剥片末端に微細剥離あり。	
3	二次加工剥片	流紋岩	T19	7.7	4.8	1.8	64.9	単剥離打面。剥片左側縁に外形を三角に張り出させるような二次加工あり。	
37	磨製石鏃	黒色頁岩	SA 1	2.3	1.9	0.2	1.3	未製品とは別母岩で、より目の細かい黒色の石材。欠損著しく、刃縁は使用あるいは剥落等による刃こぼれ著しい。全体に厚み 1.5mm 未満とたいへん薄手のもの。	
38	磨製未製品	黒色頁岩	SA 1	6.1	2.7	0.5	8.8	灰黒色で層理の発達した石材。周縁より細かな打ち欠きあり。	
39	礫器	砂岩	SA 1	8.7	4.2	2.5	86.7	礫片の上下両末端が簡単に刃付けされ、その稜線に潰れあり。	
40	礫器	砂岩	SA 1	9.6	8.7	2.6	235.0	分厚い剥片素材。平面菱形をしており、上半は折断による整形で補助的に剥離を入れている。下半は正面・裏面それぞれに剥離を入れ、鋭い縁辺を作出。器面の凸部には潰れあり。	
41	礫器	砂岩	SA 1	10.0	9.6	3.0	365.0	礫片の周縁が打ち欠かれたもの。縁辺に弱い摩滅あり。	
42	礫器	砂岩	SA 1	12.1	7.5	5.8	630.5	甲高な礫片素材で、正面には礫面が部分的に残る。裏面は節理面で、周縁より剥離・潰れあり。ごく弱い赤化あり。	
43	礫器	砂岩	SA 1	10.5	9.2	5.0	467.7	甲高な礫片素材。裏面は平滑な節理面。上縁~右縁に小さな鋸歯状の二次加工あり。上縁には一部潰れあり。	
44	砥石	砂岩	SA 1	6.4	6.5	3.4	133.6	欠損著しい。石英リッチな石質。破砕面も含め赤化あり。	
45	磨石	青砂岩	SA 1	7.0	4.1	4.6	110.7	よく研磨された円礫素材。欠損著しい。破砕面も含め弱い赤化。	
46	凹石	青砂岩	SA 1	11.6	11.2	4.4	895.8	円礫素材。正面・裏面は平滑な磨面+中央に浅く凹む敲打痕あり。側面は敲打痕がめぐる。下端欠損。欠損面も含めて、全体に赤化あり。	
47	研磨具か	軽石	SA 1	8.5	5.7	4.9	48.5	正面に摩滅ありか。自然面との区別が非常に困難で、自然礫の可能性あり。	
48	台石	砂岩	SA 1	11.2	8.1	3.5	404.8	正面中央にアバタ状の敲打痕。裏面中央に弱い敲打痕。	
49	台石	石英閃緑岩	SA 1	9.1	11.0	8.9	1,179.7	欠損面等の風化著しい。正面は凹面と見られ、摩滅あり。欠損面も含め、下半の赤化著しい。	
50	台石	砂岩	SA 1	30.8	14.7	6.1	2,990.6	使用痕は明瞭でない。長辺に打ち欠きが見られる。	

No	器種	石材	出土位置	長	幅	厚	重量	観察所見	※法量単位：長・幅・厚=cm、重量=g
51	台石	砂岩	SA1	22.8	20.0	10.5	6,400.0	歪な塊石素材。正面は比較的平坦で、摩滅あり。全体に弱く赤化。	
52	砥石	砂岩	SA1	22.8	34.7	9.3	10,500.0	正面に顕著な砥面あり。裏面平坦で手ズレのような器面。	
53	台石	砂岩	SA1	26.2	40.1	11.7	16,000.0	使用痕は明瞭でない。	
147	磨石	青砂岩	SA2	12.8	9.1	5.2	1,081.7	よく転磨された円礫素材。正面平坦で、光沢が出るほどの磨面あり。光沢は特に中央で強い。	
148	扁平礫	千枚岩	SA2	14.1	9.1	1.7	304.2	手擦れ感あり。台石素材か。	
149	扁平礫	千枚岩	SA2	15.2	8.9	2.4	477.4	手擦れ感あり。台石素材か。	
150	扁平礫	千枚岩	SA2	13.4	11.5	2.5	543.3	手擦れ感あり。台石素材か。	
151	扁平礫	千枚岩	SA2	14.3	9.9	2.5	500.6	器面は荒れる。台石素材か。	
152	扁平礫	千枚岩	SA2	13.8	12.2	2.2	496.0	手擦れ感あり。台石素材か。	
153	台石	千枚岩	SA2	14.4	9.5	2.2	427.4	扁平礫素材。正面に浅く凹む敲打痕・裏面は緩い凸面で凸部を中心に弱い敲打痕あり。	
154	台石	千枚岩	SA2	14.0	10.8	2.1	500.7	扁平礫素材。正面・裏面ともに中央にごく弱い敲打痕ありか。	
155	台石	砂岩	SA2	30.0	37.8	20.0	21,500.0	非常に大型の塊石素材。平面の1つに強い摩滅があり、砥面の可能性もある。	
156	台石	砂岩	SA2	13.4	32.3	6.6	3,882.4	塊石素材。正面はごくゆるい凹面で摩滅あり。部分的に鉄錆付着。全体に弱い赤化か。	
157	錘具	砂岩	SA2	13.4	4.8	3.2	214.1	手擦れ感あり。赤化著しい。	
158	錘具	千枚岩	SA2	13.1	4.9	3.0	238.8	手擦れ感あり。	
159	錘具	砂岩	SA2	11.2	4.4	4.6	283.0	手擦れ感あり。	
160	錘具	千枚岩	SA2	11.3	6.7	2.6	302.4	手擦れ感あり。	
161	錘具	千枚岩	SA2	14.5	5.7	3.0	303.1	手擦れ感あり。	
162	錘具	千枚岩	SA2	13.8	6.1	2.8	331.0	手擦れ感あり。	
163	錘具	千枚岩	SA2	15.7	6.3	2.2	345.4	手擦れ感あり。	
164	錘具	砂岩	SA2	12.6	5.9	4.8	361.0	手擦れ感あり。	
165	錘具	砂岩	SA2	11.5	5.7	4.9	365.4	手擦れ感あり。	
166	錘具	砂岩	SA2	12.5	6.8	3.4	373.4	手擦れ感あり。	
167	錘具	砂岩	SA2	14.3	4.5	4.6	392.3	手擦れ感あり。	
168	錘具	砂岩	SA2	14.0	7.1	2.9	408.2	手擦れ感あり。	
169	錘具	千枚岩	SA2	17.7	7.5	2.3	412.3	手擦れ感あり。	
170	錘具	千枚岩	SA2	13.7	7.0	3.3	416.3	手擦れ感あり。弱い赤化あり。	
171	錘具	砂岩	SA2	15.3	6.0	3.2	426.6	手擦れ感あり。	
172	錘具	砂岩	SA2	15.1	5.6	4.1	448.2	手擦れ感あり。	
173	錘具	砂岩	SA2	14.0	6.1	4.5	449.6	手擦れ感あり。	
174	錘具	砂岩	SA2	12.5	6.2	4.3	485.9	手擦れ感あり。	
175	錘具	千枚岩	SA2	14.3	6.0	5.2	497.8	手擦れ感あり。	
176	錘具	砂岩	SA2	15.1	5.2	4.2	534.1	手擦れ感あり。	
177	錘具	千枚岩	SA2	15.3	5.6	4.6	548.9	手擦れ感あり。	
178	錘具	砂岩	SA2	10.1	5.6	2.9	169.0	手擦れ感あり。欠損著しい。	
179	敲石	青砂岩	SA3	11.4	7.4	3.9	478.0	楕円礫素材。上下左右端に敲打痕あり。上端の敲打痕は面をなす。	
180	敲石	砂岩	SA3	9.4	7.5	6.2	667.1	歪な塊石素材。正面に弱い敲打・左右両面ならびに下端に面をなすような敲打痕あり。	
181	打突礫	青砂岩	SA3	13.4	6.9	2.2	292.2	扁平礫素材。下端に打ち欠きあり。両側縁に敲打+敲打に伴う剥離あり。両側縁を中心に赤化。	
182	磨石	青砂岩	SA3	11.1	10.6	4.5	801.6	正円礫素材。正面・裏面ともに磨面あり。側面にも所々に磨面が及ぶ。裏面に鉄錆の付着あり。	
183	凹石	砂岩	SA3	11.7	11.8	5.1	974.9	節理等のため歪に転磨された円礫素材。正面・裏面各中央部に敲打による浅い凹みあり。側面全周に弱い敲打痕。裏面は左面での敲打に伴って大きく剥離。剥離後も中央部の敲打は継続。	
184	台石	千枚岩	SA3	13.5	13.2	3.0	739.8	扁平礫素材。正面は緩い凸面で、中央に敲打による凹みあり。	
185	台石	砂岩	SA3	12.2	8.6	4.2	612.0	節理等のため歪に転磨された楕円礫素材。正面中央部に敲打あり。全体に弱い赤化あり。	
186	台石	砂岩	SA3	15.5	20.2	9.5	3,548.2	塊石素材。正面・裏面はほぼ平坦で摩滅し、特に正面で強い(図中範囲アミ)。裏面の摩滅面には少量の鉄錆が付着。器面全体が赤化後、破碎。	
187	敲石	砂岩	SA4	11.5	5.8	1.4	69.6	扁平棒礫素材。下端は欠損。上端は弱い赤化。敲打痕はないものの、欠損箇所に敲打部のあった可能性がある。	
188	砥石	砂岩	SA4	5.8	25.5	8.2	1,741.6	歪な塊石素材。幅広い1面・幅狭の2面に砥面あり。幅広い面の砥面は緩い凹凸が残っている。幅狭な面は節理を利用した砥面であり、強く研がれている。砥面には鉄錆が付着。一端は大きく欠損。	
189	剥片	鉄石英	SA5	5.4	5.8	2.5	71.1	不定形剥片。	
190	敲石	青砂岩	SA5	10.1	8.5	5.3	597.6	よく転磨された円礫素材。上下端に面的な敲打痕、正面中央・裏面中央に弱い敲打痕あり。	
191	敲石	青砂岩	SA5	10.6	6.5	4.1	426.7	よく円磨された楕円礫素材。上下端に面的な敲打痕。下端は磨面と言えるほど滑らか。裏面中央に弱い敲打痕あり。	
192	砥石	砂岩	SA5	18.1	10.0	5.1	1,398.7	断面五角形に研ぎ込み。砥面は強く湾曲。一旦、器面赤化後に再度砥面が形成されている。上半の破砕面には切り傷状の研ぎ痕が2条走り、その周辺には鉄錆がよく付着する。下端は剥離が入る。	
193	台石	青砂岩	SA5	8.1	17.8	8.2	1,212.7	転磨された四角柱状の礫素材。使用痕は明瞭でないが、正面がやや摩滅しているように見える。	
194	敲石	砂岩	SA6	13.9	5.6	3.6	443.4	断面楕円形の棒礫素材。上端・両側面にやや波打つような面的な敲打痕あり。正面に弱い敲打痕あり。下端は欠損後、鋭い割れ口をなくすように剥離あり。器面は全体にたいへん滑らか。	
195	台石	千枚岩	SA6	11.9	13.7	2.3	545.0	扁平礫素材。正面・裏面は平面で、中央にアバタ状の弱い敲打痕あり。正面の敲打部はごく浅く凹む。	
196	礫器	砂岩	SA7	10.8	8.2	3.7	379.1	礫片の末端に潰れあり。器面は全体に赤化。	
197	敲石	青砂岩	SA7	9.2	8.5	3.9	479.6	よく転磨された円礫素材。側面は全周に帯状に敲打痕が廻る。正面・裏面とも磨面で、中央に浅く凹む敲打痕あり。鉄錆少量付着。全面赤化。	
198	敲石	青砂岩	SA7	12.6	10.8	4.9	910.0	やや歪な楕円礫素材。左右両側面・下面に敲打痕あり。器面には鉄錆付着。右面の敲打部分や器面の凹部に顕著。	
199	台石	青砂岩	SA7	16.8	20.7	5.6	3,592.3	平たい塊石素材。正面はごく緩い凹面でよく摩滅。器面には部分的に鉄錆付着、特に裏面に顕著。	
200	砥石	砂岩	SA7	32.7	11.9	12.2	7,600.0	四角柱状の塊石素材。正面・左右面・裏面とも砥面あり。裏面は凸部を境に分かれ、砥面は一方に偏る。左右面の弱い敲打は砥面に意図的に凹凸を準備した可能性あり。上下両端は赤化著しい。	
206	敲石	青砂岩	SEI西	9.0	8.6	5.1	556.4	正円礫素材。正面中央に弱い敲打痕あり。	
207	砥石	砂岩	SEI西	20.1	3.5	8.0	430.1	正面・裏面に強く湾曲した砥面あり。左面は、整形目的か、割れ面の凸部を中心に研磨される。右面は大きく欠損する。目は細かく、仕上げ砥に相当か。欠損面も含め、全面強く赤化する。	

第22表 中野内遺跡遺物観察表 石器

No	器種	出土位置	長	幅	厚	重量	観察所見	※法量単位：長・幅・厚=cm、重量=g (処理前)
201	小片	SA4	2.0	1.3	0.2	1.4	錆により器面剥落か。刀子等の可能性あり。	

第23表 中野内遺跡遺物観察表 鉄器

第Ⅶ章 森ノ上遺跡（弥生・古墳時代編）

第1節 遺跡の位置と調査の方法・経過

1-1. 遺跡の位置

森ノ上遺跡は三方を山に囲まれ東方向のみ低地に向かって開放する谷間の緩斜面に立地する。緩斜面は扇状地堆積物で形成されており、緩斜面と山塊の境には、冬季には溜れ沢となる中港川とその支流が流れる。晩秋には周辺の山々からシカの声がこだまし、静かで自然豊かな環境の中に遺跡はある（第3・48図）。

なお、遺跡全体の位置等の詳細は、次年度に刊行の『野地久保畠遺跡 森ノ上遺跡』を参照してほしい。

1-2. 調査の方法と経過

今回報告する弥生時代・古墳時代に関する遺構・遺物は、当初の調査対象地外で発見された。そこで、旧来の調査対象地を森ノ上遺跡A区とし、新たに調査対象となった今回報告する地点について森ノ上遺跡B区と呼ぶこととした。

B区では、平成20年5月以降、伐採後の複数回にわたる再踏査によって、茶の木や果樹を掘り起こした根穴の排土中等でほとんど摩滅していない土師器片を大量に採集できた。B区ならびにその周辺はA区調査に伴う排土置き場として予定しており、他に代替地がなかったため、A区の調査に先立ってB区の調査を終了させる必要が出てきた。そこで、A区の表土剥ぎと平行して、土師器片を採集した付近の耕作土を重機で除いたところ、すぐに竪穴住居跡が複数検出された。遺構分布は排土置き場として予定していたB区他3,400㎡にわたって予想され、現況の畑地の筆ごとに試掘を進めていった。畑地は、高所より順にB1・B2区・・・と名付け、最終的に900㎡を除去したB1～B3区までの2,500㎡を全面調査することとなった（第48図）。B4区より低所では近代陶磁器等以外に表採されず、表土直下で礫層が露出し遺構は見られなかった。

調査期間は、A区の排土置き場の代替地がないことから、A区の本格掘削前までに終了するよう設定される必要があったため、1箇月程度の期間を想定して作業を計画した。

基本層序は、I層：耕作土・II層：二次K-Ah・

III層：K-Ah・IV層：混礫土層となる。ただし、層位横転箇所の1つでII層上位に黒色土が嵌っており、本来は二次K-Ah上に黒色土（≒クロボク）が良好に堆積していたものが、何らかの原因で消失してしまったものと見られる。

調査では、I層を重機で除去した上で、III～IV層面で古墳時代遺構の検出を進めた。遺構精査はB3区よりB1区へ向かって順次進め、その過程で、縄文時代前期等の遺物がII層中に、縄文時代早期の遺物がIV層中にそれぞれ少量含まれることが判明した。特にIV層は一見すると遺物を含むような土質でなかったため縄文土器が出土した時は驚かされた。

竪穴住居跡・土坑は個別に1/20で図化し、特に床面上に載る遺物・礫については図化した。また、竪穴住居跡の炉埋土等についてはフローテーションを実施した。遺構埋土中より出土した礫については、雨天時等を利用して現場で水洗の上、一部石器と判明したもののみ持ち帰り、他は石材別点数・重量を計量して廃棄した。（藤木）

調査日誌抄

平成20（2008）年

- 0827 表土剥ぎ開始。B3区より竪穴住居跡検出。
- 0829 B2区より竪穴住居跡検出。B4区遺構・遺物なし。
- 0901 B1区より竪穴住居跡検出。
- 0902 B区表土剥ぎ終了。
- 0911 作業員15名を投入。環境整備等。
- 0912 遺構検出。
- 0917 台風接近のため午後中止。
- 0918・0919 台風接近のため中止。
- 0922 遺構掘削本格化。
- 0929 台風接近に伴い、作業困難。
- 0930・1001 台風接近のため中止。
- 1002 B区以外の用地内で排土置き場を確保。B区調査の進捗を落とし、作業員5名体制とする。A区に進捗の重点を移す。
- 1010 雨天のため中止。
- 1023 雨天のため午後中止。
- 1029 作業員対象にミニ説明会。
- 1105 空中写真撮影。
- 1111 全作業終了（実作業日数32日）。



第48図 森ノ上遺跡B区周辺地形・調査区位置図

第2節 弥生・古墳時代の調査

B区の竪穴住居跡は、弥生時代終末期～古墳時代前期11軒（SA1～SA11）となり、この他、土坑4基がある（第49図・第24表）。遺構埋土中遺物の時期幅は弥生時代前期から古墳時代中期末までと広いが、大半を占めるのは古墳時代前期のものである。SA3・SA5は竪穴住居跡同士が切り合う唯一の例であり、SA3が古墳時代前期前葉、SA5が古墳時代前期後葉となる。

B区は畑地造成による削平が進んでおり、表土直下にIV層混礫土層が露出する範囲が半分近くを占めていた。IV層の堆積状況や周辺地形からB区の旧地形を復元すると、B区北側に緩斜面の頂部が東に向かって延びていること、B区が頂部から南に下がった緩斜面に相当するとわかる。

竪穴住居跡の配置は、B1区にSA1～SA5、B2区にSA6・SA7、B3区にSA8～SA11となる。SA3・SA7・SA8等の北側には遺構のない空白地があり、その存在を踏まえると、IV層まで削平が及んだ範囲に本来は竪穴住居跡が存在した可能性は低いと予想される。また、SA6・SA12の南側にも遺構のない空白地があり、竪穴住居跡は尾根頂部からやや南に下がった緩斜面に、短期間のうちに帯状に並んで構築されたようである。（藤木）

【1号竪穴住居跡（SA1）】（第50図）

SA1は3.5m×3.0mの方形住居である。竪穴掘削はIV層に達し、凹凸が著しい。竪穴のほぼ全面にわたって暗褐色土が貼られ、ほぼ水平に仕上げられる。支柱穴は4本で、柱間距離は1.3～1.8mである。西側2本の支柱穴はそのすぐ西側に柱穴が1本ずつある。柱穴は直径30～40cmで、床面より20cm掘り下げられる。東南隅の柱穴は二段掘りであり、大きく床面より20cm下がった上で一部もう10cm掘り下がる。後世に樹痕等の影響を受けた可能性もあるが、断面等からは明らかでない。柱穴埋土はIV層中の礫を多く含むもので、貼床面ではまったく検出できなかったことから、当初は柱穴なしと認識していた。ところが、掘削からしばらく経った雨天明けの晴天日にローリングタワー上より別住居の写真撮影をした際、貼床除去後の地山面が全体に乾燥する中で湿り気の抜けない箇所を複数見ることができた。ここで初めて支柱穴4本を検出することができた。

炉は柱穴の対角線上に位置する。炉埋土（2層）と他埋土との区別は困難であったが、貼床を切る格好で落ち込む焼土粒を多く含む土（2b層）によって二段掘りの炉と認定した。竪穴埋土は、部分的に黒みの強い箇所を持つ暗褐色土基調の単調なものであった（1層）。残深10cmと床面近くまで削平されていた。なお、炉埋土はフローテーション対象である。（藤木）

【SA1出土遺物】（第54・59図）

1～4は、弥生時代終末期～古墳時代前期前葉の壺・高坏であり、出土土器全てを図化した。1は頸部径よりやや大きい口径の小型直口壺で、肩部が大きく広がる。体部最大径は中央にあり、全体的に丸みを帯びる。胎土は非常に緻密で、器壁を薄く仕上げられており、外面全体に丁寧で細かいミガキを施し、赤色顔料を塗布する。3は複合口縁壺で、波状文がある。4は脚裾部がやや緩く開く高坏である。（古田）

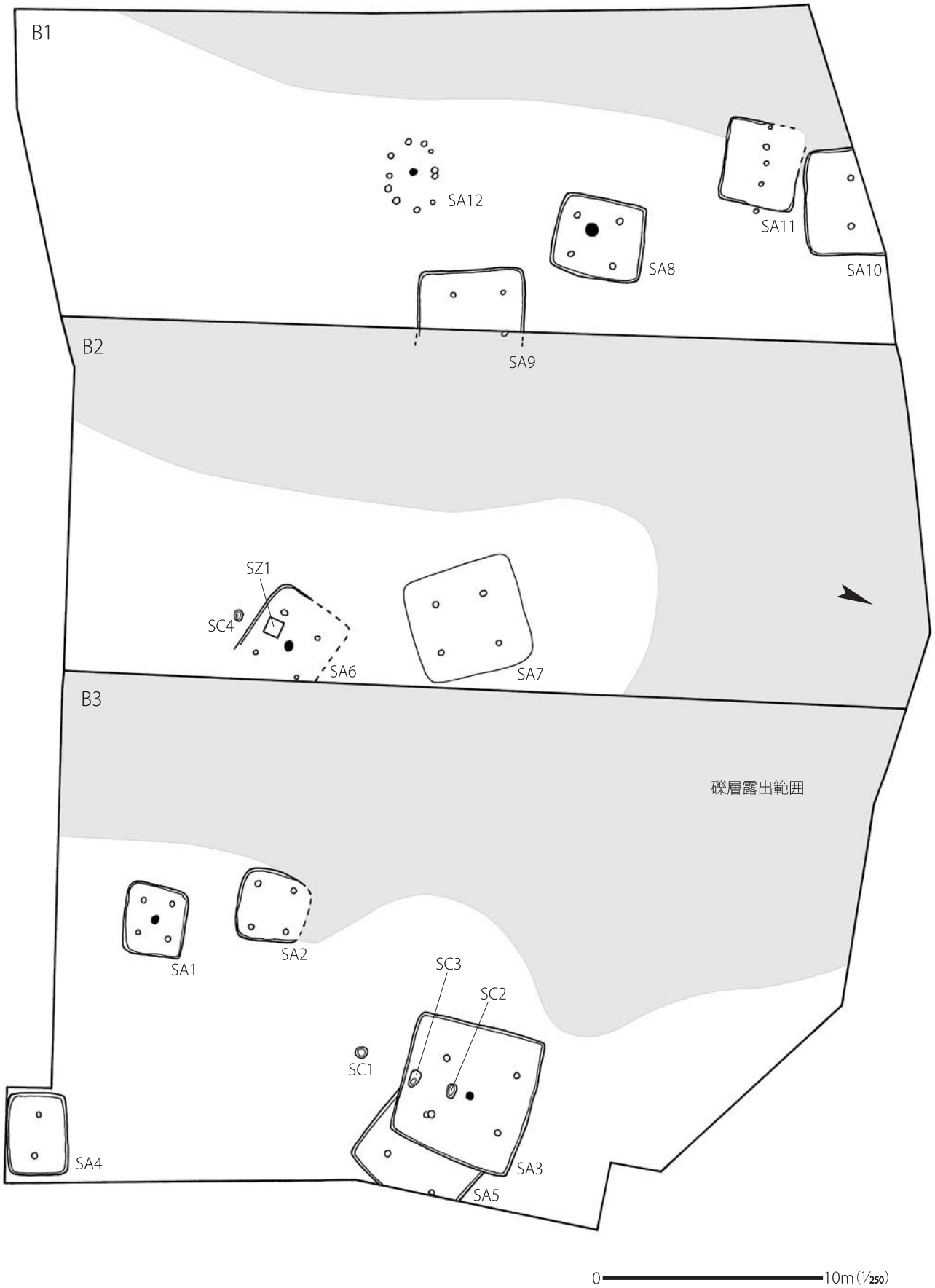
126・127は粗い質感の石材を用いた台石である。台石は柱穴付近に残されており、特に127は据えられたような状態であった。この他、埋土中出土の赤チャート製剥片1点（未図化）は、剥離等の特徴や竪穴床面が縄文時代早期包含層に及んでいることから早期のものと考えられる。（藤木）

【2号竪穴住居跡（SA2）】（第50図）

SA2は3.7m×3.3mの方形住居である。北壁の立ち上がりは明瞭でない。竪穴掘削はIV層に達し、竪穴のほぼ全面にわたって床面が水平になるように暗褐色土が貼られる（2層）。貼床の厚い箇所の土色は褐色が強くなる。支柱穴は4本で、柱間距離は1.7～2.0mである。柱穴は直径30cmで、床面より20cm掘り下げられる。柱穴埋土はSA1例に酷似し、貼床除去後の地山面が乾燥した段階で湿り気が抜けなかったことにより検出できた。この他、北西～南東の柱穴の対角線上に小穴1基がある。焼土等は検出されていない。竪穴埋土は暗褐色土基調の単調なものであった（1層）。残深10cmと床面近くまで削平されていた。なお、竪穴西寄りに100×90cmの攪乱が深く入っている。（藤木）

【SA2出土遺物】（第54・59図）

5～10は、弥生時代終末期～古墳時代前期前葉の壺・甕である。高坏はない。5は小型丸底壺で、口縁部の



第49図 森ノ上遺跡B区遺構分布図

みである。7は口縁立ち上がり部分に浮文を付ける複合口縁壺で、口縁から頸部にかけて強い斜方向の刻みを入れている。8～10は全て丸底の甕底部である。10は甕で、胴部中央に最大径があり器壁全体は薄い。上部に細かい単位で右上がりのタタキがある。底部は全体を丸く仕上げたタテ方向のタタキがある。(古田)

128は砥石であり、本来床直上に据えられたようであるが、器面に残る農具等のガジリから耕作等によって原位置より移動していた可能性が高く、表土剥ぎの際にも若干動いてしまった。この他、埋土中出土のホルンフェルス製剥片1点はSA1例と同様に縄文時代早期のものと考えられる。(藤木)

【3号竪穴住居跡 (SA3)】 (第50図)

SA3は7.0m×6.4mの長方形住居である。東にあるSA5を切る。竪穴掘削は、地山の傾斜があるため、東南隅がK-Ah中で留まる以外はIV層に達している。壁帯溝はない。貼床の可能性ある部分(3層)は局所的であり、西壁側は混礫土層がそのまま床面となる。支柱穴は4本で、柱間距離は3.4～3.8mである。柱穴は直径30cmで、南西の柱穴のみ床面より50cm下である他は、床面下10cmまで掘り下げられる。柱穴埋土は暗褐色土で、竪穴埋土2層に近い。支柱穴の対角線上には40cm×30cmの平面楕円形の、床面から深さ5cmの浅い炉が掘り込まれ、炉は多くの炭化物とともに焼土で充填される(7層)。炉埋土についてはフローテーションし、イネ等が回収された(詳細は第X章参照)。また、炉の南50cmと近い位置に、70cm×50cmの平面楕円形で床面より深さ25cmの土坑(SC2)がある。また、南壁の中央付近に壁に沿うように二段掘りの土坑(SC3)が掘り込まれる。最深部は65cm×55cmの平面楕円形で床面より30cm掘り下がっている。土坑埋土(8層)は2基ともに埋土2層よりやや暗い土色で、下部にいくほど小砂利を含んでいる。竪穴埋土は、特に壁際に最初に堆積するものは付近の地山等の状況をそれぞれ反映するものであった。すなわち、竪穴がK-Ah下の混礫土層(IV層)を深く掘り込む西壁側はIV層ブロックを多く含む埋土(4層)に、竪穴掘削がK-Ah中で留まり壁面がK-Ahで構成される北壁側は二次K-Ahに似た土質の埋土(5層)に、SA5を切る東

壁側はSA5埋土に近い土質(6層)になる。壁際が埋まった後に、暗褐色土(2層)が堆積し、最終的に竪穴中央付近を中心に黒褐色土(1層)が堆積する。

(藤木)

【SA3出土遺物】 (第54・59・62図)

11～18は、弥生時代終末期～古墳時代前期後葉の複合口縁壺・小型丸底壺・甕・高坏である。この他、未図化ながら布留系の体部小片が埋土中より出土した。

16・17の高坏脚裾はハの字状に広がる。接着部は上載せ充填であり、坏部との接着部分に刻みが入る。18は大型球形長胴の甕である。体部と頸部の境がやや不明瞭で、口縁部は内湾気味に立ち上がる。外面は、頸部に平行のタタキが残り、一部タテ方向にケズリのような強い工具痕が残る。布留系の体部小片は第58図88に類似し、器壁が非常に薄く、外面は細かいタテ方向のハケメ、内面はケズリとなる。(古田)

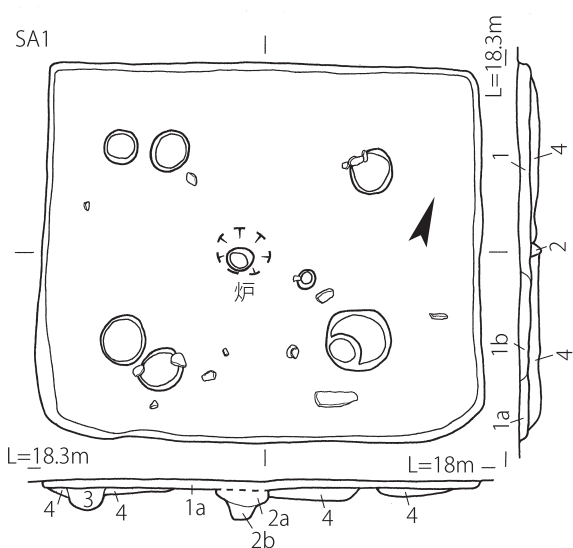
台石133は床直上に据えられたような状態で出土し、それ以外は埋土1b層より131の敲石が、埋土中礫等の水洗に伴って128～130・132の磨石・凹石・砥石が回収された。130～132いずれもよく転磨された青みのある砂岩の円礫あるいは楕円礫を素材とした敲石等で、磨石は中でも正円に転磨された礫が用いられる。128・129は粘板岩製で、仕上げ砥石と見られる。未図化には搬入礫2点の他、縄文時代石器の混入として姫島産黒曜石製石鏃・剥片各1点、砂岩製剥片1点・搬入礫1点がある。搬入礫はよく転磨された楕円礫で、使用痕等はない。

この他、埋土中より162～164の鉄鏃・鉄片が出土した。(藤木)

【4号竪穴住居跡 (SA4)】 (第51図)

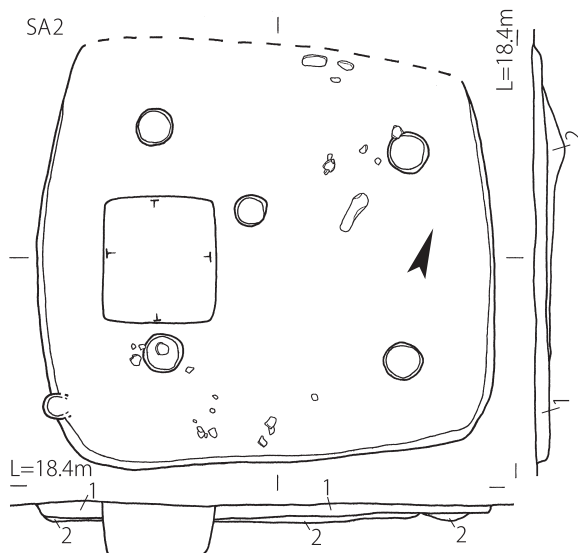
SA4は3.6m×2.7mの長方形住居である。竪穴掘削はIV層に達し、北壁の一部・西壁から南壁にかけて幅20cm・深さ5cmの壁帯溝が用意されつつ、主に竪穴中心にK-Ahブロックを含む濁った土が貼られる。支柱穴は2本で、柱間距離は1.7mである。柱穴は直径30cmで、床面より5cm掘り下げられる。柱穴配置は竪穴軸線より若干ずれている。炉はない。床直上出土遺物は高坏(111)・台石(146)があり、この2点のみがSA4に本来伴う遺物である。

竪穴埋土はまず竪穴壁際よりK-Ahブロック等を多



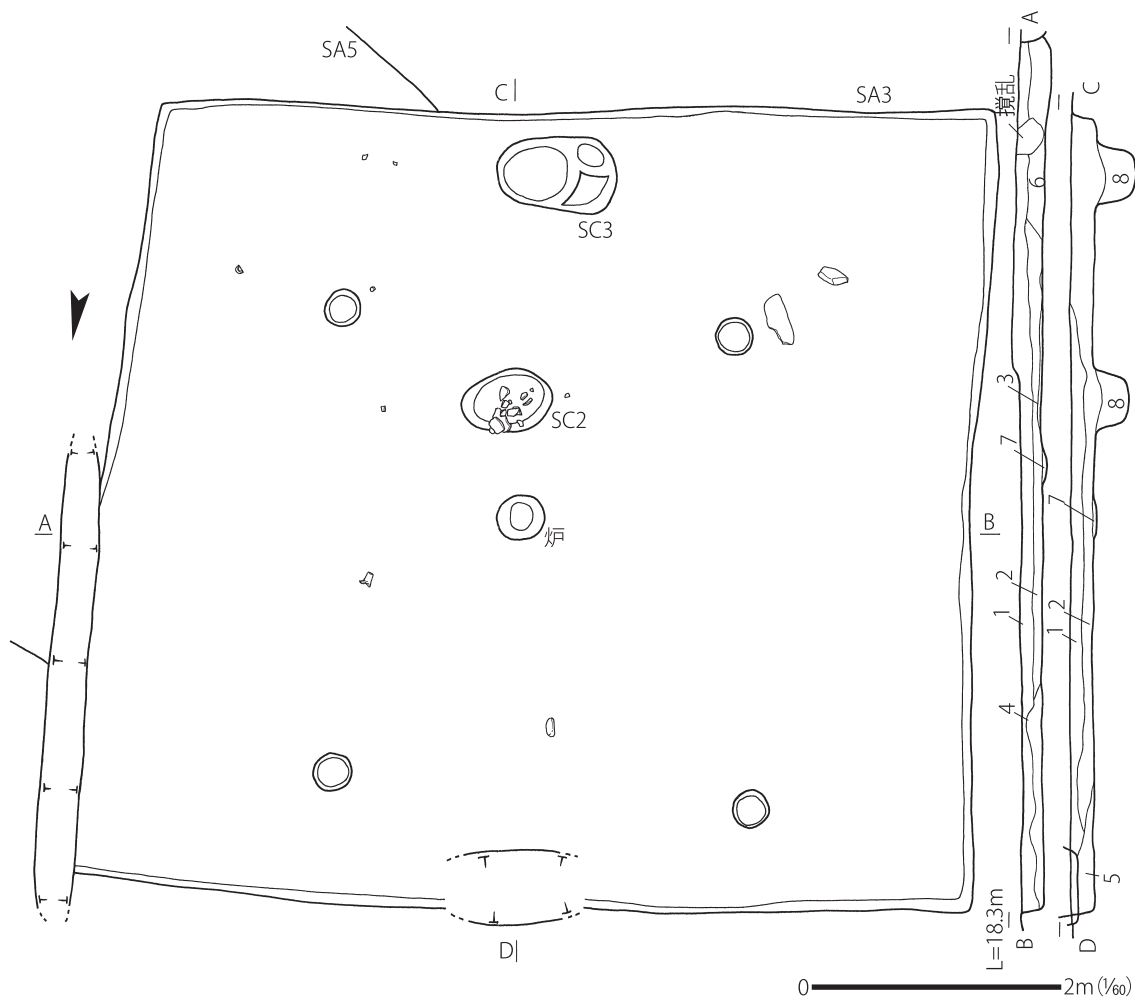
SA1土層注記

1a: 暗褐色土。埋土。/1b: 黒褐色土。埋土。1a層より黒み強い。
 2a: やや赤みのある暗褐色土。炉埋土の可能性あり。2b層より赤みが強い。
 2b: やや赤みのある暗褐色土。炉埋土の可能性あり。
 3: 暗褐色土。貼床。/4: 暗褐色土。貼床。



SA2土層注記

1: 暗褐色土。埋土。/2: 暗褐色土。貼床。



SA3土層注記

1: 黒褐色土。/2: 暗褐色土。/3: 暗褐色土。砂利・K-Ah塊多く含む。遺物なし。/4: 灰褐色土。K-Ah下の混雑土層塊からなる。遺物なし。
 5: 茶褐色土。二次K-Ahに類した埋土。/6: 暗褐色土。2層よりも灰色味あり。K-Ah塊多く含む。/7: 焼土。SA3の地床炉。
 8: 暗褐色土。2層よりもやや暗く、下部ほど小砂利を含む。

第50図 森ノ上遺跡B区古墳時代遺構実測図(1) SA1~3

く含む壁崩落土等が堆積し（3層）、次いで竪穴中央に暗褐色土が堆積する（2層）。2・3層にはほとんど遺物が含まれていない。2層堆積後には浅い皿状の凹みができており、凹面に張り付くように焼土を含むごく浅い落ち込みが確認された。この焼土周辺の土をフローテーションした結果、イネ・キビ近似種？等が回収された（詳細は第X章参照）。また、凹みの埋土（上半を1a層・下半を1b層）からは土器（46～118）・石器（136～145）・鉄器（165～169）等の大量の遺物が廃棄されたような状態で出土した。遺物の包含量は1a層で多く、土器完形品・炭化材等が目につく。一方で、1a層では遺物量は多いものの小片化した土器が目立つ。特に1b層中の遺物は、土器の下に石器・礫があり、その下からまた土器が潰れて出土する等、折り重なった出土状況であった。礫の中には3～5kgもあるような使用痕等のない巨礫も含まれていた。また、1a層中からはイネ・ブナ科・カキノキ属？等が、1b層中からはイネ・コムギ・モモ等が、フローテーションによってそれぞれ回収された（詳細は第X章参照）。これらの状況からは、竪穴埋没過程の浅い凹みの中で、焚き火等の火が使われたこと、土器や石器・礫をはじめ不要物を廃棄したこと等が想起される。

SA4はちょうど調査区壁際にあつたため、現表土から遺構検出面に至るまでの土層堆積に関する情報も収集できた。SA4埋土1層が堆積した後（床面より+30cmの高さまで埋没）、二次K-Ahが25cm以上堆積し、耕作土で攪拌されている。（藤木）

【SA4出土遺物】（第55～58・60・62図）

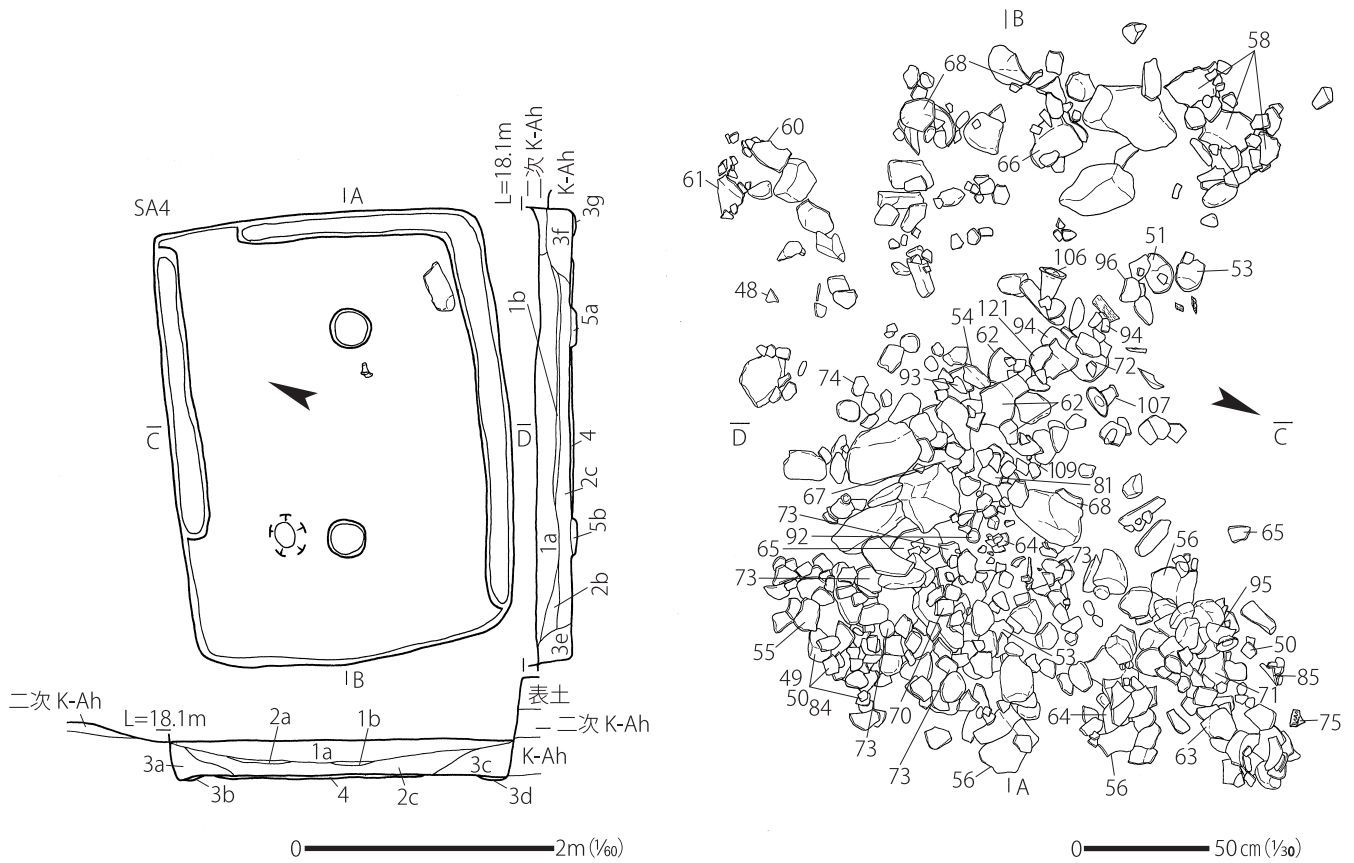
竪穴住居自体の時期を示す高坏（111）は弥生時代終末期であるが、他の埋土中の土器全体の時期の様相は古墳時代前期の範疇に入るものが多く、一部、中期のものも含まれている。甕・複合口縁壺・壺・鉢・坏・高坏が出土している。須恵器は見られない。

甕（46～73）は多数出土した。46は外面に間隔をあけて紐状に煤が残着しており、調理方法や使用用途等との関連が考えられる。47は第58図88と胎土が類似し、外面には細かい平行タタキが、内面に細かいケズリが見られることから、布留系の可能性がある。50は大型球胴形であり、全体に丸みを持ち外面にミガキを施す。51～54の底部はやや丸く自立せず転倒するような平底

である。55は器壁全体が厚く、他の中型甕の中で最も重い。色調はやや赤い。56の最大径は全体のやや中位にあり、頸部と上体部のみにタタキを施した後に一部ミガキ消している。頸部はややしまり平底である。57は、口縁部がやや外上方へ広がる。外面体部には間隔の狭い右上がりのタタキを施し、最大径部分が筒状になっている。58は頸部がやしまり、外上方へ口縁部が緩やかに広がる。外面肩部と中央に右上がりのタタキの後にタテ・ヨコ方向に一部ミガキ消す。59は口縁部が直線的に立ち上がり、途中から大きく外反し広がる。中野内遺跡出土土器（第36図133）と胎土が酷似し、形態も近い。口縁部径が頸部径より大きく、体部径と口径はほぼ同じであることから、中野内例よりやや古相である。60～62はほぼ丸い正球形の胴部に口縁が付いたような形である。外面は、右上がりのタタキの後ヨコ・ナナメ方向のミガキで消している。内面は、細かな板ナデとなる。61は内湾気味に立ち上がる口縁部である。63・64の体部はやや楕円球形である。63は口縁部が長く壺に近い甕である。64は頸部にタタキが集中する。65は体部最大径がやや中位に位置する。口縁がやや斜めに立ち上がり、口縁の一部が歪んでおり、内外面の全体に指押さえが残る。66・67は中型球長胴である。口縁部は細長く外上方へ緩く広がり頸部がややしまる。68～71の体部はイチゴ形である。口径と最大径がほぼ同じで、下位にいくにつれて狭まる。内面ハケメか板ナデをナナメ方向に施す。輪積み痕跡は内外面ともに整形されている。72・73は口縁部が直線的に立ち上がり、口径と頸部径・最大径ともほぼ変わりが無い。72は全体に丸みを帯び、外面には引っ掻き傷のような板ナデ調整を、内面にはほぼ調整を消すようなヨコ方向板ナデを施している。73はパイナップルのような体部をしており、直線的に立つ口縁部となる。内面調整の半分はタテ方向ミガキ、もう半分はヨコ方向のミガキと明瞭に異なる。全体的に胎土が赤く、硬くしまる。厚みもあってか重い。

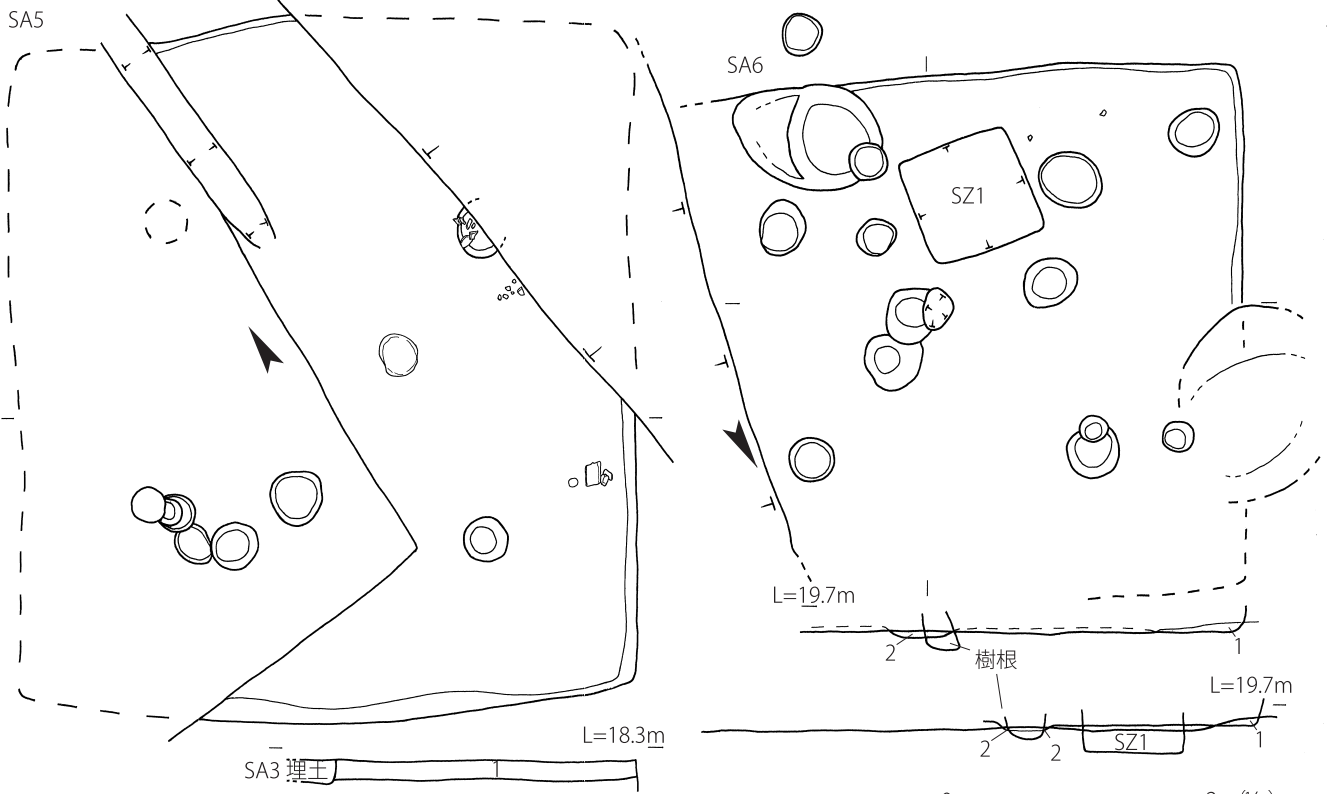
複合口縁壺（74～80）は連続山形文や波状文が施される。78は頸部に貼り付け突帯がある。

布留系の土器（81～88）には甕・壺がある。81は合成復元した甕である。胎土はややこげ茶色で器壁全体は非常に薄く、他の土器の胎土とは明確に異なる。内



SA4土層注記

1a：黒褐色土。上半は土器小片・炭化物多い。下半は土器完形品・炭化材多い。／1b：黒褐色土。遺物をほとんど含まない。土質は1a層に同じ。
 2a：暗褐色土。2c層に比べやや暗い。／2b：暗褐色土。2c層に比べやや暗い。／2c：暗褐色土。K-Ah塊を多く含む。
 3a：にぶい褐色土。K-Ah塊を多く含む。／3b：にぶい褐色土。3a層より暗い。／3c：にぶい褐色土。3a層より少ないながらK-Ah塊を含む。
 3d：にぶい褐色土。K-Ah塊の流れ込み。／3e：にぶい褐色土。二次K-AhベースでK-Ah塊を多く含む。／3f：にぶい褐色土。二次K-Ahベース。
 3g：にぶい褐色土。K-Ah塊の流れ込み。／4：暗褐色土。貼床。K-Ah塊を多く含む。
 5a：にぶい褐色土。小砂利を多く含む。柱穴埋土。／5b：にぶい褐色土。K-Ah塊・砂利を含む。柱穴埋土。



SA5土層注記

1：二次K-Ah。SA3よりも赤みが強く識別は容易。

SA6土層注記

1：暗褐色土。貼床残骸か。／2：暗赤褐色土。炉埋土。

第51図 森ノ上遺跡B区古墳時代遺構実測図(2) SA4~6

外面ともに細かいハケで整形している。82・83・85はおそらく甕の口縁部片である。87も甕の口縁部で、胎土・器壁の薄さは81と類似する。内面は細かいケズリが施されている。84・86・88は口縁部片あるいは体部片であり、壺・甕いずれか不明なものも含む。

鉢(89～91)は大小があり、壺との区別の難しいものもある。台付鉢(95・96)のうち、95の脚はハの字に広がり鉢部内面に稜線を持つ。96は短い脚部で、鉢部との接続部分は指で丁寧に押さえ付けている。外面には、ミガキ後に右下がりの細かいタタキを施している。壺(92～94・97・98)のうち92は手捏ねである。

高坏(98～117)は脚部等によりいくつかに分かれる。98は坏部である。99は坏部が浅い。器壁全体が薄く、外上方へ大きく広がる。105はミニチュアの高坏で、胎土が明らかに他とは異なる白色である。106・115・116は脚柱がほぼ同じ径のまま脚裾までのび、粘土を充填しはめ込むタイプである。108・109は脚裾が屈曲し、裾部がやや丸みを持って脚底につく。110～114は、脚柱下位でやや開き脚裾がハの字状に広がる。内面にはしぼりを施す。(古田)

残されていた146の台石はSA4の床直上出土で、136～145の敲石・磨石・砥石・台石・軽石製研磨具かは1層中出土である。138・139は青みのある砂岩製敲石で北浦周辺のもの、140は石英閃緑岩製磨石で五ヶ瀬川流域より搬入されたものであろう。136・137は砂岩製砥石でよく研ぎ込まれる。142～145は千枚岩・砂岩製台石で、砂岩には多くの石英脈や節理が走る等、両者とも粗質の石材である。この他、未図化には砥石1点・台石8点・台石破片8点・搬入礫2点・搬入軽石3点・縄文時代のチャート製打製石鏃1点がある。台石片は火熱により器面が剥落したものである。搬入軽石は長径10～15cmほどの大きさで揃っている。

165は柄との装着部分に変形した刀子である。166～169は鉄小片であり、166・167のように、一見すると中世等の釘と思しきものも含まれる。(藤木)

【5号竪穴住居跡(SA5)】(第51図)

SA5は、SA3に竪穴東側の大部分を切られ、北西隅を畑地造成に伴う段切りにより失っている。主柱穴位置等からは、5m四方の方形住居に復元される。貼床・

壁帯溝・炉等は削平を考慮しても見られない。主柱穴は4本柱が想定されるものの、実際には3本のみ検出された。主柱穴北側は想定される位置で検出できず、他主柱穴の底面が及ぶ深さ付近まで精査をしたものやはり検出できなかった。主柱穴西側はSA3主柱穴の1つと位置が近接し、別に2基の柱穴が重複する。主柱穴東側は畑地造成による段切りにより東半を失っているものの、埋土中には土器・礫が落ち込んでいた。柱穴直径30～40cm、柱間距離2.4mで、床面より50～60cm掘り込まれる。竪穴埋土はSA3よりも二次K-Ahブロックを含む関係で赤みが強く、SA3埋土との識別は容易であった。(藤木)

【SA5出土遺物】(第59・62図)

土器は古墳時代前期前葉の壺の頸部・甕の体部・高坏の脚裾部等がある。いずれも小片であり、図化していない。(古田)

石器は全て床直上より出土した。134は断面が円弧を描くようなものを対象とした砥石である。135は裏面側が上を向いて出土した台石で、一部は表土中にめり込んでいたことから土中で上下反転した可能性がある。なお、砥石のすぐ脇から、敲石等との関連が推定される転磨された楕円礫(未図化)が出土した。

170は扁平棒状の鉄小片である。(藤木)

【6号竪穴住居跡(SA6)】(第51図)

SA6は4.2m四方の方形住居である。最も残りの良い南西隅付近の竪穴壁立ち上がり部分にわずかに埋土・床面が残っていたものの、それ以外は貼床中途まで削平された、あるいは貼床さえも削平され、わずかに炉ならびに柱穴が残されたものである。東側は畑地造成に伴う段切りにより失われている。主柱穴は4本で、竪穴内ではやや南東に寄った位置に柱間距離2.1～2.2mで並んでいる。柱穴埋土は暗褐色土で、推定される床面より30～50cm掘り下がっている。主柱穴の対角線上には直径40cmの平面やや歪な円形の、床面から深さ5cmの浅い炉が掘り込まれる。炉は一部を樹痕で乱されていたものの、多くの炭化物とともに焼土で充填されていた(2層)。なお、炉に切られて、そのすぐ北東にやはり浅い円形土坑が掘り込まれていた。埋土中にわずかに焼土等が見られたことから、本来は炉であっ

た可能性もある。炉埋土ならびにその可能性ある土坑埋土と周辺の土についてはフローテーションを進めた（詳細は第X章参照）。竪穴西壁・南壁は、不自然に礫が分布することから竪穴の平面プラン確定にやや難儀したものの、後に竪穴埋没後の風倒木が各1箇所入っていた結果と判明した。竪穴埋土は暗褐色土のみの単調なものである。なお、竪穴に重複して、90cm四方の平面方形で壁面が垂直に立つ攪乱（SZ1）が掘り込まれる。（藤木）

【SA6出土遺物】（第54・14図）

19は古墳時代前期の甕、20は同じ時期の高坏である。いずれも小片である。（古田）

147は敲石である。（藤木）

【7号竪穴住居跡（SA7）】（第53図）

SA7は竪穴が削平され、硬化面ならびに柱穴のみ残されたものである。硬化面部分に断ち割りトレンチを入れたものの貼床は確認できなかった。柱穴の候補となる小穴は13基あり、そのうち深さが硬化面下20～30cmまで下がり、並びからみても4本柱の支柱穴とみて良さそうなものを3基分認定した（柱穴精査は断ち割りトレンチ掘削後に進めたため、4基目の支柱穴の予想される位置はトレンチによって飛ばした可能性が高い）。柱穴埋土は二次K-Ahがやや黒ずんだ程度の、地山との区別が非常に困難なものであり、掘り下げるにつれ地山であるK-Ahとの区別が明瞭になって掘り下げが容易になった。

SA7が竪穴住居跡であった場合、本来5m×5m以下の方角住居が予想される。（藤木）

【SA7出土遺物】（第61図）

土器は古墳時代前期と思われる甕体部片が数点ある。いずれも小片で図化していない。（古田）

148は台石であり、硬化面上に据え置かれたような状態で出土した。（藤木）

【8号竪穴住居跡（SA8）】（第52図）

SA8は4.4m×3.8mの方角住居である。竪穴掘削はK-Ah中でほぼ水平に下げられ、10cm厚でK-Ahブロックをよく含む貼床を敷きつつ（2層）、北西隅に幅25cm・床からの深さ10cmの壁帯溝を部分的に巡らせる。

貼床上面は、特に炉周辺の中央付近で硬化面が発達する。支柱穴は4本で、竪穴内ではやや南東に寄った位置に柱間距離1.8～2.0mで並んでいる。北東の支柱穴は抜き取られた痕跡がある。柱穴埋土は竪穴埋土とほぼ同じである。南西の支柱穴には長径35cm・短径25cmの一抱えもあるような塊石が落ち込んでおり、塊石を除いた時点で柱穴プランを確定できた。北西～南西の支柱穴間には直径60cm・床面からの深さ5cmの平面円形の浅い炉が設けられる。炉は焼土で充填され（3層）、炭化物をよく含んでおり、炉埋土ならびにその周辺の土をフローテーションした結果、コナラ属？等が回収された（詳細は第X章参照）。竪穴北西の床面には壁帯溝に囲まれるように直径70cm・床からの深さ10cmの浅い円形の掘り込みがある。竪穴埋土は暗褐色土を基調とする単調なものである（1層）。南東隅付近の床直上には礫が目立って含まれており、これは風倒木によって巻き上げられた礫が埋土中に混入した結果と思われる。（藤木）

【SA8出土遺物】（第54・61・62図）

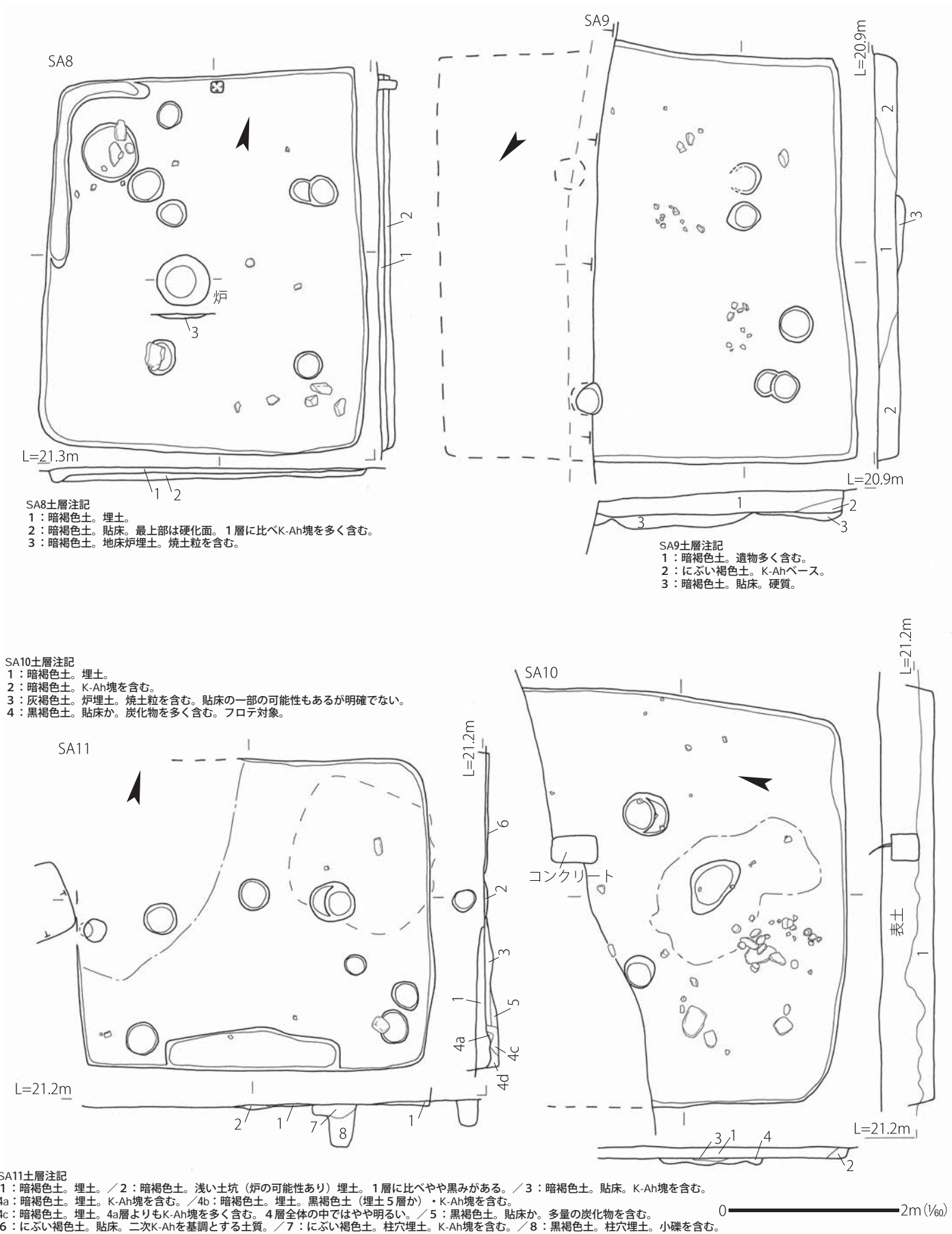
21～29は弥生時代終末期～古墳時代前期前半の小型壺・複合口縁壺・中型壺・鉢・高坏である。24は中型壺で、口縁部がやや直線的に立ち上がり、端部は丸く収まる。外面に細かい右下がりのタタキを施す。肩部にも一部タタキが見られる。29は丸底の鉢で、直線的に立ち上がり口縁内面に稜を持つ。（古田）

149～152は敲石・凹石・砥石・台石である。151は床直上出土の砥石で、他石器は全て埋土中礫の水洗中に回収された。149の敲石の他、搬入礫（未図化）は青みのある砂岩製である。特徴的なのは五ヶ瀬川等からの搬入であろう150の安山岩製凹石である。151は比較的目的が細かく、仕上げ砥石であろう。152は千枚岩製台石で、特に正面の凹みは特徴的である。この他、埋土中より縄文時代のものでであろう砂岩・姫島産黒曜石製剥片等が出土した。

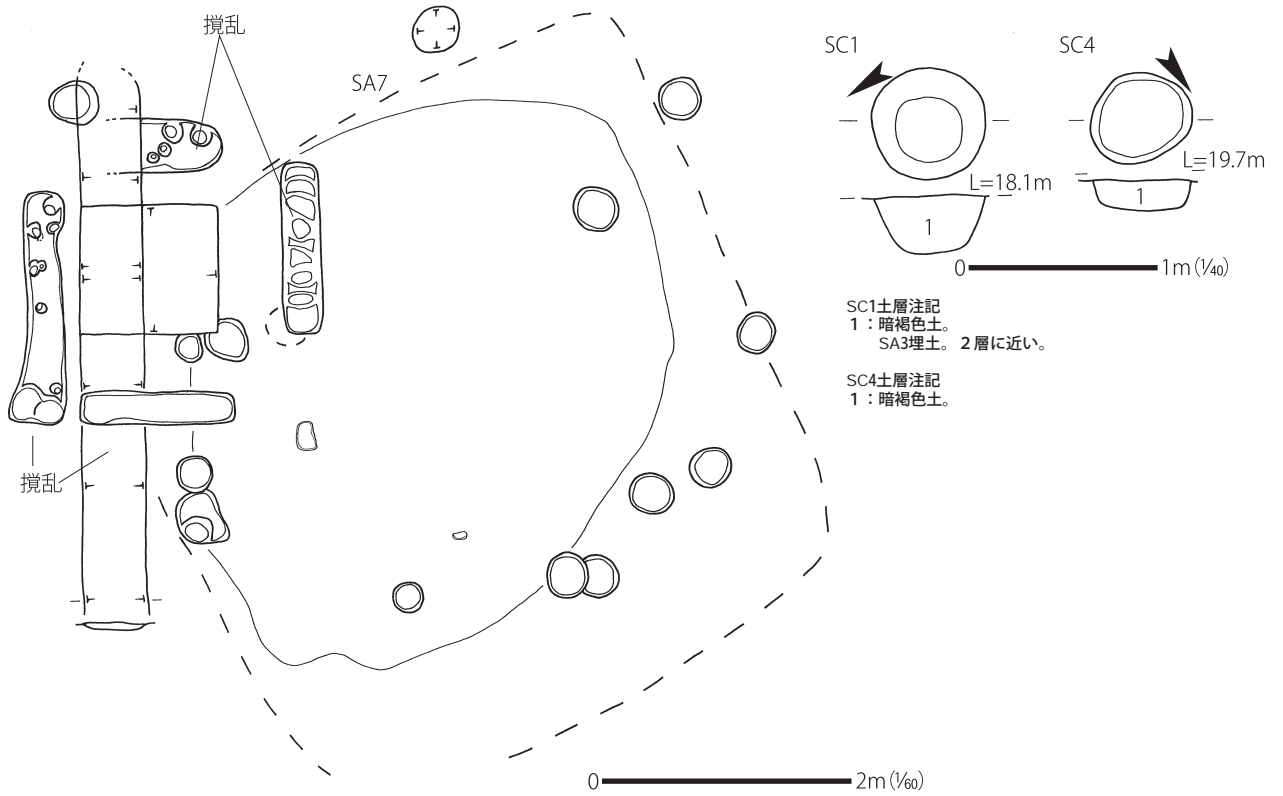
171は刀子の可能性が鉄小片である。（藤木）

【9号竪穴住居跡（SA9）】（第52図）

SA9は、西壁より約3mの位置から東側を畑地造成による段切りにより失っている。西壁は4.7mあることから、概ね5m四方の竪穴住居跡なのであろう。



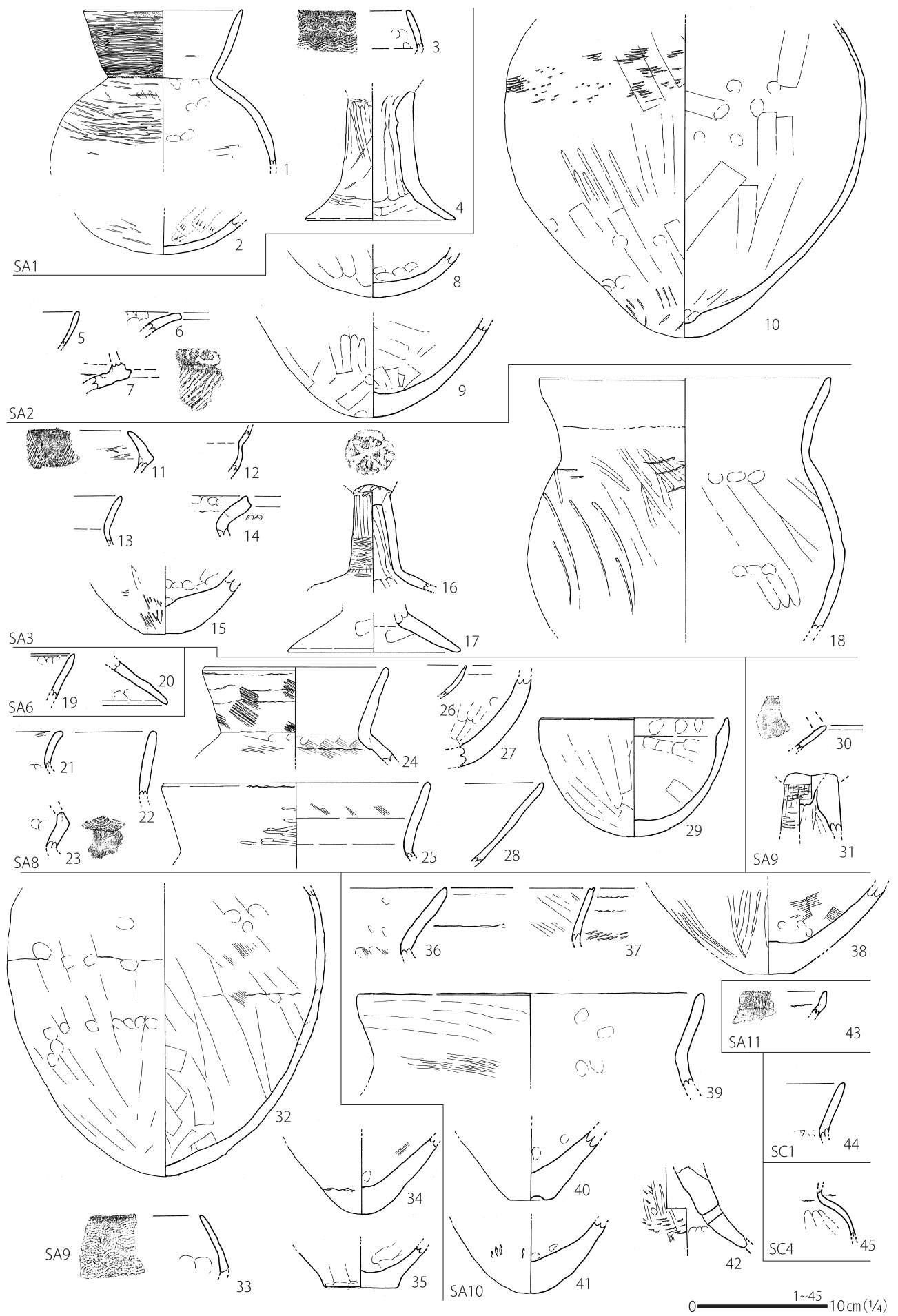
第52図 森ノ上遺跡B区古墳時代遺構実測図（3）SA8～11



第53図 森ノ上遺跡B区古墳時代遺構実測図(4) SA7/SC1・4

遺構の時期	規模	面積 (㎡)	柱穴 (本)	炉	土坑	貼床	壁帯溝	埋土中出土の 土器の時期幅	埋土中の礫			
									千枚岩		砂岩	
									点数	重量	点数	重量
SA1	弥生終末～古墳前期前葉	3.5× 3.0m	10.50	4	○	○		弥生終末～古墳前期前葉	174	12,350g	177	12,650g
SA2	弥生終末～古墳前期前葉	3.7× 3.3m	12.21	4		○		弥生終末～古墳前期前葉	85	7,900g	20	3,000g
SA3	弥生終末～古墳前期後葉	7.0× 6.4m	44.80	4	○	○		弥生終末～古墳前期後葉	998	137,500g	1021	199,500g
SA4	弥生終末	3.6× 2.7m	9.72	2		○	○	弥生終末～古墳中期末	910	58,850g	982	262,940g
SA5	弥生終末～古墳前期前葉	5.0× 5.0m	25.00	4				弥生終末～古墳前期前葉	55	4,500g	64	3,500g
SA6	古墳前期	4.2× 4.2m	17.64	4	○	○		古墳前期	155	3,000g	108	2,000g
SA7	古墳前期	5.0× 5.0m	25.00	4				古墳前期	—	—	1	750g
SA8	弥生終末～古墳前期前半	4.4× 3.8m	16.72	4	○	○	○	弥生終末～古墳前期前半	1707	133,100g	1620	103,900g
SA9	弥生終末	5.0× 4.7m	23.50	4		○		弥生終末	76	23,150g	112	33,700g
SA10	弥生終末～古墳前期中葉	4.8× 3.7+am	18+a	2		○		弥生終末～古墳前期中葉	120	20,600g	110	26,900g
SA11	古墳前期	4.0× 3.6m	14.40	2	○	○		弥生後期中葉	68	4,000g	65	4,950g
SC1	古墳	0.6× 0.6m	—	—	—	—	—	古墳				
SC4	古墳前期後葉	0.6× 0.5m	—	—	—	—	—	古墳前期後葉				

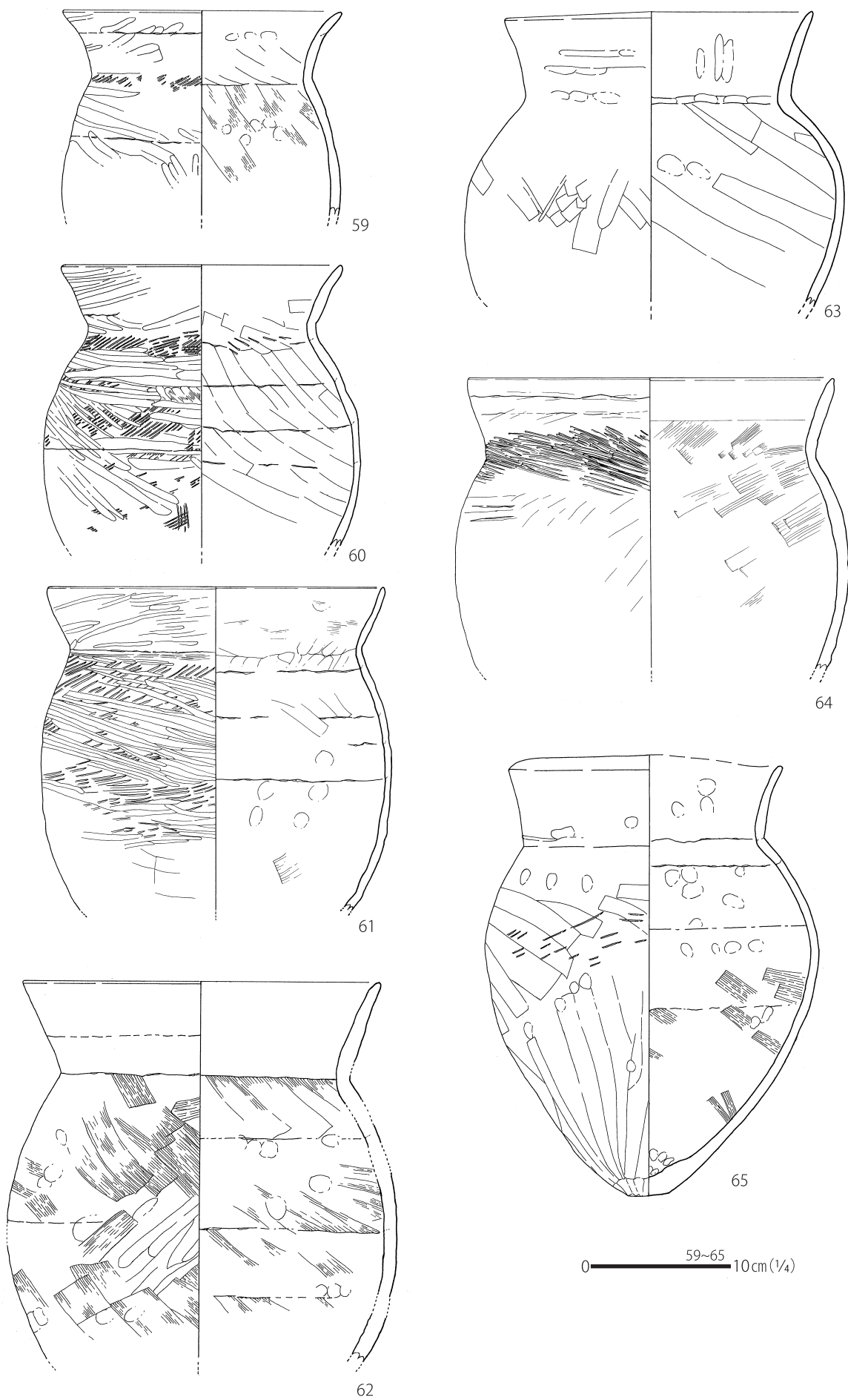
第24表 森ノ上遺跡B区古墳時代遺構一覧表



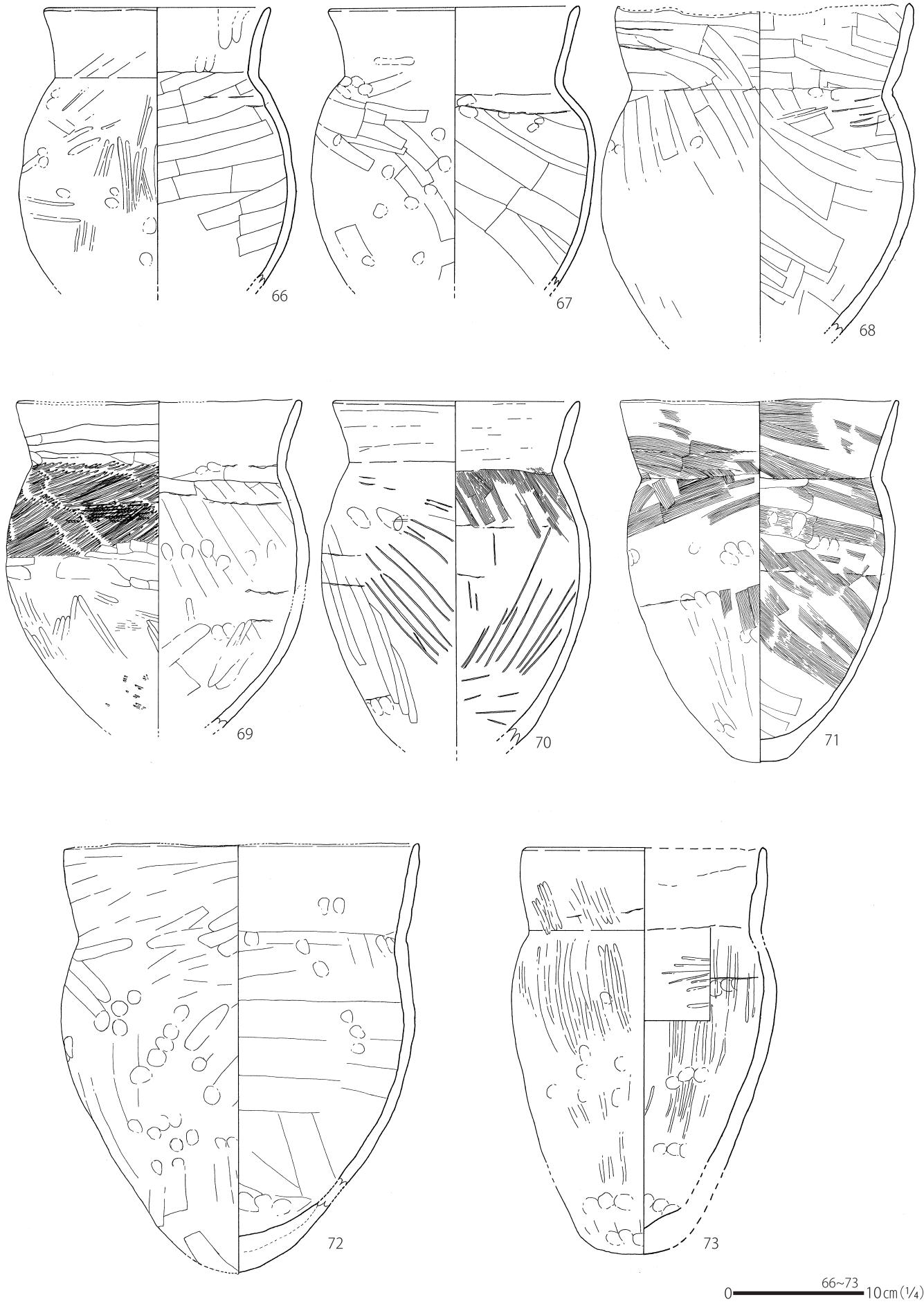
第54图 森ノ上遺跡B区古墳時代遺物実測図(3) SA1~3・6・8~11/SC1・4土器



第55图 森ノ上遺跡B区古墳時代遺物実測図(2) SA4土器



第56图 森ノ上遺跡B区古墳時代遺物実測図(3) SA4土器



第57图 森ノ上遺跡B区古墳時代遺物実測図(4) SA4土器

遺構検出はたいへん困難で、当初はぼんやりと暗くにじむ程度に見えるばかりで（1層）、竪穴住居跡かどうか疑わしいものであった。そこで、等高線に垂直方向にトレンチを設けたところ、暗くにじんだ土の周囲に二次K-Ahとほとんど区別の付かないブロックからなる竪穴埋土（2層）が堆積すると判明した。トレンチ断面の観察では、竪穴床面が硬化しているかわかり、その後の竪穴埋土掘削にあたって大きな手がかりとなった。

竪穴掘削は凹凸が激しく、竪穴中央付近で15cm・西壁際で10cm貼床される（3層）。竪穴床面は全体に非常によく硬化している。壁帯溝・炉等は削平を考慮しても見られない。柱穴は床面に6基あり、支柱穴は明瞭でないながら4本柱の可能性が高い。柱穴直径30～40cmで、床面より最大でも10cmと浅い掘り込みでしかない。竪穴埋土は、壁際にK-Ahブロックを大量に含む褐色土が堆積し（2層）、その後に暗褐色土（1層）が竪穴中央を埋めている。遺物は竪穴埋土のうち1層中に限られ、1層下部のほぼ床面に接するあたりからも甕・高坏等（31・32・34）・台石（153）が出土した。それ以外の遺物は、1層上部に集中して出土した。（藤木）

【SA9出土遺物】（第54・61図）

30～35は弥生時代終末期の複合口縁壺・甕・高坏である。

30は複合口縁の口縁部上部が外れた高坏である。32～34は全体に丸底になりつつある過渡期の甕である。32は全体的に器壁が薄く、板ナデで内外面とも整形している。33は口縁部が長くやや内湾する複合口縁壺であり、外面には波状文が4条施されている。35は底部外面を丁寧に板ナデ整形しており、弥生時代後期の特徴を色濃く残す甕である。（古田）

石器は床直上出土の台石2点がある他、姫島産黒曜石製剥片が埋土中より出土した。153は右面を上にしたような状態で出土した台石である。台石（未図化）は箱状の礫素材で、使用痕は明瞭でない。（藤木）

【10号竪穴住居跡（SA10）】（第52図）

SA10・11は近接して検出され、当初、切り合い関係にあるとみて遺構検出を進めた。SA11の北半は調

査区外に延びている。

SA10は4.8m×3.7+αmの方形住居である。北半は調査区外に延びる。竪穴掘削は、K-Ah最下部からIV層に達する。竪穴中央南寄りに焼土粒が視認できる灰褐色土埋土の深さ5cmの浅い土坑と、それを取り囲むような黒褐色土埋土の不整形の浅い落ち込みが検出された。灰褐色土埋土の土坑は炉であった可能性がある。黒褐色土埋土の落ち込みには炭化物が多く含まれていた。竪穴掘削による凹部を埋めた貼床であろうか。灰褐色土・黒褐色土ともにフローテーション対象とし、イネ科等が回収された（詳細は第X章参照）。支柱穴は2本で、柱間距離は1.8mである。柱穴は直径30～40cmで、床面より50～70cm掘り下げられる。竪穴埋土は壁際にK-Ahブロックを含む三角堆積がある他は（2層）、暗褐色土単調である（1層）。（藤木）

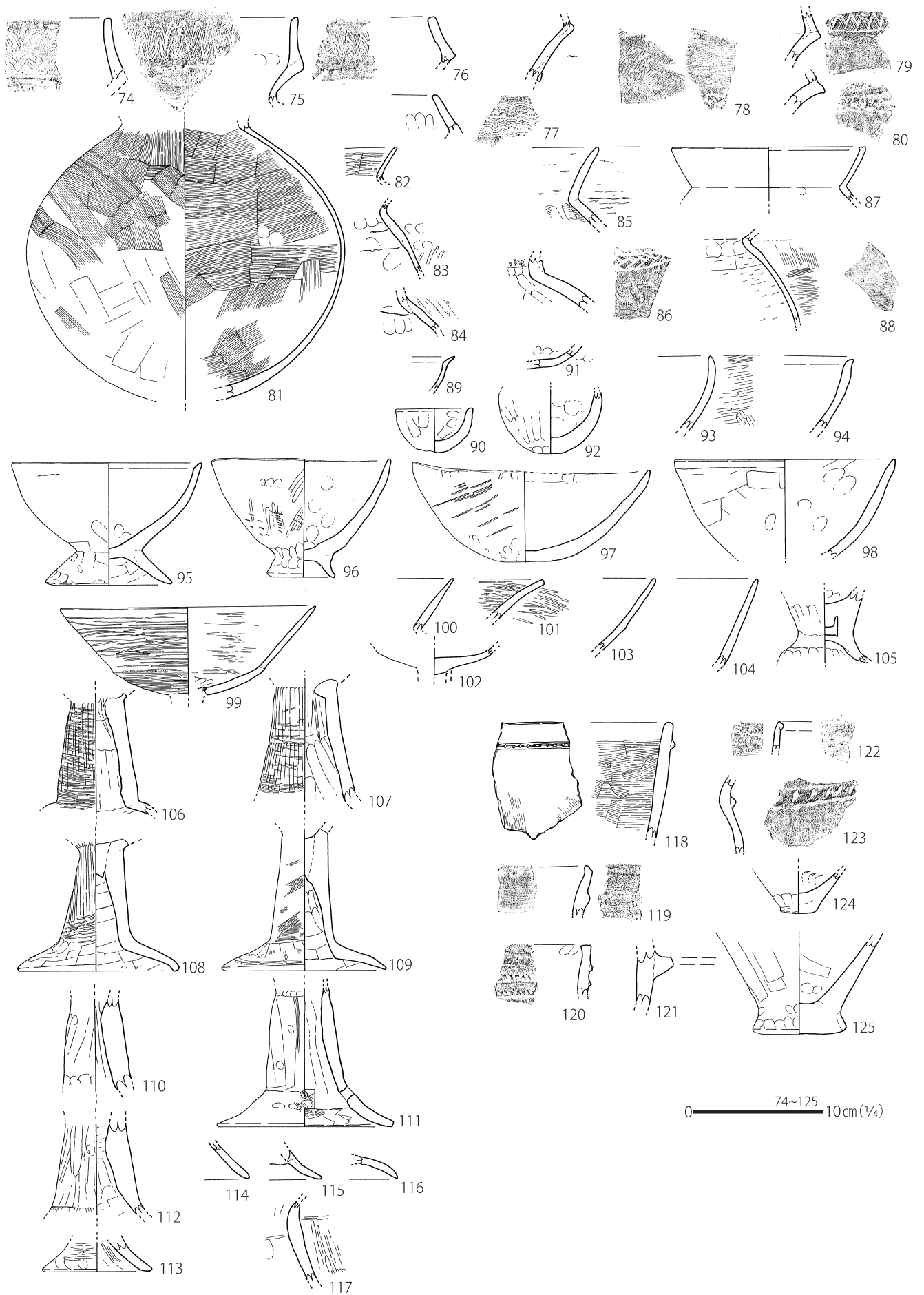
【SA10出土遺物】（第54・61・62図）

36～42は、弥生時代終末期～古墳時代前期中葉の壺・複合口縁壺・甕・高坏である。36・37はやや外反する口縁の壺である。39はやや内湾するように立ち上がる口縁であり、頸部はやや緩やかで明瞭な稜を持たない甕である。底部は丸底になる過渡期の様相がある。42は透かしを持つ高坏であり、外面にはナナメ・ヨコ方向の細かいタタキが見られる。（古田）

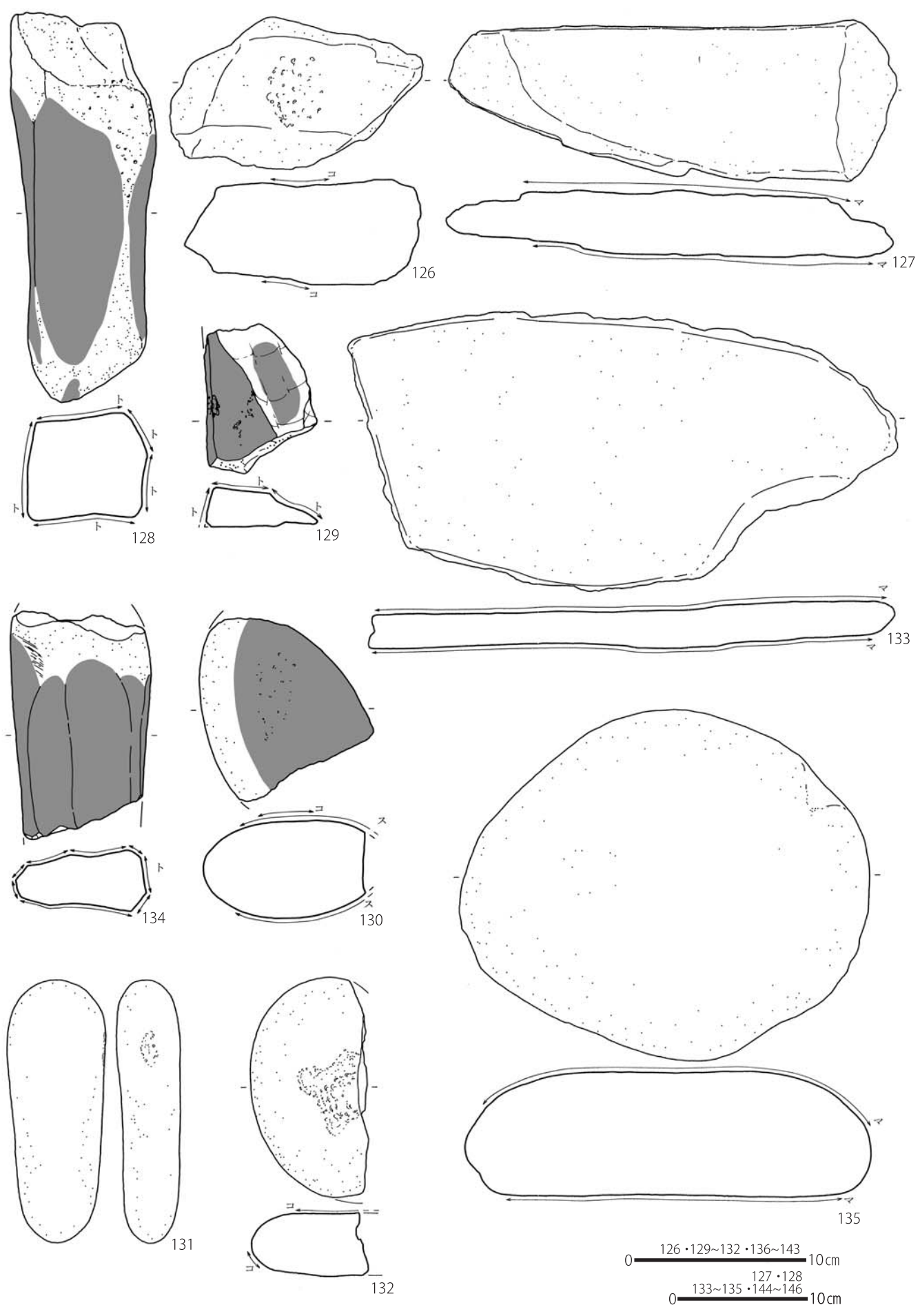
154～159は、磨石・凹石・砥石・台石・搬入礫である。154～156は青みのある砂岩製磨石・凹石・台石である。157は風化が激しく使用痕は追えない台石であるものの、すぐ脇に155の凹石があるという出土状況より台石と認定した。158は茶色の砂岩製で著しく研ぎ込まれた砥石である。未図化には縄文時代のものであろう砂岩製石核1・姫島産黒曜石製剥片1がある。（藤木）

【11号竪穴住居跡（SA11）】（第52図）

SA11は4.0m×3.6mの方形住居である。竪穴掘削は、地山自体が南東に向かって下がるため、北西隅付近ではIV層に達する。北東隅付近にはSA11に切られた状態で長径1.6mの風倒木があり、これによって平面プランの確定にやや難が生じた。床面には、IV層露出範囲よりも低くまで掘削された範囲にのみK-Ahブロックを含む濁った土が貼られ、竪穴掘削による床面



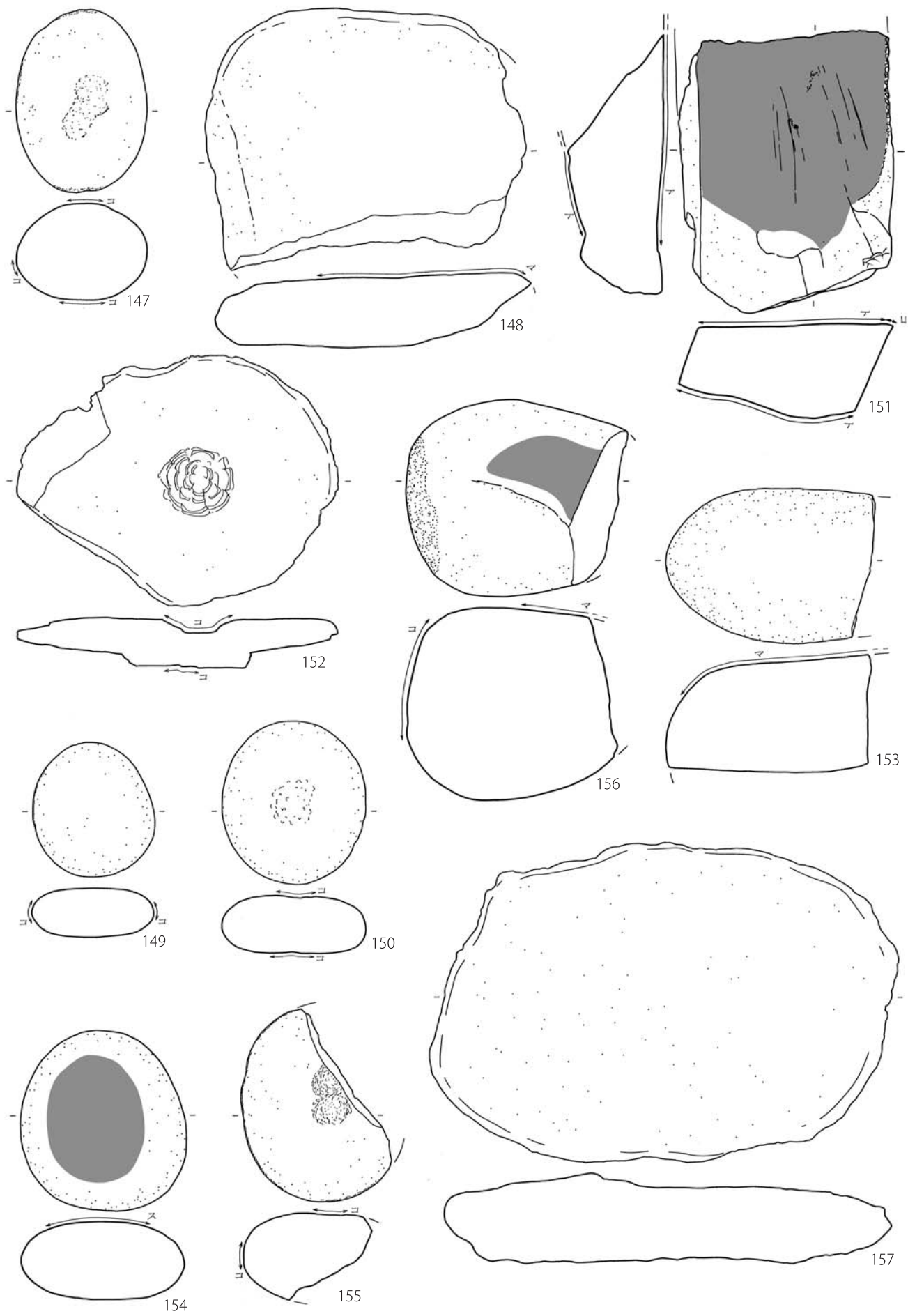
第58图 森ノ上遺跡B区古墳時代遺物実測図(5) SA4 / 古墳時代遺構外他 土器



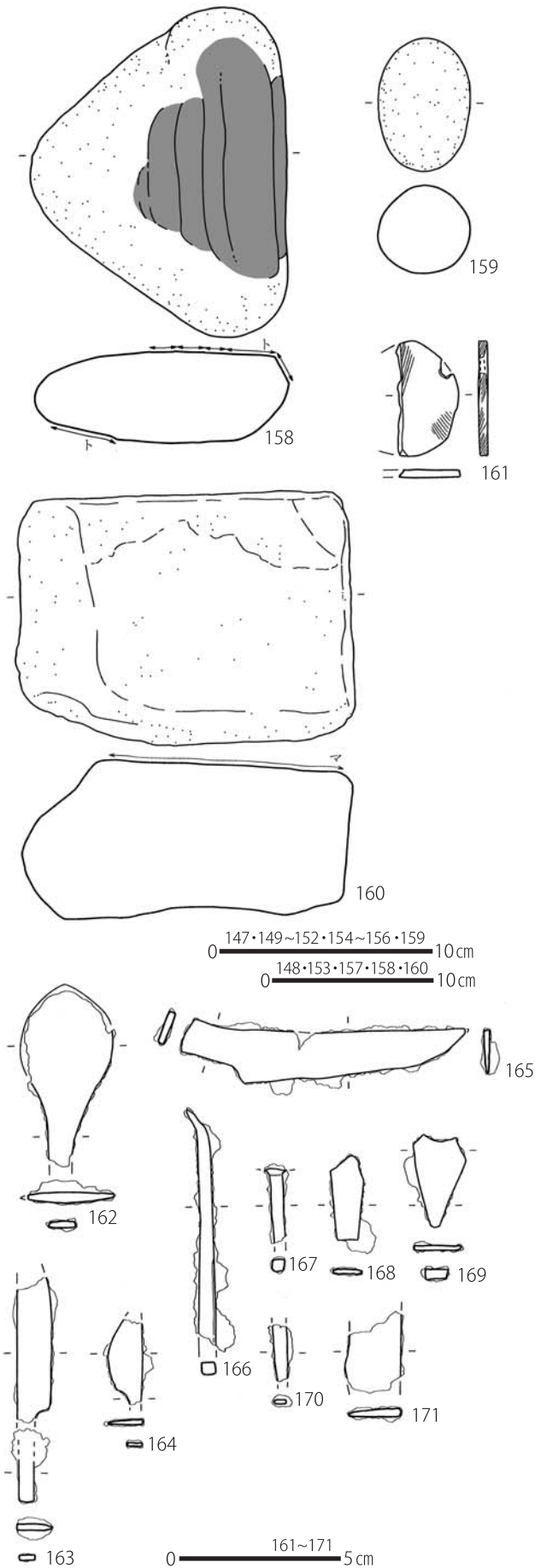
第59図 森ノ上遺跡B区古墳時代遺物実測図(6) SA1~3・5石器



第60図 森ノ上遺跡B区古墳時代遺物実測図(7) SA4石器



第61図 森ノ上遺跡B区古墳時代遺物実測図(8) SA6~10石器



第62図 森ノ上遺跡B区古墳時代遺物実測図(9)
SA10・11石器/SA3~5・8鉄器

の高低差は40cmで、床面より50cm掘り下げられる。東側の支柱穴は抜き取られた痕跡がある。支柱穴を結ぶ軸線より若干ずれて炉が掘り込まれる。炉は竪穴中央よりやや北にずれる。床直上出土遺物は台石1があり、削平の影響もあって少ない。竪穴埋土の残りは南に向かって厚く、北寄りほぼ床面近くまで削平されていた。壁際には三角堆積があり、中央に向かって徐々に埋没している。竪穴埋土中にはIV層中の自然礫等が多く含まれていた。(藤木)

【SA11出土遺物】(第54・62図)

43は弥生時代後期中葉の複合口縁壺である。硬く緻密な胎土であり、連続櫛描山形文が施される。土器量はごく少なく、他は小片のため未図化である。SA11については、弥生時代後期中葉以降であることは確実に、集落跡全体で捉えた場合、弥生時代終末期~古墳時代前期の竪穴住居跡と見てよからう。(古田)

160は台石である。(藤木)

【1・4号土坑(SC1・SC4)】(第53図)

SC1はSA3・SA5それぞれの南壁より約2mの位置にあり、直径60cm・残深30cmで椀型に丁寧に掘り込まれている。埋土はSA3埋土2層に近い。SC4はSA6南壁より40cmの位置に掘り込まれている。平面60cm×50cmの楕円形で、土坑断面は逆台形となる。残深は20cmと浅く、隣接するSA6が著しく削平されていた点を踏まえるとSC4も削平が進んでいると見てよからう。なお、SC2・SC3はSA3床面に掘り込まれたもので、SA3とともに報告している。

【SC1・SC4出土遺物】(第54図)

44はSC1出土で、古墳時代の壺である。45はSC4出土の古墳時代前期後葉の壺で、肩部に稜を持つ。

【その他の弥生~古墳時代の遺物】(第58・62図)

118~125はSA1・SA3・SA5の埋土中より出土した弥生時代前期末から中期の土器である。刻み突帯甕や底部片等がある。(古田)

161は緑色頁岩を用いた円形石製品である。滑石・頁岩製模造品等が古墳時代等にあることを踏まえると、161も古墳時代の所産の可能性はある。(藤木)

第3節. 小結

調査の結果、森ノ上遺跡B区は、弥生時代終末期～古墳時代前期の竪穴住居跡11軒・土坑4基からなる、近隣の中野内遺跡と並んで北浦町最大級の古墳時代集落跡となった。出土遺物の時期幅は弥生時代前期から古墳時代中期末までと広く、今回検出された以外にもB区一帯に弥生時代前期から古墳時代中期末までを含む集落跡の広がる可能性が高いことを示唆している。

竪穴住居跡の構造設計は、4本柱の場合、竪穴隅の対角線上に柱穴が配置され、炉がある場合はその対角線上に掘り込まれることが一般的である(SA1・3・6)。SA8は炉が偏った位置に掘り込まれる。2本柱の場合、壁～柱穴：柱穴間：柱穴～壁の配置を見ると、長方形プランのものは長軸上に1：2：1(SA4・11)、方形プランのものは1：1：1(SA10)となる。SA11は柱穴間の中央に炉が掘り込まれる。

床面積で最大規模の竪穴住居跡は6～7m四方で床面積44.8㎡のSA3であり、他竪穴住居跡が9.72～25.0㎡(平均約17.3㎡)であるのに対して格段に大きい。柱穴数・竪穴規模等を問わず、11軒中6軒は炉を竪穴内に持たない。貼床は11軒中9軒に見られ、普遍的である。一方で壁帯溝は2軒のみと少ない。

竪穴住居跡の床面には土器・石器・鉄器等が少量ながら残されており、当遺跡の一般的なあり方となっている。そのような中、SA4のみは竪穴内にある程度の土砂が堆積した後の浅い皿状の凹みの上に、大量の古墳時代前期土器・石器の他、鉄製刀子やモモの核・礫等が廃棄されたような状態で折り重なって出土し、これに伴って焼土も検出された。遺物の時期幅も、出土量の多さもあってか弥生時代から古墳時代中期末までと広く、この出土状況は他竪穴住居跡のそれと一線を画するものである。SA4に大量に土器等が残されるのは竪穴がある程度まで埋没して浅い凹地となった後であり、おそらくは一定期間継続して用いられた廃棄場であったと推定される。

森ノ上遺跡B区出土の土器は土師器甕を中心に壺・鉢・高坏等があり、布留系の土器も一定量出土した。須恵器は出土していない。いずれも、これまで資料の少なかった古墳時代前期の土器群として注目されるものである。注意されるのは古手の弥生土器も少量なが

ら出土した点であり、古墳時代前期を中心とする集落以前に、散発的ながらも人間活動が及んでいたことが垣間見られる。弥生時代から古墳時代前期を通して見られる土器の特徴は、延岡地域あるいはその南の宮崎平野方面と言うよりも、大分方面との共通性の方が目に付く。これは、森ノ上遺跡を往来した人々の交流関係等の方向性・嗜好性を示唆していよう。

石器には敲石・磨石・砥石・台石等があり、器種によって石材の嗜好性が分かれている。すなわち、敲石・磨石の類は青みのある砂岩であり、砥石は器面が黄色に風化した砂岩あるいは灰色で目の細かい粘板岩である。台石は特定石材との結びつきは弱く、良質なものをから節理や石英脈の多く走る粗質のものまで各種の砂岩が用いられた他、北浦地域ならではの千枚岩製のものも一定量見られた。石材確保は地産地消を基本としつつ、少量ながらも最も近くて五ヶ瀬川等でしか採取できない安山岩・花崗閃緑岩等も石器材として持ち込まれていた点は、当時の人の動き等を推す上で重要である。また、漁具等の出土がなかった点も注意され、海の近さからイメージされる生業＝漁撈でなく、山の恵みや農耕を意識した生業を想像させる。もちろん、土錘・石錘を用いないウケ等を駆使した漁撈の存在した可能性も残っている。

鉄器についても、鉄鏃・刀子等が一定量出土し、宮崎県北地域の弥生時代後期以降に鉄器が多く見られる点とよく符合している。

この他、炉埋土等のフローテーションで植物質食料の一端が明らかとなった(詳細は第X章参照)。中でもイネ・コムギ等の出土は、北浦周辺に古墳時代水田・畑地等の存在を想起させるものであり、今後の調査が期待される。(藤木)

※なお、弥生・古墳時代以外の森ノ上遺跡の調査成果は次年度刊行分で報告予定である。

土器観察の方法等は、中野内遺跡に同じ。74頁参照。

No.	種別	位置	口径	残高	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	胎土	石	備考
1	小型壺	SA1床	12.3	11.8	5YR6/8 橙	5YR7/6 橙	全体ハケメ(ヨコ)後ミガキ(ヨコ)(口縁)、タテハケ(頸部)、ヨコミガキ(タテハケ後)細い	(体部)ユビおさえ、全体ナデ丁寧、ヨコ板ナデ	密	a/g/b/c 多	丁寧、外面塗塗りか
2	小型壺	SA1			7.5YR7/6 橙	7.5YR6/6 橙	ユビおさえ(下) 板ナデ(体部)	ユビおさえ(下) 板ナデ(体部)	密	a/g/b/c 多	1と接合可能
3	複合口縁壺	SA1		3.0	2.5YR6/6 橙	2.5YR6/6 橙	波状文(右)	ユビナデ	密	b/ef 多	
4	高坏	SA1床		9.8	2.5YR6/6 橙	2.5YR6/4 にぶい橙	ミガキ(ヨコ)(脚柱)、ミガキ(タテ)(脚柱)、板ナデによりケズリ、ミガキ(ヨコ)(脚幅)	しぼり(脚柱)、ヨコナデ(板ナデ)	やや密	a/ef/b/c 多	
5	小型丸底壺	SA2		2.4	5YR7/8 橙	5YR6/6 橙	マメツ	ナデ	やや密	b 多	
6	甃	SA2		2.0	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	ナデ	ユビおさえ	密	a/g/b/c 多	
7	複合口縁壺	SA2		2.0	5YR6/6 橙	7.5YR6/4 にぶい橙	円形浮文、ナナメハケタタキ	接合ライン	やや密	b/g/b/c 多	
8	甃	SA2床		2.4	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	ユビナデ	ユビおさえ(底部)	やや粗	b/g/c 多	外→圧痕?
9	甃	SA2床			7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/6 橙	ミガキ一部、板ナデ多方面から、(底)ユビおさえ	一部ハケメ(少しマモウ)、他板ナデ	やや密	a/g/b/c 多	
10	甃	SA2床		23.9	5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	タタキ(底まで)、一部煤化、板ナデ後ユビ(下)	一部煤化(黒斑)、強ハケ(底)ユビおさえ、板ナデ(体下)	やや粗	b/c 多	
11	複合口縁壺	SA3		2.6	7.5YR6/6 橙(煤)	7.5YR7/6 橙	鑿歯文	強ナデ	やや密	a/b/c 多	
12	小型丸底壺	SA3			7.5YR8/3 浅黄橙	7.5YR8/4 浅黄橙	ケズリ(摩擦)?(頸~下)、ナデ(頸~上)	ナデ	密	a/b/g/c 多	基底推定 5cm 胎土白く非在地?
13	小型丸底壺	SA3		3.7	10YR7/6 明黄褐	10YR7/4 にぶい黄橙	丁寧ナデ	ナデ、(頸~)強ナデ(ケズリの可→マモウ)	密	a/b/g/c 多	
14	甃	SA3		3.0	7.5YR7/6 橙	10YR8/4 浅黄橙	頸部→一部煤化、口唇部→強ナデによる凹み、(頸)ナナメハケ後ユビナデ	接合後ナデ、ユビナデ(口唇部)	やや密	b/g/c 多	
15	甃	SA3		4.4	10YR7/4 にぶい黄橙	5YR7/6 橙	タテ(ハケ)のタタキ、上部、ナナのタタキ	ユビナデ、(底)竹管紋?	やや密	b/c 多	
16	高坏	SA3床		7.5	5YR7/6 橙	7.5YR6/6 橙	タテミガキ後ヨコミガキ(脚柱)、板ナデ(脚上)、ヨコミガキ(脚幅)	しぼり(脚柱)、ユビナデ(脚幅)	密	e/g/b 多	接合部に刻み目を入れる
17	高坏	SA3		3.0	7.5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	ユビナデ	ユビナデ	やや粗	b/c 多	基底 13.3cm
18	甃	SA3床	22.4	19.1	5YR7/6 橙	7.5YR6/6 橙	ミガキ(タタキ後ミガキ)、口→煤化、胎土粗く石が飛ぶ、タタキではない(ミガキの一種)	板ナデとユビおさえ	やや密	b/g/b/c 多	
19	甃	SA6床		3.5	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR8/6 浅黄橙	ユビナデ	ユビナデ、煤化	やや密	b/g/b/c 多	
20	高坏	SA6		3.5	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	ユビナデ(3段分けて)	ユビナデ	やや密	b/g/b/c 多	
21	小型壺	SA8		2.7	7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR8/4 浅黄橙	強ナデ	マメツハケメ、ユビナデ(頸)	密	b/g/c 多	
22	壺	SA8床	23.0	4.9	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	強ナデ	強ナデ、煤化	やや粗	a/b/c/g 多	外→口→煤化
23	複合口縁壺	SA8		2.6	5YR7/4 にぶい橙	5YR4/7 にぶい橙	円心状文様、波状文	ナデ(ユビ)	密	b/g/b/c 多	外→やや焼けてピンク
24	壺	SA8	14.0	7.2	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	接合後ヨコ方向ナデ後タタキ	接合ナナメハケ、ナナメハケ	やや密	b/g/b/c 多	内側植付痕跡?
25	甃	SA8床	20.1	5.8	7.5YR7/6 橙	7.5YR6/6 橙	ナナメハケ後ヨコナデ(口)、ヨコ方向ナデ	丁寧ミガキ後強ヨコ方向ナデ、口縁内から外へ捲る	やや密	b/c 多	
26	小型碗? 坏?	SA8		2.3	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	ナデ	ナデ	密	e/b 多	布留系か?
27	甃	SA8床		6.1	7.5YR7/6 橙	10YR6/3 にぶい黄橙	一部煤化、黒斑、タテ方向板ナデ	ユビナデ	やや密	b/f/c 多	
28	高坏	SA8床	5.0	6.1	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	細いミガキ(ナナメ)	ユビナデ	やや密	a/b/c 多	
29	鉢	SA8床	14.3	9.1	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	底部を上を持ち丁寧板ナデ		やや密	b/g/b/c 多	
30	複合口縁壺	SA9		1.9	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	細いヨコ方向ナデ	ナデ	密	e/b 多	
31	高坏	SA9床		4.3	7.5YR7/6 橙	7.5YR6/1 褐灰	タテミガキ後ヨコミガキ	しぼり、脚柱中央頂部ユビナデ	密	f/b/c 多	
32	甃	SA9床		22.0	5YR6/6 橙	5YR7/6 橙	板ナデ、ハケメ(体上)、接合のみとユビおさえ	板ナデ	やや密	b/c 多	推定基底 2cm
33	複合口縁壺	SA9		4.6	7.5YR8/6 浅黄橙	7.5YR8/4 浅黄橙	波状文(4条くらい)	ナデ(ユビ)	密	b/g/b/c 多	
34	甃	SA9床		5.9	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/6 橙	不明、接合	ハケメ(タテ)、ユビおさえ	やや密	b/c 多	
35	甃	SA9床		3.2	2.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	板ナデ(タテ)、ユビナデ(底へ)	ユビナデ	密	b/f/c 多	基底 5.8cm
36	壺	SA10床		5.2	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	接合、強ナデ	ユビナデ、板ナデ後ユビナデ(口)、ハケ後ユビおさえ(頸)	やや密	c 多	
37	甃	SA10床		4.1	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	接合ニカ所、タタキ(頸~体)、口縁(凹み)、(外)ピンク煤化	強板ナデ	密	b/c 多	
38	甃	SA10床		3.8	7.5YR7/4 にぶい橙	5YR6/6 橙	タテミガキ、平底→ナデ	ハケメ、ユビおさえ	やや粗	b/g/b/c 多	
39	甃	SA10床	26.4	6.8	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	強ナデにより凹凸、強ナデによるハケメ風、口縁炭付着	ユビおさえとナデ	やや密	b/g/b/c 多	口→煤化
40	甃	SA10床		5.4	10YR7/4 にぶい黄橙	5YR6/4 にぶい橙	一部タタキ?あり、マメツと後世のキス	ユビナデ、やや煤化	やや密	b/c/f 多	
41	甃	SA10床		5.4	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	タタキの跡(タテ)、黒斑	ユビおさえ	やや密	b/c/f 多	
42	高坏	SA10床		5.9	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	タテミガキ後タタキ(細)	ユビナデ	密	b/f/c 多	2孔残る。外から穿孔。
43	複合口縁壺	SA11		1.4	5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	波状文(1条)、ナデ(強い)	接合	密	b/f/c 多	
44	壺	SC1		4.2	7.5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	ナデ、煤化(不明)	ナデ(口)接合後、ケズリ(頸)	密	b/f 多	
45	壺	SC4		3.9	7.5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	板ナデ	ユビナデ	やや密	b/g/b/c 多	
46	甃	SA4		3.3	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	ヨコ方向ナデ	ヨコ方向ナデ	密	b/c 多	外→煤化→紐の跡?
47	甃	SA4		5.4	5YR6/8 橙	10YR7/3 にぶい黄橙	ヨコ方向ミガキ、(口)少し煤化、煤化:ヨコタタキ(細い)	ヨコナデ、ケズリ	密	e/f/b 多	+88%の可能性
48	甃	SA4		17.4	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	細いタテハケナデ(体)、マメツ(体下)、一部煤化	ハケメ(ヨコ)太い←一部マメツ	やや密	b/e/c 多	
49	甃	SA4	20.0	16.9	7.5YR6/6 橙(煤)	5YR6/6 橙	ハケ後ユビナデ、接合ラインユビナデ、ハケメうすい、一部煤化	(口)ユビナデ、(頸)ユビナデ、(肩)接合ユビナデ、一部ミガキ	やや粗	b/g/b/c 多	
50	甃	SA4		10.4	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	ユビおさえ、タタキ一部残る、煤化	細いハケナデ	やや密	b/g/b/c 多	外→煤化
51	甃	SA4		17.2	7.5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	板ナデ(タテ)、ユビナデ	板ナデ、(底)ハケ後ユビおさえ	やや密	b/c 多(D)	
52	甃	SA4		4.0	10YR7/4 にぶい橙	10YR7/4 にぶい橙	板ナデ	板ナデ後ユビナデ	やや密	b/c 多	
53	甃	SA4		9.6	7.5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	板ナデ(一部ミガキ)→ナナメ方向、タタキ→タテ方向(タタキ潰れている)	黒斑:ハケ後ユビナデ	やや密	b/g/b/c 多	
54	甃	SA4		11.1	7.5YR6/6 橙	10YR6/4 にぶい黄橙	タタキ(タテ後ナナメ、ナナメ後タテ)	タテミガキ、ユビおさえ	やや密	b/g/b/c 多	
55	甃	SA4	17.2	21.5	5YR6/6 橙(煤)	5YR7/6 橙	(口)板ナデ、(肩~体)ユビおさえ、板ナデ、(体部)ユビおさえ後ミガキ	(接)板ナデ、(頸~体)接合	密	b/c 多	

第25表 森ノ上遺跡B区遺物観察表(1) 土器

土器観察の方法等は、中野内遺跡に同じ。74頁参照。

No	種別	位置	口径	残高	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	胎土	石	備考
56	甃	SA4	21.3	36.3	5YR6/6 橙	5YR6/8 橙	(口～頸) 右あがりタタキ、(肩～体) 一部タタキ後太いミガキ、(体部下半) ヨコ方向板ナデ、マメツ、(底) タタキあり	(体上) 全体板ナデ、(体下) ハケメ残り、(底) ユビナデ	やや密	b/c 多	推定基底 4.2cm
57	甃	SA4	20.5	26.8	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	(口) ミガキヨコ、(口～体下) ヨコタタキ、ナナメタタキ、間にヨコミガキ、(体下～) ユビナデ	全体ナナメハケ：太い、(下半) タテハケ：太い		b/c 多	内→黒斑あり
58	甃	SA4	19.6	29.0	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	(肩部) 右上がりタタキ後ヨコ方向ミガキ、(体部) 右上がりタタキ後タテミガキ、(下部) タテ板ナデ	ナナメハケメ、接合後ハケメ、ユビおさえもあり	やや密	b/f/c 多	外→まばらに煤化
59	甃	SA4	19.9	14.4	5YR6/6 橙	5YR7/6 橙	(口) ナナメミガキ、接後ミガキ、(頸) 右上がりタタキ、(体) ナナメミガキ、(体～下) タテミガキ、外面煤化	(口) ユビおさえ、接後、(口～体) 細かいハケ、磨耗して一部見えない	やや密	g/b/c 多	
60	甃	SA4	19.7	20.0	5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	(口) ヨコ方向ミガキ、タタキ→ナナメ右後ヨコ方向、(体) タタキ後ミガキ、(体下半) タタキ後ナナメミガキ、剥離面ユビナデ、体部中央煤化	板ナデ(接) 消す	やや密	b/c/f 多	
61	甃	SA4	24.0	16.6	7.5YR7/6 橙(煤)	5YR6/6 橙	(口) ヨコ方向ミガキ、タタキ後ヨコ、ナナメ方向ミガキ、煤化	接合4カ所、ユビおさえ、(底) 一部ハケ残り	やや密	a/b/c 多	
62	甃	SA4	25.6	27.1	5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/6 橙	(口) 接合、粘土貼り付け、(体上) ナナメハケ、ユビおさえ、(体下) ミガキ、(体部下半) ハケ、煤化	ナナメハケ、接4→ハケメ	やや密	b/c 多	
63	甃	SA4	21.8	21.0	5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	(口) 段つくほどのユビナデ、(体) 板ナデ、一部ミガキ、体部中央煤化	(口) ユビナデ縦方向、(頸) 稜線を持つユビナデ、(体部) 板ナデ	やや密	a/g/b/c 多	
64	甃	SA4	25.9	20.8	5YR5/6 明赤褐	5YR7/4 にぶい橙	タタキ(2段分けて)、(口) 接合後ヨコナデ、調整不明	ハケメ先端が強く残り、ハケメは薄く残る(太いハケ)、(頸) 細かいハケ	やや粗	b/c 多	
65	甃	SA4	19.6	31.4	5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	(口) ユビおさえ、(肩) ユビおさえ、板ナデ後ナナメ右下向にタタキ、(下部) タテ板ナデ後接合部をユビおさえ、体部中央煤化	接合三箇所、ユビおさえ、(体部) 接合部はナナメハケ、(下部) ナナメハケ、(底) ユビおさえ	やや密	b/c 多	基底 2.7cm
66	甃	SA4	17.0	21.1	7.5YR7/6 橙	5YR6/6 橙	(口) 板ナデ、(肩～体) ユビおさえ、板ナデ、(体部) ユビおさえ後ミガキ、(体下半) タテミガキ、体部中央煤化	細かいハケ(板ナデ)	やや密	b/c 多	口縁→楕円形
67	甃	SA4	28.8	21.4	5YR6/6 橙	7.5YR7/6 橙	稜線(頸部)、板ナデ(斜め方向)、煤化全体に	(頸) ハケメ後ユビナデ、(体) 板ナデ：ナナメ、ヨコ、(下) 板ナデ：タテ、バラバラに煤化	やや密	b/c 多	ひび顕著、口縁(欠)
68	甃	SA4	21.9	25.0	5YR6/6 橙	5YR7/6 橙	(口) 接後板ナデ、(体) 板ナデ後ユビおさえ、(体下半) マメツ激しい、下部一部煤化	(口) ヨコ板ナデ、(頸) 一部強いナデ、タテナデ、(体) ナナメ板ナデ	やや密	b/c 多	
69	甃	SA4	21.3	23.5	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/6 明黄褐	(口) ユビナデ、(頸～体) ナナメタタキ後ヨコ、(体) ナデ、ミガキ、(体～半) タテミガキ、(下～) ナナメタタキ	(口～体) 板ナデ後ユビナデ、接合見える、(下～) 板ナデ or ユビナデ		b/f/c 多	
70	甃	SA4	19.3	25.7	2.5YR6/6 橙	2.5YR6/6 橙	(口) 強ヨコナデ、(口～肩部) 煤化、ユビおさえ後強板ナデ、体部下からナナメ下板ナデ、(下部) ユビおさえ、口～体煤化	(口) 稜を持つ、強ヨコナデ、ハケメで接合消す、(体部) 接合、タテ板ナデ、(下部) ヨコナデ	やや密	b/c 多	重い
71	甃	SA4	21.0	27.5	7.5YR6/6 橙	5YR6/8 橙	(口～肩) ヨコ方向ハケメ、ナナメもあり、(体上半) 接合後タテハケ後ユビおさえ、(下半) タテ板ナデ、体中央→煤化			a/b/c 多	
72	甃	SA4	27.2	32.6	7.5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	(口) 強ナデ、タタキ風、(肩) ユビナデ(体) 板ナデ後ユビおさえ、下部煤化	(口) ユビおさえ、(体) 板ナデヨコ→ユビおさえ、(体下半) 板ナデタテ→ユビおさえ、(底) 板ナデ後ユビおさえ、全体に煤化	やや密	f/b/c 多	
73	甃	SA4	18.6	31.0	7.5YR6/4 にぶい橙	5YR5/4 にぶい赤褐	煤化(まばらに)、(口) タテミガキ(接合消す)、(体) 煤化後タテミガキ後ユビおさえ	接合をタテ、ヨコのミガキ、部々で全然異なる調整、タテミガキ後ユビおさえ	やや密	b/c 多	(内) 植物痕・黒斑、重い(厚い)
74	複合口縁壺	SA4		3.6	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	波状文条	ヨコ方向ナデ	密	b/c 多	
75	複合口縁壺	SA4		6.5	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/4 にぶい橙	波状文、(ケ)→突帯	黒斑、ユビナデ	密	g/b/c 多	
76	複合口縁壺	SA4		3.5	7.5YR8/6 浅黄橙	7.5YR8/4 浅黄橙	波状文	ナデ	密	g/b/c 多	
77	複合口縁壺	SA4		3.0	5YR6/8 橙	2.5YR6/6 橙	波状文	ユビナデ	密	b/c 多	
78	複合口縁壺	SA4		3.4	2.5YR6/6 橙	2.5YR6/6 橙	ナナメハケメ、接、ハケメ(ナナメ)後貼り付け突帯	接→ヨコナデ、ヨコ方向ハケメ	密	b/c 多	
79	複合口縁壺	SA4		3.5	7.5YR7/6 橙	7.5YR6/6 橙	ユビナデ(口下)、波状文1条残る	ナデ	やや密	b/c 多	
80	複合口縁壺	SA4		2.0	5YR6/6 橙	10YR6/4 にぶい黄橙	ナデ、波状文	ナデ	やや密	b/c 多	
81	甃	SA4	21.3	10YR6/4 にぶい黄橙・5YR4/8 赤褐	10YR6/4 にぶい黄橙	(肩部) タテハケ、(体部) ナナメハケ、(体下半) 板ナデ	ナデ、波状文	(体上) ヨコハケ、(体下) タテハケ	密	e/g/b 多	布留系か
82	甃	SA4		2.5	5YR5/6 明赤褐	7.5YR6/6 橙	強ナデ	ハケメ(ヨコ方向)	密	e/g/b 多	
83	甃	SA4		5.9	7.5YR8/4 浅黄橙	5YR8/3 淡橙	(体) ユビナデ、(～体) タテミガキ	ユビナデ	やや密	b/g/c 多	
84	甃	SA4		2.4	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/6 橙	細かいハケ(2段)←接と対応	ユビナデ	密	g 多	
85	甃	SA4		6.0	10YR6/6 明黄褐	10YR6/6 明黄褐	タタキ(平行)、接合(頸)、煤化	(口) ハケ後強ヨコナデ、(頸) ナナメハケ後ユビおさえ	やや密	b/c 多	
86	壺	SA4		4.0	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	突帯：下～上へ(付けてる文様)、ユビナデ		密	b 多	
87	甃	SA4	15.0	3.8	5YR6/4 にぶい橙	5YR6/6 橙	ナデ分けてる(2つ)、ヨコ方向ナデ	口縁凹、強ヨコ方向ナデ、ユビナデ(頸)	密	e/b/f 多	布留系か
88	壺	SA4		6.5	7.5YR6/4 にぶい橙	5YR6/6 橙	タテハケ、ヨコ方向ミガキ後浮文(円形)	ケズリ(完全に)	密	e/b/g 多	布留系か
89	小型鉢	SA4		2.4	10YR8/1 灰白	10YR8/1 灰白	ナデ	ユビナデ	やや密	c 多	
90	小型鉢	SA4	5.8	3.5	5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	ユビナデ	ユビナデ	やや密	a/c/f 多	手捏ね
91	鉢? 甃?	SA4		1.2	2.5YR6/3 にぶい橙	2.5YR4/1 黄灰	ユビナデ	ユビナデ、煤化	密	b/c 多	手捏ね
92	小型鉢	SA4		4.7	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR6/6 明黄褐	平底板ナデ	ユビナデ	密	b/c 多	手捏ね
93	坏	SA4		2.6	5YR6/6 橙	7.5YR7/6 橙	タテミガキ(体)、ヨコミガキ(口～)	ヨコナデ、ユビナデ	密	b/c 多	
94	坏	SA4	25.6	27.1	7.5YR7/6 橙	5YR7/4 にぶい橙	(口) 接合、粘土貼り付け、(体上) ナナメハケ、ユビおさえ、(体下) ミガキ、(体部下半) ハケ、煤化	やや密			

第26表 森ノ上遺跡B区遺物観察表(2) 土器

土器観察の方法等は、中野内遺跡に同じ。74頁参照。

No	種別	位置	口径	残高	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	胎土	石	備考
95	脚付碗	SA4	14.5	9.4	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	丁寧ナデ、脚との接合上板ナデ	脚(内)板ナデ後ユビナデ、丁寧ナデ後ユビおさえ	やや密	a/b/c 多	基底 9.7
96	脚付碗	SA4	13.6	9.1	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	ミガキ後タタキ(ヨコ)、ユビおさえ、(脚)ユビおさえ	ユビおさえ(ナデ後)	やや密	a/b/c 多	基底 4.2
97	鉢	SA4	18.2	6.9	2.5YR7/3 浅黄	7.5YR7/6 橙	半分(煤化)、一部タタキ?(強ハケぐらい)、ユビおさえ	ナデ(マモウ気味)	やや密	b/c 多	
98	高坏	SA4	16.8	7.4	7.5YR7/6 橙	7.5YR6/6 橙	板ナデ後ユビナデ	ユビナデ	やや密	b/f/c 多	
99	高坏	SA4	8.5	6.7	5YR7/8 橙	7.5YR7/6 橙	ヨコミガキ、接合部分タテミガキ	ヨコミガキ、ユビナデ	密	a/d/b/c 多	内→植物痕跡
100	小型丸底重か?	SA4		4.0	5YR6/6 橙	5YR6/8 橙	細いヨコナデ	細いヨコナデ	やや密	e/g/b 多	胎土中に黒曜石含む?
101	高坏	SA4		3.1	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	細いミガキ後強い板ナデ	細いミガキ	密	b/g/c 多	
102	高坏	SA4		2.1	5YR6/8 橙	7.5YR7/6 橙	ナデ(少しマモウ)	ナデ	密	e/g/b 多	
103	高坏	SA4		5.5	5YR6/6 橙	5YR6/8 橙(煤)	下半ミガキ(一部)	ヨコ方向ナデ	やや密	a/b/c 多	外→灰色に一部焼ける
104	高坏	SA4		6.7	7.5YR7/6 橙	7.5YR6/6 橙	ユビナデ	ヨコ方向ナデ(マメツ気味)	やや粗	b/c 多	
105	高坏	SA4		5.2	10YR8/3 浅黄橙	2.5YR8/3 淡黄	ユビナデ	ユビナデ	やや密	b/c 多	
106	高坏	SA4		8.8	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	タテミガキ後ヨコミガキ	しぼり、板ナデ	密	b/f/c 少	
107	高坏	SA4		18.7	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	タテミガキ後ヨコミガキ(細い)	しぼり(柱)、ユビナデ(柱楕)	密	g/b/c 多	
108	高坏	SA4		10.0	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	(脚柱)タテ方向ミガキ細い、(脚柱下)ヨコ方向ミガキ、(脚楕)ヨコ方向板ナデ後ユビおさえ	(脚柱)削る、(脚楕)横方向板ナデ	やや密	g/e/b/c 多	基底 12.5
109	高坏	SA4			5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	ハケメ(ナナメ)、(脚楕)タテ板ナデ	(脚)ユビナデ、(脚楕)板ナデ	密	e/b/c 多	円盤充填、基底 12.7
110	高坏	SA4		7.0	5YR7/6 橙	5YR7/4 にぶい橙	板ナデ後ユビおさえ	しぼり(脚柱)	やや密	g/e/b/c 多	
111	高坏	SA4床	4.2	10.7	5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	接合部あり、(脚上)ユビおさえ、(体)ミガキ後板ナデ、(脚楕)板ナデ、一部ハケメ、後ユビおさえ	(脚)しぼり、孔(4つ)外→中へあける、(脚楕)板ナデ、一部ハケメ残る	やや密	b/g/c 多	4孔、基底 13.7
112	高坏	SA4		6.6	5YR6/6 橙	7.5YR7/3 にぶい橙	(脚柱)タテミガキ後ユビおさえ、(脚楕)タテミガキ	(脚柱)ケズリ、ユビナデ、(脚楕)板ナデ	やや密	b/c 多	
113	高坏	SA4		2.2	7.5YR6/4 にぶい橙	10YR6/4 にぶい黄橙	ヨコミガキ(脚)、ユビナデ(脚楕)	棒状でしぼり?、板ナデ	密	b/c 多	
114	高坏	SA4		2.6	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	ユビナデ	ユビナデ	やや密	b/c 多	外→圧痕?
115	高坏	SA4		2.3	7.5YR8/6 浅黄橙	7.5YR8/7 浅黄橙	ナデ	ナデ	密	a/g/b/c 多	
116	高坏	SA4		2.1	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	強ヨコ方向ナデ、ナデ	強ヨコ方向ナデ	密	b/c 多	高坏?蓋か?
117	高坏	SA4		6.0	5YR8/4 淡橙	5YR7/6 橙	ヨコミガキ、タテミガキ(脚楕)、	ヨコ方向ナデ、ナデ	やや密	a/g/b/f 多	
118	弥生甕	SA4		8.9	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	煤化(体)、口→刻み目(棒状工具)、炭付着	ヨコ方向ハケ	密	b/f/c 多	内→植物圧痕?
119	弥生甕	SA3床		3.5	5YR6/6 橙	7.5YR6/6	一条刻み目(貝殻?)、口→刻み目(棒状工具)、強ヨコナデ	強ヨコ方向ナデ	やや密	b/f 多	
120	弥生甕	SA3		4.6	10YR6/4 にぶい黄橙	5YR6/6 橙	口下→刻み目(棒状工具)、丸い棒状工具、2条←上下両方向同時(刻み目)、ナデ、口縁上から板ナデ	ユビナデ	密	b/f 多	
121	弥生甕	SA4		4.1	2.5YR4/1 黄灰	7.5YR7/6 橙	突帯1系	煤化	密	b/c 多	
122	弥生壺	SA1		2.1	5YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	(口)上から下へまくる、ナデ	ナデ、圧痕、拓本、	やや密	b/f/c 多	
123	弥生壺	SA3床		5.3	7.5YR7/6 橙	7.5YR6/6 橙	刻み目1条、板状工具、煤化	頸部(～下)顔料付着、強ヨコ方向ナデ	やや密	a/f/e/b 多	
124	弥生甕	SA4		3.2	2.5YR6/6 橙	2.5Y5/1 黄灰	底をユビでナデ、捲り上げのたるみあり、マメツ(ユビナデ)	ツメ跡?ユビナデ	密	b/c 多	
125	弥生甕	SA1床		8.9	7.5YR7/6 橙	7.5YR6/6 橙	ユビおさえ(下)、板ナデ(体部)	ユビおさえ(下)、板ナデ(体部)	やや密	b/c 多	基底 7.2cm

第27表 森ノ上遺跡B区遺物観察表(3) 土器

No	器種	石材	出土位置	長	幅	厚	重量	観察所見	※法量単位：長・幅・厚=cm、重量=g
126	台石	砂岩	SA 1 -7	9.7	14.7	6.0	105.4	粗質で器面も滑らかでない、一見すると石器に用いないような塊石素材。正面・裏面中央に弱い敲打痕あり。	
127	台石	千枚岩	SA 1 -13	12.3	34.4	5.0	3,107.0	砂岩に近い石質の板石素材。正面・裏面は平坦ながらも荒れた器面であり、弱く摩滅あり。全体に赤化あり。	
128	砥石	砂岩	SA 2 -7	30.0	11.1	8.2	4,292.1	目の細かい石質で風化面は黄土色をする。元は凹円礫であり、部分的に敲打整形あり、四角柱状に研ぎ込まれ、砥面はゆるくカーブした凹面である。鉄錆付着あり。農具等によるガジリ顕著。	
129	砥石	粘板岩	SA 3	8.6	6.3	2.3	137.6	板状に研ぎ込まれる。砥面は平滑で、砥面には部分的に敲打痕あり。剥離面にも弱い砥面あり。裏面は石質の関係で欠損なのか剥離面なのか判断としない。	
130	磨石	青砂岩	SA 3	10.6	10.0	5.6	743.0	よく転磨された円礫素材。正面・裏面ともに磨面あり。磨面に重複して弱い敲打痕あり。欠損著しい。	
131	敲石	青砂岩	SA 3 -3	15.1	5.8	3.7	478.7	よく転磨された楕円礫素材。右側面に弱い敲打痕あり。裏面に農具等によるガジリあり。	
132	凹石	青砂岩	SA 3	12.6	6.8	3.6	478.5	転磨された楕円礫素材。正面中央に浅く凹む敲打痕、側面に敲打痕あり。全体に赤化あり。右半は欠損。	
133	台石	砂岩	SA 3 -9	21.4	42.4	3.6	4,266.3	板石素材。正面・裏面はほぼ平滑で、全体に弱く摩滅あり。	
134	砥石	砂岩	SA 4 -2	17.5	10.9	4.7	1,402.8	砥面幅～6cmが重複し、板状に研ぎ込まれる。上下端は欠損するも、欠損面等が比較的小さなことから、欠損後も使用が継続されたのであろう。部分的に鉄錆付着。	
135	台石	青砂岩	SA 4 -5	26.8	31.6	9.6	11,900.0	転磨された塊石素材。器面は全体に滑らかで、凸面である正面・ごくゆるい凹面である裏面は摩滅あるように見える。裏面に重機等によるガジリあり。	
136	砥石	砂岩	SA 4 -196	18.3	13.4	5.9	1,800.9	断面長方形に研ぎ込まれる。砥面は緩くカーブする凹面で、削痕・敲打痕を切っている。図中黒塗りは鉄錆付着部分。裏面に欠損著しく、破砕面を含めて全面強い赤化あり。	
137	砥石	砂岩	SA 4 -130	5.7	16.8	2.3	223.3	層理に沿って板状に研ぎ込まれる。砥面は平滑あるいは弱い凹面。	
138	敲石	青砂岩	SA 4	12.7	9.9	8.0	1,467.1	分厚い楕円礫素材。正面・裏面・上下端・左右両側面に敲打痕あり。	
139	敲石	青砂岩	SA 4 -136	12.3	4.6	3.9	357.3	転磨された棒状礫素材。上下両端に敲打痕・剥離あり。	
140	磨石	石英閃緑岩	SA 4 -183	11.5	10.0	6.2	784.5	転磨された楕円礫素材。正面は磨面あり。側面は敲打痕で覆われ、上面はあたかも磨面のような目の細かい敲打痕あり。裏面は使用に伴って大きく剥離が入る。下半欠損。	
141	研磨具か	軽石	SA 4	9.6	9.1	5.0	112.7	石粒状に磨り減ったものか。下半欠損。	
142	台石	千枚岩	SA 4 -74	9.8	17.1	2.4	443.9	扁平礫素材。正面・裏面中央に凹んだ敲打痕あり。	
143	台石	砂岩	SA 4 -92	17.2	7.3	7.2	1,126.8	粗質の箱状礫素材。正面・右面に平面があり、浅く凹む敲打痕あり。	
144	台石	砂岩	SA 4	17.5	30.2	9.6	7,000.0	粗質の塊石素材。正面は凹凸ある荒れた器面ながら、中央付近に敲打痕あり。	
145	台石	砂岩	SA 4	25.7	34.9	8.0	11,500.0	粗質の塊石素材。正面は摩滅し、中央に敲打痕あり。	
146	台石	砂岩	SA 4 -201	15.2	37.5	6.5	7,000.0	扁平な塊石素材。正面に弱い摩滅あり。	
147	敲石	青砂岩	SA 6	10.4	7.5	5.5	619.8	転磨された楕円礫素材。正面中央・裏面中央・上下端に敲打痕あり。側面にも部分的に敲打痕あり。	
148	台石	砂岩	SA 7 -1	19.5	24.4	5.3	3,836.2	扁平礫素材。正面・裏面は平滑で、正面のみ摩滅あり。欠損著しい。欠損前の器面全体に弱い赤化あり。	
149	敲石	青砂岩	SA 8	7.6	7.0	2.8	225.6	転磨された楕円礫素材。側面に帯状に弱い敲打痕あり。	
150	凹石	安山岩	SA 8	9.3	8.2	3.3	396.3	転磨された楕円礫素材。正面・裏面の中央に浅く凹む敲打痕あり。	
151	砥石	砂岩	SA 8 -12	16.2	12.2	5.4	1,271.9	砥面は平滑で、削痕が顕著。部分的に敲打痕あり。裏面の砥面はやや波打つものの変滑らかである。欠損著しい。	
152	台石	千枚岩	SA 8	14.2	18.3	2.8	888.4	板状礫素材。正面中央には深く凹む敲打痕あり。裏面中央に弱い敲打痕あり。	
153	台石	青砂岩	SA 9 -9	11.7	20.0	8.9	2,594.4	よく転磨された塊石素材。全体に滑らかで、正面を中心に摩滅あり。欠損著しい。	
154	磨石	青砂岩	SA 10 -20	10.2	9.5	4.4	641.5	転磨された円礫素材。正面に弱い磨面あり。	
155	凹石	青砂岩	SA 10 -35	10.9	8.6	4.9	474.6	正面中央に2ヶ所浅く凹む敲打痕あり。側面にも敲打痕あり。欠損著しく、裏面等の使用痕は不詳。	
156	台石	青砂岩	SA 10 -24	11.2	12.7	11.0	2,284.0	転磨された塊石素材。正面はごくゆるい凸面で光沢ある摩滅あり。左面は広く細かな敲打痕あり。右面欠損。全体に弱い赤化あり。	
157	台石	千枚岩	SA 10 -36	24.1	35.8	6.8	7,500.0	扁平礫素材。風化のため使用痕は判断としない。	
158	砥石	砂岩	SA 10	20.5	15.9	5.7	2,233.7	塊石素材。砥面幅～3cmが重複しつつに研ぎ込まれる。上下端は欠損するも、欠損面等が比較的小さなことから、欠損後も使用が継続されたのであろう。部分的に鉄錆付着。	
159	搬入礫	青砂岩	SA 10 -3	6.2	4.3	4.1	148.2	鶏卵風によく転磨された礫。	
160	台石	青砂岩	SA 11 -5	14.6	21.0	9.8	6,150.0	箱状の塊石素材。転磨は弱く、器面は凹凸がよく残る。正面のみ弱い摩滅あり。	
161	円形石製品	緑色頁岩	表採	3.5	2.0	0.2	2.7	草緑色の石材。平面歪な楕円形風で側面は明確に面取りされ、0.2mm厚に薄く研磨される。半折。	

第28表 森ノ上遺跡B区遺物観察表(4) 石器

No	器種	出土位置	長	幅	厚	重量	観察所見	※法量単位：長・幅・厚=cm、重量=処理前のg
162	鏃	SA 3	5.4	2.7	0.3	10.3	裏面は剥落しており、刃部長は1～2mm長くなる。	
163	小片	SA 3	6.5	1.2	0.2	7.6	刀子の可能性あり。	
164	小片	SA 3	2.5	1.1	0.1	1.6	左に向かって厚みがうすくなる。	
165	刀子	SA 4 -18	8.8	1.7	0.2	11.8	柄との装着部分は変形する。刃長7cm。	
166	小片	SA 4 -23	7.0	0.4	0.4	5.4	一見すると中世釘のようにも見える。断面方形で一端は曲がる。	
167	小片	SA 4	2.5	0.7	0.4	1.2	一見すると中世釘のようにも見える。断面方形。	
168	小片	SA 4 -180	2.6	1.1	0.1	2.4	板状。	
169	小片	SA 4	2.9	1.7	0.4	2.8	下端厚0.4cm・上端厚0.2cmで上に向かってうすくなる。	
170	小片	SA 5	1.8	0.5	0.1	0.6	扁平な棒状。	
171	小片	SA 6	2.5	1.8	0.2	2.2	刀子の可能性あり。	

第29表 森ノ上遺跡B区遺物観察表(5) 鉄器

第四章 カラ石の元遺跡

第1節 遺跡の位置と調査の方法・経過

1-1. 遺跡の位置

カラ石の元遺跡は、延岡市大字熊野江中村地区に所在する(第63図)。字“カラ石の元”の由来であろう力石が2つ集落内に現存している。

熊野江は、熊野江川によって形成された狭小な沖積平野とその三方を囲む山からなり、熊野江川の注ぐ熊野江湾の手前には砂堤と後背湿地が形成される。集落の立地は山裾の緩斜面地にあり、熊野江川沿いの低地を中心に水田等が広がる。大日本帝国陸地測量部(明治36年測量)の地図を見ると、カラ石の元遺跡は、中村集落の奥側と別府集落方面を結ぶ丘陵越えの小径(道幅1m未満)・中村集落を貫き北西方向に山へ上っていく小径との三叉路北側に所在する。後者の小径は、標高260m付近で二又に分かれ、1つは黒岩峠(標高517m)経由で瀬口惣別当に下る小径、もう1つは丸野山・鏡山(標高645.4m)方面へ尾根上を走る小径となる。遺跡立地は、矮小な谷の最奥部分の山裾にありながらも、そのような陸路交通の要所にある。

遺跡より小径・河川を挟んで対面の緩斜面は段々畑に改変され、地表面はある程度転磨された千枚岩礫等が露出し、それらに混じって中世以降の陶磁器等が採集された。調査地から谷沿いに少し奥に進んだ付近を“寺屋敷”と呼ぶことや「開墾時にかわらけを採取した」と近隣住民より伺った。遺跡背後の丘陵には近世以降の墓地や石垣を伴う段々畑があり、六地藏幢をはじめ周知の石塔の存在や寺屋敷なる近隣地名及び立地等から、調査地一帯に中世以降の寺院跡等(御堂等も含む)が立地した可能性が考えられた。

1-2. 調査方法と経過

本調査は平成20年6月2日に着手した。工事計画では、本調査に先立って遺跡背後の丘陵の掘削・搬出を開始予定であり、工事期間や土地収用の関係上、工事用道路を調査対象地内に敷設する必要が出てきた。そこで、調査地境界に盛土を設置することや、遺構分布によっては道路を付け替えるといった条件を協議し、調査対象地北端に幅5mの工事用道路を敷設すること

とした。合わせて、工事に伴う丘陵掘削本格化前の景観を重視した空中写真を6月13日に撮影した。

掘削は、まず、段々平場の切り盛り造成の在り方を探るため、石垣の4箇所のトレンチで表土・造成土厚を把握することから始めた。造成土はガラス等近現代遺物が混入していたため、地形や切り盛り造成の状況を把握できる、斜面に直交する土層観察用ベルトを北半・南半に残しつつ、重機で表土・造成土を除去した。グリッドは国土座標に基づき10m×10mで設定した(第64図)。遺構精査はⅢ層上面で進め、一部Ⅵ層まで掘り下げた(第65図)。遺構検出の過程で、排土置場部分へ柱穴群が伸びる可能性が出てきたため、調査範囲を拡張したところ、新たに竪穴住居跡等を検出した。

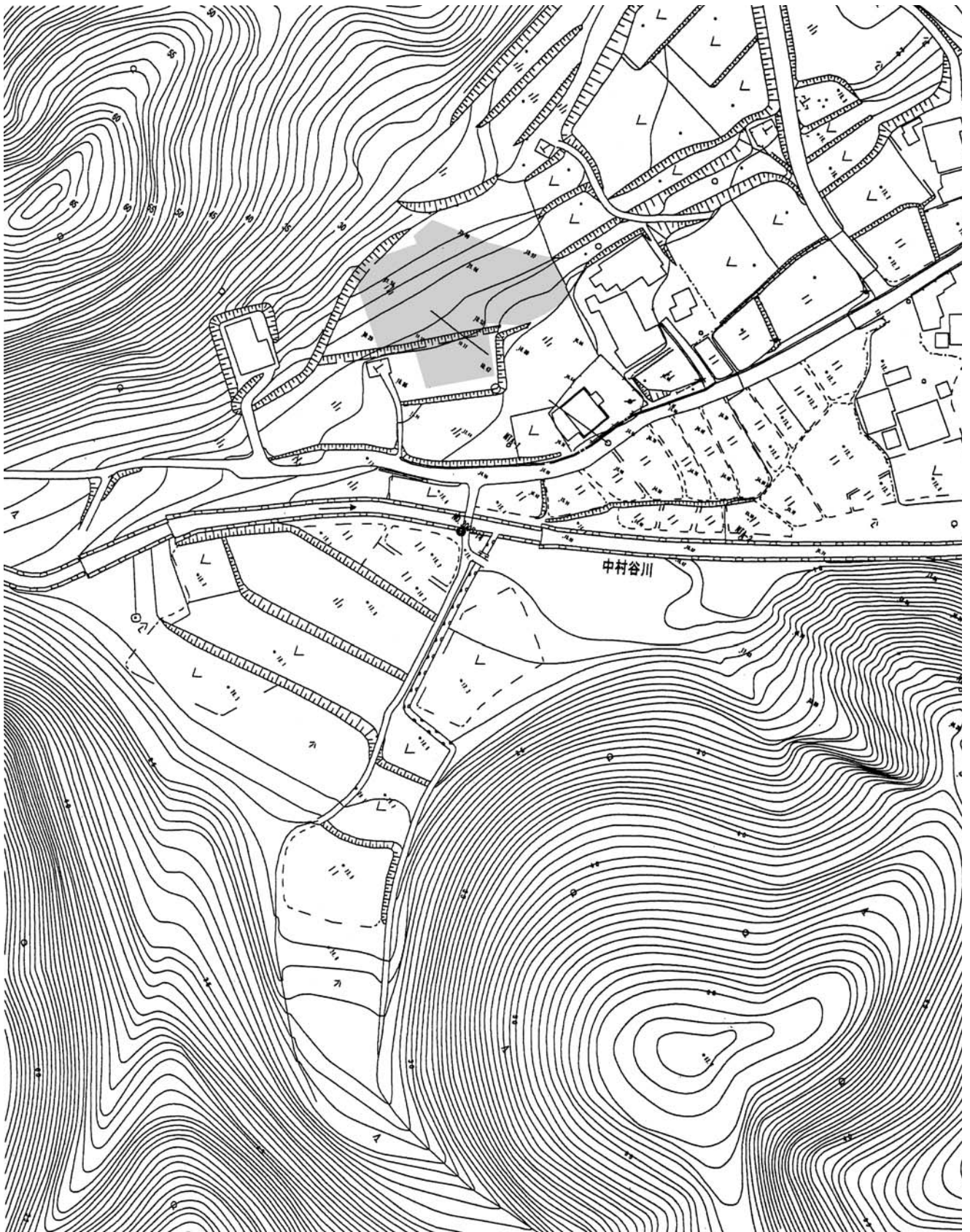
竪穴住居跡・土坑・柱穴群は個別に図化した。溝状遺構や規則性のないピットは平板測量とし、埋土の類型及び標高を記録した。また、竪穴住居跡の炉や土坑の埋土はフローテーション対象とした。石垣・石塔類の平面記録は写真測量委託し、石塔類の個別は現地で図化した。平成20年9月12日に現地調査を終了した。

なお、調査地に東接する宅地跡の試掘では近代以降の陶磁器・貝等が客土中より出土した他、遺構は未検出であった。(松元)

調査日誌抄

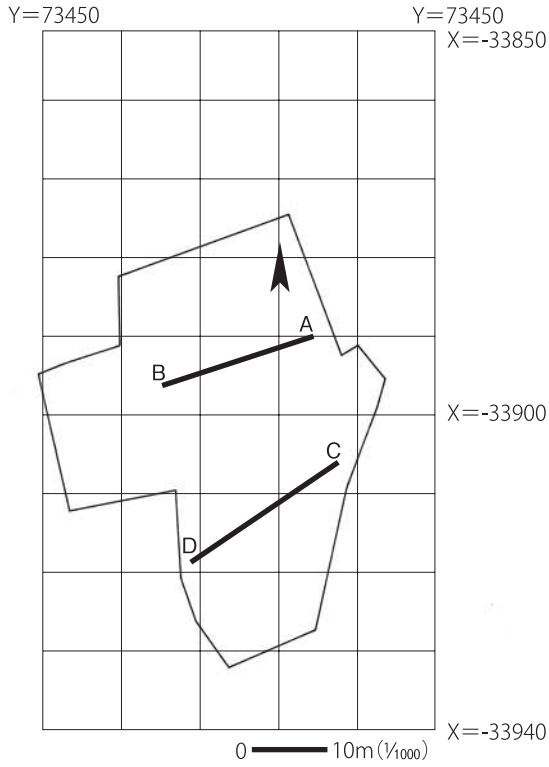
平成20(2008)年

- 0602 調査着手。
- 0613 空中写真撮影。
- 0620 調査事務所設置。
- 0701 作業員投入。掘削開始。
- 0709 重機による造成土除去開始。
- 0722 石垣・石塔群の写真測量。遺構検出本格化。
- 0729 この頃、毎夕、雷雨により一時作業中断。
- 0801 全く想定外の古墳時代遺物が遺構より出土。
- 0805 延岡市文化財保護審議会による視察。
- 0807 遺構精査の結果、調査対象地を拡張。想定外の2軒目の竪穴住居跡が検出される。
- 0808 雨天により現地作業なし。
- 0813~0815 現地作業なし。
- 0902 熊野江小学校・熊野江中学校による遺跡見学。
- 0903 六地藏幢を解体。
- 0912 現地調査終了。



0 100m (1/1500)

第63図 カラ石の元遺跡周辺地形・調査区位置図

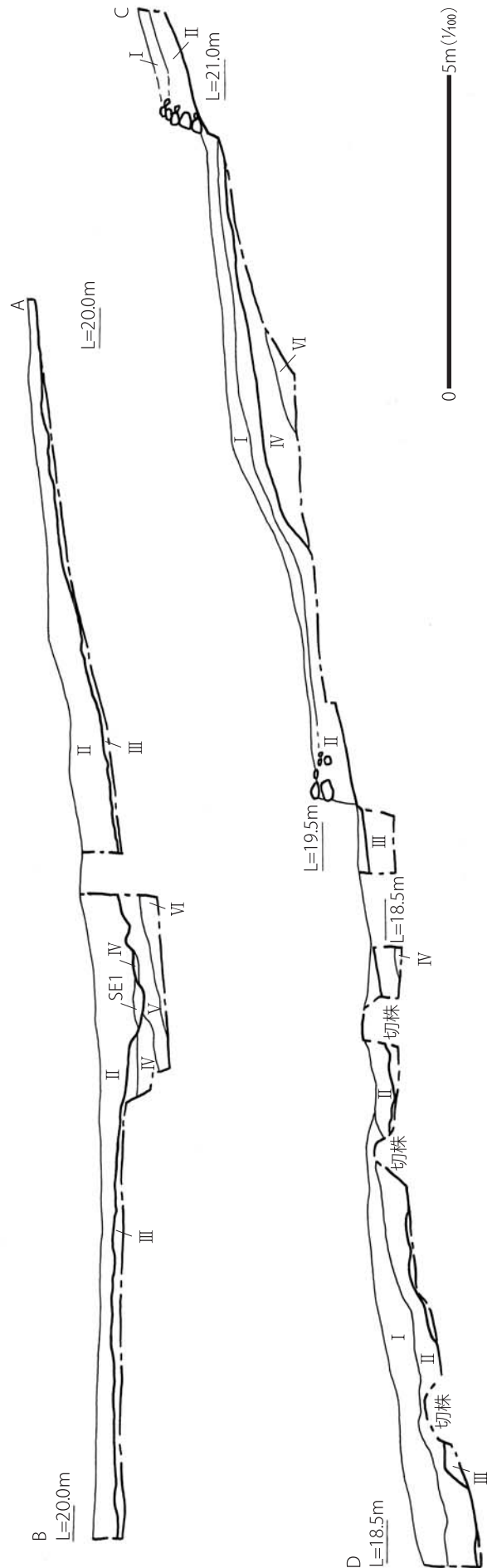


第64図 カラ石の元遺跡グリッド配置図

土層注記

- I層：表土。
- II層：暗褐色土 (Hue7.5YR3/4)。
しまりやや弱い。
IV層由来の小礫 (φ1cm未満) を1割含む。
中世～現代の遺物を含む。造成土。
ただし、遺物量は少なく、全てが同時期の
造成とは断定できない。
- III層：アカホヤ火山灰層 (K-Ah)。
しまりやや強い。粘性弱い。
漸移層は見られず安定した堆積ではない。
斜面上から流れる等、二次的な堆積と見られる。
- IV層：褐色土 (Hue7.5YR4/4)。
しまり強い。粘性やや強い。
小礫を2～3割含む。
- V層：黒褐色土 (Hue7.5YR3/1)。
しまりやや強い。粘性やや強い。
- VI層：褐色土 (Hue7.5YR4/6)。
しまり強い。粘性強い。小礫を1割含む。
- SE1・SE2：褐色土 (Hue7.5YR4/4)。
しまりやや弱い。粘性やや弱い。
III～V層由来の混合土で均一。

第65図 カラ石の元遺跡土層断面図



遺構No	略号	現場記録No	位置	長径 (m)	短径 (m)	残深 (m)	出土遺物	時期	遺構の概要
1号竪穴住居跡	SA1	S6	B3	3.30	3.10	0.48	甕・壺・坏・磨石・台石	古墳中期	
2号竪穴住居跡	SA2	S14		4.70	4.20	0.50	甕・壺・高坏・埴・打ち欠きあ る礫・磨石・砥石・台石	古墳中期	フローテーションあり
1号掘立柱建物	SB1	S50	A2				—	中世～?	
2号掘立柱建物	SB2	S53					—	中世～?	
1号土坑	SC1	S8	A1	0.71	0.48	0.23	—	中世～?	
2号土坑	SC2	S9	A1	0.94	0.80	0.24	礫	中世～?	
3号土坑	SC3	S10	A1	0.98	0.80	0.15	礫	中世～?	
4号土坑	SC4	S12	A1	0.71	0.55	0.10	—	中世～?	
5号土坑	SC5	S15	B3	2.44	1.70	0.18	礫	中世～?	
6号土坑	SC6	S22	A4	0.63	0.42	0.27	礫	中世～?	
7号土坑	SC7	S33	B5	1.12	0.78	0.25	礫	中世～?	
8号土坑	SC8	S43	A3	1.13	0.98	0.44	—	中世～?	
9号土坑	SC9	S59	A3	1.30	1.22	0.56	磁器・人形・魚骨	18C後半	廃棄土坑/桶棺墓?、フローテーションあり
1号溝状遺構	SE1	S21	B3				—	中世～?	
2号溝状遺構	SE2	S49	B1				—	中世～?	
1号石垣	S1	C3					陶磁器	近世～	
2号石垣	S2	B4					陶磁器・銭貨	近世～	
1号石列	S5	B3					陶磁器	近世～	
1号六地藏幢	S4						陶磁器・銭貨	1548年～	
東側石積	S3	C4					陶磁器・土師器	近現代	六地藏幢東側
1号ビット	S16	B4					—		
2号ビット	S17	B4					—		
3号ビット	S18	B3					—		
4号ビット	S19	B4					—		
5号ビット	S20	C3					—		
6号ビット	S23	B5	0.54				—		
7号ビット	S24	B5	0.36				動物骨・ビニル袋	近現代か	
8号ビット	S25	B5	0.32				—		
9号ビット	S26	B5	0.32				—		
10号ビット	S27	B5	0.15				—		
11号ビット	S28	B5	0.34				—		
12号ビット	S29	B5	0.22				—		
13号ビット	S30	B5	0.34				—		
14号ビット	S31	B5	0.34				—		
15号ビット	S32	B5	0.32				—		
16号ビット	S34	B5	0.12				—		
17号ビット	S35	B5	0.22				—		
18号ビット	S36	B5	0.32				—		
19号ビット	S37	B5	0.18				—		
20号ビット	S38	B4	0.18				—		
21号ビット	S39	B4	0.24				—		
22号ビット	S40	B4	0.36				—		
23号ビット	S44	A3	0.34				—		
24号ビット	S45	A4	0.22		0.25		—		
25号ビット	S46	B4	0.20				—		
26号ビット	S47	A4	0.26				—		
27号ビット	S48	B4	0.20				—		
28号ビット	S56	A2			0.30		—		
29号ビット	S57	A3			0.10		—		
30号ビット	S58	A3			0.20		—		
欠番	S7						—		自然の窪み
欠番	S11						—		
欠番	S13						—		
欠番	S41						—		バケット痕
欠番	S42						—		バケット痕
欠番	S51						—		
欠番	S52						—		SE1と同一
欠番	S54						—		樹痕
欠番	S55						—		樹痕
欠番	S60						—		
欠番	S61						—		

第30表 カラ石の元遺跡遺構・遺物一覧表

石塔計測概念図は129頁参照

部位	備考	A	a	b	c	d	e	f	g	
62	空風輪	(29.3)	19.8	4.5	9.7	欠	19.1	18.4	欠	
63	空風輪	墨書あり。	29.9	16.8	1.6	3.2	7.4	16.8	19.2	7.9
64	空風輪		29.2	15.0	1.9	5.4	7.1	20.0	19.4	9.2
65	空風輪		34.0	15.8	1.1	5.5	10.8	17.9	19.3	9.9

部位	備考	C	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	
66	火輪	欠損・風化著しい。柄穴内底面に幅2.3cmの鑿痕残る。	16.4	5.8	-	-	-	4.1	5.1	-	10.0	22.3	(18.2)

部位	備考	D	r	s	t	u	w	x	
67	塔身(水輪)	風化著しい。	18.8	21.2	14.8	5.7	20.3	29.3	9.2
68	塔身(水輪)	下面のみ鑿痕が残る。	24.2	24.1	9.4	3.1	(21.4)	31.7	12.4
69	塔身(水輪)	風化著しい。	23.7	24.5	5.6	3.5	25.6	30.8	12.0
70	塔身(水輪)	下面に幅2cm程の鑿痕、全面に幅1~2mmの線状痕が残る。	30.2	26.1	無	無	(26.4)		

(単位: cm)

第31表 カラ石の元遺跡石塔観察表

第2節. 縄文時代の調査

調査区内平場には、斜面上から二次堆積した、全体に暗く濁った色調のアカホヤ火山灰(K-Ah、Ⅲ層)が厚く堆積しており(第65図)、古墳時代・中世以降の遺構検出面となった。そのような中、古墳時代以降の遺構埋土のように明瞭ではないながら、A1・A2グリッドのⅢ層面が他に比べて混ざりが多くまだらに見えたことから、遺構の可能性を考えてトレンチを掘削した。結果としては、竪穴住居跡等の遺構検出には至らなかったものの、少量の遺物を回収することとなった。

遺物として、前期曾畑式土器(1)、二次加工ある剥片・剥片・石核・敲石(2~5)をトレンチならびに雨後のⅢ層面で回収した。縄文時代遺物は、図化以外では古墳時代竪穴住居跡SA2の埋土中出土の前期土器片1点があるのみで、全体に少ない(第66図)。(松元)

第3節. 古墳時代の調査

古墳時代の遺構・遺物の存在は、先行トレンチや表土剥ぎでも全く認められず、竪穴住居跡の検出は予想外であった。A2グリッドでの柱穴群検出時の調査区拡張で新たに検出した1軒を含め、計2軒の竪穴住居跡を検出した。この他、周辺では土坑・ピットも確認されたが、時期の特定が困難であり、明らかに古墳時代の遺構と言えるものではない(第67図)。

【1号竪穴住居跡(SA1)】(第69図)

斜面と平場の際付近に位置し、造成土除去後、Ⅲ層面での精査で検出された。

床面は3.2m四方の略方形で、貼床は施されずⅢ層中で掘形の底面となる。中央に支柱穴1基を有し、これに南接して炭化物をわずかに含む窪みがあるが、他にピット・土坑等の屋内施設は確認されなかった。

埋土の堆積状況は、1層の特に上位に5cm長程の礫を多量に含む点が特徴的で、ほぼ全面にわたり認められた。2層では10~20cm長の礫が目立った。

遺物(第70図)では、埋土中より細片化した甕・壺の口縁部や底部片が見られた。6は壁際床面付近で出土した残り良い坏であり、9・15は支柱穴北側の床面出土の磨石・台石である。小片を含む土器総重量は723gを測る。

【2号竪穴住居跡(SA2)】(第68図)

SA1より12m程下方の平場に位置し、造成土除去後Ⅲ層面での精査で検出された。

床面4.7×4.2mの略長方形で、全面に貼床が施されⅣ層上位で掘形の底面となる。

貼床面で柱穴検出の精査を行ったが明確につかめず、貼床除去後さらに地山を掘り下げたところ、床面長軸に桁行を向ける支柱穴6基を検出した。P3のみ底面付近に柱痕跡を確認できた。直径10cm程の円形で、Ⅲ層由来土ベースの明黄褐色砂質土に占められ、輪郭には鉄分が凝集し明赤褐色を呈する。

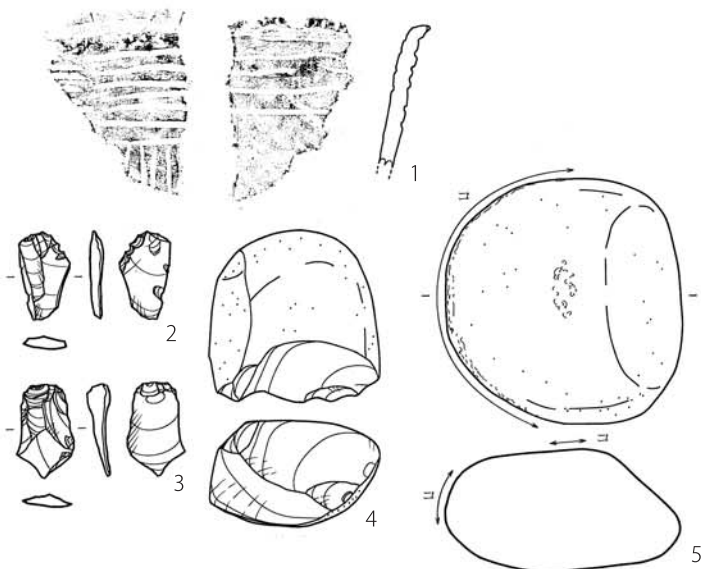
また、埋土の掘り下げ中に、中央南寄りに焼土を含む土坑S1を検出した。S1について、当初、床面の炉跡と見たものの、周囲が硬化していない点やその下位で貼床面及び炉跡S5を検出したため、S1は床面に伴う炉跡等ではなく、竪穴部埋没途中のものとなした。貼床面では、炉跡S5及び土坑S2~4・6を検出した。S2~4は深さ15cm程で、S3・4は柱穴と重なることから、柱抜き取りに関連する可能性がある。S6では10cm長程の粘土塊が見られた。

遺物(第70図)では、埋土中~床面より土器片が出土したものの、いずれも小片で形あるものやまとまりは見られなかった。接合の結果、7・8の坑・高坏脚部が確認できた他、高坏坏部片、壺・甕の口縁部・底部片等がある。10~14・16は、床面直上より出土した磨石・砥石・台石・打ち欠きある礫である。また、西側壁際にて粘土塊が検出された。小片を含む土器総重量は2,520gを測る。なお、中央西寄り及び南東隅を中心に、埋土3層上面に載る格好で50~60cm長の台石状礫あるいは10~20cm長の礫が多数見られた。

3層上面の台石状礫や焼土を含む土坑は、何らかに機能した面と捉えることも可能である。この面は平坦でなく硬化もしていないため、貼床の貼り直し等は考えにくい。埋没の人為・自然為は問わず、竪穴の埋没途中で、焼土の混じる土坑S1の形成も含め、廃棄等何らかの行為があったものと考えられる。

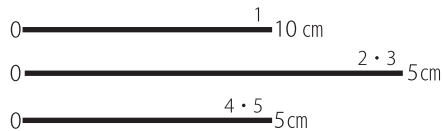
なお、S1・S5についてはフローテーションを実施し、ツブラジイ・マメ類等が回収され、前者については放射性炭素年代測定を実施した(詳細は第X章参照)。

(松元)

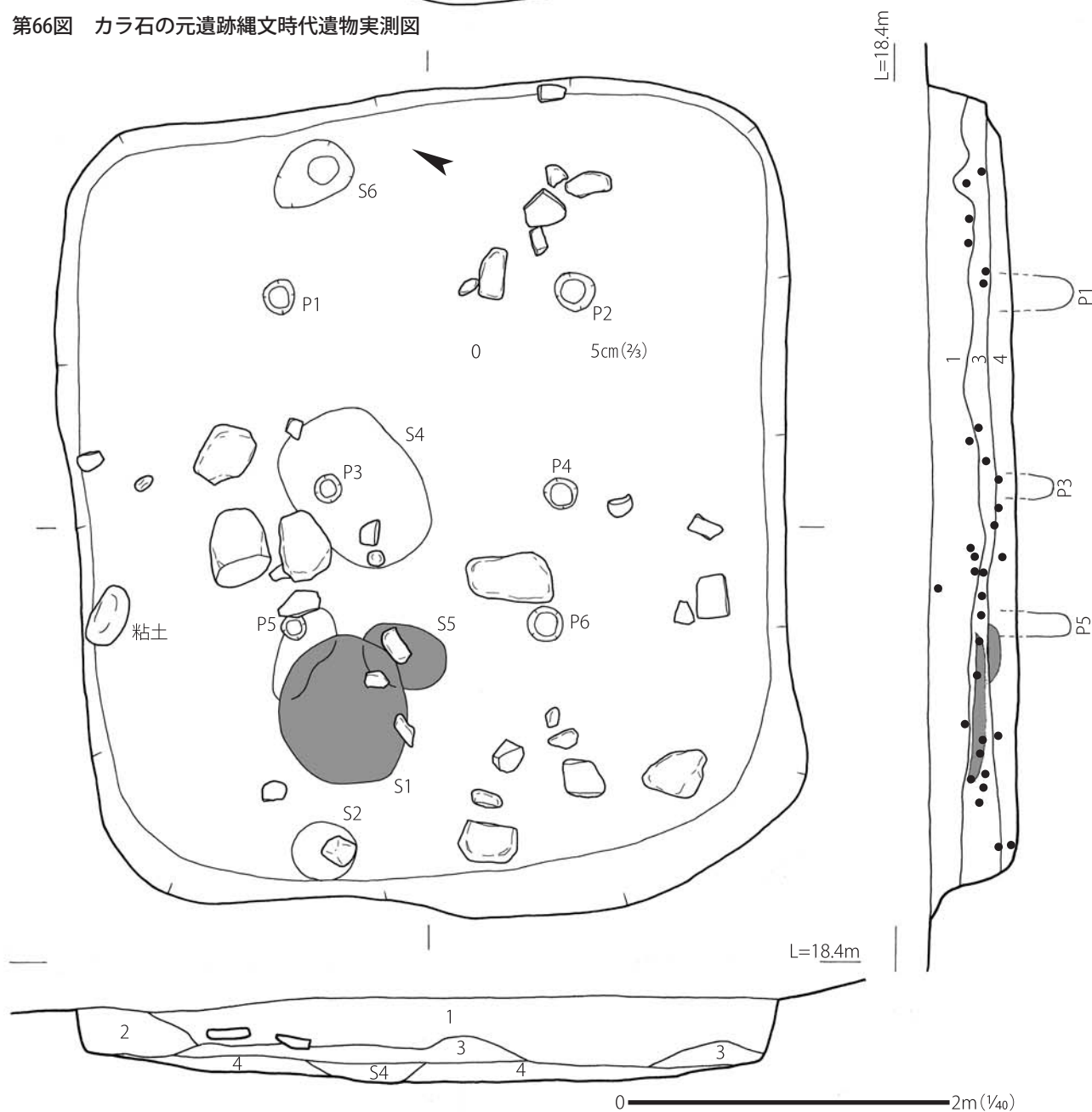


SA2土層注記

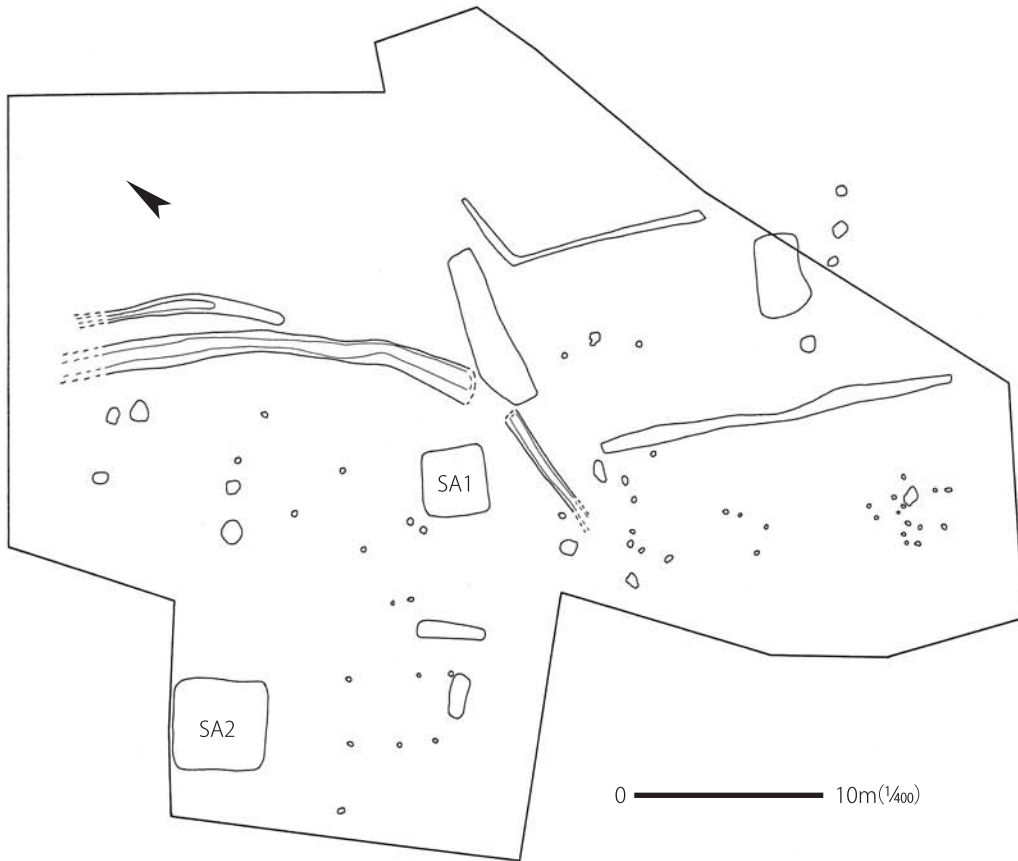
1. 褐色土 (Hue7.5YR4/4)。しまり強い、粘性やや弱い。Ⅲ層土ベースで砂質。
2. 1層に似る。明褐色土ブロック (φ 5 cm程) を4割含む。
3. 黒褐色土 (Hue7.5YR3/2)。しまり強い、粘性やや強い。炭化物 (φ 5 mm程) 1割未満含む。炭化物の中には5 cm長のものもある。1層との境に台石・礫が載り、明褐色土ブロックも多く見られる。
4. 黒褐色土 (Hue10YR3/2)。しまり非常に強い、粘性弱い。Ⅲ層ブロック (φ 5~10cm) を6割含む。貼床に相当。
- S1. 暗褐色土 (Hue7.5YR3/3) をベースに、赤褐~明褐色の焼土塊 (φ 2~5 cm) を2割含む。炭化物 (φ 1 cm未満) を1割含む。しまり・粘性やや強い。
- S2・3・4. 3層に似るが、しまりやや弱い、いずれも貼床との差が明瞭でない。
- S5. 褐色土 (Hue7.5YR4/4) をベースに、赤褐~明褐色の焼土塊 (φ 5~10cm) を4割含む。炭化物 (φ 2 cm未満) を1割含む。しまり非常に強い、粘性やや弱い。
- S6. 褐色土 (Hue10YR4/4) Ⅲ層ベースで砂質。しまりやや弱い、粘性弱い。
- P1~P6. にぶい黄褐色土 (Hue10YR4/3) Ⅲ層ベース。しまり弱い、粘性やや弱い。



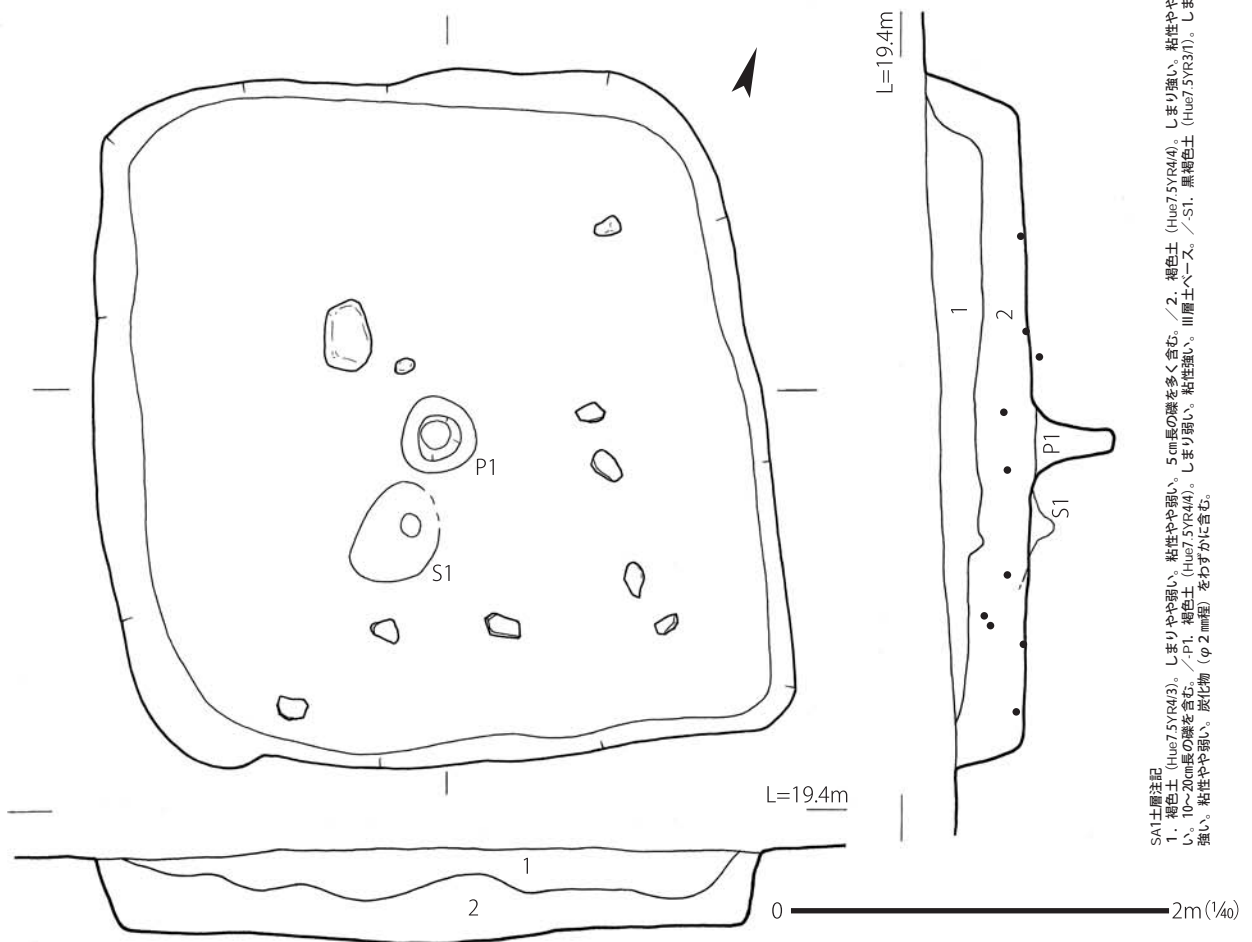
第66図 カラ石の元遺跡縄文時代遺物実測図



第68図 カラ石の元遺跡古墳時代遺構実測図 (1) SA 2

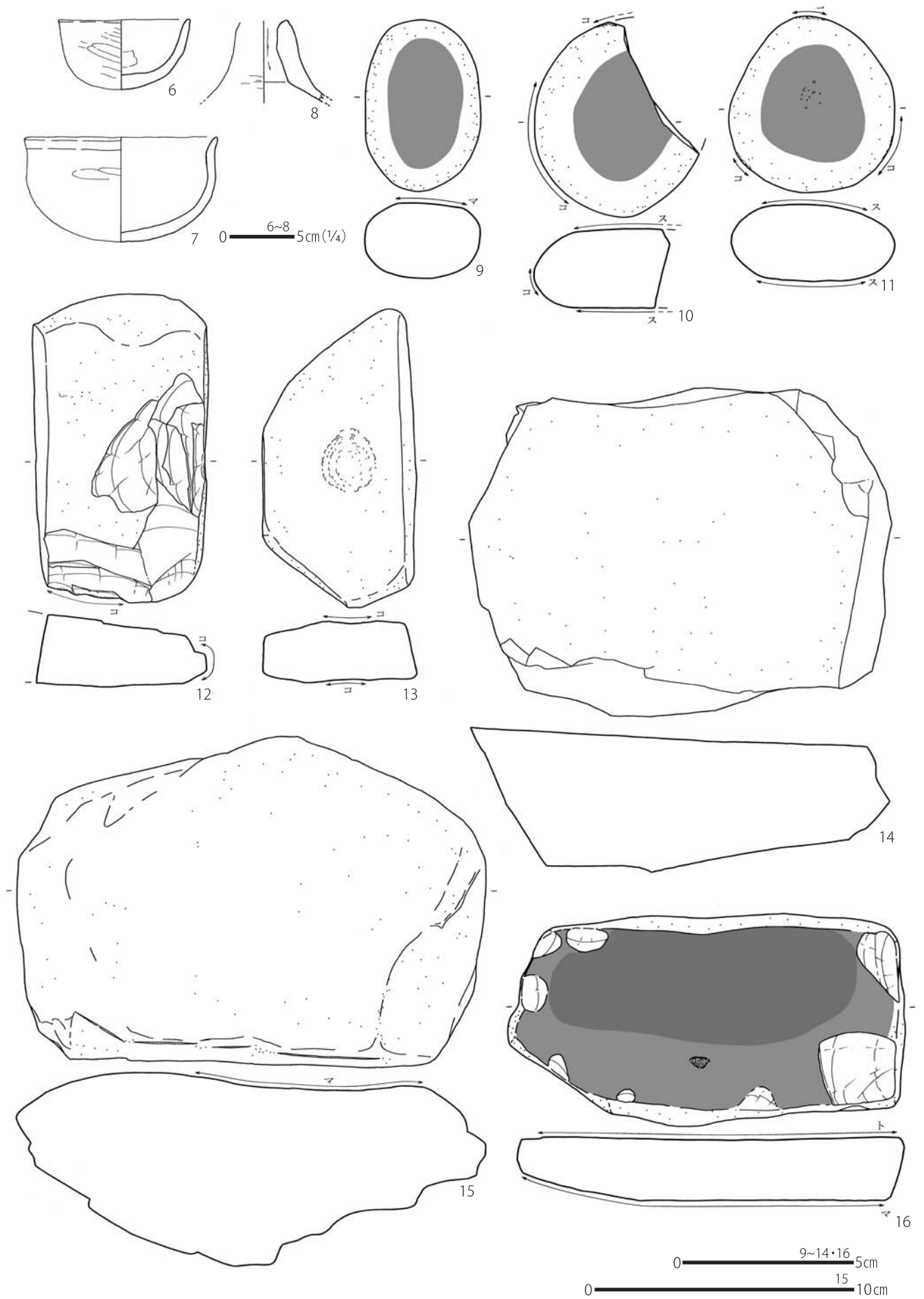


第67図 カラ石の元遺跡古墳時代遺構分布図



第69図 カラ石の元遺跡古墳時代遺構実測図(2) SA1

SA1は厚注記
 1. 褐色土 (Hue7.5YR4/3)。しまりやや弱い、粘性やや弱い、5cm底の隙を多く含む。/ 2. 褐色土 (Hue7.5YR4/4)。しまり強い、粘性やや弱い、10~20cm底の隙を含む。/ P1. 褐色土 (Hue7.5YR4/4)。しまり弱い、粘性強い。/ S1. 黒褐色土 (Hue7.5YR3/1)。しまり強い、粘性やや弱い、炭化物(φ2mm程度)をわずかに含む。



第70図 カラ石の元遺跡古墳時代遺物実測図

第4節 中世以降の調査

調査地一帯は山林化していたものの元は段々畑であり、その一角に六地藏幢や無縫塔・五輪塔が集中していた。また、寺屋敷という近隣地名や立地等からも、中世以降の寺院跡等の存在が想定された。

遺構では、Ⅲ層面で柱穴群・土坑・ピット・溝状遺構を検出したものの、土坑SC9以外は埋土中に遺物を含まず、その時期を明確にできなかった。石塔や遺物の様相からは、当遺跡周辺が遅くとも18C後半までは葬送・供養に関連する空間であったと考えられるため、これら遺構も本節で扱うこととする。

4-1. 遺構

【柱穴群】（第72図）

斜面裾部の平場等に大きく2箇所分布する。造成土除去後Ⅲ層面での精査で検出された。柱穴群1・2ともに直線的な並びを見出すことができ、認定困難ながら掘立柱建物跡の可能性も残される。

【9号土坑（SC9）】（第74図）

Aグリッド平場部分に位置し、直径1.2mの円形プラン・深さ約50cmを測る。検出時から内部に直径1mの円形プランが明瞭に認められ、掘形より若干小さい土坑状となった。これは、据え置かれた桶の痕跡と考えられる。埋土中には40～50cm長の礫が集中し、18C以降の肥前系赤絵碗の小片（46）・陶製の女性人形（47）・魚骨・植物種子が出土した。桶棺墓等の機能も想定し、人歯回収等を目的に全埋土25,260gをフローテーションした。その結果、人骨や歯は未確認であり、カツオを中心にマアジ・スズキ目・フグ科他の魚骨、イネ・オオムギ・コムギならびにアワ・キビの近似種の穀類が回収された。人形が欠損品であることを考え合わせても、墓であった可能性は低く、桶が埋置された廃棄土坑等であろう（詳細は第X章を参照）。

【1号溝状遺構（SE1）】（第71図）

Ⅲ層で検出、底面からの立ち上がりは不明瞭だが、幅50～80cmをもって緩やかに立ち上がる。調査区北側から斜面裾部に沿って走り、石列1付近で斜面下方へ緩やかに曲がりつつ一旦途切れる。長さ約2mの土橋状部分を残して斜面下方へと伸び途切れる。南側ほど底面レベルは低い。遺物の出土はなかった。

【2号溝状遺構（SE2）】（第71図）

SE1から斜面上方のⅣ層で検出した。立ち上がりの不明瞭な点等SE1と同様だが、底面幅は狭い。SE1に沿って走るが途中で途切れる。南側ほど底面レベルは低い。遺物の出土はなかった。

石垣（第73図）

丘陵頂部付近まで続く段々畑を構成しており、畑の一部は現在も使用されている。調査区内の石垣について、列ごとに1・2号石垣、1号石列とした。

石材はⅣ層以下で採れる砂岩の呉呂太石が主に使われ、基本的に野面積みで、石の長軸を石垣列に直交させるものが多い。削平されたⅣ層面に造成土を10～20cmほど噛ませ、40～50cm長の巨礫を根石とし、2段目より上は落とし積みされる部分が見られる。高さは60～80cmを測る。

石垣に直接絡む遺物は新しいものでも19C前半で、遅くとも近世後半には造成・石垣構築がなされていたものと考えられる。

なお、丘陵中腹以上の石垣は千枚岩の扁平石を平積みしており、調査区内含む丘陵中腹以下の石垣とは様相を異にする。これは、単純に付近に千枚岩のみが多いという都合によるものと見られる。

【1号石垣】（第73図）

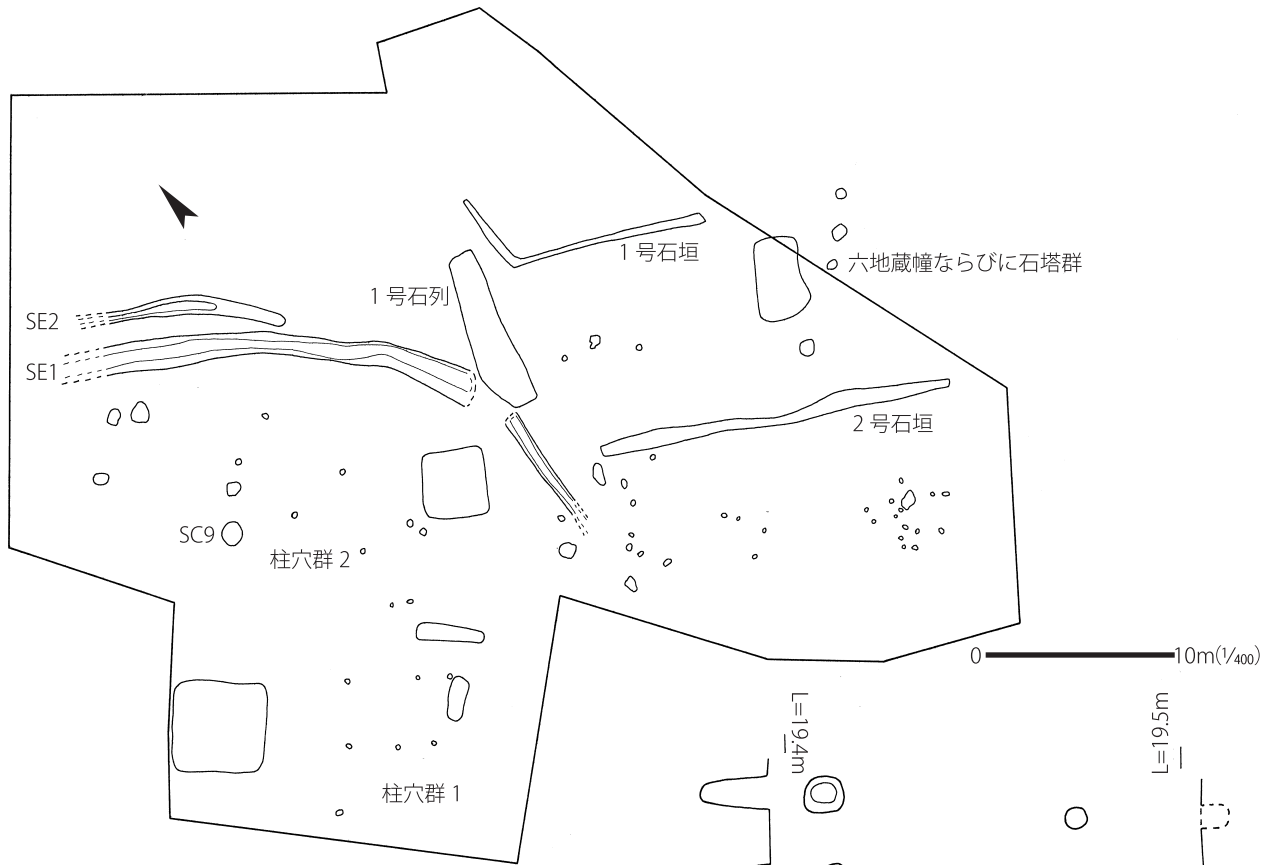
北側で斜面上方に屈曲し途切れる。屈曲部は一部崩落しているが、周囲より低くなるようU字状に積みされている。また、屈曲部より5m程南側以南は石垣勾配が緩く、根石に巨礫がほとんど用いられておらず、石垣北半との構築時期差が想定される。

【2号石垣】（第73図）

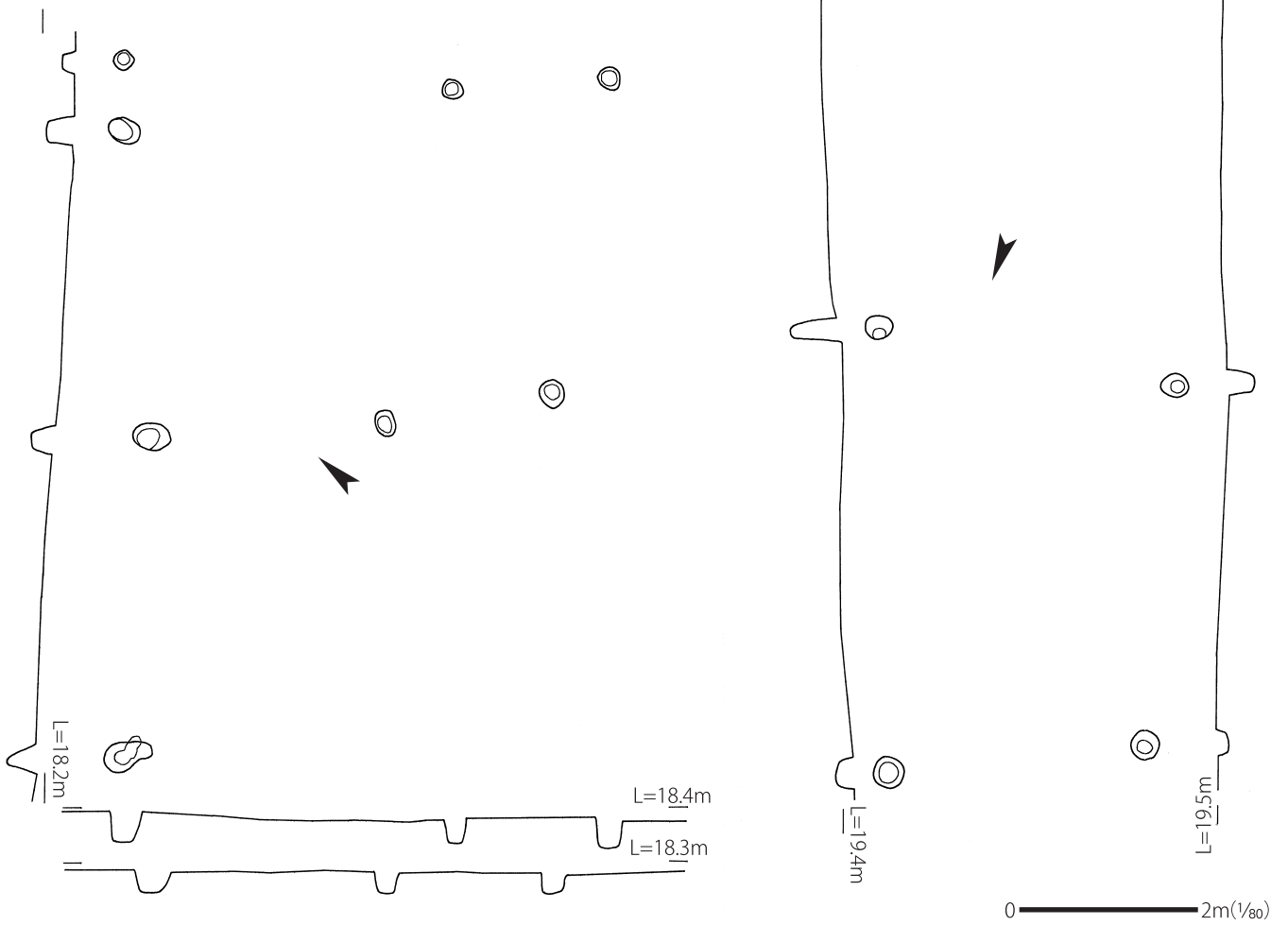
北側で斜面下方に屈曲し途切れる。六地藏幢前で幢側に入り込むように曲がり、以南は若干蛇行する。この南半石垣の根石も巨礫でなく、北半とは様相が異なる。また六地藏幢前は崩落してはいるが、30cm長の扁平石を階段状に3段ほど積んでおり、1号石垣の場合と同様構築時期差が想定される。なお、1・2号石垣の北半は、根石や落とし積み等積み方が類似しており、同時期の構築と見られる。

【1号石列】（第73図）

1・2号石垣がそれぞれ北側で屈曲する部分に沿うように30cm長の礫が整然と並べられている。特に1号



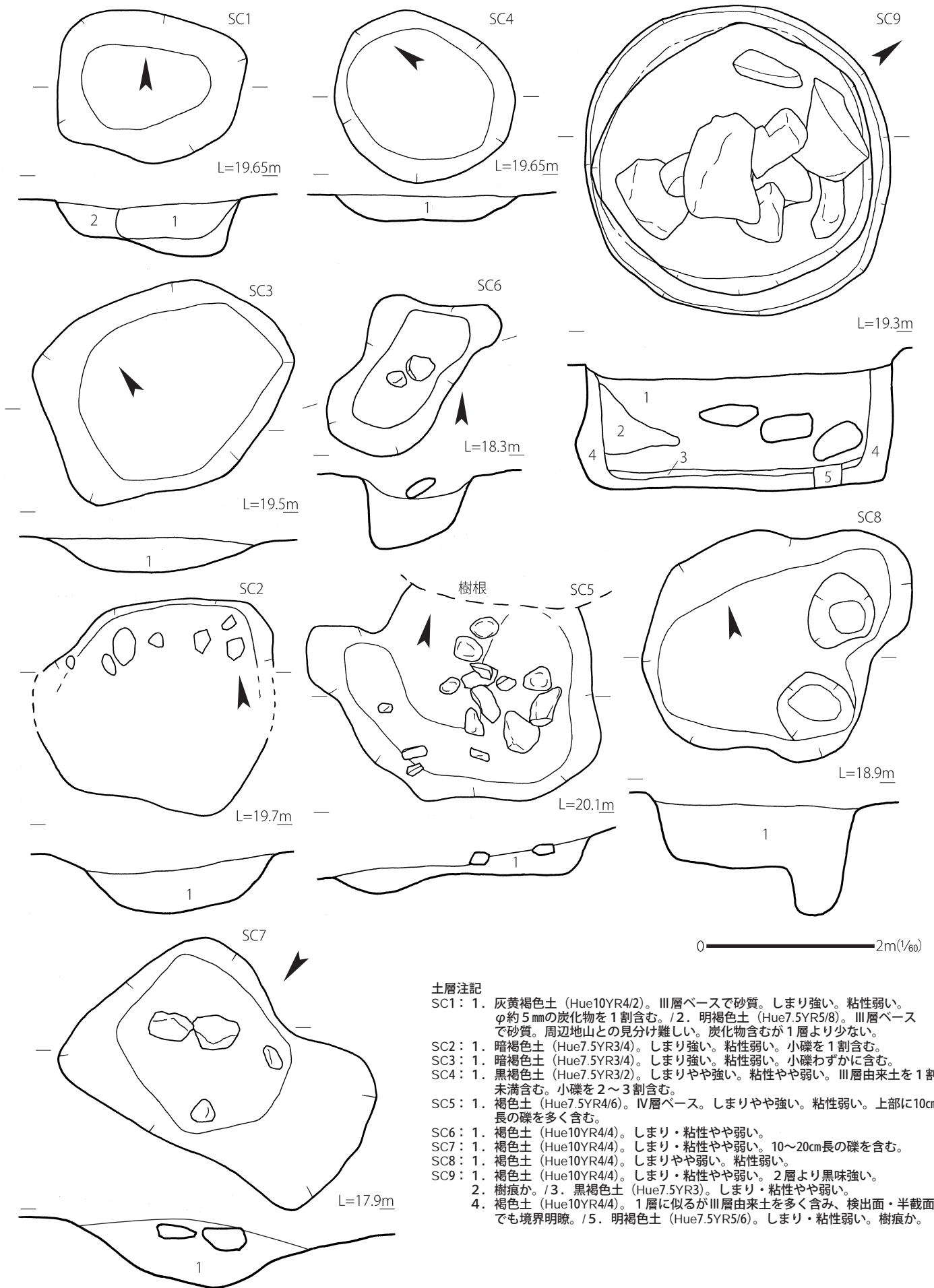
第71図 カラ石の元遺跡中世以降の遺構分布図



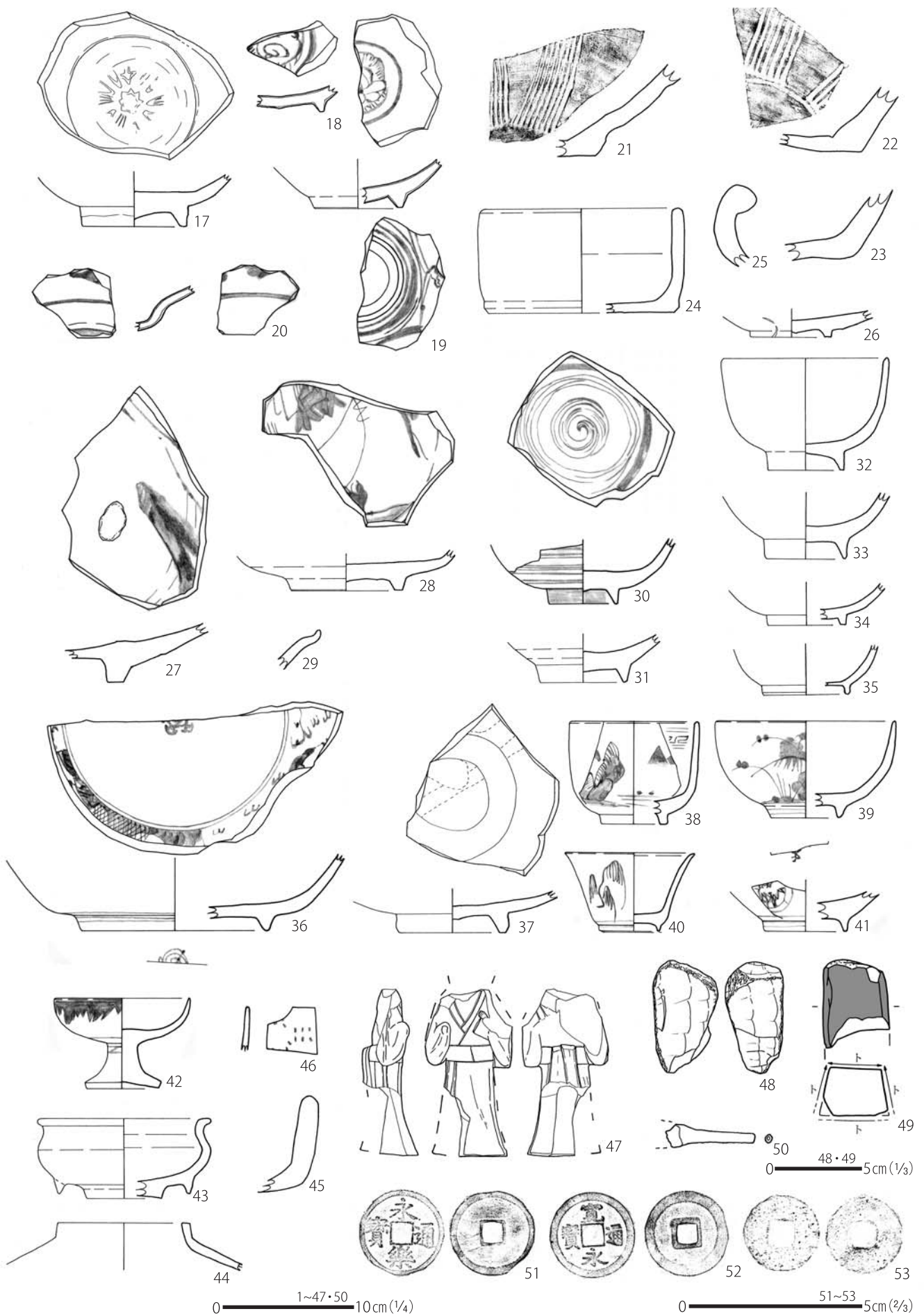
第72図 カラ石の元遺跡中世以降のピット群実測図



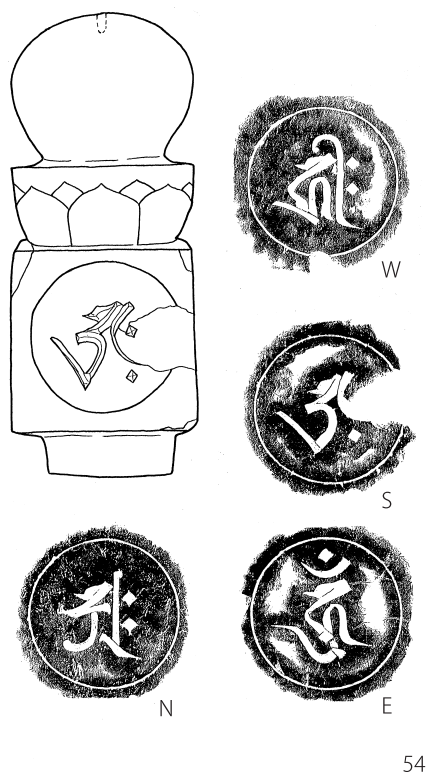
第73図 カラ石の元遺跡中世以降の石塔群・石垣遺構実測図



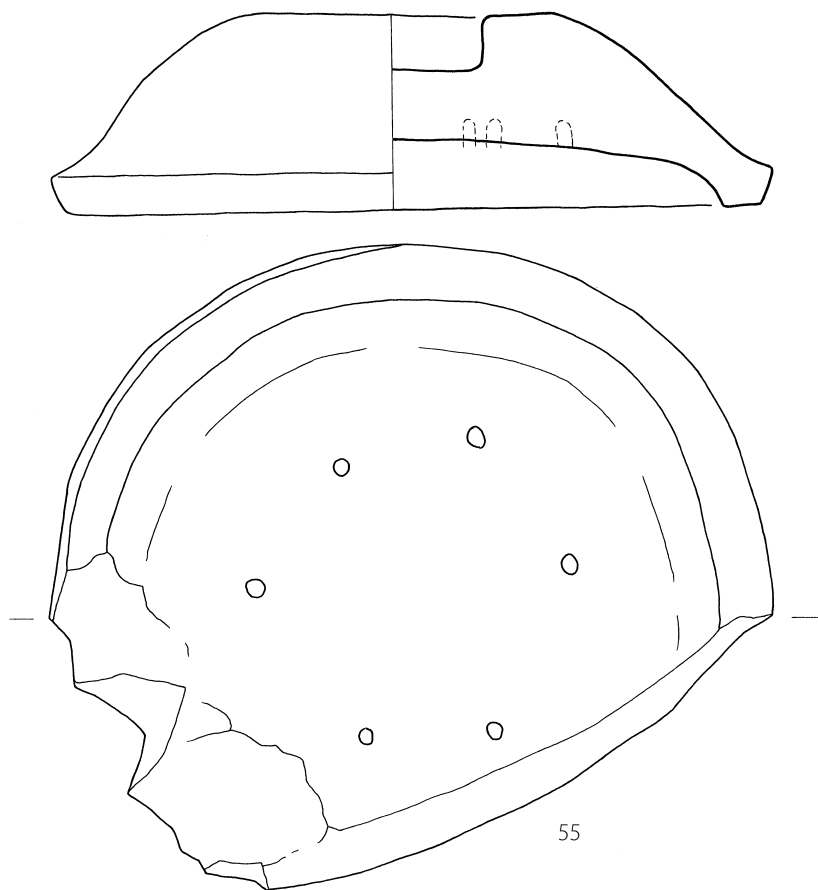
第74図 カラ石の元遺跡中世以降の土坑実測図



第75図 カラ石の元遺跡中世以降の遺物実測図(1)

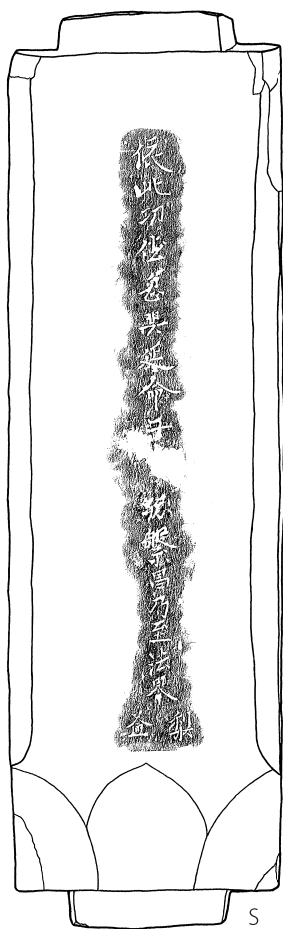


54

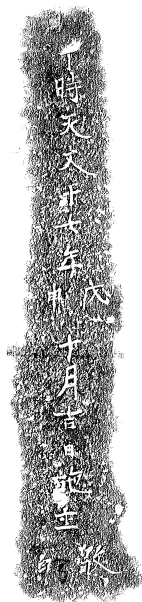


55

0 54~56・58・59 50cm (1/10)



S



E

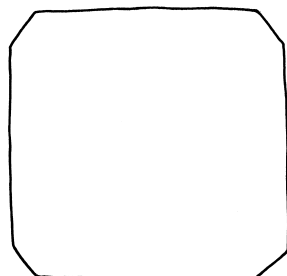


N

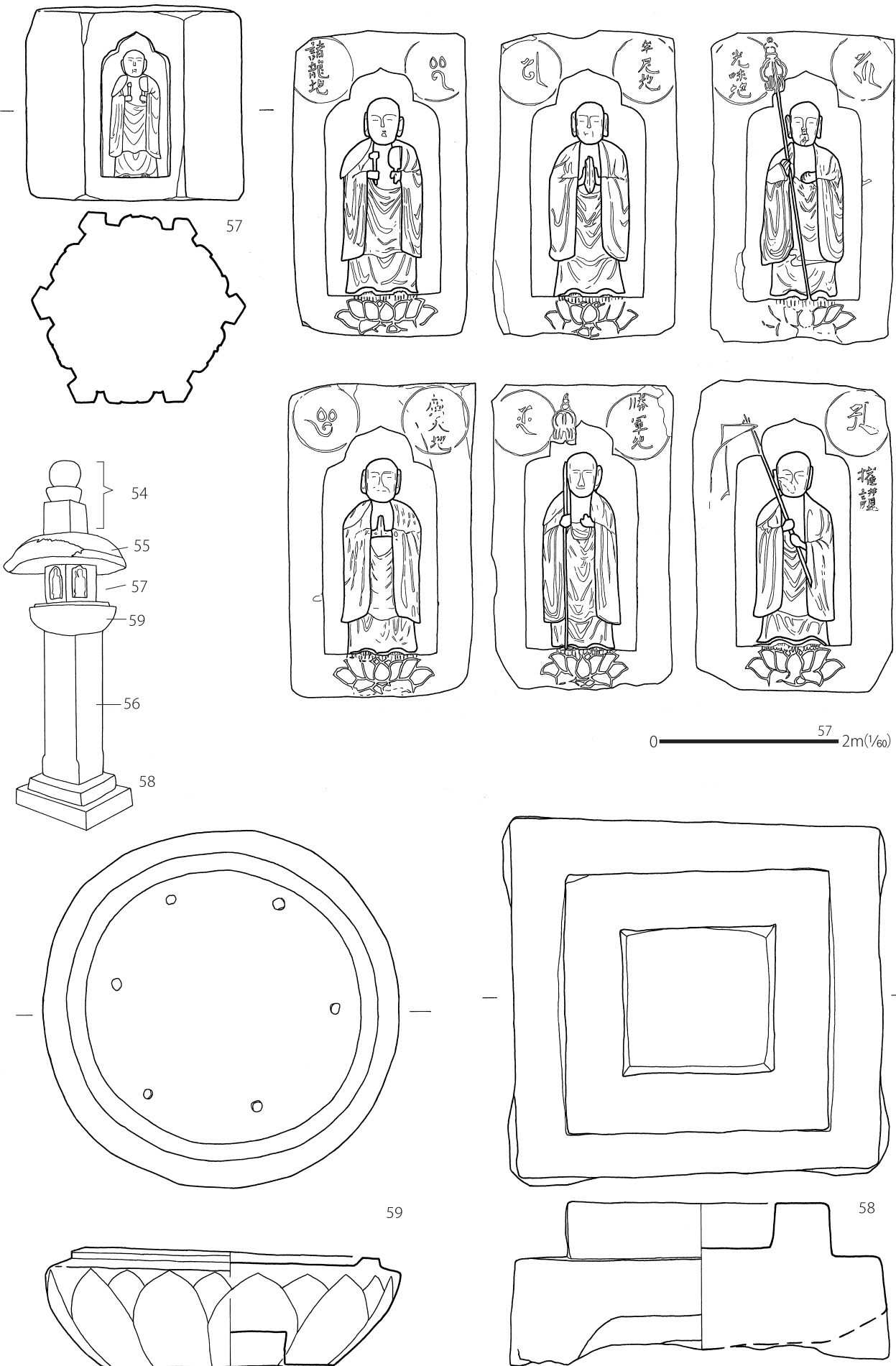


W

56



第76図 カラ石の元遺跡中世以降の石塔類実測図(1)



第77図 カラ石の元遺跡中世以降の石塔類実測図（2）

石垣とは幅約70cmの通路をなすように見え、同時期構築の可能性がある。この石列を境に地籍も異なっており、何らかの境界としての機能があったと見られる。

【六地藏幢・無縫塔・五輪塔等】（第73図）

1・2号石垣に挟まれる平場に六地藏幢、それより斜面上方に無縫塔や近世墓が立てられており、周辺には五輪塔空風輪や火輪が散在する。六地藏幢は建立当初の厳密な原位置は保っていないながらも、大きくは変わらないものと想定される。

石塔石材は、六地藏幢・無縫塔が硬質の阿蘇系溶結凝灰岩、近世墓が行藤山周辺の花崗岩を素材としており、その他は軟質の阿蘇系溶結凝灰岩である。六地藏幢を囲む石列には水輪が転用され、納骨孔に花瓶が挿される等現在も信仰の対象となっている。

4.2. 遺物・石塔（第75～78図）

中世は龍泉窯系・景德鎮窯・漳州窯ならびに備前系の碗皿・甕・播鉢等の生活雑器がある（17～26）。近世は18～19Cの広東碗・端反碗・小坏・猪口・仏飯器・香炉等（27～45）があり、生活雑器が少ないという器種の偏りが見られた。その他、火打石・砥石・銭貨・銅製煙管吸口（48～53）もある。

六地藏幢（54～59）は宝珠・請花・露盤が一体形で、宝珠頂部に直径1cm・深さ2cmの孔を有する。露盤は四角柱をなし四面円相内に金剛界四仏種子が刻される。笠部は陣笠形丸屋根で、下面の六角柱龕部各角と接する箇所、直径2cm・深さ3cmの孔を有する。龕部は各面の両肩に円相、内部に尊名と種子を刻する。中台は丸鉢形で十二単蓮弁を刻し、笠部と同様6箇所孔を有する。上面は蓮肉を浮かして幢身を受ける。幢身は四角柱で裾部に八蓮弁を刻し、それより上に面取りを施す。四面に「奉建立逆修藤原朝臣甲斐織部助婦夫河野越智朝□」「現世安穩後生善処天長地久諸願成就之」「于時天文十七年戊申十月吉日施主敬白」「依此功德息災延命子□孫繁昌乃至法界梨益」と紀年銘、逆修者名、祈願文が刻字されている。基台は一石二段の四角盤である。いわゆる円角混合式の日向式六地藏幢である。

六地藏幢宝珠露盤（60）は宝珠と露盤の一体形で、宝珠頂部に直径2cm・深さ3cmの孔を有する。四角柱

露盤の各面に円相と金剛界四仏種子が施される。一面のみ種子ウングが刻され、三面にそれぞれ種子アク・キリーク・タラークの墨書が残る。**基台**（61）は一石二段の四角盤である。60・61は2基以上の六地藏幢が本来存在した可能性を示している。

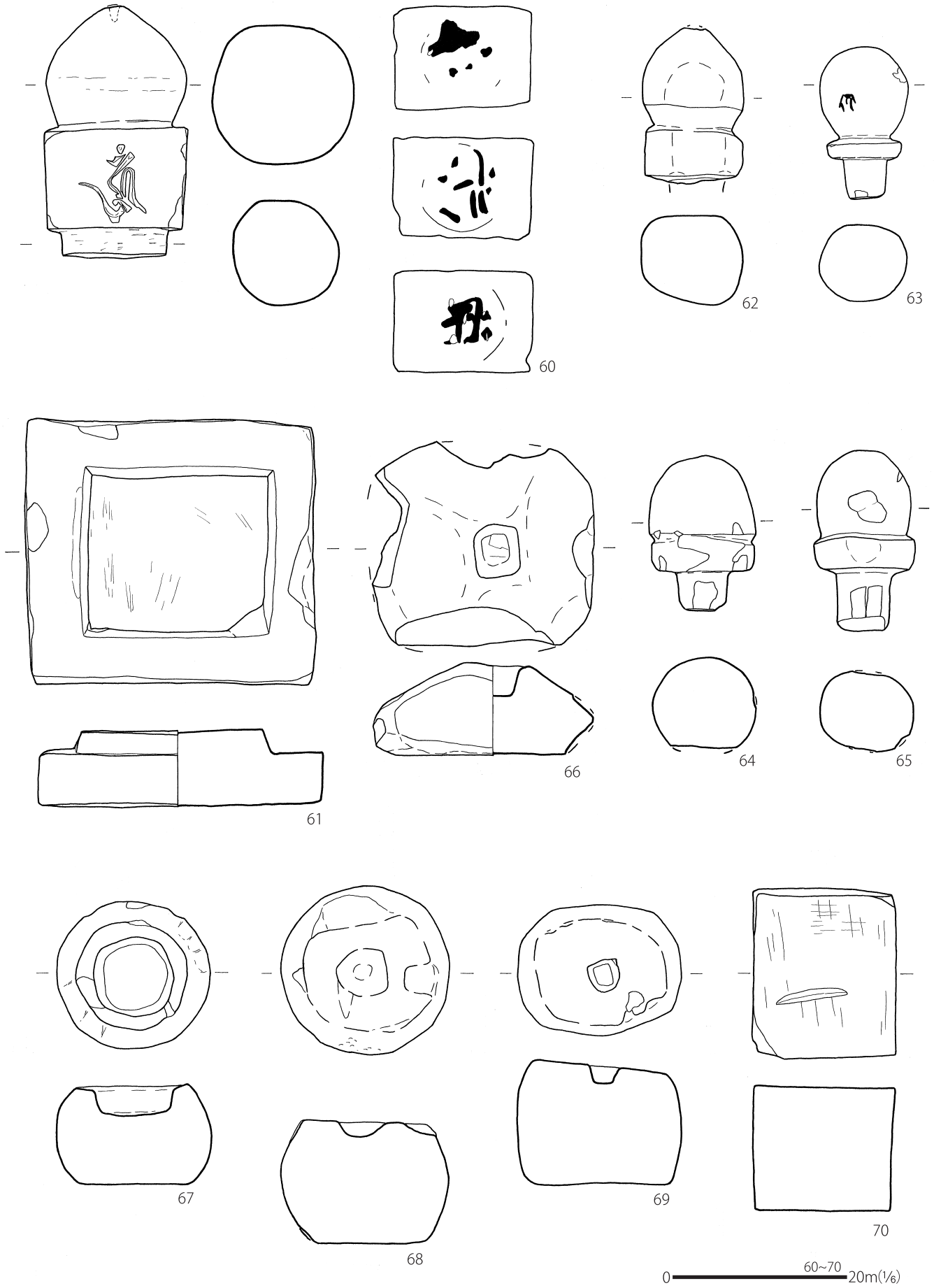
無縫塔は調査区の外側にあり個別図化は未実施である。表側に円相キリークと銘文「向岸順西禅門靈位」、裏側に元龜四年の紀年銘が刻される。**五輪塔**は本来の組み合わせを失った状態ながら、六地藏幢付近から調査区外へと散在する。石垣1は調査区外へ延び、表土に埋没しつつも石積み中に水輪が転用されている。調査区内の石垣1・2の石積みには石塔転用例はない。図化したのは調査区内のもので、空風輪（62～65）・火輪（66）・水輪（67～69）がある。63は墨書が残着する。70は宝塔か。（松元）

第5節. 小結

調査の結果、縄文時代から中世～近世・近代にわたる遺構・遺物が確認された。

包含層中より少量出土した**縄文時代前期**の遺物は、熊野江地区最古の人類遺物として重要な資料である。**古墳時代中期**の竪穴住居跡2軒の検出は予想外の発見であった。谷間の限られた平坦面を利用した集落であったと見られる。**中世**以降になると、1548（天文17）年建立の六地藏幢の他、付近に石塔類も散在することから、寺院等の存在が予想されていた。寺院の存在を明確にする遺構ではないものの、柱穴群2箇所・土坑・溝状遺構2条がこれに関連する可能性がある。中でも、溝状遺構は、その位置からみて建物域と墓域（祭祀域）を区画していた可能性があり、両域をつなぐ土橋も設けられていた。遺物としては、中世以降、近代遺物まで出土した。中でも近世遺物については生活雑器が少ないという器種の偏りが見られ、墓域等の特殊な空間であったことを窺わせている。おそらくは、これらの空間意識が形骸化・弱体化した後に畑地等として段々に改変されたと想定される。また、**近世**の廃棄土坑より出土したカツオや穀類は海山の幸に恵まれた食糧事情の一端等を垣間見ることとなった。

いずれの資料も、これまでほとんど発掘例のなかった熊野江地区の歴史を知る上で重要である。（松元）



第78図 カラ石の元遺跡中世以降の石塔類実測図（3）

No.	種別	器種	部位	注記	時代	法量 (単位 cm)	外面	内面	備考
1	縄文	深鉢	口	D5II S1	縄文		タテヨコ沈線文、口唇にキザミ	ヨコ沈線文	曾畑式か。
6	土師器	坏	口・底	S6-1	古墳	高 8.1・口 (14.6)	横ナデ、横ヘラミガキ		
7	土師器	碗	口・底	S14	古墳	高 5.3・口 10.2	ヘラミガキ	不定工具ナデ、ヨコナデ	
8	土師器	高坏	脚	S14	古墳		工具ナデ後ナデ	ヨコナデ、シボリ	
17	青磁	皿	底	C3S5		底 (6.0)	高台内無釉	花文	龍泉窯系。
18	青花	碗皿	底	周辺 1				文様不明	景德鎮窯。
19	青花	碗皿	底	表採	16	底 (2.5)	花文?、圏線	文様不明、圏線	漳州窯・白化粧土。
20	青花	皿	底	I	16 後半		文様不明、圏線	文様不明、圏線	漳州窯・白化粧土、貫入。
21	陶器	槽鉢	底	S5	16 後		回転ナデ	描目単位幅 2.2cm で 8 条	備前系。暗赤褐色。内面に黄ゴマ。胎土緻密な田土。
22	陶器	槽鉢	底	B3II	14/15		回転ナデ	回転ナデ、描目単位幅 2.5cm で 7 条	備前系。橙色。山土。
23	陶器	槽鉢	底	周辺 2	16				備前系。小石多い。田土?
24	陶器	花入?	口	T7・B6 I		底 (10.0)	回転ナデ	回転ナデ	備前系。山土。
25	陶器	甕	口	S5	14/15		回転ナデ	回転ナデ	備前系。青灰色。小石多い山土。
26	陶器	皿/碗	底	排土	16 後	底 (4.7)	底部無釉 (釉掻き?)		唐津系。大橋 I 期。
27	陶器	皿	底	S2	17 後		鉄絵松文	砂目痕	唐津系二彩。
28	染付	皿	底	表採	~17 中	底 6.3	暁付無釉	花文	初期伊万里。生掛け、外面貫入。
29	陶器	火受	口	S2	17 前		回転ナデ	回転ナデ、白化粧土	肥前系。大橋 II 期。
30	陶器	碗	底	C5 I	17	底 (3.9)	白刷毛目、暁付無釉	白刷毛目、蛇の目様・砂付着	肥前系。
31	白磁?	碗	底	S2	17 中	底 5.0	高台内無釉	白化粧土	初期伊万里。生掛け。
32	陶器	碗	口・底	C5 I	17 後	高 6.4・口 9.4・底 4.3	暁付無釉		肥前系。
33	陶器	碗	底	S2	17 後	底 5.5			肥前系。貫入。
34	陶器	碗	底	表採	17 後		底部無釉		肥前系。京風。
35	陶器	碗	底	C5 I		底 4.8	暁付無釉		産地不明。暗褐色。
36	染付	皿	底	表採	18 後	底 (10.6)	圏線、暁付砂付着、裏銘「渦福」	飛雲文・四方禪・唐草文、圏線、五弁花	肥前系。
37	陶器	皿	底	S5	18	底 6.1	高台無釉	蛇の目軸剥ぎ、掛け分け	肥前内野山系。
38	染付	猪口	口・底	S2	19 前	高 5.9・口 (7.2)・底 (3.8)	山水文、底・高台に圏線	雷文	肥前系。
39	染付	碗	口・底	表採	18		草花文、圏線	裏銘「？」	肥前系。
40	染付	小坏	口・底	S3	18・19	高 4.5・口 6.8・底 (3.0)	柳文	見込みに砂付着	肥前系。
41	染付	碗	口・底	S5	18 前	底 (4.6)	コンニャク印判(笹?)、圏線		肥前系。
42	染付	仏飯器	口・底	表採	17・18	高 5.2・口 7.7・底 4.2	雨降文、圏線		肥前系。
43	青磁	香炉	口・底	S5	18	高 4.5・口 (9.6)・底 (4.2)	底無釉	目跡	肥前系。
44	陶器	土瓶	口	B5II	18・19	口 (7.6)	回転ナデ	回転ナデ	薩摩系。
45	土器	焙烙	口・底	S5					
46	染付	碗	口	S59			草花文か		肥前系。赤絵。
47	陶器	土人形		S59					中空、深さ 5.5cm。

第32表 カラ石の元遺跡遺物観察表 (1) 土器・陶磁器等

No.	種別	時代	注記	長	幅	厚	重量	備考	※長・幅・厚の単位はcm、重量の単位はg
2	二次加工 ある剥片	縄文	表採	2.3	1.8	0.4	1.1	チャート製。右側縁に鋸歯状の二次加工あり。	
3	剥片	縄文	表採	2.5	1.5	0.4	1.1	姫島 Ob 製。裏面打点部の特徴から、剥片への二次加工 (打製石鏃・石匙等の製作等) の過程で出た剥片。	
4	石核	縄文	表採	6.9	6.6	4.3	256.0	ホルンフェルス製。最終的に円礫の小口より縦長指向の剥片剥離。打面調整・頭部調整なし。	
5	敲石	縄文	T3	9.3	9.7	4.8	659.5	砂岩製。垂円礫素材。正面中央・側面に敲打痕あり。	
9	磨石	古墳	S6-2	9.8	6.6	4.5	448.1	砂岩製。楕円礫素材。正面に弱い磨面あり。側面に少量鉄錆付着あり。	
10	磨石	古墳	S14-31	11.3	9.6	4.6	617.8	砂岩製。やや歪な円礫素材。正面・裏面ともに磨面あり。周縁には弱い敲打痕・赤化あり。欠損著しい。鉄錆の付着あり。	
11	磨石	古墳	S14-30	10.2	9.5	4.4	634.5	砂岩製。やや粗めの垂円礫素材。正面・裏面ともにごく弱い磨面あり。側面の凸部 3ヶ所にごく弱い敲打痕あり。	
12	打ち欠き ある礫	古墳	S14-12	17.7	10.1	4.1	1286.6	砂岩製。目の粗い扁平礫素材。右辺中央の正面側・裏面側に敲打・剥離あり。下縁も打ち欠きあり。器面は剥離面も含めて全体に弱く赤化。	
13	台石	古墳	S14-4	17.1	7.9	3.5	776.2	千枚岩製。層理の発達した目の粗い扁平礫素材。正面・裏面中央に浅く凹む敲打痕あり。裏面は剥落あり。	
14	台石	古墳	S14-1	32.6	25.0	10.3	13000.0	砂岩製。層理の発達した目の粗い塊石素材。正面は平坦で、使用痕は明瞭でないながら使用面であった可能性がある。	
15	台石	古墳	S6-10	36.1	25.1	13.8	19000.0	砂岩製。塊石素材。正面はゆるい凹面をなし、全体に弱い磨面あり。裏面は凹凸著しく、床面に埋め殺されていた。	
16	砥石	古墳	S14-21	30.6	16.1	4.4	4637.3	砂岩製。扁平礫素材。正面はごく緩やかな凹凸面であったようで、それを利用する要領で砥面が形成される。特に中央には幅約 10cm の光沢面になるまで研ぎ込まれた部分がある (図中濃いアミ部分)。砥面周縁には剥離があり、鉄錆がよく残着する。上面は弱い磨減あり。裏面は正面と同じくごく緩やかな凹凸面であり、全体によく磨減する。磨減面の端寄りに丸く凹んだ細やかな敲打痕あり。	
48	火打石	近世	表採	6.4	3.8	3.3	92.9	石英製。一部に礫面残す。稜線に潰れ・磨減あり。	
49	砥石	近世	表採	5.0	3.7	2.7	72.8	いわゆる天草砥石。四角柱状に研ぎ込まれる。下端欠損。	

第33表 カラ石の元遺跡遺物観察表 (2) 石器

No.	種別	時代	出土地点	長	幅	厚	重量	備考	※長・幅・厚の単位はcm、重量の単位はg
50	煙管	近世	表採	3.5	0.4~0.8		1.7	銅製。吸い口。口は大変細い。欠損品のため全長は現存長。	
51	永楽通宝	中世	B5S2 I	2.0		0.1	3.0		
52	寛永通宝	近世	B4S2 I	2.4		0.1	2.8		
53	銭貨	?	I	2.4				風化のため銭種不明。	

第34表 カラ石の元遺跡遺物観察表 (3) 金属器・銭貨観察表

第Ⅸ章 小路・鳴川引地の石塔について

第1節. 石塔調査の方法と経過

小路（こじ）の石塔群は、地元住民の間ではよく知られたものであったが、当センターでは平成20年5月に存在を把握できた。伐採業者によると、伐採木搬送路掘削の際に、高速道路用地内にあった石塔について路線外へ移動・保存したそうで、将来も地元住民によって大切に守られる予定である。

鳴川引地（なるかわひきち）の石塔は、後述するように原位置より離れて各部材が路線内外に散在している状態であった。

石塔の実測・写真撮影等は平成20年12月より現地に進めた。墨書の残存するものは、本センターにおいて赤外線カメラを用いて記録を行った。実測図は1/20を基本にし、月輪・墨書等は1/1で作成した。写真記録は35mmモノクロフィルムによる記録を中心に行い、随時デジタルカメラを併用した。なお、記録終了後は各石塔ともに現地の旧状に復している。（崎田）

第2節. 小路の石塔群の概要

小路の石塔群は、地下集落から西の山手に入り込んだ、比較的広い谷の1つの北斜面に分布する。

石塔に付くコケの状態から、いくつかの石塔が地表面に露出していたようである。石塔群の位置から北の山斜面方向を望むと、斜面に張り付くように石塔群が分布することや、その背後には屏風のような格好で岩盤が露出することがわかる。念のため北側の尾根については頂上までを踏査したが、遺構・遺物等は全く発見されなかった。

石塔群下には地下集落より山方向へ上がる細道があり、その下を流れる開渠水路を渡ると、国道388号線から山手側だけで5面分の水田が広がり、各水田は石積みで段状に構築されている。石積み中に石塔・石臼の類は見られなかった。水田部分で近世以降の陶磁器等が採集された。水田を挟んで南の尾根については、遺構・遺物等は見られなかった。

石塔群東側には約300㎡の平場がある。地表下約10cmまで黒色土（旧表土か）があり、その下位に褐色土

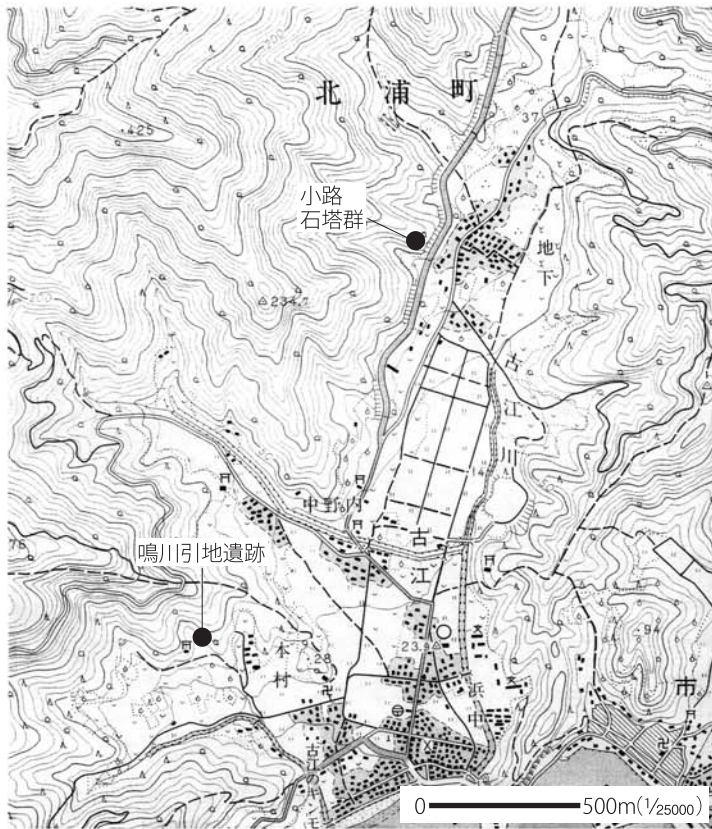
（風化した岩盤礫を多く含む）が続く。平場にはかつて社があったとされ、社は地下神社へ合祀されたそうである。これに関連するものとして、凝灰岩製切石が地表面に2点散在し、いずれもすだれ調整が見られ近世以降であろう。平場法面にも凝灰岩切石が階段状に積み重なっている。この他、平場の端には祠あるいは墓と思われるものがある。遺物としては、砂岩塊石・近世後半（18C後半～19C）の菊皿、近世～近代の瓦等が少量採集された。

石塔（第80～82図・第35表）について、1は空風輪である。円頭型で中央付近に最大径を持つ。2～4は相輪である。2は宝珠・宝輪・請花・露盤とも装飾が良好に残されていた。宝珠は尖頭型で下部に最大径を持つ。宝輪には奇数の輪に横方向、偶数の輪に縦方向の工具痕が見られた。3は宝輪の中央の輪が他の輪より薄いという特徴を持つ。露盤の装飾はない。4は円頭型の宝珠を持ち、宝輪は下部に進むにつれてその太さを増す。裾の広がる露盤に装飾は見られない。

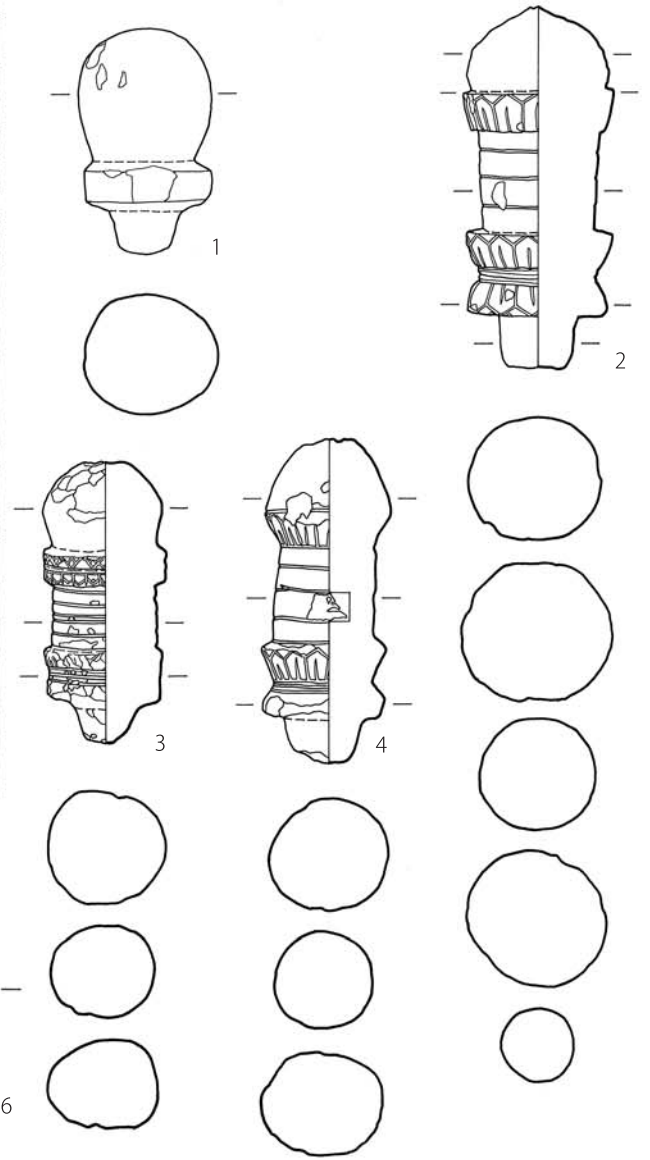
5～10は火輪もしくは笠である。平面形で5・8・10は長方形、6・7・9は正方形を呈す。柄孔は5～8が方形で、9・10が円形である。反りは5・9・10に見られるが、6～8には見られない。

11～16は塔身または水輪である。11は4側面に梵字が刻まれ、立面状態で左右に傾きが見られる。6つの塔身の中では最も深い方形納骨孔が造られている。12・13には4側面に月輪が刻まれており、非常に浅い方形納骨孔が造られている。14には4側面に墨書による金剛界五仏のキリーク、アク、ウン、タラークが記されている。また「天正廿年壬申」の文字から文禄元（1592）年に造られたと思われる。納骨孔は造られていない。15は2側面に墨書による梵字が記されている。正面の墨書に「慶長」の文字が読み取れることから、1596～1614年に造られたことが推察できる。浅い方形納骨孔が造られている。16は判読が困難であるが2側面に墨書による梵字が記されている。非常に浅い方形納骨孔が造られている。

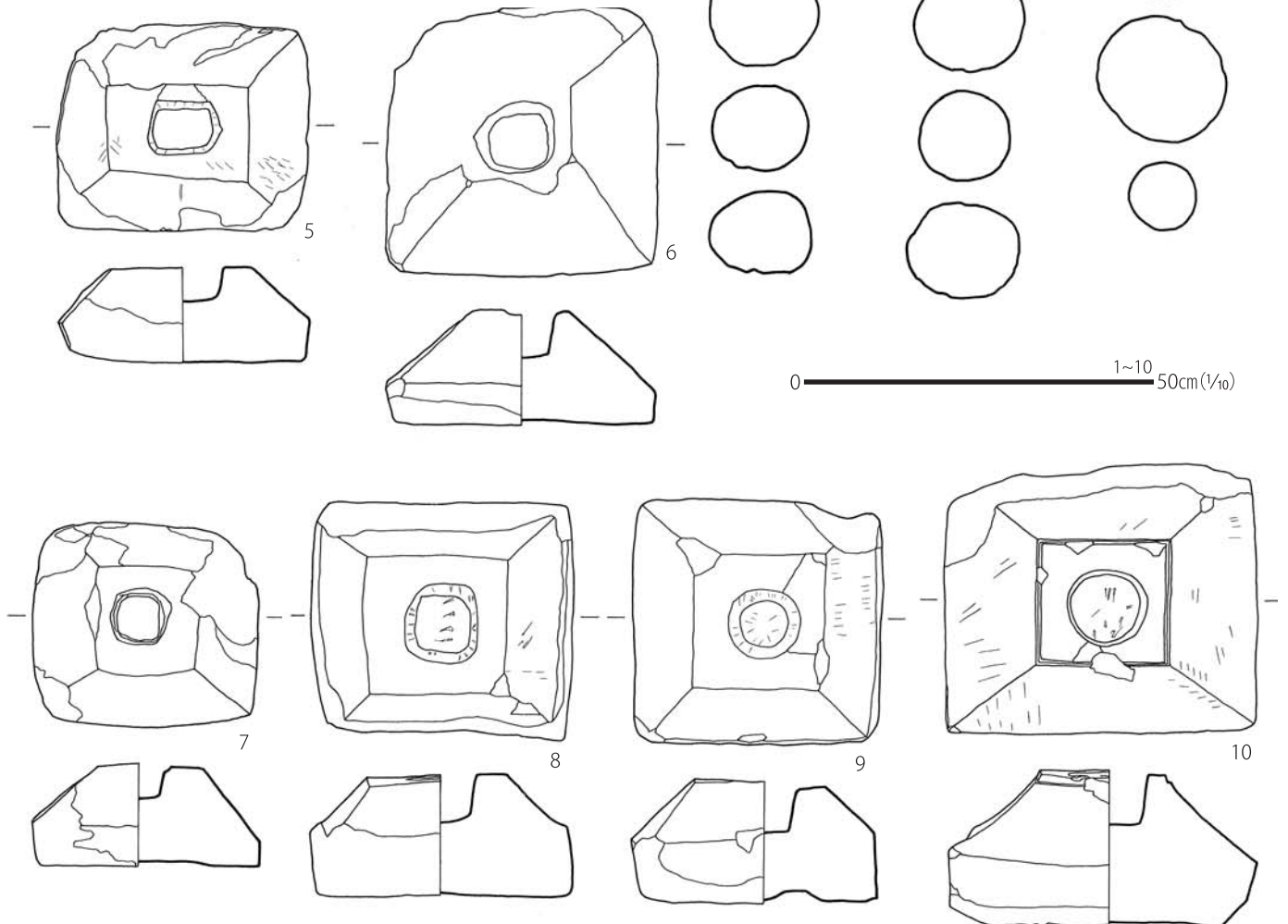
17～22は地輪もしくは基壇である。いずれも厚さは



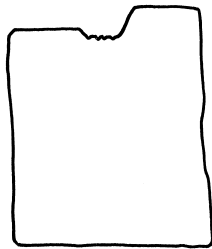
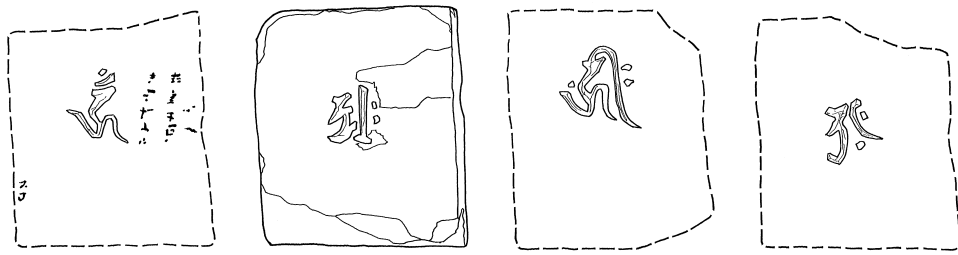
第79図 小路石塔群・鳴川引地位置図



0 1~10 50cm(1/10)

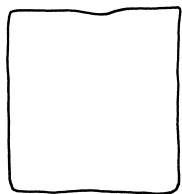
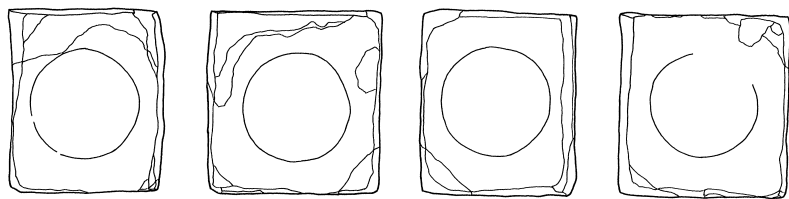


第80図 小路石塔群の石塔実測図(1)

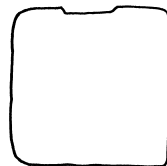
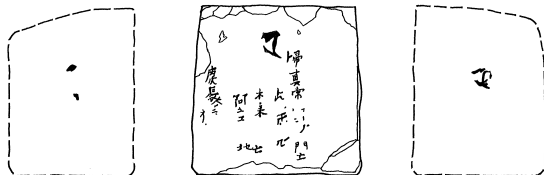
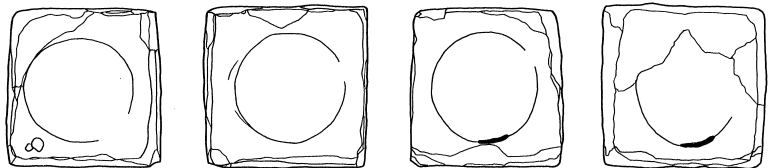


11

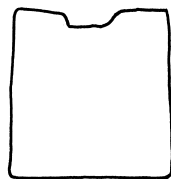
0 ————— 11~16 50cm(1/10)



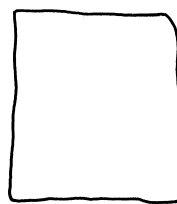
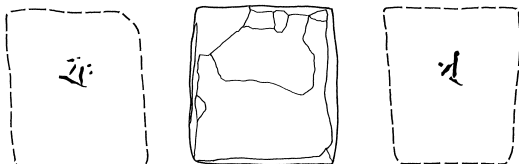
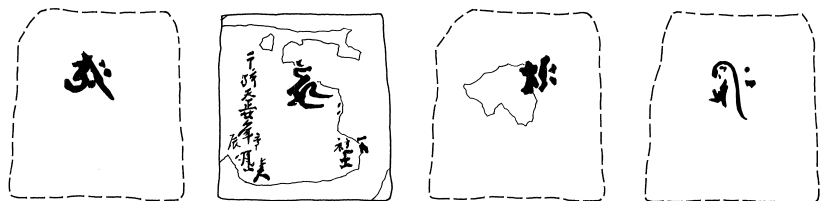
12



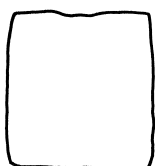
13



15

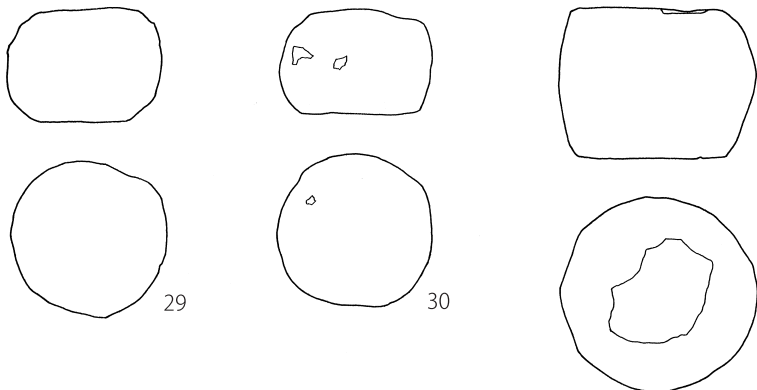
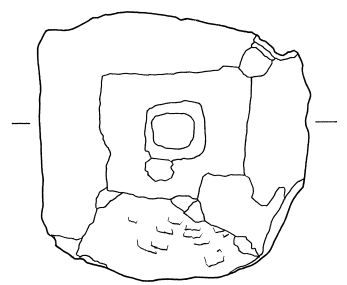
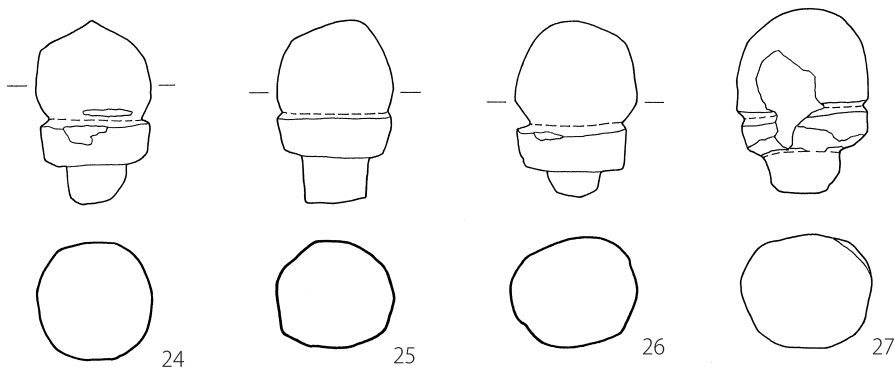
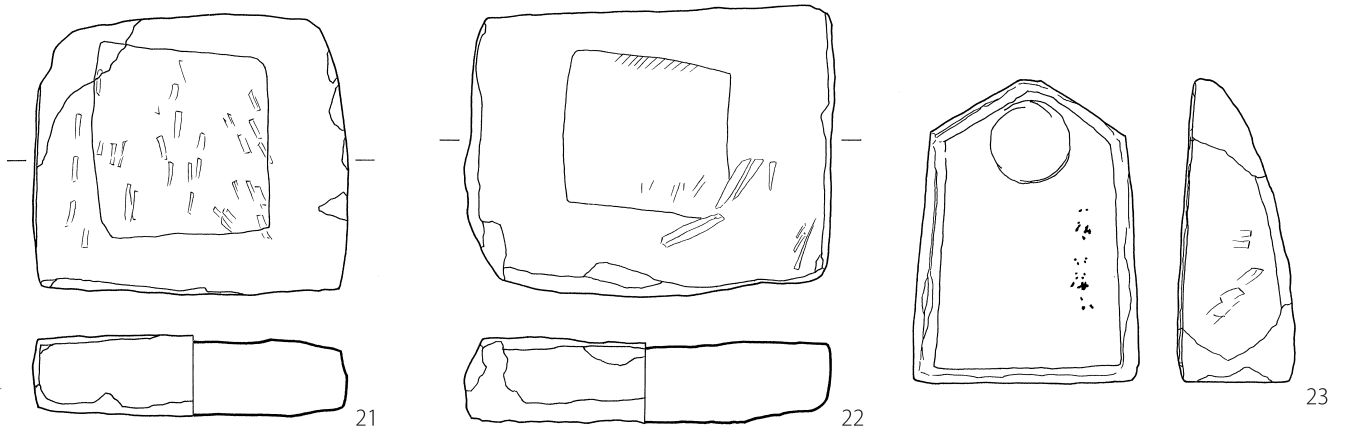
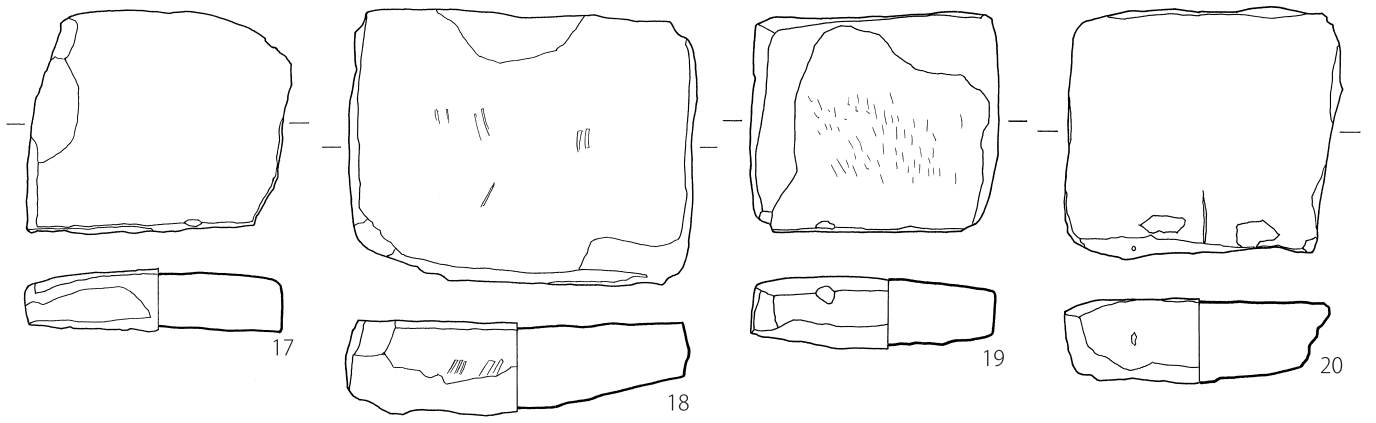


14



16

第81図 小路石塔群の石塔実測図(2)



0 ————— 17~31 20cm(1/10)

第82図 小路石塔群の石塔実測図(3)・鳴川引地の石塔実測図

番号	部位	A	a	b	c	d	e	f	g
1	空風輪	14.9	8.8		3.3	2.8	8.9	8.4	4.5

番号	部位	B	イ	ロ	ハ	ニ	ホ	ヘ	ト	チ	リ	ヌ	ル	ヲ	ワ	カ	ヨ
2	相輪	47.7	11.1	5.4		13.2	11.1		6.9	19.1	19.8		15.8	14.9	19.3	18.6	10.4
3	相輪	(38.1)	(11.4)	5.6		8.0	6.9		5.2	15.7	16.2		13.8	13.8	15.5	14.7	9.0
4	相輪	(42.7)	(9.3)	5.2		12.5	10.0		5.7	16.5	16.7		13.3	13.3	16.5	16.0	9.9

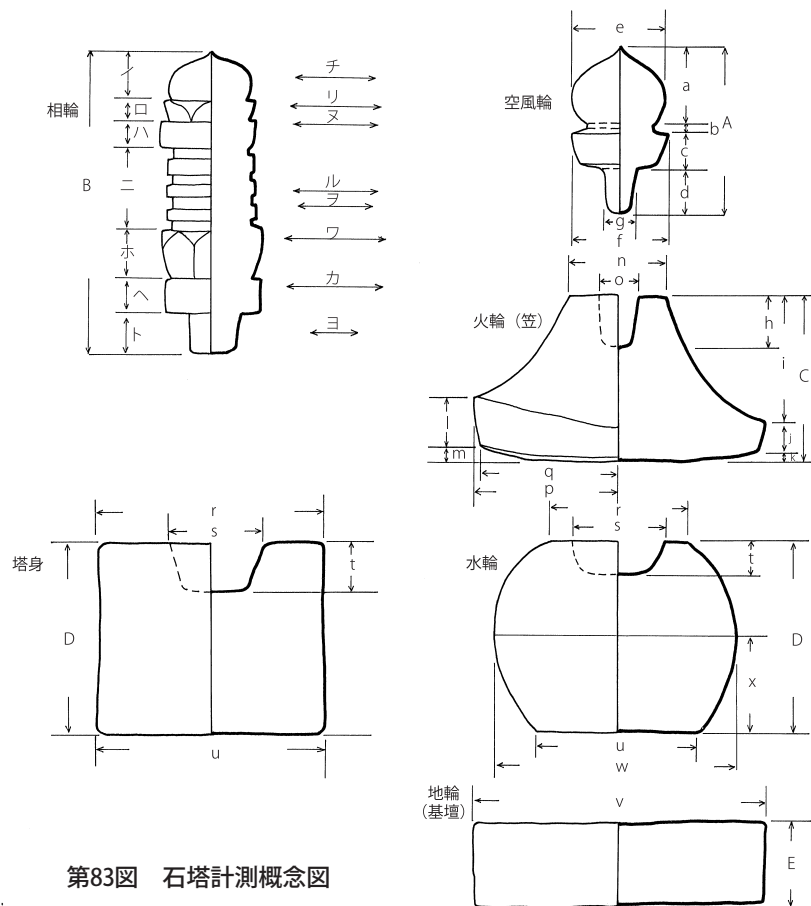
番号	部位	C	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q
5	火輪	13.6	3.6	4.0	5.8	0.2	3.8	2.0	20.8	9.5	18.1 14.4	16.2 (12.5)
6	火輪	16.4	6.2	5.4	4.2	0.6	(5.4)	0.5	15.1	10.0	19.2	17.8
7	火輪	14.7	4.5	6.3	3.8	0.1	(6.0)	0.2	(15.2)	7.7	17.0 14.0	14.0 (11.0)
8	火輪	17.4	4.8	2.4	9.2	1.0	4.2	0.5	20.6	10.4	18.6 16.2	17.2 (14.8)
9	火輪	17.2	4.2	2.8	9.2	1.0	8.2	0.8	18.6	10.2	18.8	17.0
10	火輪	21.5	6.7	5.6	5.4	3.8	(8.0)	2.5	19.2	11.4	22.8	22.8

番号	部位	D	r	s	t	u
11	塔身(水輪)	31.8	(26.4)	(8.0)	4.0	26.2
12	塔身(水輪)	24.1	22.8	6.0	0.8	(24.4)
13	塔身(水輪)	21.0	(21.2)	7.4	0.9	20.8
14	塔身(水輪)	24.6	21.2			22.8
15	塔身(水輪)	22.3	20.4	7.0	1.8	20.8
16	塔身(水輪)	20.7	17.8	(6.6)	0.6	18.6

番号	部位	E	v
17	地輪(基壇)	8.6	(33.6)
18	地輪(基壇)	12.4	45.0
19	地輪(基壇)	9.4	32.8
20	地輪(基壇)	11.0	35.0
21	地輪(基壇)	10.8	21.4
22	地輪(基壇)	10.4	27.6

番号	名称	高さ	厚さ
23	基石	39.6	(14.5)

第35表 小路石塔群観察表



第83図 石塔計測概念図

番号	部位	A	a	b	c	d	e	f	g
24	空風輪	24.2	12.6	1.2	5.4	5.0	15.6	14.4	8.0
25	空風輪	24	12.4	0.8	4.8	6.0	15.4	15.2	8.1
26	空風輪	23.4	13.7	1	5.3	3.4	16.8	15.4	5.6
27	空風輪	24.2	12.4	1.4	5.2	5.2	17.4	16.6	9.0

番号	部位	C	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q
28	火輪	20.6 (22.4)	6.6	9.0	4.0	1.0	3.0	1.0	19.6	5.6	18.2	17.2

番号	部位	D	r	s	t	u	w	x
29	水輪	14.8	13.2			11.2	20.4	8.0
30	水輪	13.8	(14.0)			15.6	20.2	6.0
31	水輪	20.0	19.0			19.4	26.0	10.0

第36表 鳴川引地の石塔観察表

8.6～12.4cmと薄手である。側面には約1～3cmの工具痕が多数見られ、21には弧を描くような工具痕も見られた。幅は18が45cmと大型であるが、17・19・20は30cm台、21・22は30cm以下と小型である。

23は板碑型の墓石である。正面からの形状は将棋の駒の様な五角形で月輪が刻まれている。正面右側に墨書が残されていたが、判読はできなかった。(崎田)

第3節. 鳴川引地の石塔の概要

鳴川引地は第三章で触れたように、試掘の結果、本調査対象外となった地点である。周辺遺跡との関係は、森ノ上遺跡から中港川を挟んだ対岸の緩斜面が鳴川引地となる。尾根を挟んだ北側の谷間には野地久保畠遺跡が立地する。

鳴川引地の石塔は、元宮神社の鳥居前の小道を西に向かって進み、昌雄寺の元社があったとされる石段のある小丘を過ぎると、江戸時代後半～明治時代の共同墓地が右手の山斜面に広がっている。墓地の一部は高速道路用地内にかかっていた墓標を路線外へ移動・積み上げた状態であったが、それらに混じって五輪塔がいくつか見られた。昌雄寺の元社とされる小丘の麓にも五輪塔が半ば埋もれた状態で見られた。小丘頂部の社周辺にも大師像等と並んで空風輪2点が祀られている。また、森ノ上遺跡調査地より斜面をやや下がった田畑(2601・2602・2625番地)の境界付近に、セメントを流し込んだプラスチックコンテナを土台として、空風輪を祀るように立てているものも1基見られた。元宮神社境内にもいくつか五輪塔が知られている。

このように一所にまとまるわけではないものの、複数の五輪塔が散見されることは、鳴川引地一帯の緩斜面地に中世の集落等が広がっていた可能性を窺わせるに十分である。

石塔(第82図・第36表)について、24～27は空風輪である。形状は24が尖頭型、25～27は円頭型である。いずれも最大径が中央より下位に見られる。28は火輪である。正面から見ると頂部に傾きが見られる。また、下面中央部には浅い凹みが造られていた。柄孔は方形で笠に反りは見られない。29～31は水輪である。いずれも20cm以下と小型で納骨孔がないという特徴がある。

(崎田)

第4節. 小結

小路ならびに鳴川引地では、空風輪5基・相輪3基・火輪7基(笠も含む)・塔身(水輪)6基・水輪3基・地輪6基・墓石1基の計31基が残されていた。各部位の分類は次のとおりである。

空風輪は頂部が丸いⅠ類・尖るⅡ類とし、空輪の最大径が中央付近にあるものをⅠ-1類(1)・Ⅱ-1類(24)、中央より下位にあるものをⅠ-2類(25～27)とする。相輪には頂部の丸いⅠ類(4)、頂部の尖るⅡ類(2)がある。火輪は柄孔がいずれも方形で、平面形が正方形で反りのないⅠ-1類(6・7・28)、平面形が長方形で反りのあるⅠ-2類(5)、平面形が長方形で反りのないⅠ-3類(8)がある。塔身(水輪)は納骨孔が方形のⅠ類・納骨孔のないⅡ類があり、納骨孔が深く正面からの形状が長方形のⅠ-1類(11)・Ⅱ-1類(15)、納骨孔が浅く正面からの形状が正方形のⅠ-2類(12・13)、納骨孔が深く、正面からの形状が台形のⅠ-3類(14)、納骨孔が浅く正面からの形状が台形のⅠ-4類(16)がある。水輪はいずれも納骨孔がなく、薄手のⅠ-1類(29・30)、厚手のⅠ-2類(31)がある。地輪(基壇)は薄手のⅠ類(17・19)、厚手のⅡ類(18・20～22)がある。

両遺跡から出土した石塔の各部位の法量を見てみると、小型のものが多いことわかる。また、それぞれの造設時期は、紀年銘等が残っていなかった鳴川引地のものは不明だが、小路の石塔群は塔身部の墨書から16C末～17C初頭には一部が造られていたと思われる。

また、両遺跡の納骨を行う部位を見てみると、小路の石塔群が立法体もしくは直方体であるのに対し、鳴川引地は樽状を呈している。前者は北浦町三川内の大井地区・梅木地区の石塔群に小路出土相輪と酷似した相輪を持つ宝篋印塔が存在する。このことから、宝篋印塔の塔身である可能性が高い一方で、水輪の一形態であることも否定できない。しかしながら、小路に樽型の水輪が見られないことから、両者の造設に時期差があったことと、それぞれが異なる宗派による手法で埋葬されたことが考えられる。

(崎田)

第X章 自然科学分析

自然科学分析では、種実・骨・貝類同定、放射性炭素年代測定・土器ならびに土壌の珪藻分析ならびに蛍光X線分析を実施した。

海舞寺・森ノ上・カラ石の元遺跡での主なフローテーション対象は、古墳時代竪穴住居跡等（森ノ上・カラ石の元）・中世集落域検出のピット群等（海舞寺）・近世土坑（カラ石の元）である。これは、種実資料の希薄な宮崎県北部の貴重な資料となること、古墳時代や中近世も対象とすることで通史的な植物質食料の変遷把握が期待されることの、大きく2つの意味で重要である。回収された種実（海舞寺遺跡のみ貝殻を含む）の主なものについては、コンタミネーション等を回避するために放射性炭素年代測定を実施した。

各分析等の方法・結果等の詳細については、次節以降で報告する。（黒木）

第1節 種実同定と放射性炭素年代測定

1. 種実同定

1-1. 試料

種実同定試料は、4遺跡の各遺構埋土のフローテーション作業で検出された種実である。検出場所は、海舞寺遺跡が中世の集落域ピットである。中野内遺跡が古墳時代の住居跡（SA5・6）、中世の可能性が指摘されるピット（pit-4）、1号流路（SE1）埋土の一部である。森ノ上遺跡は、SA3・6・8の炉、SA4の1a・1b層、1～2層間の焼土、SA10貼床である。カラ石の元遺跡は近世のゴミ穴（SC9）、古墳時代竪穴住居跡（SA2）である。最終的に抽出された炭化種子（不明を含む）は、海舞寺遺跡が529個、中野内遺跡が5個、森ノ上遺跡が36個、カラ石の元遺跡が13個、計583個であった。

試料には分析番号をナンバリングした。分析番号については以下No.と記す。

1-2. 分析方法

フローテーション方法について、約1kg以上の土はフローテーション装置使用を基本とし、約1kg未満の土は、パン箱に水を溜め、水に沈めた篩（網目0.45mm）の中に土をこぼし、浮かんできた炭化物を回収する簡

易フローテーション法で回収した。ピットの埋土は、半截した後、炭化物の有無を確認し、基本的に8号サイズのビニール袋に入る量を回収した。土は、天日で乾燥後、重量を量った。浮かんだ炭化物と篩に残った土は全て回収し、室内作業で炭化物以外のゴミ等は大型ルーペを使い、ピンセットや筆で除去した。選別には紙の上で炭化物を転がす方法も採用し、最終的に双眼実体顕微鏡で炭化種実を選別した。

選別された試料は双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて同定が可能な種実遺体を抽出した。現生標本および石川（1994）・中山ほか（2000）等との対照から、種実遺体の種類と部位を同定した。

今回の分析で、水洗対象とした土の乾燥総重量は308.075kgであった。種実同定結果は第39～43表、主要な種子の写真は図版74・75に示した。

2. 放射性炭素年代測定

2-1. 試料

年代測定用試料は、海舞寺遺跡12試料、中野内遺跡5試料、森ノ上遺跡2試料、カラ石の元遺跡4試料の合計23試料である。海舞寺の1試料が貝殻、中野内遺跡の5試料が炭化材で、残りは全て種実を対象とした。

2-2. 分析方法

試料は、超音波煮沸洗浄と酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸1.2N・水酸化ナトリウム1N・塩酸1.2N）により、不純物を取り除いた後、グラファイトを合成し、測定用試料とした。測定機器は、NEC製コンパクトAMS・1.5SDHを用いた。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用した。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma:68%）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02（Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いた。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙

線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い (^{14}C の半減期 $5,730 \pm 40$ 年) を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表した。また、No.76はハマグリ貝殻であることから、海洋炭素に由来する較正曲線を用いた暦年較正を行った。リザーバー効果による補正に関しては、地域的な補正を行うための情報に乏しいため、海洋での一般的な値 (暦年較正プログラムのdefault値である約400年) を用い、地域による補正は考慮していない。その他の試料は、種実と炭化材であることから、北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いた。

暦年較正は、測定誤差 σ 、 2σ 双方の値を計算した。 σ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

3. 結果と考察

放射性炭素年代測定および暦年較正結果は**第37表**に示した。種実同定結果は**第39~43表**、主な炭化種実の特徴は**第38表**、主要な写真は**図版74・75**に示した。

(1) 海舞寺遺跡

放射性炭素年代測定の結果は、暦年較正 (測定誤差 σ) で種実はcal AD1209-1611、貝殻はcal AD1352-1414年となった (**第37表**)。

ピットからは、オオムギ・マメ類等の炭化した栽培種を主体とする種実が確認され、これらの種子が入り込んでいたピットは中世のものであると推定される。No.1・2 (101・102) は集落域に残したベルトの造成土から検出されたもので、No.1がII a層、No.2がII b層から採取した。このベルト周辺はK-Ah上面に土を盛ることで平地が形成されていることから、集落域には中世の炭化種子が多数広がっていたことも考えられる。

栽培種は、モモ・イネ・アワ (近似種 (?含む)) ・ヒエ (近似種 (?含む)) ・キビ (近似種 (?含む)) ・オオムギ (?含む) ・コムギ・ムギ類・ソバ・マメ類

(アズキグループ含む) が確認され、全体の78.1% (全炭化種子529個中、栽培種413個) を占めている。モモは食用・薬用・観賞用・祭祀等への利用が知られ、穀類のイネ・アワ (近似種 (?含む)) ・ヒエ (近似種 (?含む)) ・キビ (近似種 (?含む)) ・オオムギ (?含む) ・コムギ・ムギ類・ソバ・マメ類は、胚乳や種子が食用される主要な植物質食糧である。

なお、これらの栽培種の可食種実は、当時の植物質食糧として利用されていたことが推定される。また、イネ・アワ近似種・オオムギには、表面に穎が付着した胚乳が確認されることから、穎果 (稲穂等) の状態で火を受けたことが推定される。炭化種子とともに、炭化した材片や動物遺存体等も産出することを考慮すると、食料や燃料材として利用された生活残滓であることが示唆された。

(2) 中野内遺跡

炭化種実は、草本のキジムシロ類・チドメグサが確認され、No.167 (SE1) でも、草本のイシミカワ近似種が確認された。これらの草本類は、生態性を踏まえると、調査区周辺に普通に生育していたと考えられる種類であり、何らかの過程を経て遺構内に混入したものと推定される。

No.181 (SI1) 集石遺構から出土した炭化材の暦年較正 (測定誤差 σ) はcal BC8719-8638となり、縄文時代早期の年代であった (**第37表**)。

(3) 森ノ上遺跡

古墳時代前期の竪穴住居跡内の炉跡等からは、栽培種の炭化種実が確認された (**第42表**)。No.171のモモの暦年較正 (測定誤差 σ) はcal AD255-335、イネはcal AD257-345と近似した年代値を得た。カキノキ属 (?) は、本地域に栽培種と野生種が分布する。出土種子は1個のみで小型であるため、栽培種と特定するには至らず、可能性を指摘するにとどめた。これらの栽培種 (可能性を含む) の可食種実の利用と、全て炭化していることから、火を受けたことが推定される。

栽培種を除く炭化種実は、No.168 (SA3炉) でエノグサ・No.169 (SA4の1a層) で炭化した広葉樹のブナ科・No.173 (SA8炉) で炭化した広葉樹のコナラ属? が確認された。広葉樹のコナラ属を含むブナ科は、本地域に分布する照葉樹林の主要構成種で、堅果が食用

可能な有用植物である。

(4) カラ石の元遺跡

遺構SA2 (No.176・177) は、炭化した栽培種のイネ、マメ類と、炭化した常緑広葉樹のツブラジイ (近似種含む) が確認された。ツブラジイは、本地域に分布する照葉樹林の主要構成種で、堅果が食用可能な有用植物である。SA2のツブラジイおよびツブラジイ近似種の種実2点がcal AD430-533とcal AD340-398であった。一方、SC9のコムギおよびオオムギの2点は、cal AD1674-1952であった。

近世のゴミ穴SC9 (No.175) は、炭化した栽培種のイネ・アワ近似種・キビ近似種?・コムギ・オオムギが確認され、コムギの暦年較正 (測定誤差 σ) はcal AD1680-1952、オオムギはcal AD1674-1942と近似した年代値が得られた。これらの穀類は、当時の植物質食糧として利用されていたことと、火を受けたことが推定される。炭化した材片や動物遺存体等も産出することを考慮すると、食料や燃料材として利用された生活残滓であることが示唆された。

第2節 骨・貝類同定

1. 試料

試料は海舞寺遺跡の中世のピットS341から出土した貝類 (No.182)、カラ石の元遺跡の中近世の3基の遺構S2・S5C3・S24から出土した骨貝類等、および近世のゴミ穴SC9から出土した骨 (No.183) である。No.182は1試料中に1~3点の破片、No.183には多数の魚骨が含まれていた。

2. 分析方法

試料に付着した土壌は、竹串、あるいは乾いた刷毛等で除去した。試料を肉眼あるいは実体顕微鏡で観察し、その形態的特徴から、種と部位の同定を行った。計測は、デジタルノギスを用いて測定した。

3. 結果と考察

検出された種類の一覧及び同定結果は第44~47表に示した。

(1) 海舞寺遺跡

出土したヒメクボガイ・レイシガイ・ウズイチモン

ジ・ハマグリ等は、近隣の沿岸部で採取されたものが持ち込まれたと考えられる。被熱の痕跡はみられないが、いずれも現在も食材とされる種類であり、食料資源としての利用が推定される。検出された貝類の分布域・生息域は、奥谷ほか (2000) によると次の通りである。

ヒメクボガイは、房総半島・山形県~沖縄に分布し、潮間帯~水深20mの岩礁に生息する。ウズイチモンジは、房総半島・能登半島以南に分布し、潮間帯~潮下帯上部の岩礁に生息する。レイシガイは、北海道南部や男鹿半島以南に分布し、潮間帯~潮下帯の岩礁域に生息する。ハマグリは北海道南部~九州に生息し、潮間帯下部~水深20mの内湾の砂泥底に生息するとされる。これらのことから、出土した貝類は、岩礁地を中心としているが、一部は干潟等からも採取されたと推定される。

(2) カラ石の元遺跡

今回検出された種類の中で、キクメイシ科はサンゴ類の一種である。破片であるが、持ち込まれた当時は径6cm程度の半球形で完存していた可能性もある。この他のアワビ類・カキ類等の貝類や魚類は、食材として遺跡内に持ち込まれたと考えられる。魚類では、サメ類・マアジ・カツオ・スズキ目・フグ科が検出されているが、中でもカツオが最も多かった。貝類のアワビ類やカキ類は岩礁域に生息する。サメ類は種類により浅海性~深海性等様々である。マアジは、浅海の岩礁域に定着する種類と沿岸から沖合の外洋の中層~底層 (水深10~100m前後) を回遊する種類があり、幼魚は内湾に進入し、稚魚は浮遊性が強く表層にいる。カツオは、暖海性で黒潮に沿って春に北上し、秋に南下する季節的な回遊を行う。フグ科は浅海や岩礁域に生息する。これらの生態性から、沿岸域だけでなく、沖合に出る漁獲も盛んに行われていたと推定される。なお、カツオは、尾鰭椎前椎体が最も多く検出されており、連結したものが4個体分、単体が9点出土することから、少なくとも6個体分はあったと考えられる。また、魚骨の中には、焼けている骨もみられ、利用後に火を受けたものも存在した。このことは、検出された魚骨・貝類はゴミ穴と考えられるSC9内に投棄された生活残滓である可能性が示唆された。

第3節.中野内遺跡出土土器の検証

1. 試料

試料は、中野内遺跡古墳時代中期の土師器塚2点 (No.184・185、第33図69・70) と、比較試料の土器が検出された周辺の土壌1点 (No.186)、土器の内側に付着していた土壌2点 (No.187・188) の計5点である。土師器は水洗を終えた状態で分析した。

2. 分析方法

(1) 珪藻分析

土師器と土壌とで分析方法が異なる。土師器は、内側の付着物を蒸留水で濡らしながら歯ブラシで擦り取り、その懸濁液を検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させた。

土壌試料は、湿重で0.2~7.1g (No.186は試料が少量であったため0.2g、No.187は5.4g、No.188は7.1g) を秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法 (4時間放置) の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集した。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させた。乾燥後、プリウラックで封入して、永久プレパラートを作製した。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数した (化石の少ない試料はこの限りではない)。種の同定は、原口ほか (1998)、Krammer (1992)、Krammer & Lange-Bertalot (1986・1988・1991a・1991b)、渡辺ほか (2005)、小林ほか (2006) 等を参照し、分類基準は、Round, Crawford & Mann (1990) に従った。なお、壊れた珪藻殻の計数基準は、柳沢 (2000) に従った。

同定結果は、中心類 (Centric diatoms; 広義のコアミケイソウ綱Coscinodiscophyceae) と羽状類 (Pennate diatoms) に分け、羽状類は無縦溝羽状珪藻類 (Araphid pennate diatoms; 広義のオビケイソウ綱Fragilariophyceae) と有縦溝羽状珪藻類 (Raphid pennate diatoms; 広義のクサリケイソウ綱Bacillariophyceae) に分けた。また、有縦溝類は、単縦溝類、双縦溝類、管縦溝類、翼管縦溝類、短縦溝類に細分した。

各種類の生態性については、Vos & de Wolf (1993) を参考としたほか、塩分濃度に対する区分はLowe (1974) に従い、真塩性種 (海水生種)、中塩性種 (汽水生種)、貧塩性種 (淡水生種) に類別した。また、貧塩性種についてはさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度 (pH)・流水に対する適応能についても示した。そして、産出個体数100個体以上の試料については、産出率2.0%以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の層位分布図を作成した。また、産出化石が現地性が異地性かを判断する目安として、完形殻の出現率を求めた。堆積環境の解析にあたり、淡水生種 (貧塩性種) については安藤 (1990)、陸生珪藻については伊藤・堀内 (1991)、汚濁耐性については渡辺ほか (2005) の環境指標種を参考とした。

(2) 蛍光X線分析

試料を105°Cで乾燥し、メノウ乳鉢で微粉碎した後、ダブルレイヤーペレット法による加圧成型 (プリケット) 試料とし、波長分散型蛍光X線分析装置 (理学電気工業製、RIX1000) により、重元素 (22Ti~92U) 範囲の全角定性および軽元素の定性分析を実施した。なお、土師器 (試料番号184・185) については付着物が認められる土器内面部分から削取した胎土試料を供試した。

加圧試料の作成条件については第50表に、測定に用いた蛍光X線装置の装置条件および測定条件の詳細については、第51・52表に掲げた通りである。

3. 結果

(1) 珪藻分析

結果を第49表・第84図に示す。また、珪藻化石の生態性区分や環境指標種群の説明を第48表に示す。珪藻化石の産出頻度は全般的に少なかったが、土師器のNo.185と土器に付着していた土壌のNo.187は、堆積環境を検討する上で有意な量の珪藻化石が産出した。完形殻の出現率は、40~60%であった。産出分類群数は、合計で15属24分類群であった。以下に産出した珪藻化石の特徴を述べる。

・土師器

化石が産出したNo.185は、陸上のコケや土壌表面等多少の湿り気を保持した好氣的環境に耐性のある陸生

珪藻が大部分を占めた。主要種は、陸生珪藻の中でも耐乾性の高い陸生珪藻A群の*Luticola mutica*が約60%と優占し、同じく陸生珪藻A群の*Hantzschia amphioxys*が約20%と多産した。これに付随して、陸生珪藻A群の*Pinnularia borealis*等を伴っていた。また、海水付着性で海水砂質干潟指標種の*Cocconeis disculus*が1個体産出した。

なお、化石の少なかったNo.184は、No.185とほぼ同様の種類の陸生珪藻が産出した。

・土壌

化石が産出した土師器（第33図69）内土壌のNo.187は、陸生珪藻が約95%と優占した。主要種は、陸生珪藻A群の*Neidium alpinum*が約30%と優占し、同じく陸生珪藻A群の*Luticola mutica*・*Caloneis aerophila*・*Hantzschia amphioxys*・*Pinnularia borealis*それに水域にも生育する陸生珪藻B群の*Pinnularia schoenfelderi*等を伴っていた。

なお、土器が検出された場所の土壌のNo.186と土師器（第33図70）内土壌のNo.188は化石が少なく、産出種が陸生珪藻にほぼ限られていた。

（2）蛍光X線分析

蛍光X線スペクトルを第85～89図に示す。また、本装置に付属するオーダー分析プログラムを利用し、ファンダメンタルパラメーター（FP）法に基づくスタンダードレス分析を実施し、検出元素を対象に100%に規格化した場合の相対含有率（wt%）を第53表に掲げた。なお、定量演算にあたっては、検出元素の全てを酸化物と仮定した条件で処理を実施した。

土師器および土壌から検出された元素のうち、Si・Ti・Al・Fe・Mn・Mg・Ca・Na・K・Pは岩石・土壌・粘土等の主要構成元素であり、他の検出元素もまた基本的にはこれらに含まれる微量元素である。ただし、土師器に関しては分析試料を削取する際にステンレス鋼刃を用いているため、鋼材からのコンタミネーションが否めない。比較試料の土壌と比べて、CrとNiが土師器において多い傾向にあるのは、おそらくそのためである。なお、Feについても同様に鋼材の影響を受けていると思われるが、試料に含有されるFeの全体量からすればほとんど無視できる程度であろう。なお、No.185の土師器においては、MnOが4.2

%も検出されている。土中埋設中にマンガン酸化物が沈着した可能性も考えられるが言及することは難しく、原因については定かではない。

4. 考察

出土土器の製塩用途としての可能性を検証するために、珪藻分析と蛍光X線分析を実施した結果、入れ子状に重なる土師器の内側のNo.185から珪藻化石が産出したが、外側のNo.184は少なかった。産出した珪藻化石の内容をみると、両試料とも陸上の好気的環境に生育する陸生珪藻が主体となっており、海水生種に由来する珪藻化石はNo.185から1個体産出したのみである。なお、産出した陸生珪藻は、土壌珪藻としても一般的なものである（Patrick,1977）ことから、土師器内や土師器が埋没していた地点の土壌に含まれた陸生珪藻に由来する可能性がある。これは、比較試料として分析した土師器（第33図69・70）の土器内に含まれていた土壌の珪藻化石組成とも近似していたことから窺える。

一方、海水に含まれる主要な陽イオン、陰イオンは Na^+ ・ K^+ ・ Mg^{2+} ・ Ca^{2+} ・ Cl^- ・ SO_4^{2-} ・ HCO_3^- であり、製塩によって析出する塩類は NaCl ・ KCl ・ MgCl_2 ・ CaCl_2 ・ CaSO_4 ・ MgSO_4 等である。析出塩のほとんどは NaCl であり、にがり成分である MgCl_2 ・ CaCl_2 等は微量～少量含まれる程度であることが多い（パリオ・サーヴェイ株式会社2004）。今回の蛍光X線分析による調査では、比較試料の土壌と土師器とでは SiO_2 や Al_2O_3 ・ Fe_2O_3 等構成物質の本質において若干の組成差が見られる以外に大きな特徴の違いは見受けられず、Clや SO_4 の含有率も逆に土師器において少ないことから、 NaCl 等の塩化物や MgSO_4 等硫酸塩が土師器胎土に付着、あるいは含浸して残存しているような状況は捉えられなかった。

引用文献

- 安藤一男,1990,淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用,東北地理,42,73-88.
Asai, K. & Watanabe, T.,1995,Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophylic and saproxenous taxa. *Diatom*,10, 35-47.
原口和夫・三友清史・小林 弘,1998,埼玉の藻類 珪藻類,埼玉県植物誌,埼玉県教育委員会,527-600.
Hustedt, F.,1937-1939,*Systematische und ökologische Unter*

- suchungen über die Diatomeen-Flora von Java., Bali und Sumatra*. Archiv für Hydrobiologie, Supplement, 15:131-177, 15:187-295, 15:393-506, 15:638-790, 16:1-155, 16:274-394.
- 石川茂雄, 1994, 原色日本植物種子写真図鑑. 石川茂雄図鑑刊行委員会, 328p.
- 伊藤良永・堀内誠示, 1991, 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 珪藻学会誌, 6, 23-45.
- 小杉正人, 1988, 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 第四紀研究, 27, 1-20.
- 小林 弘・出井雅彦・真山茂樹・南雲 保・長田啓五, 2006, 小林弘珪藻図鑑. 第1巻, (株)内田老鶴圃, 531p.
- Krammer, K., 1992, *PINNULARIA. eine Monographie der europäischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND 26*. J. CRAMER, 353p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1986, *Bacillariophyceae. 1. Teil: Naviculaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band 2/1*. Gustav Fischer Verlag, 876p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1988, *Bacillariophyceae. 2. Teil: Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band 2/2*. Gustav Fischer Verlag, 536p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1991a, *Bacillariophyceae. 3. Teil: Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band 2/3*. Gustav Fischer Verlag, 230p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1991b, *Bacillariophyceae. 4. Teil: Achnantheaceae, Kritische Ergänzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band 2/4*. Gustav Fischer Verlag, 248p.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志, 2000, 日本植物種子図鑑. 東北大学出版会, 642p.
- Lowe, R.L., 1974, *Environmental Requirements and pollution Tolerance of Fresh-water Diatoms*. 334p. In Environmental Monitoring Ser. EPA Report 670/4-74-005. Nat. Environmental Res. Center Office of Res. Develop., U.S. Environ. Protect. Agency, Cincinnati.
- 奥谷喬司・窪寺恒己・黒住耐二・斎藤 寛・佐々木猛智・土田英治・土屋光太郎・長谷川和範・濱谷 巖・速水 格・堀 成夫・松隈明彦, 2000, 日本近海産貝類図鑑. 奥谷喬司編. 東海大学出版会, 1173p.
- パリノ・サーヴェイ株式会社, 2004, 向田 (35) 遺跡自然科学分析. 青森県埋蔵文化財調査報告書373集 向田 (35) 遺跡-国道279号有戸バイパス建設事業に伴う遺跡発掘調査報告- (第2分冊), 青森県埋蔵文化財調査センター, 1-22.
- Patrick, R., 1977, Ecology of freshwater diatoms and diatom communities. The biology of diatoms., Botanical Monographs, 13, 284-332, Blackwell Scientific Publication, London.
- Round, F. E., Crawford, R. M. & Mann, D. G. 1990, *The diatoms. Biology & morphology of the genera*. 747p. Cambridge University Press, Cambridge.
- Vos, P.C. & H. de Wolf, 1993, Diatoms as a tool for reconstructing sedimentary environments in coastal wetlands: methodological aspects. *Hydrobiologica*, 269/270, 285-296.
- 渡辺仁治・浅井一視・大塚泰介・辻 彰洋・伯耆晶子, 2005, 淡水珪藻生態図鑑. 内田老鶴圃, 666p.
- 柳沢幸夫, 2000, II-1-3-2- (5) 計数・同定. 化石の研究法-採集から最新の解析法まで-, 化石研究会, 共立出版株式会社, 49-50.
- 吉崎昌一, 1992, 古代雑穀の検出. 月刊考古学ジャーナル, No.355, 2-14.

分析番号	遺跡	遺構	種類	補正年代(BP)	δ13C(‰)	暦年較正年代 (cal)												相対比	Code No.	
						σ	cal	AD	-	cal	AD	cal	BP	-	cal	BP	-			cal
1	海舞寺	101	コムギ (胚乳)	380±17	-24.40±0.21	σ	cal	AD	1,454	-	cal	AD	1,491	cal	BP	496	-	459	0.845	10493-1
						2σ	cal	AD	1,603	-	cal	AD	1,611	cal	BP	347	-	339	0.155	
2	海舞寺	102	オオムギ (胚乳)	470±17	-27.43±0.17	σ	cal	AD	1,430	-	cal	AD	1,443	cal	BP	520	-	507	1.000	10493-2
						2σ	cal	AD	1,421	-	cal	AD	1,447	cal	BP	529	-	503	1.000	
22	海舞寺	S93	イネ (胚乳)	727±18	-25.62±0.21	σ	cal	AD	1,271	-	cal	AD	1,282	cal	BP	679	-	668	1.000	10493-3
						2σ	cal	AD	1,263	-	cal	AD	1,288	cal	BP	687	-	662	1.000	
26	海舞寺	S110	イネ (胚乳)	768±17	-25.43±0.20	σ	cal	AD	1,243	-	cal	AD	1,246	cal	BP	707	-	704	0.036	10493-4
						2σ	cal	AD	1,251	-	cal	AD	1,275	cal	BP	699	-	675	0.964	
47	海舞寺	S167	オオムギ (胚乳)	636±17	-24.47±0.19	σ	cal	AD	1,297	-	cal	AD	1,311	cal	BP	653	-	639	0.375	10493-8
						2σ	cal	AD	1,359	-	cal	AD	1,387	cal	BP	591	-	563	0.625	
76	海舞寺	S341	ハマグリ (貝殻)	977±19	0.48±0.19	σ	cal	AD	1,352	-	cal	AD	1,414	cal	BP	598	-	536	1.000	10493-5
						2σ	cal	AD	1,328	-	cal	AD	1,431	cal	BP	622	-	519	1.000	
77	海舞寺	S343	オオムギ (胚乳)	625±18	-29.04±0.21	σ	cal	AD	1,299	-	cal	AD	1,318	cal	BP	651	-	632	0.429	10493-6
						2σ	cal	AD	1,352	-	cal	AD	1,369	cal	BP	598	-	581	0.381	
99	海舞寺	S393	オオムギ? (胚乳)	827±18	-24.85±0.24	σ	cal	AD	1,380	-	cal	AD	1,390	cal	BP	570	-	560	0.190	10493-9
						2σ	cal	AD	1,293	-	cal	AD	1,327	cal	BP	657	-	623	0.396	
105	海舞寺	S405	コナラ属 (子葉)	640±17	-24.11±0.21	σ	cal	AD	1,342	-	cal	AD	1,362	cal	BP	608	-	555	0.604	10493-7
						2σ	cal	AD	1,302	-	cal	AD	1,322	cal	BP	648	-	628	0.432	
141	海舞寺	S532	コムギ (胚乳)	701±18	-24.64±0.24	σ	cal	AD	1,348	-	cal	AD	1,367	cal	BP	602	-	583	0.389	10493-10
						2σ	cal	AD	1,382	-	cal	AD	1,392	cal	BP	568	-	558	0.180	
147	海舞寺	S1011	オオムギ (胚乳)	676±18	-23.60±0.20	σ	cal	AD	1,296	-	cal	AD	1,330	cal	BP	654	-	620	0.395	10493-11
						2σ	cal	AD	1,338	-	cal	AD	1,397	cal	BP	612	-	553	0.605	
166	中野内	SE1(トレンチ5 の6層)	コナラ節 (炭化材)	606±17	-24.34±0.21	σ	cal	AD	1,209	-	cal	AD	1,254	cal	BP	741	-	696	1.000	10493-12
						2σ	cal	AD	1,176	-	cal	AD	1,259	cal	BP	774	-	691	1.000	
171	森ノ上B	SA4 土器中	モモ (核)	1,737±19	-27.17±0.20	σ	cal	AD	1,295	-	cal	AD	1,309	cal	BP	655	-	641	0.341	10493-13
						2σ	cal	AD	1,361	-	cal	AD	1,386	cal	BP	589	-	564	0.659	
175	カラ石の 元	SC9	コムギ (胚乳)	145±17	-25.72±0.20	σ	cal	AD	1,288	-	cal	AD	1,298	cal	BP	680	-	652	0.970	10493-14
						2σ	cal	AD	1,272	-	cal	AD	1,378	cal	BP	578	-	572	0.030	
177	カラ石の 元	SA2-S1	ツブラジイ (子葉)	1,584±19	-28.70±0.22	σ	cal	AD	1,282	-	cal	AD	1,298	cal	BP	668	-	652	0.779	10493-15
						2σ	cal	AD	1,371	-	cal	AD	1,378	cal	BP	579	-	572	0.221	
179	中野内	SE1(トレンチ5 の7層)	広葉樹 (炭化材)	1,035±18	-26.46±0.19	σ	cal	AD	1,278	-	cal	AD	1,306	cal	BP	672	-	644	0.678	10493-16
						2σ	cal	AD	1,363	-	cal	AD	1,385	cal	BP	587	-	565	0.322	
179	中野内	SE1(トレンチ4 の5a層)	コナラ節 (炭化材)	956±19	-27.29±0.18	σ	cal	AD	1,307	-	cal	AD	1,327	cal	BP	643	-	623	0.399	10493-17
						2σ	cal	AD	1,342	-	cal	AD	1,362	cal	BP	608	-	588	0.418	
181	中野内	S11	広葉樹 (炭化材)	9,405±28	-27.54±0.20	σ	cal	AD	1,385	-	cal	AD	1,394	cal	BP	565	-	556	0.183	10493-18
						2σ	cal	AD	1,300	-	cal	AD	1,368	cal	BP	650	-	582	0.797	
181	中野内	S11	広葉樹 (炭化材)	9,405±28	-27.54±0.20	σ	cal	AD	1,381	-	cal	AD	1,401	cal	BP	569	-	549	0.203	10493-19
						2σ	cal	AD	1,255	-	cal	AD	2,268	cal	BP	1,695	-	1,682	0.175	
181	中野内	S11	広葉樹 (炭化材)	9,405±28	-27.54±0.20	σ	cal	AD	271	-	cal	AD	304	cal	BP	1,679	-	1,646	0.508	10493-20
						2σ	cal	AD	313	-	cal	AD	335	cal	BP	1,637	-	1,615	0.316	
181	中野内	S11	広葉樹 (炭化材)	9,405±28	-27.54±0.20	σ	cal	AD	243	-	cal	AD	355	cal	BP	1,707	-	1,595	0.956	10493-21
						2σ	cal	AD	367	-	cal	AD	380	cal	BP	1,583	-	1,570	0.044	
181	中野内	S11	広葉樹 (炭化材)	9,405±28	-27.54±0.20	σ	cal	AD	257	-	cal	AD	301	cal	BP	1,693	-	1,649	0.624	10493-22
						2σ	cal	AD	317	-	cal	AD	345	cal	BP	1,633	-	1,605	0.376	
181	中野内	S11	広葉樹 (炭化材)	9,405±28	-27.54±0.20	σ	cal	AD	253	-	cal	AD	382	cal	BP	1,697	-	1,568	1.000	10493-23
						2σ	cal	AD	1,680	-	cal	AD	1,694	cal	BP	270	-	256	0.170	
181	中野内	S11	広葉樹 (炭化材)	9,405±28	-27.54±0.20	σ	cal	AD	1,727	-	cal	AD	1,764	cal	BP	223	-	186	0.393	10493-24
						2σ	cal	AD	1,774	-	cal	AD	1,775	cal	BP	176	-	175	0.007	
181	中野内	S11	広葉樹 (炭化材)	9,405±28	-27.54±0.20	σ	cal	AD	1,800	-	cal	AD	1,812	cal	BP	150	-	138	0.143	10493-25
						2σ	cal	AD	1,854	-	cal	AD	1,857	cal	BP	96	-	93	0.014	
181	中野内	S11	広葉樹 (炭化材)	9,405±28	-27.54±0.20	σ	cal	AD	1,863	-	cal	AD	1,866	cal	BP	87	-	84	0.014	10493-26
						2σ	cal	AD	1,919	-	cal	AD	1,939	cal	BP	31	-	11	0.258	
181	中野内	S11	広葉樹 (炭化材)	9,405±28	-27.54±0.20	σ	cal	AD	1,951	-	cal	AD	1,952	cal	BP	1	-	2	0.000	10493-27
						2σ	cal	AD	1,670	-	cal	AD	1,698	cal	BP	280	-	252	0.163	
181	中野内	S11	広葉樹 (炭化材)	9,405±28	-27.54±0.20	σ	cal	AD	1,722	-	cal	AD	1,779	cal	BP	228	-	171	0.346	10493-28
						2σ	cal	AD	1,798	-	cal	AD	1,817	cal	BP	152	-	133	0.118	
181	中野内	S11	広葉樹 (炭化材)	9,405±28	-27.54±0.20	σ	cal	AD	1,833	-	cal	AD	1,879	cal	BP	117	-	71	0.167	10493-29
						2σ	cal	AD	1,916	-	cal	AD	1,943	cal	BP	34	-	7	0.199	
181	中野内	S11	広葉樹 (炭化材)	9,405±28	-27.54±0.20	σ	cal	AD	1,950	-	cal	AD	1,953	cal	BP	0	-	3	0.008	10493-30
						2σ	cal	AD	1,674	-	cal	AD	1,683	cal	BP	276	-	267	0.131	
181	中野内	S11	広葉樹 (炭化材)	9,405±28	-27.54±0.20	σ	cal	AD	1,735	-	cal	AD	1,778	cal	BP	215	-	172	0.649	10493-31
						2σ	cal	AD	1,799	-	cal	AD	1,805	cal	BP	151	-	145	0.076	
181	中野内	S11	広葉樹 (炭化材)	9,405±28	-27.54±0.20	σ	cal	AD	1,932	-	cal	AD	1,942	cal	BP	18	-	8	0.144	10493-32
						2σ	cal	AD	1,667	-	cal	AD	1,691	cal	BP	283	-	259	0.174	
181	中野内	S11	広葉樹 (炭化材)	9,405±28	-27.54±0.20	σ	cal	AD	1,729	-	cal	AD	1,783	cal	BP	221	-	167	0.525	10493-33
						2σ	cal	AD	1,796	-	cal	AD	1,811	cal	BP	154	-	139	0.105	
181	中野内	S11	広葉樹 (炭化材)	9,405±28	-27.54±0.20	σ	cal	AD	1,921	-	cal	AD	1,952	cal	BP	29	-	2	0.196	10493-34
						2σ	cal	AD	430	-	cal	AD	443	cal	BP	1,520	-	1,507	0.168	
181	中野内	S11	広葉樹 (炭化材)	9,405±28	-27.54±0.20	σ	cal	AD	451	-	cal	AD	462	cal	BP	1,499	-	1,488	0.120	10493-35
						2σ	cal	AD	483	-	cal	AD	533	cal	BP	1,467	-	1,417	0.711	
18																				

ナラ属 (*Quercus*) ブナ科

子葉の破片が検出された。炭化しており黒色。完形ならば卵状楕円体で頂部は尖る。破片は子葉の合わせ目に沿って割れた半分以下で、長さ1.2cm、径0.8cm程度。子葉は硬く緻密で、表面は縦方向に走る維管束の圧痕がみられる。子葉合わせ目の表面は平滑で、正中線上は僅かに窪み、頂部に小さな孔(主根)がある。

ツブラジイ (*Castanopsis cuspidata*(Thunb. ex Murray) Schottky)ブナ科シイ属

子葉が検出された。炭化しており黒色。長さ4.5mm、径4.2mm程度の広卵体で頂部は尖る。子葉の合わせ目に沿って割れた半分以下の破片もみられる。子葉は硬く緻密で、表面は縦方向に走る維管束の圧痕がみられる。子葉合わせ目の表面は平滑で、正中線上は僅かに窪み、頂部に小さな孔(主根)がある。なお、シイ属と思われる果実の破片も確認された。炭化しており黒色。破片の大きさは4mm程度。果皮はコナラ属よりもやや厚く、表面には微細な縦筋が配列する。果皮内面には、粗面で粗い縦隆条が配列する内果皮がある。

モモ (*Prunus persica* Batsch) バラ科サクラ属

核(内果皮)の破片が検出された。炭化しており黒色。完形ならばやや偏平な広楕円体で頂部はやや尖り、基部は切形で中央部に湾入した臍がある。1本の明瞭な縦の縫合線が発達し、背面正中線上に細い縦隆条が、腹面正中線には浅い縦溝とその両側に幅の狭い帯状部がある。内果皮は厚く硬く、表面は縦に流れる不規則な線状の深い窪みがあり、全体として粗いしわ状にみえる。破片は、縫合線に沿って割れた半分未満で、大きさは8mm程度。核の内側表面は平滑で、種子1個が入る楕円状の窪みがみられる。

カキノキ属 (*Diospyros*) ? カキノキ科

種子が検出された。炭化しており黒色。長さ7mm、幅4mm、厚さ2mm程度のやや偏平な非対称倒皮針体。種子には縦に一周する稜があり、背面は丸みを帯び、腹面は直線状。腹面基部にある1mm程度の楕円形の孔を欠損する。種皮は薄く硬く、表面は粗面。

イネ (*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属

胚乳と穎の破片が検出された。炭化しており黒色。長楕円形でやや偏平。胚乳は長さ4.0~5.5mm、幅2.5~3.5mm、厚さ1.5mm程度。基部一端に胚が脱落した斜切形の凹部がある。表面はやや平滑で、2~3本の隆条が縦列する。表面に穎が付着する個体もみられる。胚乳を包む穎(果)は、完形ならば長さ6.0~7.5mm、幅3~4mm、厚さ2mm程度。基部に斜切状円柱形の果実序柄と1対の護穎を有し、その上に外穎(護穎と言う場合もある)と内穎がある。外穎は5脈、内穎は3脈をもち、ともに舟形を呈し、縫合してやや偏平な長楕円形の稲籾を構成する。果皮は薄く柔らかく、表面には顆粒状突起が縦列する。

アワ近似種 (*Setaria cf. italica* (L.) P.Beauv.)

イネ科エノコログサ属

胚乳・穎が検出された。炭化しており黒色、胚乳は長さ1.3~1.5mm、幅1.0~1.3mm、厚さ0.8~1.0mm程度の半偏球体。背面は丸みがあり、基部正中線上に径0.5mm程度の馬蹄形の胚の凹みがある。腹面は平ら。胚乳表面はやや平滑。穎(果)が付着する個体が確認される。果皮は薄く、表面には横方向に目立つ顆粒状突起が配列する。海舞寺遺跡のNo80 (S351)、No88 (S369)では、穎果複数個が集結した状態が確認される。

ヒエ近似種 (*Echinochloa cf. utilis* Ohwi et Yabuno)

イネ科ヒエ属

胚乳・穎が確認された。炭化しており黒色、穎が付着した胚乳は長さ2mm、幅1.2mm、厚さ1mm程度、胚乳は長さ1.3mm、幅1mm、厚さ0.5mm程度の狭卵~半偏球体で、背面は丸みがあり腹面はやや平ら。基部正中線上に、胚乳の長さの2/3以上を占める縦長で馬蹄形の胚の凹みがある。胚乳表面は粗面またはやや平滑。穎(果)が付着する個体が確認される。果皮は薄く、表面は平滑で光沢があり、微細な縦長の網目模様が縦列する。

キビ近似種 (*Panicum cf. miliaceum* L.) イネ科キビ属

胚乳が検出された。炭化しており黒色。径1.8mm、厚さ1mm程度のやや偏平な広卵体。背面は丸みがあり、腹面は平ら。基部正中線上には、径0.4mm程度の馬蹄形の胚の凹みがある。表面は粗面。

オオムギ (*Hordeum vulgare* L.) イネ科オオムギ属

胚乳が検出された。炭化しており黒色、長さ4.5~6.5mm、径3~4mm程度のやや偏平な紡錘状長楕円体。両端は尖る。腹面は正中線上にやや深く深い縦溝があり、背面は基部正中線上に胚の痕跡があり丸く窪む。表面には微細な縦筋があり、穎(果)が付着する個体も確認される。

コムギ (*Triticum aestivum* L.) イネ科コムギ属

胚乳が検出された。炭化しており黒色、長さ2.5~3.8mm、径2~3mm程度の楕円体。腹面は正中線上にやや深く深い縦溝があり、背面は基部正中線上に胚の痕跡があり丸く窪む。表面はやや平滑。なお、頂部を欠損するなど遺存状態が悪く、オオムギとの判別が難しい個体をムギ類としている。

ソバ (*Fagopyrum esculentum* Moench) タデ科ソバ属

果実が検出された。炭化しており黒色。長さ3mm、径2.2mm程度の三稜状広卵体。三稜と頂部は鋭く尖り、面はやや凹む。基部は切形で径1mm程度の萼を欠損する。果皮表面はやや平滑。

マメ類 (Leguminosae) マメ科

種子が検出された。炭化しており黒色、長さ3.5~4.2mm、幅2.5~3mm、厚さ1.5~2mm程度の長楕円体。状態良好な完形個体には、腹面の子葉合わせ目にある細長い長楕円形の臍は確認されないが、子葉の中間を占める胚軸がやや突出する個体がみられる。また、子葉の合わせ目から割れた半分個体の一部には、子葉内面に北大基準(吉崎,1992)の「アズキグループ(幼根が臍の終わり程から急に立ち上がり、胚珠中央に向けて伸びる)」に該当する幼根や初生葉の状態が確認される。種皮表面はやや平滑で、焼け膨れ、表面が崩れているものもある。なお、径1.5mm程度と小型で、腹面の子葉合わせ目上に長さ0.8mm、幅0.3mmの細長い長楕円形の臍が確認される種子を、マメ科と区別している。

第38表 主な炭化種子の特徴

分析番号 (No)	遺構	乾燥重量 (g)	アワーヒ胚乳	アワ近似種胚乳	アワ近似種類	アワ近似種?胚乳	イネ胚乳	イネ科胚乳	オオムギ胚乳	オオムギ?胚乳	カヤツリグサ科果実	キビ近似種胚乳	キビ近似種?胚乳	コナラ属子葉	コムギ胚乳	シイ属?果実	シンジュガヤ属果実	ソバ果実	タデ属?果実	タデ属?果実	ヒエ近似種胚乳	ヒエ近似種?胚乳	マメ科種子	マメ科種子	マメ類アズキグループ種子	ムギ類胚乳	ムギ類稈	ムギ類?胚乳	モモ核	菌核	双子葉類種子	双子葉類マメ科?種子	不明種実	不明植物	不明炭化物		
1	101	15000		1			2					1											1	1											5		
2	102	14500		1					60						4		1							1	1	8						57			6		
3	S6	400																																	1		
4	S13	750																													2						
5	S14	370																												2							
6	S25	400																												1							
7	S32	110													1																						
8	S33	235													1											1	1										
9	S39	220																																	1		
10	S52	350							1																												
11	S54	190				1										1																					
12	S55	270					1																														
13	S62	190	1																																		
14	S71	260	4																																		
15	S72	310	1													1																					
16	S74	270									1																						3				
17	S76	240	1																							1										1	
18	S79	260													1																					1	
21	S87	210																																			
22	S93	250					1																														
23	S98	195					1								1																					1	
24	S99	300	1																															2			
25	S109	300					1																														
26	S110	250	1				1																														
27	S112	310																																			
29	S117	255		1											1																						
30	S119	330							1																											1	
31	S121	250													1																						
33	S130	235																																		3	
34	S132	405																																			
35	S133	380										1																								3	
36	S134	360	1						1																												
37	S139	280					3																			2										1	
38	S144	235																1																			
39	S145	300						1																												1	
40	S147	270	1																																	1	
41	S151	290										1																									
42	S156	345	1																																		
43	S157	245							1																												
44	S164	400													1										1												
45	S165	380					1								1																						
46	S166	400	1																					1													
47	S167	560							1																											1	
48	S168	430	1																						1											1	
49	S169	450													1										1											1	
50	S171	380													1																						
51	S178	290																						1													
53	S180	360																																			
54	S181	410													1																					1	
55	S182	210							1																												
56	S183	220																																			4
57	S185	315																																			2
58	S187	365					1																														
59	S190	215																																			
60	S202	270							1																												6
61	S203	260																																			1
62	S206	235																						1													
63	S208	240	1																																		
64	S210	270																																			
65	S211	215																								1											
66	S212	290	1																																		
67	S216	330																								1											
71	S227	480																																			
72	S230	480																																			
73	S232	170							1																												
74	S233	290																																			
75	S235	1780																							1												1
76	S341	1800						1	1																												
77	S343	1780	5												1										40												1
78	S345	205	1																																		

第39表 海舞寺遺跡炭化種子一覧 (1)

分析番号 (No)	遺構	乾燥重量 (g)	アワヒエ胚乳	アワ近似種胚乳	アワ近似種類	アワ近似種?胚乳	イネ胚乳	イネ科胚乳	オオムギ胚乳	オオムギ?胚乳	カヤツリグサ科果実	キビ近似種?胚乳	キビ近似種胚乳	コナラ属子葉	コムギ胚乳	シイ属?果実	シンジュガヤ属果実	ソバ果実	タデ属?果実	タデ属?果実	ヒエ近似種?胚乳	ヒエ近似種胚乳	ヒエ近似種?胚乳	マメ科種子	マメ科種子	マメ類アズキグループ種子	ムギ類胚乳	ムギ類稈	ムギ類?胚乳	モモ核	菌核	双子葉類種子	双子葉類マメ科?種子	不明種実	不明植物	不明炭化物		
79	S347	1820																																				
80	S351	160		5			1																									2						
81	S352	2030		3																	1			1							6					1		
82	S356	250		1																																		
83	S357	6080		1					1		1				1										1						1					1		
84	S360	270																						1														
85	S363	290																														2						
86	S366	315							1																													
87	S368	120		2																																		
88	S369	170		5																																		
89	S370	1450		2					1		1																											
90	S371	345					1		1																													
91	S372	1800		4			1		1													2																
92	S375	470		1																																		
93	S376	460																														2						
94	S378	125		1																																		
95	S380	1260		4																																		
96	S383	80		1																																		
99	S393	450		1					1	1																								1			1	
100	S395	250																														1					1	
101	S396	590							1																							1						
102	S397	260					1																															
104	S401	180		1																			1															
105	S405	1130					2		1					2								17															2	
107	S410	460		1			2						1									5															1	
108	S411	515				2	2		1																		1				5	1					4	
109	S412	620																																1				
110	S413	520																															3					
111	S414	240																														1					1	
112	S415	245	1												1																							
113	S419	325							1																													
115	S438	240					2																															
116	S458	500													1																							
117	S462	355	1																																			
119	S470	130												5																								
120	S471	225													1																							
121	S473	160													1																							
122	S474	2820							1					1												1												
123	S479	170							1																													
124	S487	310					1																															
126	S493	110		1																																		1
128	S499	210		1					1																													
130	S509	125																																				
134	S513	130																																				
136	S515	160		1					1	1																2												
137	S521	265								2																												
138	S524	100																																				
139	S530	250		1					1																													2
140	S531	110		1					1																													1
141	S532	300													1																							
145	S1006	225																																				1
146	S1007	155													1																							
147	S1011	260								1																												
148	S1019	150					1																															
150	S1024	280																																				
151	S1027	280		1																																		
152	S1029	250																																				1
153	S1032	260																																				1
154	S1033	275																																				
155	S1036	130							2		1																											
156	S1040	330																																				
157	S1046	5530	2				1		1				1		1										16	4	3							1			2	
159	S1101	400																																				
161	S1103	390							1																													
162	S1104	870					1																															1

第40表 海舞寺遺跡炭化種子一覧 (2)

第41表 中野内遺跡炭化種子一覧

分析番号 (No.)	遺構名	乾燥重量 (g)	キシムシロ類*	キシムシロ類近似種	イシムシロ類近似種	菌核	不明植物
163	SA 5	230				1	
164	SA 6	120				5	
165	pil-4	0					3
166	SE 1	50	1	1			
167	SE 1	0	1				

注)*キシムシロ類:キシムシロ属-ヘビイチゴ属-オランダイチゴ属

第42表 森ノ上遺跡炭化種子一覧

分析番号 (No.)	遺構	乾燥重量 (g)	イネ胚乳	カキノキ属? 種子	キシムシロ類? 胚乳	コナラ属? 子葉	コナラ胚乳	ブナ科果実	双子葉類	不明種実	不明炭化物
168	SA 3 炉	32,090	1								
169	SA 4 1 a層	22,330	12	1			7		1	57	
170	SA 4 1~2層間焼土	3,670	1	1					1	7	
171	SA 4 1 b層	9,000	2			1			5	7	
173	SA 8 炉	22,860				2				5	
174	SA10 貼床	86,370								1	

*40個菌核?

第43表 カラの元石遺跡炭化種子一覧

分析番号 (No.)	遺構	乾燥重量 (g)	アワ近似種 胚乳	イネ胚乳	オオムギ胚乳	キビ近似種? 胚乳	コムギ胚乳	ツブミシイ子葉	ツブミシイ近似種子葉	マメ類種子
175	SC9	25260	1	1	2	1	5			
176	SA2-S1	8710						5	11	
177	SA2-S5	3080								2

第44表 海舞寺遺跡検出動物分類群の一覧

- 軟体動物門 Phylum Mollusca
 - 腹足綱 Class Gastropoda
 - 前鰓亜綱 Subclass Prosobranchia
 - 古腹足目 Order Vetigastropoda
 - ニシキウズガイ科 Family Trochidae
 - ヒメクボガイ Omlhalus nigerimus
 - ウズイチモンジ Trochus rota
 - 新腹足目 Order Neogastropoda
 - アッキガイ科 Family Muricidae
 - レイシガイ亜科 Subfamily Rapaninae
 - レイシガイ Thais bronni
 - 二枚貝綱 Class Bivalvia
 - 異歯亜綱 Order Heterodonta
 - マルスダレガイ目 Order Veneroida
 - マルスダレガイ科 Family Veneridae
 - ハマグリ Meretrix lusoria

第45表 海舞寺遺跡の貝類同定結果

分析番号 (No.)	遺構番号	種類	部位	状態	左	右	部分	数量
182	S341	ヒメクボガイ	殻				破片	3+
		ウズイチモンジ	殻				破片	2
		レイシガイ	殻				破片	1
		腹足綱					破片	1
		ハマグリ	殻		左		破片	1
						右	破片	6
		ハマグリ類	殻		左		破片	1
							破片	1
						破片	6	
		貝類	殻				破片	3.5g

第46表 カラ石の元遺跡検出動物分類群の一覧

- 刺胞動物門 Phylum Cnidaria
 - 花虫綱 Class Anthozoa
 - 六放(射)珊瑚亜綱 Subclass Hexacorallia
 - イシサンゴ目 Order Scleractinia
 - キクメイシ科 Family Faviidae
 - 属種不明 Gen. et. sp. indet.
 - 軟体動物門 Phylum Mollusca
 - 腹足綱 Class Gastropoda
 - 前鰓亜綱 Subclass Prosobranchia
 - 古腹足目 Order Vetigastropoda
 - ミミガイ科 Family Haliotidae
 - アワビ類 Haliotis sp. indet.
 - 二枚貝綱 Class Bivalvia
 - 翼形亜綱 Subclass Pteriomophia
 - カキ目 Order Ostreoida
 - カキ亜目 Suborder Ostreina
 - イタボガキ科 Family Ostreidae
 - カキ類 Crassostrea sp.
 - 脊椎動物門 Phylum Vertebrata
 - 軟骨魚綱 Class Chondrichthyes
 - 板鰓亜綱 Subclass Elasmobranchii
 - メジロザメ目 Order Carcharhiniformes
 - メジロザメ科 Family Carcharhinidae
 - 属種不明 Gen. et. sp. indet.
 - 硬骨魚綱 Class Osteichthyes
 - 条鰭亜綱 Subclass Actinopterygii
 - スズキ目 Order Perciformes
 - スズキ亜目 Suborder Percoidei
 - アジ科 Family Carangidae
 - マアジ Trachurus japonicus
 - サバ亜目 Suborder Scombroidei
 - サバ科 Family Scombridae
 - カツオ Katsuwonus pelamis
 - フグ目 Order Tetraodontiformes
 - フグ亜目 Tetraodontoidei
 - フグ科 Family Tetraodonidae
 - 属種不明 Gen. et. sp. indet.
 - 両生綱 Class Amphibia
 - カエル目(無尾目) Order Anura
 - 科属不明 Fam. et. gen. indet.

第47表 カラ石の元遺跡の骨貝類同定結果

| 分析番号 (No.) | 遺構番号 | 種類 | 部位 | 状態 | 左 | 右 | 部分 | 数量 | |
|------------|------|--------|--------|--------|----|-----|------|------|----|
| 175 | SC9 | 脊椎動物門 | 歯牙 | | | | 破片 | 1 | |
| 182 | S2 | キクメイシ科 | 殻 | | | | 破片 | 1 | |
| | | カキ類 | 殻 | | | | 破片 | 3 | |
| | | S5C3 | アワビ類 | 殻 | | | | 破片 | 1 |
| | | S24 | メジロザメ科 | 椎骨 | | | | 破片 | 1 |
| | | | サメ・エイ類 | 椎骨 | | | | 破片 | 2+ |
| 183 | SC9 | マアジ | 歯骨 | | 左 | | ほぼ完存 | 1 | |
| | | カツオ | 主上顎骨 | | | 右 | ほぼ完存 | 1 | |
| | | | 主鰓蓋骨 | | 左 | | 破片 | 1 | |
| | | | 角骨 | | 左 | | 破片 | 1 | |
| | | | 方骨 | | 左 | | ほぼ完存 | 1 | |
| | | | 腹椎 | | | | ほぼ完存 | 1 | |
| | | | 尾椎 | | | | ほぼ完存 | 9 | |
| | | | 尾椎 | | | | 破片 | 2 | |
| | | | 尾鰭椎前椎体 | | | | ほぼ完存 | 9 | |
| | | | 終尾椎 | | | | ほぼ完存 | 2 | |
| | | | カツオ 1 | 尾鰭椎前椎体 | | | | ほぼ完存 | 3 |
| | | | カツオ 2 | 尾鰭椎前椎体 | | | | ほぼ完存 | 3 |
| | | | カツオ 3 | 尾鰭椎前椎体 | | | | ほぼ完存 | 3 |
| | | | カツオ 4 | 尾鰭椎前椎体 | | | | ほぼ完存 | 2 |
| | | | スズキ目 | 方骨 | 焼骨 | | 右 | ほぼ完存 | 1 |
| | | | フグ科 | 尾椎 | | | | ほぼ完存 | 1 |
| | | | 魚類 | 内臓骨 | | | | 破片 | 6 |
| | | | | 鰓把 | | | | ほぼ完存 | 1 |
| | | | | 腹椎 | 焼骨 | | | ほぼ完存 | 3 |
| | | | | | 焼骨 | | | 破片 | 1 |
| | | | | 椎骨 | 焼骨 | | | 破片 | 8 |
| | | | | 鰭棘 | | | | 破片 | 10 |
| | | | 焼骨 | | | 破片 | 8 | | |
| | | 不明 | | | | 破片 | 11 | | |
| | | | 焼骨 | | | 破片 | 28 | | |
| | カエル類 | 脛腓骨 | | | | 両端欠 | 2 | | |

| | | |
|----------------------------|---|---|
| | 塩分濃度に対する区分 Lowe(1974)による | |
| 海水生種 | 強塩性種 | 塩分濃度 40.0‰以上の高濃度海水域に生育する種 |
| | 真塩性種(海水生種) | 塩分濃度 40.0～30.0‰に生育する種 |
| 汽水生種 | 中塩性種(汽水生種) | 塩分濃度 30.0～0.5‰に生育する種 |
| 淡水生種 | 貧塩性種(淡水生種) | 塩分濃度 0.5‰以下に生育する種 |
| | 淡水生種の生態性区分 | |
| 塩分 | 貧塩好塩性種 | 少量の塩分がある方が良く生育する種 |
| | 貧塩不定性種 | 少量の塩分があってもこれに良く耐えることができる種 |
| | 貧塩嫌塩性種 | 少量の塩分にも耐えることができない種 |
| | 広域塩性種 | 淡水～汽水域まで広い範囲の塩分濃度に適応できる種 |
| pH | 真酸性種 | pH7.0 以下に生育し、特に pH5.5 以下の酸性水域で最も良く生育する種 |
| | 好酸性種 | pH7.0 付近に生育し、pH7.0 以下の水域で最も良く生育する種 |
| | pH 不定性種 | pH7.0 付近の中性水域で最も良く生育する種 |
| | 好アルカリ性種 | pH7.0 付近に生育し、pH7.0 以上の水域で最も良く生育する種 |
| | 真アルカリ性種 | pH7.0 以上の水域にのみ出現する種 |
| Hustedt(1937-38)による | | |
| 流水 | 真止水性種 | 止水域にのみ生育する種 |
| | 好止水性種 | 止水域に特徴的であるが、流水域にも生育する種 |
| | 流水不定性種 | 止水域にも流水域にも普通に生育する種 |
| | 好流水性種 | 流水域に特徴的であるが、止水域にも生育する種 |
| | 真流水性種 | 流水域にのみ生育する種 |
| Hustedt(1937-38)による | | |
| 主に海水域での環境指標種群(小杉,1988 による) | | |
| 外洋指標種群(A) | 塩分濃度が約 35‰の外洋水中で浮遊生活するもの | |
| 内湾指標種群(B) | 塩分濃度 35～26‰の内湾水中で浮遊生活することからそのような環境を指標することのできる種群 | |
| 海水藻場指標種群(C1) | 塩分濃度 35～12‰の海域で海藻(草)に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群 | |
| 汽水藻場指標種群(C2) | 塩分濃度 12～4‰の汽水域で海藻(草)に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群 | |
| 海水砂質干潟指標種群(D1) | 塩分濃度 35～26‰の砂底の砂に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群 | |
| 汽水砂質干潟指標種群(D2) | 塩分濃度 26～5‰の砂底の砂に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群 | |
| 海水泥質干潟指標種群(E1) | 30～12‰の閉鎖性の高い塩性湿地など泥底の泥に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群 | |
| 汽水泥質干潟指標種群(E2) | 塩分濃度 12～2‰の汽水化した塩性湿地などの泥に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群 | |
| 淡水底生種群(F) | 2‰以下の淡水域の底質の砂、泥、水生植物などに付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群 | |
| 淡水浮遊生種群(G) | 塩分濃度 2‰以下の湖沼などの淡水域で浮遊生活することからそのような環境を指標することのできる種群 | |
| 河口浮遊生種群(H) | 塩分濃度 20～2‰の河口域で浮遊生活、あるいは付着生活することからそのような環境を指標することのできる種群 | |
| 淡水域での環境指標種群(安藤,1990 による) | | |
| 上流性河川指標種群(J) | 河川上流部の峡谷部に集中して出現することから上流部の環境を指標する可能性の大きい種群 | |
| 中～下流性河川指標種群(K) | 河川中～下流部や河川沿いの河岸段丘、扇状地、自然堤防、後背湿地などに集中して出現することから、そのような環境を指標する可能性の大きい種群 | |
| 最下流性河川指標種群(L) | 最下流部の三角州の部分に集中して出現することから、そのような環境を指標する可能性の大きい種群 | |
| 湖沼浮遊性種群(M) | 水深が約 1.5m以上ある湖沼で浮遊生活する種群で湖沼環境を指標する可能性の大きい種群 | |
| 湖沼沼沢湿地指標種群(N) | 湖沼における浮遊生種としても沼沢湿地の付着生種としても優勢に出現することから、そのような環境を指標する可能性の大きい種群 | |
| 沼沢湿地付着生種群(O) | 沼よりも浅く水深が 1m前後で一面に水生植物が繁茂している沼沢や更に水深の浅い湿地で優勢な出現の見られることからそのような環境を指標する可能性の大きい種群 | |
| 高層湿原指標種群(P) | ミズゴケを主体とした環境や泥炭が形成される環境に集中して出現することから、そのような環境を指標する可能性の大きい種群 | |
| 陸域指標種群(Q) | 水中でなく、多少の湿り気のある土壌表面、岩の表面、コケなど常に大気に曝された好気的環境(陸域)に集中して生育することからそのような環境を指標する可能性の大きい種群 | |
| 陸域での環境指標種群(伊藤・堀内,1991 による) | | |
| 陸生珪藻 A 群(RA) | 陸生珪藻の中でも、分布がほぼ陸域に限られる耐乾性の高い種群 | |
| 陸生珪藻 B 群(RB) | 陸生珪藻 A 群に伴い、陸域にも水中にも生育する種群 | |
| 未区分陸生珪藻(RI) | 陸生珪藻に相当すると考えられるが、乾湿に対する適応性の不明なもの | |

第48表 生態性区分と環境指標種群

| 種 類 | 試料番号 | 生態性 | | | 環境
指標種 | 土師器 | | 土 壤 | | |
|---|---------|-------|------|------|-----------|-----|-----|-----|-----|-----|
| | | 塩分 | pH | 流水 | | 184 | 185 | 186 | 187 | 188 |
| Bacillariophyta (珪藻植物門) | | | | | | | | | | |
| Araphid Pennate Diatoms(無縦溝羽状珪藻類) | | | | | | | | | | |
| <i>Ulnaria ulna</i> (Nitzsch)Compere | Ogh-ind | al-il | ind | U | - | - | - | 1 | - | - |
| Raphid Pennate Diatoms(有縦溝羽状珪藻類) | | | | | | | | | | |
| Monoraphid Pennate Diatoms(単縦溝羽状珪藻類) | | | | | | | | | | |
| <i>Planothidium lanceolatum</i> (Breb. ex Kuetz.)Lange-Bertalot | Ogh-ind | ind | r-ph | K,T | - | - | - | 1 | - | - |
| <i>Achnanthydium subhudsonis</i> (Hustedt)H.Kobayasi | Ogh-ind | ind | r-ph | T | - | - | - | 1 | - | - |
| <i>Cocconeis disculus</i> (Schum.)Cleve | Euh-Meh | | | D1 | 1 | - | - | - | - | - |
| Biraphid Pennate Diatoms(双縦溝羽状珪藻類) | | | | | | | | | | |
| <i>Gomphonema lagenula</i> Kuetzing | Ogh-ind | ind | r-ph | S | - | - | - | 1 | - | - |
| <i>Gomphonema parvulum</i> (Kuetz.)Kuetzing | Ogh-ind | ind | ind | U | - | - | - | - | 1 | - |
| <i>Stauroneis borrichii</i> (Pet.)Lund | Ogh-ind | ind | ind | RI | - | 2 | - | 2 | - | - |
| <i>Stauroneis obtusa</i> Lagerstedt | Ogh-ind | ind | ind | RB | - | - | - | 2 | - | - |
| <i>Diademsis biceps</i> Arnott ex Grunow in Van Heurck | Ogh-ind | al-il | ind | RA,T | 1 | 2 | - | 3 | 1 | - |
| <i>Diademsis confervacea</i> Kuetzing | Ogh-ind | al-il | ind | RB,S | - | - | - | 1 | - | - |
| <i>Diademsis contenta</i> (Grun.ex Van Heurck)D.G.Mann | Ogh-ind | al-il | ind | RA,T | 2 | 1 | - | 4 | - | - |
| <i>Luticola mutica</i> (Kuetz.)D.G.Mann | Ogh-ind | al-il | ind | RA,S | 6 | 61 | 3 | 17 | 3 | - |
| <i>Luticola saxophila</i> (Bock ex Hustedt)D.G.Mann | Ogh-ind | ind | ind | RB | 1 | - | - | - | - | - |
| <i>Neidium alpinum</i> Hustedt | Ogh-ind | ac-il | ind | RA | 11 | 2 | - | 30 | 3 | - |
| <i>Caloneis aerophila</i> Bock | Ogh-ind | ac-bi | ind | RA,S | 1 | - | - | 9 | 1 | - |
| <i>Caloneis bacillum</i> (Grun.)Cleve | Ogh-ind | al-il | r-ph | U | - | - | - | 1 | - | - |
| <i>Caloneis hyalina</i> Hustedt | Ogh-ind | ind | ind | RA | 1 | 1 | - | 1 | 1 | - |
| <i>Pinnularia borealis</i> Ehrenberg | Ogh-ind | ind | ind | RA,U | 2 | 6 | - | 5 | 7 | - |
| <i>Pinnularia schoenfelderii</i> Krammer | Ogh-ind | ind | ind | RB | 3 | 2 | - | 11 | 4 | - |
| <i>Pinnularia subcapitata</i> Gregory | Ogh-ind | ac-il | ind | RB,S | 3 | 3 | - | 1 | - | - |
| 管縦溝類 | | | | | | | | | | |
| <i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.)Grunow | Ogh-ind | ind | ind | RA,U | 4 | 18 | - | 7 | 1 | - |
| <i>Nitzschia brevissima</i> Grunow | Ogh-Meh | al-il | ind | RB,U | - | - | - | 1 | - | - |
| <i>Nitzschia amphibia</i> Grunow | Ogh-ind | al-il | ind | S | - | 1 | - | - | - | - |
| 翼管縦溝類 | | | | | | | | | | |
| <i>Surirella minuta</i> Brebisson | Ogh-ind | ind | r-ph | U | - | - | - | 1 | - | - |
| 短縦溝類 | | | | | | | | | | |
| <i>Eunotia</i> sp. | Ogh-unk | unk | unk | | - | 1 | - | - | - | - |
| 海水生種 | | | | | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 海水～汽水生種 | | | | | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 汽水生種 | | | | | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 淡水～汽水生種 | | | | | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 |
| 淡水生種 | | | | | 35 | 100 | 3 | 99 | 22 | |
| 珪藻化石総数 | | | | | 36 | 100 | 3 | 100 | 22 | |

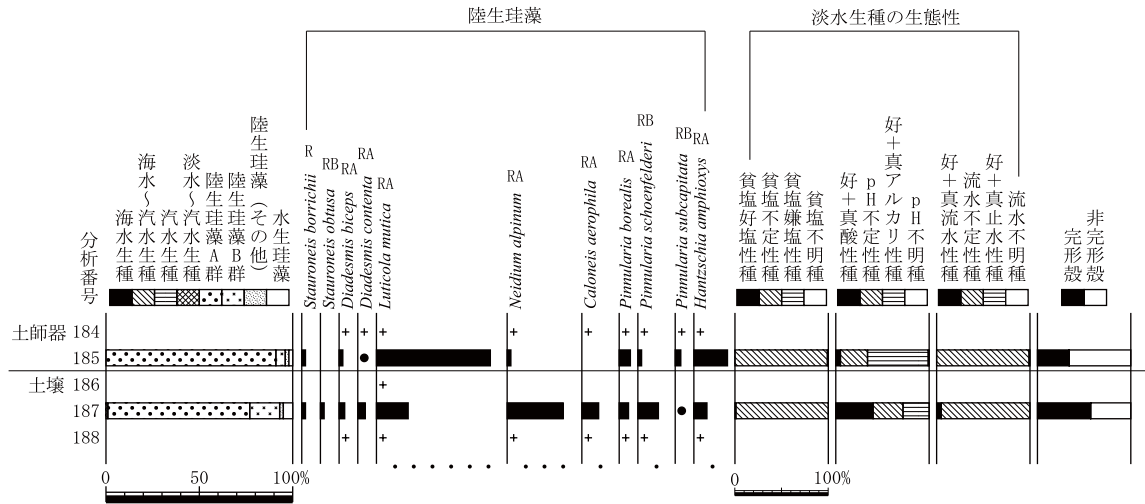
凡例

H.R. : 塩分濃度に対する適応性 pH : 水素イオン濃度に対する適応性 C.R. : 流水に対する適応性
Euh-Meh : 海水生種-汽水生種 al-bi : 真アルカリ性種 l-bi : 真止水性種
Ogh-Meh : 淡水-汽水生種 al-il : 好アルカリ性種 l-ph : 好止水性種
Ogh-hil : 貧塩好塩性種 ind : pH不定性種 ind : 流水不定性種
Ogh-ind : 貧塩不定性種 ac-il : 好酸性種 r-ph : 好流水性種
Ogh-hob : 貧塩嫌塩性種 ac-bi : 真酸性種 r-bi : 真流水性種
Ogh-unk : 貧塩不明種 unk : pH不明種 unk : 流水不明種

環境指標種群

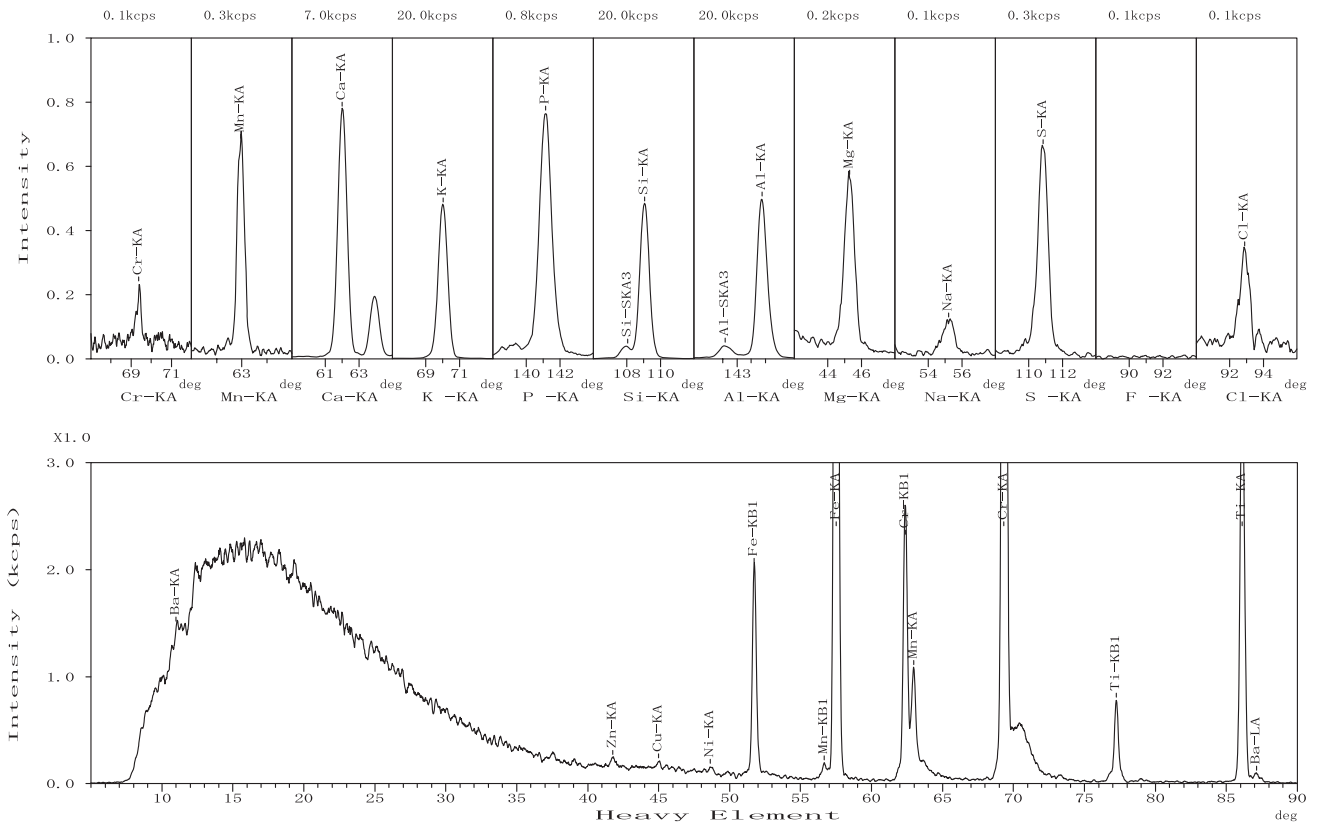
D1:海水砂質干潟指標種 (小杉, 1988)
K:中～下流性河川指標種 (安藤, 1990)
S:好汚濁性種, U:広域適応性種, T:好清水性種 (以上はAsai and Watanabe, 1995)
R:陸生珪藻 (RA:A群, RB:B群, RI:未区分、伊藤・堀内, 1991)

第49表 珪藻分析結果

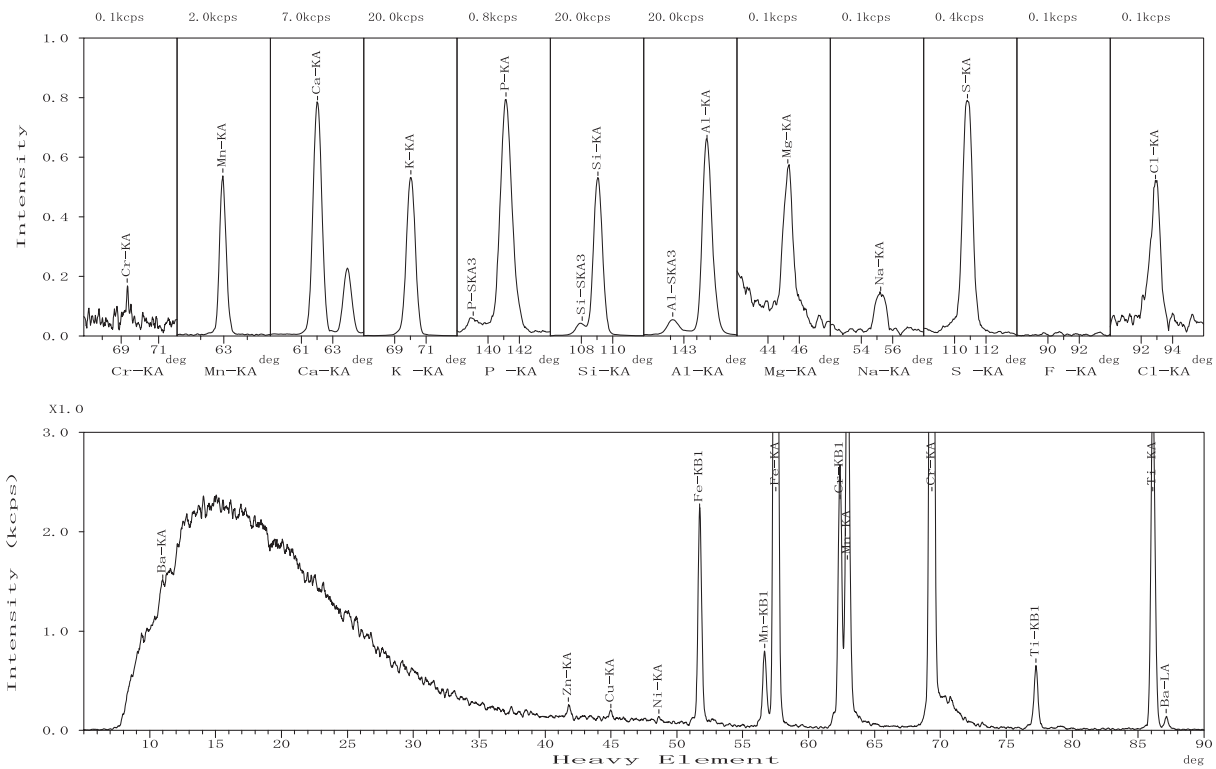


海水-汽水-淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は2%未満、+は100個体未満の試料について検出した種類を示す。
(環境指標種, RA:陸生珪藻A群, RB:陸生珪藻B群, RI:未区分陸生珪藻)

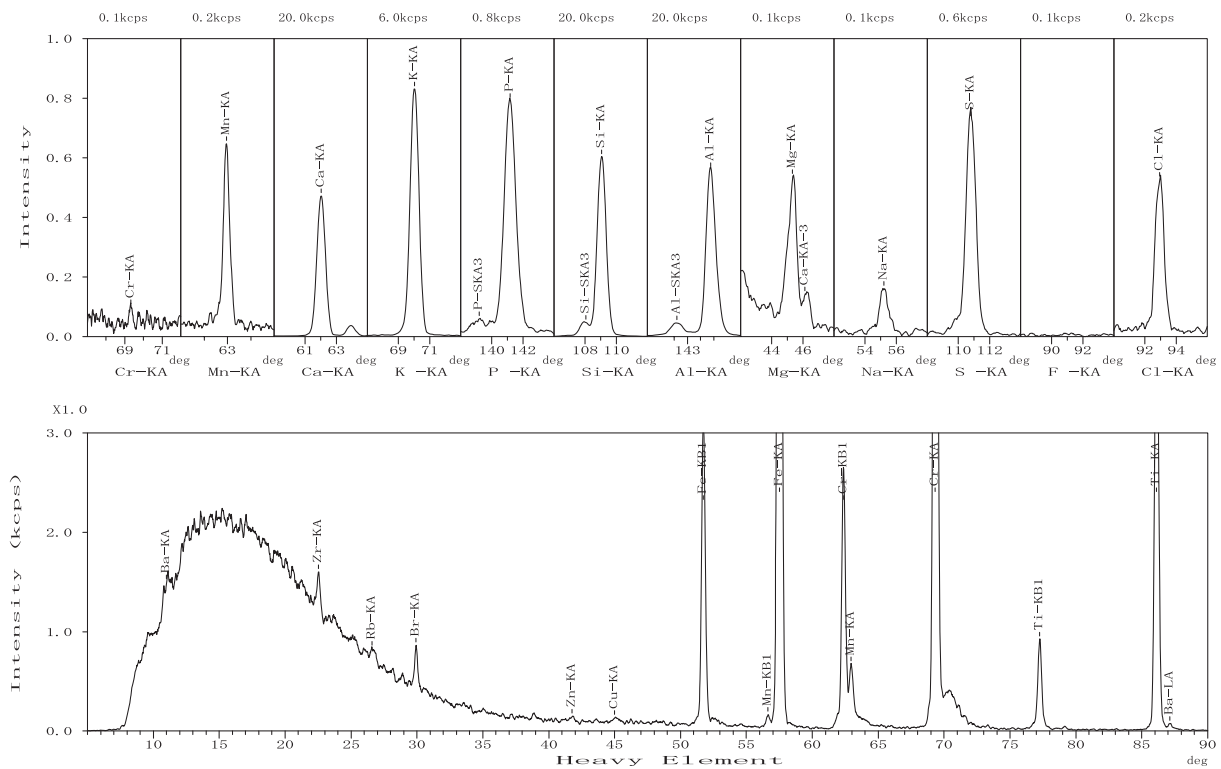
第84図 主要珪藻化石群集の分布



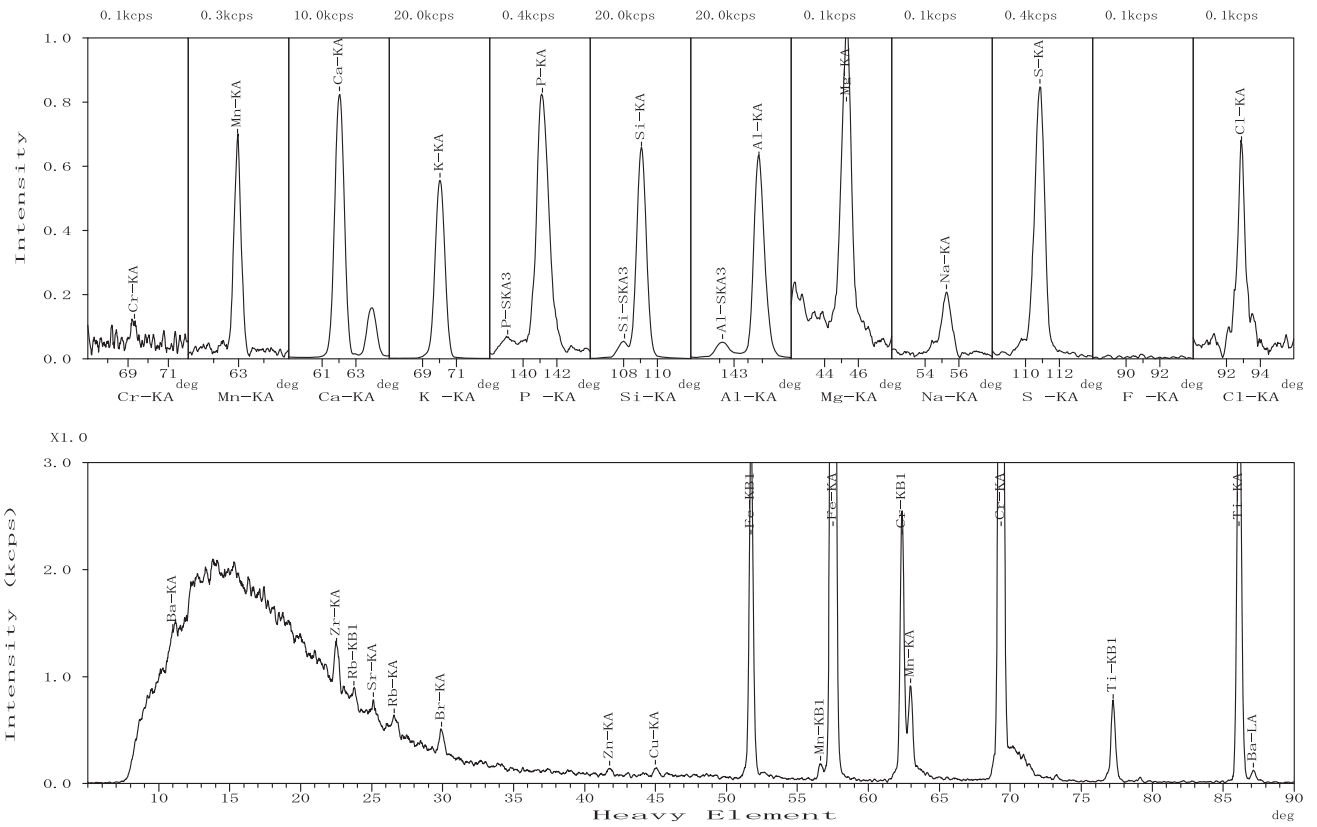
第85図 分析番号184の蛍光X線スペクトル



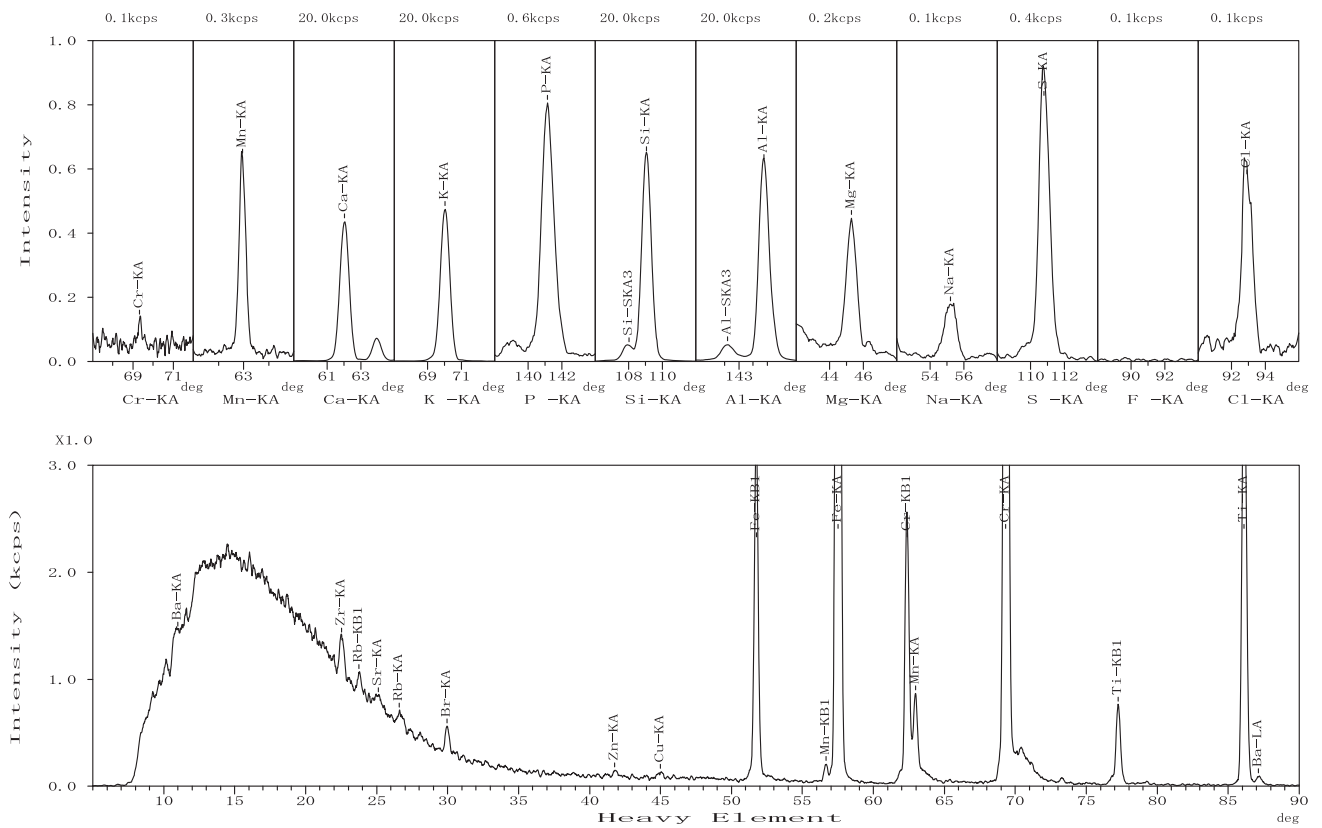
第86図 分析番号185の蛍光X線スペクトル



第87図 分析番号186の蛍光X線スペクトル



第88図 分析番号187の蛍光X線スペクトル



第89図 分析番号188の蛍光X線スペクトル

第50表 加圧成型試料作成条件

| | |
|-------|-----------------------------|
| 加圧装置 | 電動式試料成型機 (理学電機工業社製 9302-D3) |
| 成形リング | 塩化ビニル (30mmφ) |
| バインダー | 四ホウ酸リチウム |
| 加圧力 | 10ton (100kN) |

第51表 蛍光X線装置条件

| | |
|--------|-------|
| ターゲット | Cr |
| 管電圧 | 50 |
| 管電流 | 50 |
| 試料マスク | 20mmφ |
| 試料スピン | OFF |
| ダイアフラム | 15mmφ |
| 測定雰囲気 | 真空 |

第52表 蛍光X線定性測定条件

| 測定元素 | 測定スペクトル | 1次フィルタ | アッテネータ | スリット | 分光結晶 | 検出器 | PHA | | スキャン条件 | | | |
|-------|---------|--------|--------|------|------|-----|-----|-----|---------|---------|-----------|-----------|
| | | | | | | | LL | UL | 開始(deg) | 終了(deg) | ステップ(deg) | 測定時間(sec) |
| HEAVY | Kα | OUT | 1/1 | Std. | LIF1 | SC | 100 | 300 | 5.0 | 90.0 | 0.02 | 0.1 |
| Cr | Kα | IN | 1/1 | Std. | LIF1 | SC | 100 | 300 | 67.0 | 72.0 | 0.02 | 0.4 |
| Mn | Kα | IN | 1/1 | Std. | LIF1 | SC | 100 | 300 | 61.0 | 65.0 | 0.02 | 0.4 |
| Ca | Kα | OUT | 1/1 | Std. | GE | PC | 100 | 300 | 59.0 | 65.0 | 0.05 | 0.4 |
| K | Kα | OUT | 1/1 | Std. | GE | PC | 100 | 300 | 67.0 | 73.0 | 0.05 | 0.4 |
| P | Kα | OUT | 1/1 | Std. | GE | PC | 150 | 300 | 138.0 | 144.0 | 0.05 | 0.4 |
| Si | Kα | OUT | 1/1 | Std. | PET | PC | 100 | 300 | 106.0 | 112.0 | 0.05 | 0.4 |
| Al | Kα | OUT | 1/1 | Std. | PET | PC | 100 | 300 | 140.0 | 147.0 | 0.05 | 0.4 |
| Mg | Kα | OUT | 1/1 | Std. | TAP | PC | 150 | 250 | 42.0 | 48.0 | 0.05 | 1.0 |
| Na | Kα | OUT | 1/1 | Std. | TAP | PC | 150 | 250 | 52.0 | 58.0 | 0.05 | 1.0 |
| S | Kα | OUT | 1/1 | Std. | GE | PC | 150 | 300 | 108.0 | 114.0 | 0.05 | 0.4 |
| F | Kα | OUT | 1/1 | Std. | TAP | PC | 150 | 300 | 88.0 | 94.0 | 0.05 | 1.0 |
| Cl | Kα | OUT | 1/1 | Std. | GE | PC | 150 | 300 | 90.0 | 96.0 | 0.05 | 0.4 |

第53表 蛍光X線分析結果

| 成分名 | スペクトル | 土師器 | | | | 土壌 | | | | | |
|-------|-------|-------------|------------|-------------|------------|-------------|------------|-------------|------------|-------------|------------|
| | | 分析番号 184 | | 分析番号 185 | | 分析番号 186 | | 分析番号 187 | | 分析番号 188 | |
| | | X線強度 (kcps) | 分析結果 (wt%) | X線強度 (kcps) | 分析結果 (wt%) | X線強度 (kcps) | 分析結果 (wt%) | X線強度 (kcps) | 分析結果 (wt%) | X線強度 (kcps) | 分析結果 (wt%) |
| SiO2 | Si-KA | 9.6309 | 48.98 | 10.5727 | 45.53 | 12.0425 | 50.69 | 13.0803 | 50.48 | 12.9404 | 50.70 |
| TiO2 | Ti-KA | 3.8959 | 1.86 | 3.3856 | 1.30 | 4.6686 | 1.84 | 4.0907 | 1.49 | 4.0738 | 1.50 |
| Al2O3 | Al-KA | 9.8571 | 32.10 | 13.1308 | 35.17 | 11.2554 | 30.73 | 12.5559 | 31.28 | 12.5447 | 31.56 |
| Fe2O3 | Fe-KA | 11.6685 | 9.49 | 12.6165 | 8.28 | 16.4248 | 11.05 | 16.9324 | 10.43 | 16.3361 | 10.17 |
| MnO | Mn-KA | 0.1940 | 0.96 | 1.0556 | 4.20 | 0.1210 | 0.49 | 0.1999 | 0.75 | 0.1835 | 0.69 |
| MgO | Mg-KA | 0.1073 | 1.06 | 0.0490 | 0.40 | 0.0457 | 0.38 | 0.0937 | 0.71 | 0.0795 | 0.61 |
| CaO | Ca-KA | 5.3895 | 0.87 | 5.4262 | 0.71 | 9.3787 | 1.24 | 8.1476 | 1.00 | 8.6092 | 1.07 |
| Na2O | Na-KA | 0.0096 | 0.30 | 0.0137 | 0.35 | 0.0149 | 0.39 | 0.0198 | 0.47 | 0.0167 | 0.40 |
| K2O | K-KA | 9.5680 | 2.13 | 10.6055 | 1.92 | 4.9583 | 0.93 | 11.0748 | 1.89 | 9.4202 | 1.64 |
| P2O5 | P-KA | 0.6734 | 1.50 | 0.6219 | 1.13 | 0.6221 | 1.16 | 0.3991 | 0.68 | 0.4568 | 0.79 |
| BaO | Ba-LA | 0.0477 | 0.05 | 0.1137 | 0.09 | 0.0390 | 0.03 | 0.0667 | 0.05 | 0.0410 | 0.03 |
| Br | Br-KA | — | — | — | — | 0.4058 | 0.04 | 0.2117 | 0.02 | 0.2360 | 0.02 |
| Cl | Cl-KA | 0.0288 | 0.03 | 0.0491 | 0.04 | 0.1003 | 0.08 | 0.0659 | 0.05 | 0.0536 | 0.04 |
| Cr2O3 | Cr-KA | 0.0180 | 0.18 | 0.0137 | 0.11 | 0.0046 | 0.04 | 0.0072 | 0.05 | 0.0094 | 0.07 |
| CuO | Cu-KA | 0.0467 | 0.02 | 0.0710 | 0.02 | 0.0412 | 0.01 | 0.0758 | 0.02 | 0.0448 | 0.01 |
| NiO | Ni-KA | 0.0494 | 0.03 | 0.0424 | 0.02 | — | — | — | — | — | — |
| Rb2O | Rb-KA | — | — | — | — | 0.1065 | 0.01 | 0.1442 | 0.01 | 0.1382 | 0.01 |
| SO3 | S-KA | 0.1952 | 0.44 | 0.3860 | 0.70 | 0.4430 | 0.83 | 0.3314 | 0.57 | 0.3618 | 0.63 |
| SrO | Sr-KA | — | — | — | — | — | — | 0.1574 | 0.01 | 0.1059 | 0.01 |
| ZnO | Zn-KA | 0.0644 | 0.02 | 0.1261 | 0.03 | 0.0418 | 0.01 | 0.0561 | 0.01 | 0.0429 | 0.01 |
| ZrO2 | Zr-KA | — | — | — | — | 0.4203 | 0.04 | 0.3355 | 0.03 | 0.3300 | 0.03 |
| Total | | | 100.02 | | 100.00 | | 99.99 | | 100.00 | | 99.99 |

第Ⅺ章 総括

第1節. 旧石器～縄文時代の北浦・熊野江

北浦・熊野江の旧石器時代とは、現在の四国島との間を流れた古豊後川を望む山麓部に相当する。これまで、北浦・熊野江の旧石器時代資料はなく、北の大分県佐伯市域でも旧石器はほとんど知られていない。そのような中、いずれも原位置遊離の状態ながら、海舞寺遺跡・中野内遺跡において旧石器が確認された点は、旧石器空白域を埋める意味で大変重要である。

旧石器と同じく初例となった縄文時代早期前葉の集石遺構1基が中野内遺跡で確認され、海舞寺遺跡でも赤化礫が散在したことから付近に早期の集石遺構等の存在が予想された。中野内遺跡は扇状地端にあり、集石遺構の位置に立つと、葦原等の低湿地と砂堤、その先に広がる海原を望むことができたであろう。扇状地の植生環境は照葉樹林と予想され、森林と水辺環境の境界付近に集石遺構が残された可能性がある。なお、次年度報告分の森ノ上遺跡では150基を越す集石遺構が発見されており、それらとの時間的前後関係や生業空間の関係解明が待たれる。

縄文時代前期から晩期までは、遺構の発見例はないものの、出土遺物としてカラ石の元遺跡の前期曾畑式土器、海舞寺遺跡の後期土器、採集品には後期の台付皿形土器、腰岳産黒曜石ならびにチャート製打製石鏃、蛇紋岩製品を含む磨製石斧等がある。市振字日用採集の台付皿形土器は一定規模の集落によく見られるものであり、拠点となるような集落遺跡も将来的には発見されるのであろう。また、後期以降と見られる蛇紋岩製石斧・腰岳産黒曜石製石鏃はそれぞれ山間部ならびに西北九州域との交流を物語っている。(藤木)

第2節. 弥生～古墳時代の北浦・熊野江

弥生時代は中野内遺跡に前期末～中期前半の集落跡があり、その時期の遺物が中野内・森ノ上遺跡で出土した。

2-1. 中野内遺跡の大柱遺構について

本文第71頁で報告したSC4は、大柱遺構の可能性がある。大柱遺構の認定要件は、北部九州の諸例では

「段掘りになっていること+直径30cm程度以上+柱穴のように深い」という条件が揃えば“立柱”と認定している。さらに、認定条件として、単に段掘りであるばかりでなく、柱を引き込むためのスロープが必要不可欠とされる(境2000)。また、福岡県春日市立石遺跡例では「なんらかの契機に柱を再び立て何らかの契機をもとに柱を抜いている」と復元され、伴出遺物は辟邪や神を鎮める祭事に使用された後に投棄されたものであるという(境2000)。この大柱遺構は、『魏志』韓伝に見られる“蘇塗”に類する祭場(金関1982)、民俗例の「鳥杵」のようなムラの入り口や境界等に立てて集落の境を守る役割を果たすもの(水野1982・渡辺1995)ではないかと推測される。

類例は宮崎県内にもある。国富町塚原遺跡ではスロープ状の遺構を伴う土坑3基が確認されており、近年、詳細に検討がなされた(東2009)。土坑からは、鳥形軽石製品や家形と見られる軽石製品(家形について報告本文中では男女の性器を併せて表現したと記載)が出土している。東氏は“北部九州の大柱遺構”と“近畿・東海の鳥形木製品”について、塚原遺跡において“大柱遺構”より“鳥形軽石製品”が出土したことから両者が一つにつながったと評価する。また、九州で鳥形木製品の出土例が少ない点は木製品の遺存度の問題とし、境氏が言う柱規模についても南九州では小規模例も含まれるように変容したと見る(東2009)。さらに、集落の端の溝から出土した木製品(宮崎県埋せ第44集塚原遺跡の第7図)は船形の木製品であることが筆者の再整理によって新たに判明した。

こうして見てくると、中野内遺跡SC4について、スロープ状施設や鳥形製品等がないとはいえ、以下の①～④を理由に大柱遺構と言うことができよう。

- ①柱を固定する際に利用されたものと想定される、土坑壁を半周ほど巡る段が付けられている。
- ②他土坑等と明らかに異なる、大人一人がすっぽり収まるような土坑規模と、直径約40cmと大きい柱材。
- ③柱が使用された後には、柱の上部を切ってそこに三角形の礫を置いている。

④集落の縁辺に位置しており、一本柱である。

特に④を重視するならば、SC4は中野内ムラの入り口・境界を守る役割にあったと考えられる。(古田)

2-2. 北浦の弥生土器について

中野内・森ノ上遺跡等で弥生土器が一定量出土した。少資料ながらも現状での特徴を整理しておきたい。

前期から中期の甕は下城式土器が出土している。下城式とは弥生時代前期から豊前・豊後地域に広く分布するもので、口縁部に1～2条の突帯を巡らせ、篋状工具で刻みを施す特徴がある。北浦例と豊前・豊後方面出土例とを比べると、内面の指押さえ痕や外面のハケメ調整が酷似し、胎土色調もにぶい褐色～褐色である。いわゆる下城式系と呼ばれる、縦方向に突帯二条が並ぶものや二条突帯の下部に穿孔するもの等も出土する。また、中野内SA1では下城式の祖形となるような甕があり、前期に遡ると考えられる口縁部に刻み目突帯を持つものも出土している。この他、くの字形に屈曲する口縁部をもつ東北部九州系の甕も数点出土する。前期から中期の壺は外来的要素を持つものが多い。下城式に類似した壺は二股状工具で弧状の文様を描いており、篋状工具で施文した類品も出土している。また、大分や北部九州でよく見られる、頸部に削り出し突帯を持つ壺も複数出土した。他には、瀬戸内地域で見られる口縁部に凹線文を施す土器があり、胎土も白色で明らかに他と異なる。頸部に突帯を巡らせるものや胴部に木の葉文様・無軸羽状文を持つもの等、北部九州の影響下にあるものが少数ながら出土している。圃場発掘SA1では須玖式と思われる丹塗の壺片がある。

後期から終末期について、中野内遺跡で大分県に主分布域のある安国寺式の複合口縁壺の口縁部片4点が出土した。口縁部に連続山形文・波状文が施され、後期中葉～後葉のものがある。森ノ上遺跡では口縁部長の長い後期後葉のものが数点も見られた。胎土は、中野内・森ノ上例ともに同一である。また、出土していない土器群として、大野川中・上流域に主分布域を持ち、後期中葉～末葉の五ヶ瀬川流域・高千穂盆地で多く出土する工字突帯のある土器が挙げられ(甲斐2009・高橋2009)、今後の調査でもその有無が問われよう。

土器の胎土に注目すると、甕・壺ともに、弥生土器

は橙～茶橙色系、土師器は暗茶褐色で煤化するものが多い。混和材について、北浦地域の土器には、長石・石英のみでなく、特徴的に千枚岩片が多く含まれていた。一方で、外来的要素をよく持つ土器には、角閃石・雲母の他、赤色粒子を多く含む。この他、北浦の下城式土器の胎土中には緑色結晶片岩を含むものがあり、大分市教育委員会の坪根伸也氏の御教示によれば、大分市内出土品に類似するという。

その他、中野内遺跡で出土した波状口縁を持つ土器(第47図⑥⑦)も他地域との交流関係を知る上で大変重要である。これらについて、大分市教育委員会の坪根伸也氏より文献・遺物とも御教示いただいた。

⑦の類品は、大分県下郡遺跡2点、同県中安遺跡(一次)1点、徳島県南庄遺跡1点、福岡県下稗田1点、島根県智頭枕田遺跡1点、同県タテテウ遺跡7点・兵庫県上ノ島遺跡1点である。坪根氏によれば、少個体数ながら西部瀬戸地域に分布しており、下城式甕の分布領域内に収まって広がりを見せる可能性があると言う。中野内⑦の口縁部形態は、付け足しの接合はなく、下城式の口縁部に刻み目を入れるように、上部から波状口縁を形成している。体部の文様は変則突帯や縦方向の突帯を貼り付けており、大分県下郡遺跡例と酷似する。一方で、下郡例あるいは徳島県内出土品は、口縁部が花びらのように開くが、中野内例は直線的かつ丁寧な整形と異なる。兵庫県や四国島例は口縁部形態が類似するものの、体部の文様は在地の多条沈線を採用する。地理的に見てもひとまずは大分県域との関連が最も強いのかもしれない。1遺跡に数点のみ出土する点も特徴的である。また、岡山県南溝手遺跡・愛媛県松木遺跡には、縄文系弥生土器とされる口縁部に刻み目を入れて細かい波状にしたものが見られる。

もう一点の土器⑥については、縄文晩期のリボン状突起に類似している。口縁部の波状の形態が、連続しない可能性があり、胎土も⑦とは、大きく異なる。⑥の位置づけは今後も検討を継続したい。(古田)

2-3. 北浦の古墳時代前～中期土師器編年(第90図)

宮崎県域の古墳時代土師器編年はこれまでに主に以下のものがあり(永友1987・石川1989・谷口1995・吉本1995・松永2002・今塩屋・松永2004他)、宮崎県北

域の様相の整理は資料数の制約から手薄であった。そこで、畿内編年との対照が取れるよう松永編年（松永2004）の時間軸を基準とし、中野内・森ノ上遺跡を中心に、北浦町域の前～中期の様相や傾向を検討することで将来の資料増を受けた再検討に備えたい。

編年は、中期について、**共伴する須恵器**に注目すると、中野内圃場発掘のSA10=TK208、SA11=布留4、SA13=TK23・TK47、SA14=TK208、SA18=TK23であり、今報告の中野内SA3=TK208、接合関係から近接した時期と思われるSA5～7はのうちSA7=TK208である。これらの共伴関係から竪穴住居跡出土の土器を同時期に存在したと仮定して並べ、その前後関係から傾向を大掴みして分類を試み、その中で器種毎の変化や傾向を抽出してゆく。前期に主体がある森ノ上遺跡では須恵器がなく、さらにSA4出土土器には弥生時代後期の口縁部・布留系甕・タタキ調整の有無・高坏の形態的特徴の差異・中野内遺跡の中期土器の系譜から追える後期初頭の甕等、時期幅を持った土器が混在して出土している。一方でSA4以外は土器の量が少ない。そこで、森ノ上遺跡の土器については、竪穴住居跡出土分を同時存在と仮定しつつ、明確な時期差や中期との系譜等を考慮していく。また、タタキ調整の導入時期や布留系土器の組成等が他地域と異なる可能性も踏まえない。

形式・型式分類にあたって、器形を設定した上で、大分類として、形態より機能差が想定される土器ごとに以下のように分類する。

甕は、竪穴住居跡出土51点を対象とした。胴部最大径が26cm以上で胴部中心が最大の大型甕（全体のうち4点）、口径10cm以上のその他を中型甕に大別した。全体器形の分かる資料が少ないため、口縁部・体部形態で細分した。

口縁部形態の分類

- I類：口縁部が「く」の字状で、緩やかにやや外反し端部が細く尖り気味である。内外面とも頸部の稜が明瞭である。
- II類：I類と同じく「く」の字状で、口縁部内面は直線的に開き、外面はやや内湾し丸みがあり、端部が尖る。口径<胴部最大径
- III類：II類よりも口縁部が立ち上がり、頸部から口縁全体に内湾する。口縁部内側は、外反し外

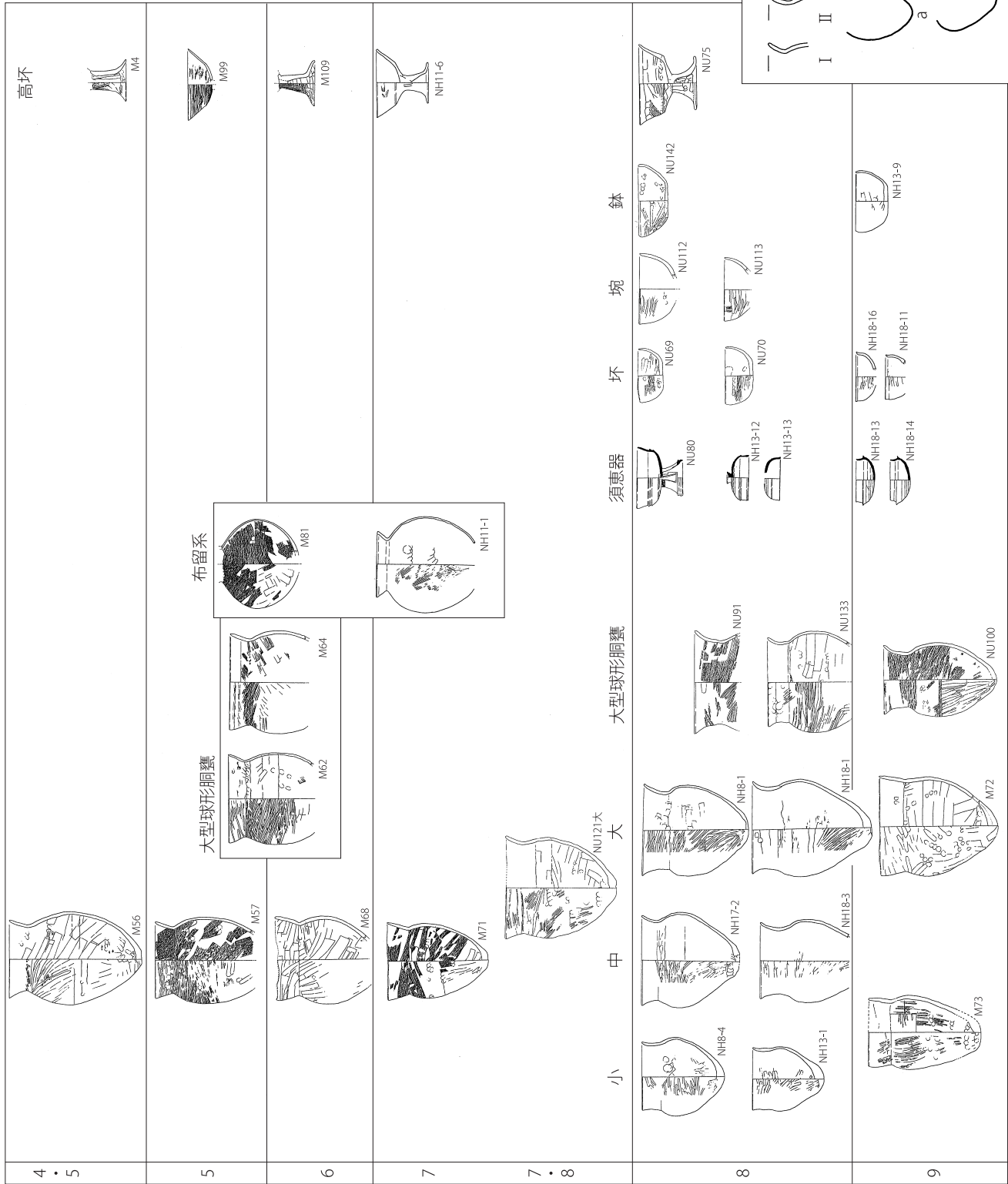
面はやや内湾気味で端部は丸みを持つ。頸部との稜線がややなくなる。

- IV類：口縁部がやや立ち上がりが大きく、やや直立気味になり、口縁部の先端がやや尖る。頸部と口縁部との境がなくなり、滑らかなナデ肩の曲線となる。口径<胴部径。
- V類：口縁部が弧状に外反し、頸部との境がない。口径≥胴部径。
- VI類：V類と似るが、口縁端部が短く外反する。
- VII類：口縁部が直線的に立ち上がる。
- VIII類：布留式の口縁部の特徴で、端部はやや鈎針のように端部を摘みあげている。

体部形態の分類

- a：倒卵型のような形で最大径が胴部中心にある。
- b：砲弾型のような形で、最大径が胴部で、胴部がやや長く丸みを持つもの。
- c：極端に言えば、丸みのある六角形のような形。肩部から胴部で屈曲し、胴部最大径が同じ径のまま続き、底部に向かって、やや屈曲していく。dよりやや角張るもの。
- d：イチゴ形のような形で、肩部が最大径を持ち、全体に丸みを持ち、底部に向かってしぼむもの。
- e：パイナップルのような形をしており、肩部が張るものの、緩やかに萎んで、底部がやや丸みのある平底になる。
- f：胴部が丸い球形のような形をしているもの。
- g：fよりやや楕円形のもの。

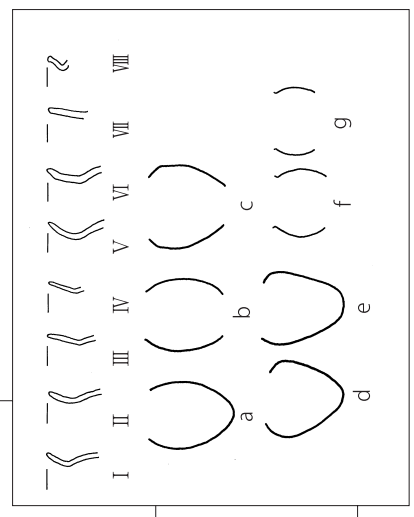
形態・調整等の変化について、**口縁部形態**は大きく「く」の字に屈曲する口縁部から頸部の締まりが緩くなり、やや直線的に立ち上がるようになり、中には頸部との境が不明瞭なものがある。変化の方向はI類→II類→III類へ、IV・V類がVI・VII類へとなる。少数ながらも**底部**まで残る資料からは、平底→丸みのある平底→丸底→平底と変化する。**体部**は、aがやや平底で全体に器壁も厚く弥生的な要素を残す。古墳前～中期にc・dが増加傾向にあり、体部形態がa→b→cへ変化し、全体に膨らみを持ち、肩部が大きく張る。dが長胴化していくと口径が狭まり、口径>胴部最大径となり、VII類の口縁部になると口径≤胴部最大径となる。



| 期 | | 畿内縄文 | |
|---|-----------|-------|----------|
| 1 | 弥生後期前葉 | 1 | 庄内1 |
| 2 | 弥生後期中葉 | 2 | 庄内2 |
| 3 | 弥生後期後葉 | 3 | 布留1 |
| 4 | | 布留1.2 | |
| 5 | 布留2.3 | 6 | 布留3 |
| 6 | 布留4 | 7 | TK73・216 |
| 7 | TK208 | 8 | TK23 |
| 8 | TK47 | 9 | MT15 |
| 9 | TK15 | | |
| | 寺沢縄文1986 | | |
| | 須恵器田辺1981 | | |

| I | II | III | IV | V | VI | VII | VIII | 口縁部のみ |
|-------|----|-----|----|---|----|-----|------|-------|
| a | 2 | | | | | | | 2 |
| b | | 3 | 1 | | | | | |
| c | | | | 9 | 1 | 3 | 1 | 2 |
| d | | | 1 | 3 | 2 | | | 3 |
| e | | | | 1 | | | | 3 |
| f | | | 1 | 1 | | 2 | | |
| g | | | 1 | 1 | | 1 | | |
| 口縁部のみ | | | | 1 | 2 | 1 | 1 | 2合計51 |

M = 森ノ上遺跡
 NH = 中野内 (圃場発掘)
 ※NH住居番号 - 遺物番号
 NU = 中野内遺跡



第90図 中野内・森ノ上遺跡の古墳時代前期～中期の編年案

f・gは大型球形胴甕に相当する。調整については、外面がハケメ中心からタタキ→タタキ後ミガキ→ハケメあるいはミガキとなる。内面はハケメ→ハケメあるいは板ナデとなる。

坏・埴・鉢については区分け困難なものも含まれており、便宜上、口径より器高が2分の1以下=坏、口径より器高が2分の1以上=埴、口径>底径=鉢とした。中期中葉～後期にかけて、坏は同時期のものが多く、個体差以上には変化等の方向性は見えない。埴は、やや直線的に立ち上がる、あるいは内湾する口縁部から、口縁内面がややくの字状に尖るようなものが見られる。鉢は、後期にかけて、口径が小さくかつより深くなる傾向がある。

高坏は、盛り付け・供献用土器と想定される脚付きの土器の一群である。全形の分かる資料が少なく、坏部と脚部形態等によって分類する。

・高坏A：弥生からの系譜を引く大型の高坏で、器壁が薄く、口縁部が長く外上方に大きく開き、全体に丁寧にミガキが施される。

・高坏B：布留系高坏の大型・中型品があり、やや水平の坏部底面から直線的（やや外反気味）に立ち上がり、口縁と受部の境に段を持ち口縁端部がやや外反する。

・高坏C：布留系高坏中型品であり、脚部cが付く。

・脚部a：脚裾から緩やかにラップ状に開く。

・脚部b：脚柱はエンタシス状に膨らみ、稜を持ち、外方向へ内湾気味に開く裾部を持つ。

・脚部c：脚部全体がハの字状に開く。

高坏については、大分・宮崎領域の高坏の変化にも触れておきたい。大分領域では布留1・2から高坏A+脚部bが増加し、脚部aは減少し、高坏Bの割合が高くなり、脚柱部内面のヘラケズリが顕著になる。宮崎領域でも弥生時代的な高坏Aから高坏Bへと量的に変化し、布留系高坏群が卓越してくる。高坏A→Bへ、中期になるにつれ高坏B→Cへと北浦地域も弥生時代的な高坏から布留式系高坏へと転換する。坏部は、外方へ広く伸びていたが、坏部の径が小さくなり、坏部が全体に深くなるものや、底面がやや平らになるものがある。調整は、古いものほど脚柱が丁寧なミガキであり、内面は絞りを施す。前期前半には内面を削って

いる。中期に入ると外面が丁寧なミガキのものと、やや粗いものがあった。出土資料のうち、高坏脚柱のほとんどは中空である。さらに、脚部の接合には、粘土塊を押し込んで脚部内面から指で押し付けて支える「円盤充填法」が採用されていた。また、脚柱の上に粘土塊が付着したまま、その上部に刻み目を入れるものもあり、これは接着強度を増す目的が考えられる。

編年図について、多く出土した甕を中心に組んでいく。甕NU121（NU等の略語の詳細は第90図参照）以降は、共伴関係から変遷を確実に追えるものである。甕M56～M71（4～7期）は、形態的特徴の変遷、ならびに4・5期について大分県南の編年と当地域での中期への変遷を考慮して配置した。甕M81・NH11-1の順は布留系の編年を参照した。5～7期について、当地域での布留甕やタタキの導入期が不明なため、今後の資料増によってこの時期全体がやや遡る可能性もある。坏・埴・鉢は、共伴関係が追えるものである。高坏M4・NH11-6・NU75は、甕等との共伴関係が追える。5・6期のものは、甕の主な時期から配置した。須恵器は、田辺編年を用いた。

甕を中心に見た各時期の特徴を述べると、4期の甕は形態的に弥生的な特徴が見られ、大分領域の古墳時代初頭の倒卵形甕の影響がそのまま残る。また、頸部がやや縮まり、口縁部径より胴部最大径が大きく、中央に位置している。外面口縁部に細かい右上がりのタタキが一部ある。内外面ともに板ナデ・指ナデがあり、内面には繋ぎ目が顕著である。底部は厚い平底ながら、自立はできない。これらの特徴は、大分県南の鹿道原遺跡・多武尾遺跡の弥生時代末～古墳時代初頭の甕に酷似する。またタタキ調整の導入時期が早ければ弥生時代終末期に遡る可能性もある。以上より、4期は弥生時代終末期～古墳時代初頭と考えている。

5期の甕はⅢ類・bである。4期の甕の特徴も残しつつ、口径・胴部最大径の差（口径<胴部最大径）や口径・頸部径の差がともに小さくなる。口縁部はやや上方に開き、口縁先端部が尖る。口縁部と体部との境が明瞭である。4段階に比べ、胴部外面中位までタタキが及ぶものが増加し、タタキ自体の幅は狭く細かい。胴部中央より上は横方向の細かいミガキを、胴部下半は縦方向のミガキを施し、一部タタキを消している。

内面には、細かいハケメの後に指ナデあるいは指押さえがある。

なお、**5・6期**の間に布留式の丸い甕が入るとすれば、それが契機となって大型球形胴甕が流入したのではないかと考えている。その理由としては、中型甕Ⅱ・Ⅲ類の口縁部が布留式に似ている点、Ⅲ類ではタタキ調整の後に丁寧にヨコ方向にナデ消す点や布留系同様に器壁全体が薄いものが見られる点が挙げられる。宮崎県内の他地域でも大型球形胴甕が出土している。

6期の中型甕は、5期に比べてⅢ類の特徴が強く、口径・胴部最大径がほぼ等しく、口径・頸部径の差もより少なくなる。胴部の張りがやや高い位置に上がり、その分、胴部上方の器壁が厚くなる。内面の輪積み痕跡と相対するように外面に右上がりのタタキの後に横方向のミガキが施されているものや、内外面ともにナデるものがある。

7期は、口径・胴部最大径が等しくなる。口縁部が上方に向かって、より直線的に立ち上がる。体部形態はd～eであり、やや肩部が張り、胴部が平底の底部に向かって窄まる。器壁がやや薄く、内外面ともに丁寧な作りである。なお、甕NU-121は伴出土器からは後段階のものであるが、やや胴部に張りがなく平底であることから7期のものとした。この他、7期には布留系のやや長胴化した甕が流入する可能性がある。

8期は、須恵器の相伴関係から、詳細な変化を読み取り可能である。甕には小・中・大型品の分化が明瞭になる。甕口縁部は直線的に大きく立ち上がり、体部は丸みを持ちつつも肩部が大きく張っている。特に甕の肩部が大きく張る点は全盛期と言って良い。内面の板ナデ調整が使用されて磨耗気味なのか、丁寧に調整がされているか不明であるが、やや調整が見えないものがある。この他、Ⅴ類の中から、頸部に明瞭なラインを持って口縁部先端がやや開くようなタイプが登場する。大型甕の一部には長胴化の傾向が出始める。

また、口縁部から胴部にかけて全体的に煤が付着し、横方向のミガキが照り光るほどに外面に煤が吸着しているものが多い。土器自体の色調が見えなくなるほど真っ黒く全体が煤化している特徴がある。一方で、6期以前等の森ノ上遺跡出土甕について、外面の胴部最大径の周りや口縁部に煤が付着するものが多く、中野

内例のように器面全体に及ぶようなものはなかった。煤付着のあり方に相違が生まれた背景として、調理対象物の違い・炉への設置手法の違い・器形の違い・使用頻度や年数の違い等、明快な解答はないながら多くのことが想像される。

9期以降は全体に長胴化傾向となる。Ⅵ・Ⅶ類で丸底がある。ただし、丸底とはいえ自立はできない。

以上をまとめると、**古墳時代前期初頭～前期（4～7期）**には、大分県下郡遺跡・鹿道原遺跡、熊本県北無田遺跡に見られるような、弥生的な要素を残した倒卵型の土器が当地域でも出土する。胴部の最大径もやや上部に位置し、胴部が全体に長い。

前期前半（5～6期）には、大分方面に近い様相が強ク顕れる。延岡市黒仁田遺跡には外面全体にやや太いタタキ調整を施す甕類がある一方で、北浦地域では頸部～体部上方に細かいタタキ調整を施すものが主流である。当地域に外面全体へタタキを施す例がない点は、少数資料の現状にあっては独自性なのかどうか判別が難しい。タタキの単位の幅や体部全体の煤化の様子は、東郷町上野原遺跡の竪穴住居跡出土土器に酷似する。胴部～底部の形態的特徴は、五ヶ瀬川流域・日向地域・県北山間部のものと似ている。

前期後半（6～7期）は資料数が特に少ない。甕について宮崎県北地域等の様相と共通点が多くなってくる。外面の調整等はハケメ等も見られる中、ミガキが主流になりつつある。布留系の影響が全体に器壁が薄く、口縁部が長くなり口径 \geq 胴部最大径となる。

中期（7・8～8期）になると、中野内遺跡出土例にあるように、甕の肩部が大きく張ってくる。延岡市山口遺跡第2地点には胴部上部がやや張る甕も見られるが、中野内例ほど肩部が張る甕は宮崎県内の他地域にはなく、後期まで下れば国富町西下本庄遺跡に似た形態の甕が見られる程度である。甕の肩部が張る特徴は、北浦地域等の独自性となる可能性もある。内面調整では、口縁部の繋ぎ目が見えなくなるほど何回も丁寧に板ナデ等を施している。なお、延岡市黒仁田遺跡や宮崎平野部に特徴的な、甕類の口縁先端部をしっかりと指押さえする手法は、北浦地域には見られない。

中期には、坏・埴・鉢類や小型壺等が追加されるのみでなく、前期までの主流であった中型甕に加え、こ

の時期になって大型・小型甕も見られるようになる。これは、須恵器の登場と「食器」の銘々器の概念の導入等による坏類の増加等と密接に関係していると思われる。北浦地域にも生活様式の大きな変化が推察され、延岡市山口遺跡第2地点も同じ傾向を見せる。

後期(9期)には、甕口縁部の直線的な立ち上がり、カマド(北浦地域では未発見)導入との関連が言われる長胴化が窺える。また、繋ぎ目の調整が粗くなり、粘土紐跡を残すものが増えてくる。いずれの点も宮崎県内の他地域と共通する点である。

北浦地域の弥生時代～古墳時代までの土器について、他地域との影響関係を通して見てみると、弥生時代は大分県域や北部九州、瀬戸内地域に意識が向いている。続く古墳時代も、5期までは大分県域的な要素を残しているが、6期には甕口縁部等に宮崎県域と共通点が出始め、中期になると多くの点で宮崎県内の他地域と同じようになってくる。とはいえ、甕の肩部が強く張る点や外面全面に黒く煤が付着する点等は、北浦地域の独自色となる可能性も十分考えられる。今後の資料の増加を待って再検討を果したい。(古田)

2.4. 北浦の弥生～古墳時代の石器の変遷

まず、中野内遺跡の圃場発掘の石器について補足説明をしておく。SA1:赤色頁岩製磨製石鏃・黒色頁岩製磨製石鏃・チャート製微細剥離ある剥片・青砂岩製敲石・千枚岩製扁平礫・青砂岩製礫・軽石、SA2:青砂岩製敲石、SA3:淡黄褐色で石英リッチの砂岩製磨石・青砂岩製剥片・軽石小塊、SA4:青砂岩製敲石・青砂岩製剥片・青砂岩製凹石・磨製石鏃用剥片、SA5:黒色頁岩製磨製石鏃・同石材製剥片、SA6:青砂岩製楕円礫、SA8:青砂岩製敲石、SA9:青砂岩製敲石、SA10:青砂岩製礫・青砂岩製凹石、SA11:青砂岩製敲石、SA13:軽石製磨石、SA14:青砂岩製敲石、SA17:砂岩製台石、SC2:青砂岩製礫器(円礫端部の剥離縁辺に潰れあり)・青砂岩製磨石か、SC11:青砂岩製凹石・同石材円礫、G・H-3・4区柱穴群:青砂岩製円礫、G・H-3・4区柱穴群中央土坑:姫島産黒曜石製石核。

弥生時代前期後葉～中期前葉・中期末～後期初頭は磨製石鏃・同未製品や剥片・砂岩製礫器・青砂岩製敲石類(敲石・磨石・凹石・台石を指す、以下同じ)・

軽石製研磨具が特徴的である。砥石は明瞭なものがない。砂岩製礫器は縁辺に簡単な剥離を加えたもので、稜線に潰れが残る。遺跡内で生産・使用・廃棄される便宜的なものである。石材的に注目されるのは石英閃緑岩製台石であり、五ヶ瀬川流域から搬入品であろう。また、青砂岩はよく転磨された海岸礫で、北浦湾や熊野江湾あるいは高島等が候補となるが定かでない。余談であるが熊野江の南浦村古墳は積石塚とされ、その周辺に散在する礫の多くも青砂岩であり、豊富に見られる石材なのであろう。この他、弥生時代まではチャート製石器が伴う可能性が残っているが定かでない。

なお、中野内遺跡圃場発掘の弥生時代前～中期までに収まるであろう蛇紋岩製扁平片刃石斧は宮崎県内に類品がなく、大分県域をはじめ東北九州との交流を窺わせるものである。

弥生時代終末～古墳時代前期は青砂岩製敲石類・砂岩あるいは粘板岩製砥石・軽石製研磨具が特徴的である他、各竪穴住居跡に台石が備えられる。台石は青砂岩製も見られるが、多くは粗質の千枚岩・砂岩製である。砥石には新来の要素があり、砂岩製で断面が多角形となるまでよく研ぎ込まれた粗砥や目の細かい粘板岩製仕上げ砥が見られるようになる。これは、鉄器の普及と無関係でなかろう。磨製石鏃は見られなくなる。また、弥生時代に引き続き五ヶ瀬川流域より搬入の石英閃緑岩製石器が見られ、同じく五ヶ瀬川流域産と見られる安山岩製凹石もある。石材流通の上で、北浦・熊野江の石材を基本としつつも五ヶ瀬川流域のものが少数ながらも特徴的に搬入されており、何らかの社会関係を示す可能性がある。この他、町内採集の弥生時代後期以降の石庖丁からは、未発見ながらも水田の存在を暗示している。なお、竪穴住居跡埋土中出土の赤チャート・姫島産黒曜石・ホルンフェルス等は周辺地域の様相からも混入品で間違いなかろう。

古墳時代中期は前期の様相と似ており、青砂岩製敲石類や鉄製品用を思わせるに十分な砥石等が見られる。中野内遺跡SA2からは錘具がまとまって出土した。同じく中野内遺跡SA7出土の礫片の一端に刃部を設けた礫器は破碎した台石等をリサイクルした可能性がある。出土例は限定的なものであり、鉄器等を補う上で便宜的に用意されたものなのであろう。(藤木)

2.5. 石製の錘具について

中野内遺跡SA2出土の錘具は、周辺に普通にある石材を利用しており、長軸約10.1～17.7cm(平均13.6cm)、短軸約4.8～5.2cm(平均3.6cm)、厚さ約2.6～5.2cm(平均3.6cm)、重量169～548g(平均377.5g)となる。錘具である以上、重量は最も重要な属性である。その重量と関連のある断面の形に注目すると、平たい・台形・三角形・丸く平たく楕円ものと分類できる。平たいもの・三角形のもの重量はおおよそ同じである。(割れているもの以外)台形や楕円ものは、よく使用し、用途に応じて使い分けを行っている可能性があり、台形と楕円のものが多い傾向があり、台形の重量は、約200～550g幅である。そのうち軽い錘具より順に並べると、同一に近い重量のものが2点ずつあるようにも見える。これは重量の近い2点で1対となった可能性を示している。2点で1対という組み合わせから想定されるのは、錘具のついた経糸を交互に吊した編布台である。さらに、少しずつ重量が異なるのは、模様付け等の際に中心あるいは両端に重い錘具を吊すことでバランスのとれた製品とした結果であろうか。もじり編みを行う際に特に強く締める必要のある両端にやや重い錘を使うことはよく行われている(渡辺1981)。あるいは、重い部分では糸をよりきつく締め、軽い部分ではゆるめに編む等の使い分けであった可能性が考えられる。重量に一定の幅があり、さらにこのように断面の台形のものだけで2点で1対という組み合わせが見える遺跡として、宮崎県内では川南町尾花A遺跡(当センター未刊行)・西都市宮ノ東遺跡・都城市中尾遺跡がある他、福岡県多々良込田遺跡・熊本県河陽F遺跡・群馬県多胡蛇黒遺跡・栃木県青龍淵遺跡・東京都中田遺跡等でも見出され、やはり使用方法・用途に応じて重量を変えたのであろう。

民具に見られるもじり編み製品とオモリとの関係は4群に分類されるが(渡辺1981)、中野内例は第3群(間隔が10～20cm前後で重量110～470g、対象製品:米俵・炭俵・各種のコモ・ミノ・ウケ等)・第4群(間隔が15～30cm前後で重量360～880g、対象製品:雪囲い簾・エリ等の大型品)の重なった領域にあっている。そのまま当てはめれば、中野内遺跡出土の錘具は、大型のカゴ類やコモ、簾の類の製作に用いられた可能性がある。なお、北浦町古江在住の発掘作業員

より、約10年前、スノコやカゴを編む際に石のオモリを使ったという聞き取りも得られた。(古田)

第3節. 中世・近世の北浦・熊野江

3-1. 歴史的背景と石塔造立について

平安時代中～後期頃、県北に白杵庄が成立した。その後、白杵庄内の荒野が開発されて岡富別府が成立する。白杵庄・岡富別府・富田庄(現在の日向市)は、宇佐宮の御封が設定された庄園で、白杵郡惣鎮守の今山八幡宮の造替・神事を支える重要な庄園であった。そのため「封郡司」と呼ばれる特別な郡司が管理を行い、宇佐宮神官の田部氏(日向土持氏の祖)が封郡司に任命されていた。

これらの地域の庄園は、治承・寿永年間(1177～1183年)豊後大神氏の一族である白杵惟隆が一時、岡富別府を治めていたが、『建久凶田帳』(1197(建久8)年)では、土持宣綱が地頭となり、田部土持氏が支配権を回復している。なお、建久凶田帳では、白杵庄の名は見られず、代わりに宇佐宮領県庄が登場し、関東御家人の伊東祐経が地頭に任命されている。

その後、県庄の地頭は、伊東家庶子の門川氏に引き継がれる。しかし、南北朝時代には門川氏の勢力の衰えに乗じて、土持氏が伸張り岡富～県を支配し、「県土持氏」を名乗るようになった。この時代、県北地域には、室町幕府の直轄領と見られる「白杵院」が存在した。白杵院は、1340～1342年の観応の擾乱後に島津氏一族の樺山氏に地頭職が与えられていたが、島津元久の時代に伊東氏と連携した県土持氏によって排除された。これによって県北地域一帯が県土持氏の支配下に入った。

中世の北浦町・熊野江地区最大の事件は佐伯惟治の自刃である。事件の概要は次のとおりである。1526(大永6)年、豊後の大友義鑑の家臣で梶牟礼城主佐伯惟治は肥後の菊池氏・筑後の星野氏と府内侵攻を画策した。事前に情報を得た大友氏は白杵長景と佐伯惟常に命じて惟治を攻めさせたが、城は容易には落城しなかった。そこで長景は「一時、日向に退いてもらえば、自分が謀反の疑いをはらし、再入城がかなう様でしょう」という偽の起請文を惟治に送り、開城を勧めた。惟治はこれに応じ、翌1527(大永7)年惟治を可

愛岳（延岡市北川町）に隠棲したが、長景から連絡がないので伊予の縁者を頼ることにした。惟治一行が海路をとるために三川内（北浦町）に至った時、長景の命を受けた県新名党がこれを襲い、惟治は尾高知山中で自刃した。惟治の自刃した場所には、尾高知神社が建てられ、惟治を富尾（鴟尾とも呼ばれる）権現として祀っている。この事件は、その後佐伯惟治の墓をめぐる文政年間（1818～1830年）に佐伯藩蒲江村（大分県佐伯市）と古江村との間で争いを起こしている。

この事件で惟治が四国伊予へ逃れようとしたことから、中世における現在の延岡市北東地域と四国の瀬戸内海地域との関係の深さが窺える。また、今回発掘調査を行ったカラ石の元遺跡（延岡市熊野江）の六地藏幢（1548（天文17）年建立）に「奉建立通稱藤原朝臣甲斐織部助夫婦 河野越智朝人」、北浦町古江の昌雄寺の六地藏幢（1533（享禄5）年建立）には「越智末孫河野通正」の銘文が記されていることから、この地域への伊予河野氏の勢力が定着していたことが考えられる。

1577（天正5）年、島津氏との勢力争いに敗れた伊東氏は、大友氏を頼って豊後へ落ちていった。1578（天正6）年、大友軍は日向に侵攻し、当時、島津方に付いていた県土持氏の拠城である松尾城を落城させた。熊野江地区に隣接する須美江地区の普門寺に置かれている木造十一面観音立像（11Cの作）は、1578（天正6）年の大友宗麟の日向侵攻による難を逃れるために、熊野江の寺屋敷にあった寺院から移されたものと言われている。

しかし、同年11月の高城・耳川の合戦で大友軍が敗退したため、島津氏は土持綱久を再び松尾城に入れ、この地域の支配権を認めた。1586（天正14）年島津の豊後攻略の戦陣を務めていた三川内城の甲斐宮内は、同年12月に大友方の逆襲を受け、宮内も討ち死にしたと言われている。北浦町三川内の市尾内の石塔群は、この時の戦没者を弔うものと言われている。

三川内には、市尾内の他に梅木、大井地区に石塔群が存在する。梅木地区の梅木仏堂前には宝篋印塔6基、五輪塔2基を含む17基の石塔がある。この内4基の宝篋印塔は、それぞれ108cm、128cm、132cm、165cmの高さを持ち、ほぼ完全な形で残されている。また、2基

の五輪塔も良好な状態が保たれており、全高はそれぞれ94cm、103cmである。これらの石塔の造立時期は不明だが、1基の宝篋印塔の格狭間部に「永正」（1504～1520年）の文字が刻まれている。大井地区の石塔群は個人の墓地内にあり、2基の宝篋印塔の他石塔の各部位が点在している。この2基の宝篋印塔の1基には「天文廿四年」（1555年）の紀年銘の刻字が見られる。また、今回調査を行った小路谷石塔群では、1基の塔身に墨書による「天正廿年壬申」（文禄元年・1592年）の紀年銘が確認されている。

北浦地区内の寺院を見てみると、三川内地区には1573（天正元）年に光久寺（曹洞宗）が創建されている。一方、古江地区には、同じ曹洞宗の昌雄寺が立地する。昌雄寺は1568（永禄11）年天台宗正応寺として創建されたが、1658（万治元）年に天台宗から曹洞宗へと改宗し、現在の寺号になった。

1587（天正15）年、豊臣秀吉によって九州平定がなされ、高橋元種が領主として入封した。その後、この地域は江戸時代を通じて延岡藩領であった。延岡藩は城下7町以外の村々を8つの組に分け、それぞれに大庄屋を置いた。三川内、宮野浦、市振、古江、熊野江・島野浦は、須怒江、浦尻と共に六箇組に属している。1634（寛永11）年の7村の石高を比較すると、三川内村が246石と最も高く、2番目に高い古江の170石や3番目の熊野江・島野浦の144石と比べても大きな差が見られる。

これらのことから、16C初頭～後半にかけて北浦・熊野江地区で多くの石塔が造立されていたことが窺える。また、梅木地区・大井地区の一部の宝篋印塔は北浦地区に正応寺・光久寺が建立される以前に造られたものであることから、この地域に2つの寺院の前身となるものがあり、そこを中心に仏教文化が定着していたことが予想できる。また、今回の調査で三川内地区を中心に大型の五輪塔と宝篋印塔の存在が確認された。両塔とも武士層を中心に造られたことと江戸期における三川内村の豊かな石高を示す数値から、この地域にこれらを造立できる経済力を持った武士（土豪）の存在を示すものと言えるであろう。また、北浦地区に禅宗の寺院が建立されたのも、この地に存在した武士層の気風に適応したからと思われる。（崎田）

3-2. 魚貝類利用の変遷とその特質

今回の発掘調査ではフローテーションによって数多くの食料残滓が得られ、海舞寺遺跡より貝、カラ石の元遺跡より魚骨が一定量回収できた点は北浦・熊野江ならではとも言える成果として特筆される。

海舞寺遺跡における14C代の食用貝はS341から出土し、ヒメクボガイ・レイシガイ・ウズイチモンジ・ハマグリがある。いずれも近隣の岩礁地や干潟等から採取されたと推定され、屋敷地で食用の後に、イネ・オオムギ等とともに廃棄された貝の一群である。これらの特質を知る上で、中野内遺跡の圃場発掘SA13（古墳時代中期後葉～後期前葉）から出土した大量の貝が重要である。当時の報告書中ではマガキが多量に出土したと記載されるが、今回、残された土試料をフローテーションした結果、新たに海産のイボアナゴ・イシダタミガイ・クボガイ・ヒメクボガイ・ヘソアキクボガイ・クマノコガイ・ギンタカハマ・スガイ（殻・蓋あり）・コシダカサザエ（殻・蓋あり）・サザエ・カノコガイ？・アラレタマキビ・レイシガイ・ウニレイシ・ミツクチキリオレ科・ホソオカチョウジガイ・ケガイ・ムラサキインコガイ・タイラギ？・オハグロガキ・コケゴロモガキ・マガキガイ・チリハギガイ・チョウセンハマグリ、陸産のヒメベッコウマイマイ・アズキガイ・シリオレギセルガイで構成されると判明した（内訳等の詳細は別稿を準備中）。量的に多いのはスガイ・ケガイ・ムラサキインコガイ・チョウセンハマグリである。海産貝は潮干帯の岩礁ならびに砂地に棲息する採取容易なものが大半であり、一部、タイラギ？のように潜水等による採取が予想されるものも含まれる。陸産貝は埋没過程で加わったものであろう。

中野内遺跡・海舞寺遺跡は同じ内湾を望む小空間内に立地し、さらに食料残滓の廃棄場が量の多寡はあるものの両者に確認されていることから、通史的な貝構成の変遷を見る上で有利な条件にある。そこで、両遺跡の貝種構成を比較すると、種類・棲息地等がほぼ重複するとわかる。これは、古墳時代・室町時代という時代の違いを超えて、いわゆる地産地消が継続した結果として大変注目される。

貝の地産地消について、弥生～古墳時代を中心に宮崎県域全体に目を向けると、内陸にあたる小林市須木

村田代ヶ八重遺跡（これのみ縄文時代後期）ではカワニナ、遺跡一帯より海を望むことのできる宮崎市前原北遺跡、熊野原遺跡B地区、下那珂貝塚、高鍋町大戸ノ口第2遺跡ではスガイ・イシマキガイ・ケガイ・カワニナ・ヤマトシジミ・ハマグリ等、海は見えないながらも下流域である新富町八幡上遺跡がヤマトシジミ・カワニナと、地元産品を消費する姿が明確である。中野内・海舞寺遺跡において、海産貝が主で、ヤマトシジミ・カワニナ等の汽水域や淡水環境に棲息する貝が見られない点は、遺跡一帯に大河川や池沼が存在しない立地環境の特徴とよく整合している。ただし、例外として墓副葬品があり、現海岸線より最大で約20km内陸に入った宮崎市柿木原2号地下式横穴墓・国富町市ノ瀬10号地下式横穴墓で、それぞれチョウセンハマグリ、アワビが出土している。

こういった状況が大きく変化するのは江戸時代になってからである。延岡市林遺跡は城下町近郊の農村であり、江戸時代の貝を含む食料残滓の廃棄場が確認されている。注目されるのは、これまで見られなかった貝種が含まれる点であり、特にアカニシ・サトウガイ・バイ・イタヤガイといった水深10～30mに棲息するものが見られる。棲息環境によっては、これまでの貝と同じような磯場や砂浜で簡易に採取するのではない、潜水等も伴うより専門的・高度な技術が必要となっている。漁法の変化を示すとともに、現代につながる貝の嗜好性も江戸時代にある程度まで完成されたことを示していよう。

カラ石の元遺跡における18C後半の魚骨は、廃棄土坑SC9に残されていた、6個体以上のカツオを主に、マアジ・スズキ目・フグ科である。遺跡は農村であった中村地区集落の裏山に相当し、一般化するには至らないながらも、農村で食された魚種の一端を窺う好資料となっている。

カツオの存在は沖合での漁があったことを示すが、江戸時代末期～明治時代初頭の状況を記録した『日向地誌』によれば、年間漁獲高として市振で5,000尾、宮野浦で5,000尾、島野浦で50,000尾ものカツオが挙げられ、イワシと並んで主な対象魚となっている。熊野江は農閑期に漁業に従事し、海産物として年間イワシ1,500,000尾・アワビ300殻が挙げられていることか

ら、北浦方面で挙がったものを購入した可能性がある。いずれにせよ、北浦・熊野江一帯が海産資源に恵まれていた点をよく示している。

この他、『日向地誌』にはハマグリ（古江50,000殻・島野浦50,000殻）・アワビ（市振100殻・熊野江300殻）も挙げられている。これは、中野内・海舞寺遺跡で見られたように、江戸時代末期にも古墳時代・室町時代と同じくハマグリがよく採られた（江戸時代以降もおそらく食されていた）こと、アワビが目立って採取されたことを示している。日常の中で、磯で採取するような貝類については『日向地誌』に記載されなかっただけと予想され、貝食の地産地消はつい近年まで続いたものと思われる。

※貝の同定にあたって、日本貝類学会会員の西邦雄先生に御教示いただいた。（藤木）

本章では、各遺跡の調査成果や関連する諸点を総合化する意味で、特に北浦・熊野江地区における弥生時代・古墳時代・中世以降の石塔群ならびに水産資源について述べてきた。

今、北浦・熊野江地域は高速道路建設によって大きく変貌しつつある。そのような中、本書の成果が一つの契機となって、より厚みのある豊かな地域史が復元されることを願っている。

主な参考文献

石川恒太郎1968『宮崎県の考古学』
北浦町1994『北浦町史』通史編/史料編第一巻 町内文書/史料編第二巻 町内戦時史料
北浦町教育委員会1997『中野内遺跡』
北浦村教育委員会1968『北浦村史』第一輯/第二輯
延岡市教育委員会1986『延岡市古代史料収蔵目録』
平部崎南1884『日向地誌』（1978年に青潮社より印字刊行）
宮崎県1989『宮崎県史考古編1』/1993『宮崎県史考古編2』/1996『土地分類基本調査』蒲江
宮崎県教育委員会1987『林遺跡』宮崎県文化財調査報告書第30集/1992『平成3年度農業基盤整備事業に伴う発掘調査概要報告書』/1998-1999『宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書1・II』
宮崎県総合博物館1972『研究資料 第三集 山村調査報告書-北浦村三川内の歴史と民俗-』（土器類全般）
石川悦雄1989『弥生時代後半期から古墳時代の土器編年に向けて-予察I高坏-』宮崎県総合博物館研究紀要』9、宮崎県総合博物館
今塩屋毅行・松永幸寿2002『日向における古墳時代中～後期の土器器-宮崎平野部を中心として-』九州前方後円墳研究会』第5回大会資料
愛媛県埋蔵文化財調査センター1996『斎院・古照-第8・9次調査-（第2分冊）』/1998『斎院・古照（遺物編）』
大野町教育委員会1985『無田原遺跡』
大分市教育委員会1982『多武尾遺跡調査概報』/1991『下郡遺跡群』/1992『下郡遺跡群』/2003『古国府遺跡群-上七曾子遺跡』/2005『下郡遺跡群3』/2006『下郡遺跡群4』/2007『下郡遺跡群5』/2008『下郡遺跡群6』/2009『下郡遺跡群7』
大野町教育委員会1981『大野原遺跡』
岡山県教育委員会1997『窪木遺跡1』岡山大学建設に伴う発掘調査Ⅲ
小田富士雄・長直信2007『第二部 特設編 第三章 古墳時代四葉前の須恵器生産』『行橋市史』資料編原始・古代
甲斐貴充2009『五ヶ瀬川流域出土の工字突帯文系土器』『特別展何の意ぞ碧山に栖む』西都原考古博物館

西都原考古博物館
久住町教育委員会1999『板切遺跡群（第I～V）・小原田遺跡』
高知県埋蔵文化財センター1992『具向中山遺跡群第1分冊』/2001『居徳遺跡群I』
高山町教育委員会・（財）元興寺文化財研究所鹿兒島県2000『永野原遺跡』
高橋 徹2001『大分の弥生・古墳時代土器編年』『大分県立歴史博物館研究紀要』大分県立歴史博物館/2009『豊と日向を結ぶ道』『特別展何の意ぞ碧山に栖む』西都原考古博物館
田辺昭三1981『須恵器大成』角川書店
玉永光洋1989『大溝出土器群の時期幅について』『安国寺遺跡』
寺澤 薫1986『畿内古式土器の編年と二・三の問題』『矢部遺跡』樞原考古学研究所
東郷町教育委員会1991『樋田遺跡』/2003『上野原遺跡』第6集
永友良典1987『日向の土師器』『えとのす』32号、新日本教育図書
野津町教育委員会1984『新生遺跡・下藤遺跡』/1985『野津川流域の遺跡』
延岡市教育委員会1991『上南方地区遺跡中尾原遺跡山口遺跡』第6集/1992『上南方地区遺跡中尾原遺跡 畑山遺跡』第8集/1992『差木野遺跡』第9集/2002『延岡市城内遺跡1』第26集
日之影町教育委員会2003『平底遺跡』第1集
松永幸寿2004『日向における古式土師器の成立と展開-宮崎平野部中心として-』『西四国-九州間の交流に関する考古学的研究』
松山市埋蔵文化財センター1991『松山大学校内遺跡-第2次調査』
宮崎県1989『差木野遺跡』『宮崎県史』資料編考古1
宮崎県教育委員会1985『堂地東遺跡』『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第2集
宮崎県埋蔵文化財センター1999『西下本城遺跡』第15集/2005『山口遺跡第2地点』第99集/2009『黒仁田遺跡』第181集/2008『板平遺跡』第176集
吉本正典1995『宮崎平野出土の土師器に関する編年的考察』『宮崎考古』14、宮崎考古学会（波状口縁のある土器関連）
尼崎市教育委員会1973『上ノ島遺跡』第8集
愛媛県埋蔵文化財センター1989『八町遺跡・中寺州尾遺跡・松木遺跡』
大分市教育委員会1962『一次中安遺跡』大分大学学芸学部総合調査報告/2005『下志村遺跡 第二次調査』
岡山県教育委員会1995『南溝手遺跡1』
島根県教育委員会1990『タテチョウ遺跡』『タテチョウ遺跡発掘調査報告書』Ⅲ
智頭町教育委員会2006『智頭枕田遺跡1』
土器持寄会論文集刊行会2000『突帯文と遠賀川』
徳島市教育委員会1988『南庄遺跡』現地説明会資料
（梅木謙一・菅原康夫編『弥生土器の様式と編年』四国編、木耳社にも掲載）
行橋市教育委員会1985『下碑田遺跡弥生時代前期～中期』『下碑田遺跡』（竪穴住居跡関連）
石川悦雄1991『宮崎県における弥生時代竪穴式住居の展開』『宮崎県史研究』第5号
伊東秀樹・永井宏幸・蔭山誠一1999『松菊里型竪穴式住居の受容と展開』『年報 平成10年』（財）愛知県埋蔵文化財センター
岡 毅・太田 睦2009『佐賀県みやき町「西寒水四本柳遺跡」の調査概要』『九州考古学会総会-研究発表資料集-』
柴尾俊介2006『松菊里型住居をめぐって』『研究紀要』第20号、（財）北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室
新宮町教育委員会1992『七又木地区 八幡上遺跡』第13集
長津宗重1985『日向型間仕切り住居の研究序説』『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第2集
中間研志1987『松菊里型住居』『東アジアの考古学と歴史』
北郷泰道1989『南九州における間仕切り壁住居の成立と終焉』『宮崎県史研究』第3号
（一本柱遺構関連）
鉛谷 一2000『弥生・古墳時代の鳥形製品』『まいぶん愛知』No.59、財団法人愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター
大阪府立弥生文化博物館2007『日向・薩摩・大隅の原像-南九州の弥生文化-』
金岡 恕1982『神を招く鳥』『考古学論考-小林行雄博士古稀記念論文集-』平凡社
境 靖紀2001『弥生時代大柱祭祀の一例-春日市立石遺跡の検討-』『古文化談義』第47集
東 徹志2009『南九州の“弥生の鳥”が語るもの-スロープ付土坑から出土した鳥形木製品について-』『南の縄文・地域文化論考新東見一代表還暦記念文集』中巻
水野正史1982『弥生時代のまつり』『歴史公論』第82号、雄山閣
宮崎県埋蔵文化財センター1985『松元遺跡 井手口遺跡 塚原遺跡』第44集
渡辺 誠1995『韓国の蘇塗と弥生時代の鳥形木製品』『西谷眞治先生古稀記念論文集』勉誠社/2001『弥生時代の鳥竿信仰』『巨木と鳥竿』勉誠社（集落関連）
古今書院1998『大学テキスト日本の扇状地』
砂防学会1993『火砕流・土石流の実態と対策』鹿島出版会
高橋 保2004『土石流の機構と対策』近未来社
埋蔵文化財研究会2009『弥生時代後期の社会変化』『第58回埋蔵文化財研究会』（鍾具関連）
かなかわ考古学財団1999『下大槻峯遺跡（No.30）Ⅲ』報告53
熊本県教育委員会2003『河陽F遺跡』第209集
群馬県埋蔵文化財調査事業団1993『多胡蛇黒遺跡』第146集
埼玉県埋蔵文化財調査事業団1979『下田・諏訪』第21集/1998『砂田前遺跡』第198集
栃木県教育委員会・（財）とちぎ生涯学習文化財団2009『青龍湖遺跡・皇宮前塚』
東京都埋蔵文化財センター2005『船田遺跡第2分冊』第161集/2009『八王子中田遺跡-都宮八王子中野町団地（4期）』第231集
樋口清之編1977『縄文の美術（原始日本の再発見 第1集）』学研
福岡市教育委員会1985『多々良込田遺跡Ⅲ』
都城市教育委員会2008『平田遺跡A地点・B地点・C地点』第87集
宮崎県埋蔵文化財センター2001『梅北佐土原遺跡 中尾遺跡 葦原遺跡』第42集
渡辺 誠1973『縄文時代の漁業』雄山閣出版/1981『編み物用鍾具としての自然石の研究』『名古屋大学文学部紀要』27/1985『編布の研究』『日本史の黎明 八幡一郎先生頌寿記念考古学論集』六興出版/1992『編布の変遷』『衣食住と民具』雄山閣出版